

# 奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和59年度

昭和60年

奈良市教育委員会

# 奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和59年度



昭和60年

奈良市教育委員会



山陵町狐塚横穴群1～3号横穴（西から）

## 序 文

奈良盆地の北端、四神相応の理想の地として現在の奈良市域に平城京が造営されたのは、いまから約1200年前のことです。平城京跡は、東西 6.0 km, 南北 4.8 km を占める大規模なもので、古代律令国家として確立した姿を今に伝えるすぐれた遺跡であります。ところが、このような地下に眠る遺跡は、近年の人口増加などによる大規模な開発の波が押し寄せているため破壊されている例が増加しています。こうしたなかで当教育委員会といたしましては、調査体制の充実をはかり、事前の発掘調査をすすめてきました。そのため、除々に往時の具体的な様相などもわかってまいりました。

今年度は、32件の発掘調査を行ない、うち平城京左京二条二坊十二坪及び東市跡推定地の調査を除く調査を一括して報告いたします。特に今年度の調査は、平城京のみならず平城京以外でも大きな成果を得ることができました。ここに示した調査成果が幾分なりとも活用いただければ幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作製にあたって、御指導、御協力をいただいた奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和60年 3 月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

## 例 言

1. 本書は、昭和59年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。

2. 昭和56年度に平城京左京三条四坊十坪、及び京東条里推定地において発掘調査を実施したが、未報告であったため本書の付編に掲載する。また、昭和58年の平城京左京六条三坊十坪（東堀河）の調査で出土した遺物についても併せて報告する。

昭和59年度には平城京左京二条二坊十二坪、及び東市跡推定地においても発掘調査を行っているが、これについては別に刊行を予定している。

3. 本書に収録した報告は次頁に記したとおりである。なお、調査地の位置は折り込みの発掘調査位置図に示した。

4. 発掘調査は、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター係（所長：三好良則）が行ない、各調査担当者は次頁に記した。調査に関わる庶務は、文化財課庶務係（係長：前川宏充、森 光彦）が担当した。

5. 横井窯跡の調査では、奈良市文化財保護審議会歴史環境関係小委員会委員の指導のもとに行なった。磁気探査については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 西村 康氏の御指導、御協力を得た。また、西村 康氏には玉稿を賜わった。なお、調査の実施にあたっては土地所有者細井怜子氏、蔭山晏堂氏、秋山 暎氏、秋山十三子氏の御理解と多大の御協力があった。記して感謝いたします。

6. 発掘調査及び出土遺物の整理作業には下記の学生諸氏らの参加、協力があった。

行天優貴子（四天王寺女子大学卒業生）、大野佳子（大阪樟蔭女子大学卒業生）

飯野公子（奈良大学卒業生）、日高しのぶ（奈良女子大学卒業生）

吉田洋恵（帝塚山大学卒業生）

服部芳人、藤田忠彦、金村浩一、影近栄子、佐賀和美（以上奈良大学学生）

和田素子、桐山美佳（以上奈良女子大学学生）

古川成美、藤原郁代（以上関西大学学生）、吉田野々（龍谷大学学生）

上村紀子（上智大学学生）、鎬木 顕（早稲田大学学生）

玉林尚子（大阪成蹊女子短期大学学生）

7. 本書の作成は、文化財課長 亀井伸雄の指導のもとに調査担当者全員があたり、それぞれ分担し執筆した。なお、各報告の末尾にその文責を明らかにした。

8. 本書の編集は、奈良美穂が行なった。

## 目 次

1. 邑地町遺物散布地の調査	1
2. 山陵町狐塚横穴群の調査	8
3. 横井窯跡の調査	22
4. 平城京右京一条四坊七坪の調査	34
5. 平城京右京二条四坊五・六坪の調査	37
6. 平城京西四坊大路の調査	37
7. 平城京西一坊大路の調査	38
8. 平城京左京一条三坊十二・十三坪の調査	39
9. 平城京左京三条三坊九坪の調査	45
10. 平城京左京（外京）三条六坪十坪の調査	46
11. 平城京左京四条二坊七坪の調査	52
12. 平城京四条条間路の調査	62
13. 平城京左京（外京）四条五坊七坪の調査	67
14. 平城京左京四条四坊十六坪の調査	67
15. 平城京左京（外京）四条六坊七坪の調査	68
16. 平城京左京五条四坊四坪（五条大路）の調査	69
17. 平城京五条大路の調査	69
18. 平城京左京五条一坊一・八坪の調査	70
19. 平城京左京（外京）五条五坊五坪の調査	89
20. 平城京左京六条三坊十五坪の調査	91
21. 平城京左京（外京）三条五坊四坪の調査	93
22. 平城京左京（外京）三条五坊十四坪の調査	95
23. 史跡 大安寺旧境内の調査	97
24. 興福寺旧境内の調査	101
付 編	
25. 平城京左京六条三坊十坪（東堀河）の調査	104
26. 平城京左京三条四坊十坪の調査	124
27. 京北条里推定地の調査	128

## 調 査 地 一 覧

調 査 地		調 査 期 間	調査面積	備 考
1	邑地町遺物散布地	邑地町1210番地の1他	500㎡	邑地町圃場整備
2	山陵町狐塚横穴群	山陵町1227の1番地	50㎡	J・EVANG
3	横井窯跡	横井町904～909	152㎡	横井窯跡緊急調査
4	平城京右京一条四坊七坪	西大寺野神町1576番地他	49.8㎡	公園整備
5	平城京右京二条四坊五・六坪	菅原町370番地	400㎡	伏見小学校
6	平城京西四坊大路	平松町607, 608番地	7.8㎡	粟実住宅
7	平城京西一坊大路	六条町274番地	33.9㎡	佐脇 秀治
8	平城京左京一条三坊十二・十三坪	法華寺町1351番地	132.5㎡	一条高校
9	平城京左京三条三坊九坪	芝辻町2丁目232番地の3	40.5㎡	サカイヤ地所
10	平城京左京(外京)三条六坊十坪	中筋町31番地の1	93.0㎡	駐輪場
11	平城京左京四条二坊七坪	四条大路1丁目741-1番地	390㎡	高辻 春雄
12	平城京四条条間路(1) (2)	四条大路2丁目881番地他 四条大路2丁目20番地	146㎡ 120㎡	井上 明太郎 東中 久好
13	平城京左京(外京)四条五坊七坪	三条本町1-1番地	25.5㎡	御駅レンタカー関西
14	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町39, 40-5番地	200㎡	クボタハウス
15	平城京左京(外京)四条六坊七坪	小川町24番地	36㎡	率川幼稚園
16	平城京左京五条四坊四坪(五条大路)	大安寺町891番地の2	2.4㎡	大西 耕司
17	平城京五条大路	大安寺町904番地の1	11.25㎡	大西 武雄
18	平城京左京五条一坊一・八坪	柏木町8番地他	10,400㎡	仮称第18中学校
19	平城京左京(外京)五条五坊五坪	西木辻町67番地	450㎡	春日中学校
20	平城京左京六条三坊十五坪(1) (2)	大安寺町92番地 大安寺町96番地の1	43.8㎡ 54㎡	増田 健治 熊木 健
21	平城京左京(外京)三条五坊四坪	大宮町1丁目65番地の5	380㎡	中村 志司
22	平城京左京(外京)三条五坊十四坪	西之阪町38-1番地他	65㎡	西之阪隣保館
23	史跡大安寺旧境内(84-1次)	大安寺町1373番地の1	64.4㎡	大西 保夫
	同(84-2次)	大安寺町1373番地の1	70.4㎡	北和地所
	同(84-3次)	大安寺町1371・1372番地	98.6㎡	楠木 義正
	同(84-4次)	大安寺町1099番地	3.2㎡ 7.6㎡	今西 勇
24	興福寺旧境内(84-1次) (84-2次)	高畑菩提町1122番地の18・19 登大路町	40㎡ 19㎡	榎木 義治 奈良市水道局
付 編				
25	平城京左京六条三坊十坪(東堀河)	大安寺町79番地の1	423㎡	楠木 英彦
26	平城京左京三条四坊十坪	大宮町162番地の4・31	454㎡	大同生命保険相互会社
27	京東条里推定地	南京終町73番地他	284㎡	仮称第39小学校 (現, 飛鳥小学校)
	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町265-1番地他	2,250㎡	
	平城京左京八条三坊十一坪 (東市推定地)	東九条町445番地	510㎡	

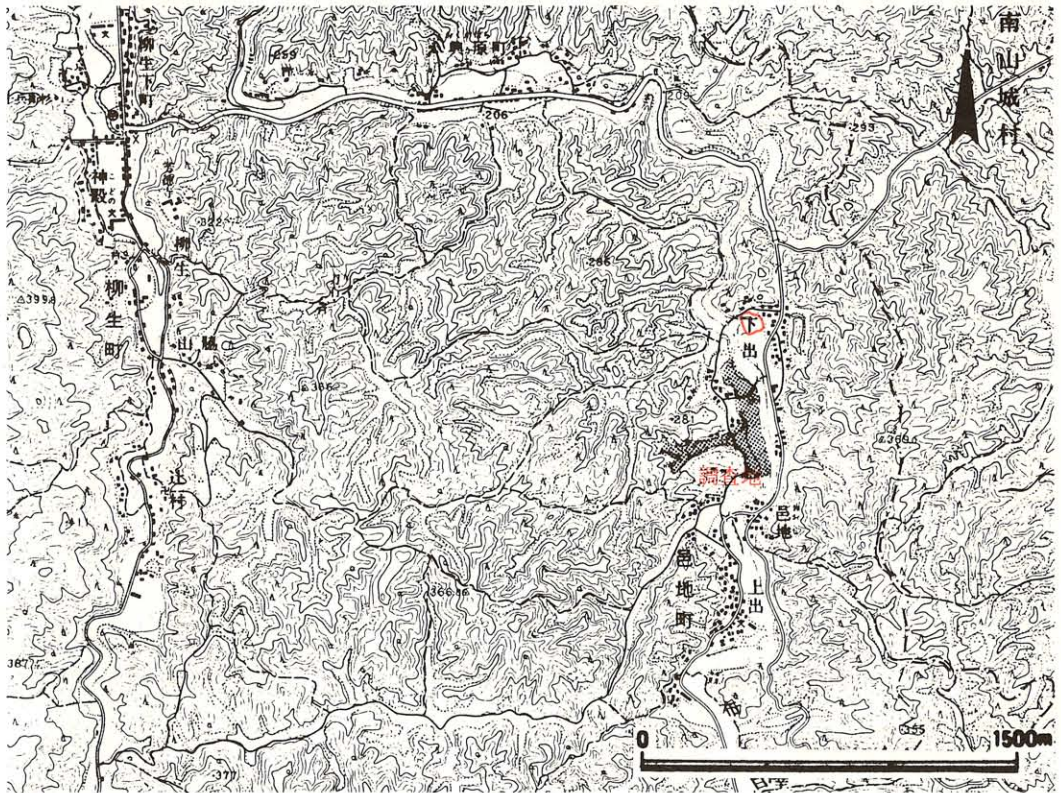
※ 掲載番号は、発掘調査位置図と対応する。

# 1. 邑地町遺物散布地の調査

## I はじめに

本調査は、奈良市邑地町1210番地の1～1600番地の2他において実施した圃場整備に伴う事前の発掘調査である。邑地町は奈良市の東部山間にあり、京都府南山城村に隣接している。邑地町の集落は北流する布目川に沿って点在しており、圃場整備区域は町の中央、布目川の西岸にあたり、総面積42,000㎡である。現状は、水田、畑地、茶畑などである。奈良市農林課が圃場整備に先立ち、遺跡の有無確認踏査願を奈良県教育委員会に提出したところ、県教育委員会から、北東の布目川東岸に土師器などの遺物が散布<sup>注)</sup>することや、圃場整備地の面積が広大であることから、試掘調査が必要との回答を受けとった。このため奈良市教育委員会が試掘調査を行なうことになった。調査の期間は昭和59年11月19日から12月27日までである。なお、調査期間中は、邑地町圃場整備管地委員会及び邑地町自治会の方々には多大なる協力を得た。記して感謝したい。

注) 奈良県教育委員会「奈良遺跡地図 第4分冊」昭和58年3月



調査地と周辺の遺跡 1 / 30000

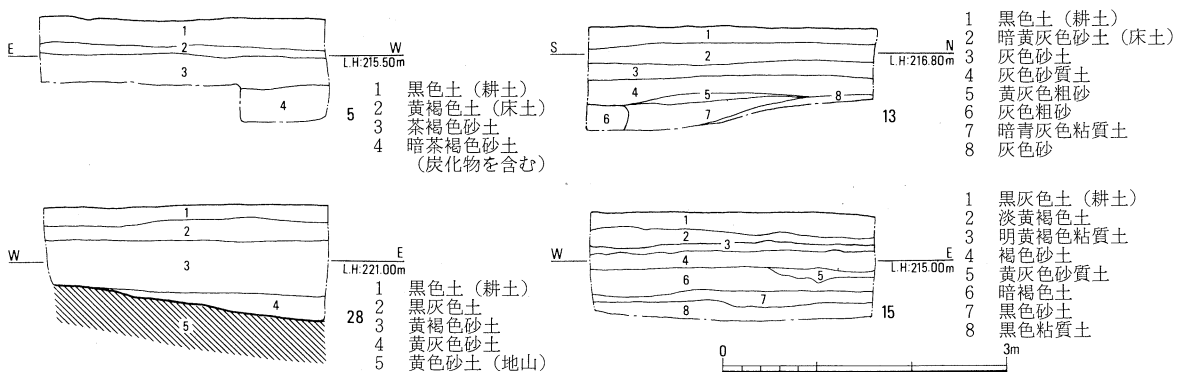


## II 調査の概要

調査地の大部分は水田で、その立地条件によってA B C D地区に区分できる。A地区は布目川に沿って造られた平坦地の水田で、標高が215.5～217.3 mの地域、B・C地区は西側に広がる山地から派生する東西尾根の先端部斜面に造られた水田で、北尾根先端部をB地区、南尾根先端部をC地区とする標高216.2～220.6mの地域、D地区はB・C地区の丘陵にはさまれた谷部斜面につくられた水田で、標高218.5～233.7mの地域である。調査は当初、地形を考慮して3×3mのトレンチを約50m間隔に24ヶ所設定して行なった。これらの調査結果と地形からみて、B地区の上部平坦面に遺跡の存在が考えられたため、新たに4箇所のトレンチを設定して調査を行なった。

**A地区の調査** 調査は1～14のトレンチを設定して行なった。各トレンチの土層はほぼ同様な堆積であったため、6トレンチの土層を述べる。堆積土層状態は、地表から黒色土の耕土、黄褐色土の床土、黄褐色砂土となり、灰色、茶褐色の細砂が地表下1.2 mまで堆積する。この層以下をボーリング調査したが、茶灰色の砂層であった。調査の結果、他トレンチでも床土下は砂層の堆積で、遺構面と考えられる層はなく、堆積土からは土師器皿、瓦器碗などが少量出土した。A地区の地形とこの堆積土から考えて、布目川は現在の地点よりも西側を流れていたと考えられ、水田は旧河道上に造られたものであろう。また、谷部が開口する地点にある13トレンチの土層は、耕土、床土、灰色砂質土、暗青灰色粘質土、灰色砂となり、地表下1.0 mで黒色粘質土となる。これらの堆積土は、谷筋を流れてきた土砂が開口部近くに堆積したものと考えられる層で、灰色砂質土層からは、縄文土器深鉢、サヌカイト片、土師器皿、黒色土器A碗、瓦器碗などが少量出土した。

**B地区の調査** 調査は北尾根先端部の水田に15～24のトレンチを9箇所設定し行なった。15トレンチの土層は、地表から黒灰色土の耕土、淡黄褐色土の床土、明黄褐色粘質土、褐色砂土、暗褐色土、黒色砂土となり、地表下1.6mで黒色粘質土となる。黒色砂土層から磨製石斧、サヌカイト片、土師器皿、瓦器碗が少量出土したが、遺構面と考えられる層はない。16・17トレンチの土層は、地



5・13・15・28トレンチ堆積内土層図 1/80

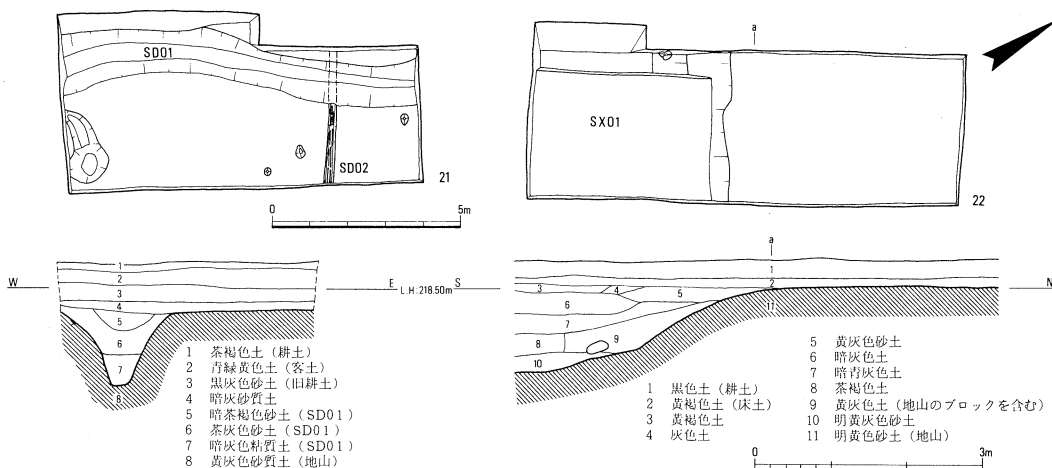


発掘区 の 位置 1 / 2000

表から耕土，床土，青灰色砂土，黄灰色砂土となり，地表下0.7 mで青灰色砂質土の地山となる。堆積土から陶器大甕片が少量出土した。18トレンチの土層は，地表から耕土，床土，暗茶褐色砂土，暗茶褐色土，暗褐色土，黒色砂土となり，地表下0.7 mで黄灰色砂質土の地山となる。この地山面で，幅40cm，深さ10cmの南北素掘り溝を1条検出した。溝の埋土からは遺物は出土しなかった。暗茶褐色土，暗茶褐色砂土からは，古墳時代の須恵器片，鎌倉時代の土師器皿，瓦器碗などが少量出土した。19・20トレンチの土層は，地表から耕土，床土となり，地表下0.3～0.4 mで茶灰色砂土の地山となる。床土から土師器皿，サヌカイト片などが出土した。

21トレンチ B地区の南側に東西4.0 m，南北9.6 m（発掘面積38.4㎡）の南北トレンチを設定した。土層は，地表から黒色土の耕土，青緑色土の客土，黒灰色砂土の旧耕土，暗灰色砂質土となり，地表下0.6 mで黄灰色砂質土の地山となる。土地所有者によると数年前に客土して水田面を0.3 m程高くしているという。地山面は南へ向かってゆるやかに傾斜しており，この面で遺構を検出した。調査の結果，南北溝SD01，暗渠SD02を検出した。SD01はトレンチ西辺を流れる断面V字状の素掘り溝で，幅1.4～1.6 m，深さ1.0～1.2 mを測る。埋土は上層から，暗茶褐色砂土，黄灰色砂土，暗青灰色粘質土となるが，遺物は出土しなかった。溝底は南端が北端より0.2 m低くなることから，溝は南流していたものと考えられる。SD02は東西方向の暗渠で幅20cm，深さ15cmを測る。溝内に小枝を敷きつめ導水路とするもので，旧水田の暗渠として使用したものであろう。なお，堆積土からは土師器皿・羽釜，瓦器碗などが少量出土した。

22トレンチ 21トレンチの北側に設定した東西4.0 m，南北11.6 m（発掘面積46.4㎡）の南北トレンチである。土層は，地表から黒色土の耕土，黄褐色土の床土となり，地表下0.4 mで明黄色砂土の地山となる。トレンチの中央で地山の南斜面を検出した。斜面の堆積土層状態は，上層から黄褐色土，灰色土，黄灰色砂土，暗灰色土，暗青灰色土，黄灰色土，茶褐色土，明黄色砂土と複

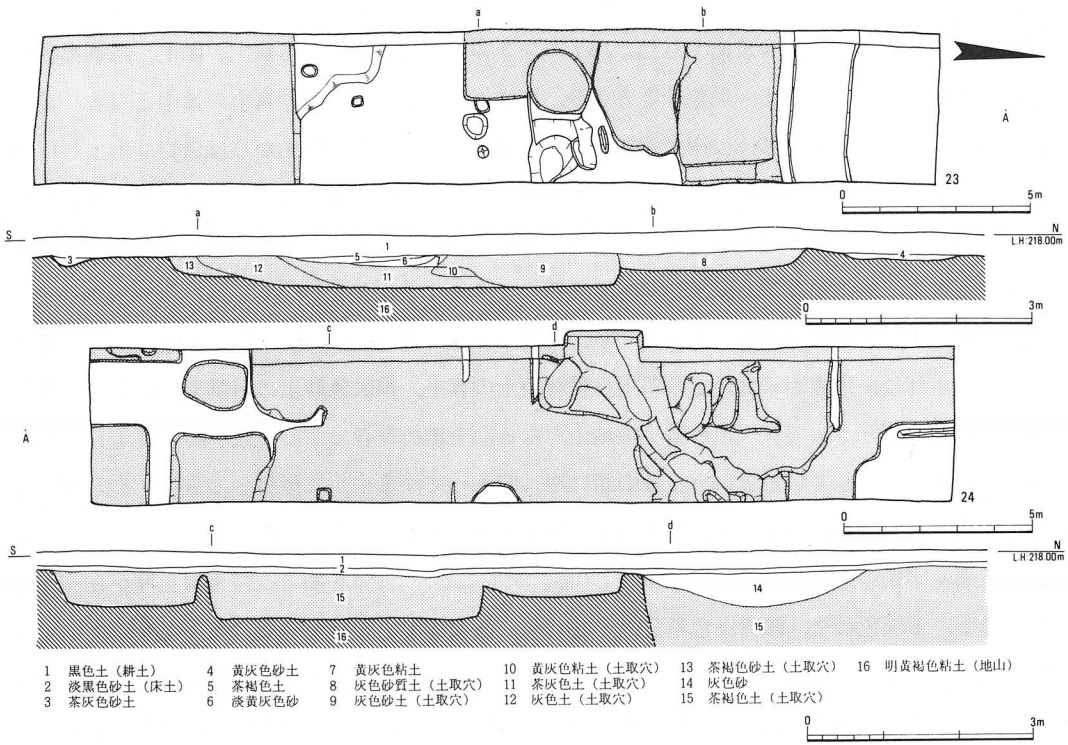


21トレンチ検出遺構平面図 1/200

北壁堆積土層図 1/100

22トレンチ検出遺構平面図 1/200

西壁堆積土層図 1/100



23・24トレンチ検出遺構平面図1/200・西壁堆積土層図1/100

雑に堆積する。下層の明黄灰色砂土は、地山のブロックを含む層で、近世の平瓦片を包含する。

**23・24トレンチ** B地区の中央上部に設定したトレンチで、23トレンチは東西4.0m、南北24.0m (発掘面積96.0㎡)、24トレンチは東西4.0m、南北22.8m (発掘面積91.2㎡)である。各トレンチの土層は、地表から黒色土の耕土、淡黒色砂土の床土となり、地表下0.3mで明黄褐色粘土の地山となる。西トレンチの地山上面で数多くの土壙を検出した。土壙は一辺1.5～2.0mの平面隅丸長方形を呈し深さ0.6～0.8mを測る。土壙の埋土は地山のブロックを含む茶褐色土で、土師器皿、瓦器碗、サヌカイト片が出土した。地元では、江戸時代の末ごろまでこの尾根の南斜面で瓦を焼いていたことが伝えられており、この土壙群はその際に必要な粘土を取った穴と考えることもできよう。トレンチでは土取穴以外の遺構は検出できなかった。

**C地区の調査** 調査は25～28のトレンチを設定して行なった。28トレンチの土層は、地表から耕土、床土、黄褐色砂土となり、地表下0.9mで黄色砂土の地山となる。各トレンチの地山面はゆるやかに東へ傾斜しており、黄褐色砂土は丘陵裾部へいく程、厚く堆積する。堆積土から土師器皿・甕・羽釜、などが少量出土した。調査の結果、丘陵の東傾面を検出したのみで何ら遺構はなかった。

**D地区の調査** 谷部の水田は泥田のため、土層観察を目的とした29～31の小トレンチを設定して調査を行なった。トレンチの大きさはほぼ東西0.7m、南北1.2m (発掘面積約0.9m)であ

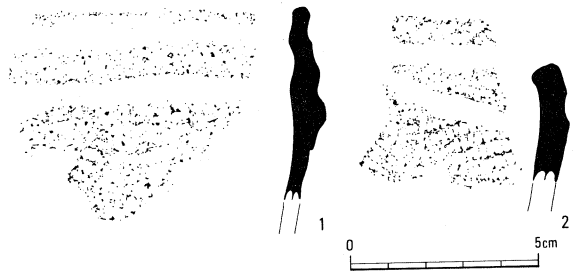
る。各トレンチとも地表から耕土，床土，黄褐色土となり，地表下0.5～0.7 mで黒灰色粘質土となる。この黒灰色粘質土は，谷部が水田化される以前の堆積土と考えられる湧水層で，黄褐色土は水田造成時の客土と考えられる。泥田であるため，この二層の間には小枝をたばねた暗渠が設けられている。D地区では，遺構，遺物は発見できなかった。

今回の調査では，土壌群以外の遺構は検出できなかったが，縄文時代から現代までの遺物が出土しており，調査地周辺にこれらの遺跡があることが予想されるため，今後の分布調査及び発掘調査によってその遺構を明らかにしていきたい。

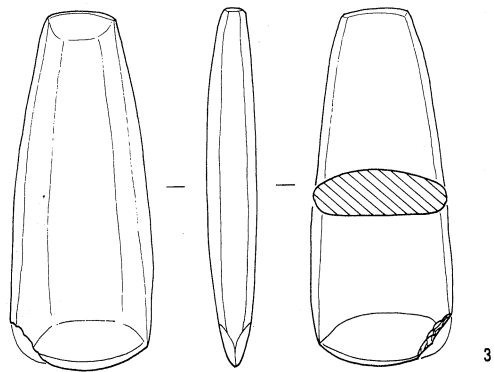
### Ⅲ 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には，縄文土器深鉢，古墳時代の須恵器杯蓋，奈良時代の須恵器杯・甕，黒色土器A碗，鎌倉時代の土師器皿，瓦器碗の他に，磨製石斧，サヌカイト片，瓦器火舎陶器大甕，白磁碗，土師器羽釜，染付碗，青磁碗，天目茶碗，平瓦，鉄釘など，縄文時代から現代までの多くのものがあるが，そのほとんどは細片である。このため，比較的残りの良い縄文土器，磨製石斧について記述する。

**縄文土器 (1・2)** 13トレンチから縄文土器が6片出土した。いずれも深鉢の一部分と考えられるもので口縁部2片，底部1片がある。1は口縁部が直立するもので口縁部外面に二条の平行沈線をもつ。その下には縄文を施しているが，磨滅しているために詳細は不明である。内面も磨滅が著しく調整は不明。色調は茶灰色を呈し，胎土中には2～3mmの白色砂粒が多く含まれている。焼成は良好。色調及び胎土から，底部を含む他の4片と同一個体と考えられる。2は，内彎ぎみにたちあがる口縁部をもち口縁端部は内傾する。口縁部外面には，沈線で左あがりに区画した中に磨消縄文を施している。口唇部にも縄文を施す。口縁部内面はなで調整で仕上げている。色調は茶褐色を呈し，胎土には1mm前後の砂粒を含んでいる。焼成は良好。いずれも縄文時代後期頃の特徴をもつ。



**磨製石斧 (3)** 15トレンチで出土した平面撥状を呈する両刃の小型磨製石斧である。右面の基部は，平坦につくりだされている。左面の基部は，やや丸味をもち丁寧に研磨されている。全長9.3cm，幅1.8～3.7cm 最大厚1.2cm，重量75g。 (篠原豊一)

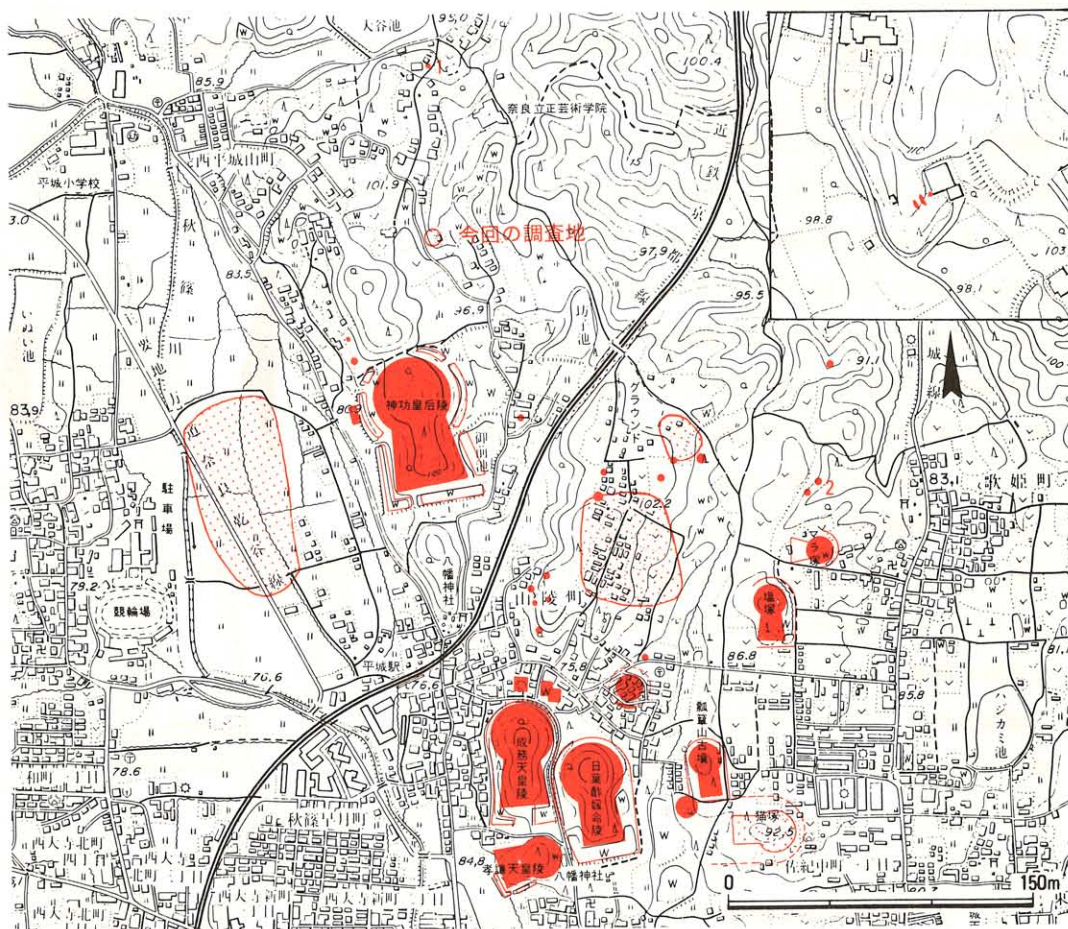


出土遺物 1/2

## 2. 山陵町狐塚横穴群の調査

### I はじめに

昭和59年7月20日、奈良市山陵町1227の1番地、J. EVANG氏から奈良国立文化財研究所へ、同氏宅増築工事中に陶棺を発見したとの通報があった。これを受け、翌21日朝、同研究所職員が現地に赴き、住宅基礎掘削箇所において、亀甲形陶棺2個体の露呈を確認した。横穴であると判断し、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良市教育委員会文化財課に連絡がとられた。このため、市教委文化財課では職員が現地へ赴き、陶棺露呈状態を確認した。同日午後、奈良国立文化財研究所、県教委文化財保存課、市教委文化財課の三者が、対策について協議を行ない、遺跡の重要性から、緊急の対応が必要であると判断し、市教委文化財課が、現地発掘調査を担当、対処する



発掘区の位置

こととなり、同日中に調査に着手した。

なお、調査は発見陶棺2個体についての埋納施設及び、その範囲確認を目的として実施したが、調査進行に伴い、他に2基の横穴の存在が確認され、最終的に3基の横穴と、4個体の陶棺を検出し得た。このため、調査期間は当初の計画を大幅に超過し、全調査を終了したのは7月30日である。

以上の経過から、今回発見の横穴を調査地の字名から狐塚横穴群と呼称し、報告する。

調査に際しては、J・EVANG氏、(株)尾田組の御理解と、多大なる御協力を得、花園大学教授、伊達宗泰氏、奈良国立文化財研究所の諸氏には多くの御指導を賜った。記して感謝いたします。

## II 位置と環境

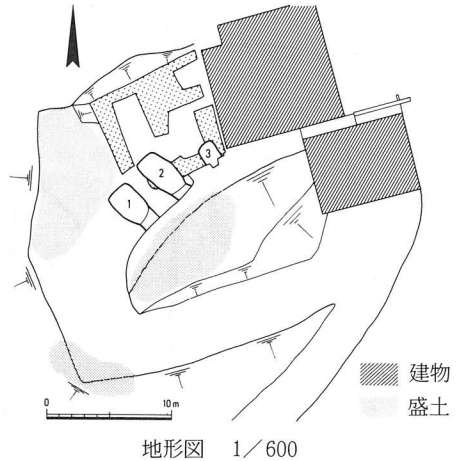
横穴は、神功皇后陵の北方の丘陵西縁の一支脈南側斜面に開口する。標高は、おおむね108mの地点にあたる。横穴のある南斜面は、従前畑地として開墾されており、横穴検出面は、テラス状の平坦地となっている。平坦面南側には、住宅増築工事のための盛土がなされ、以南は進入道路のため切り通し状に削平されている。

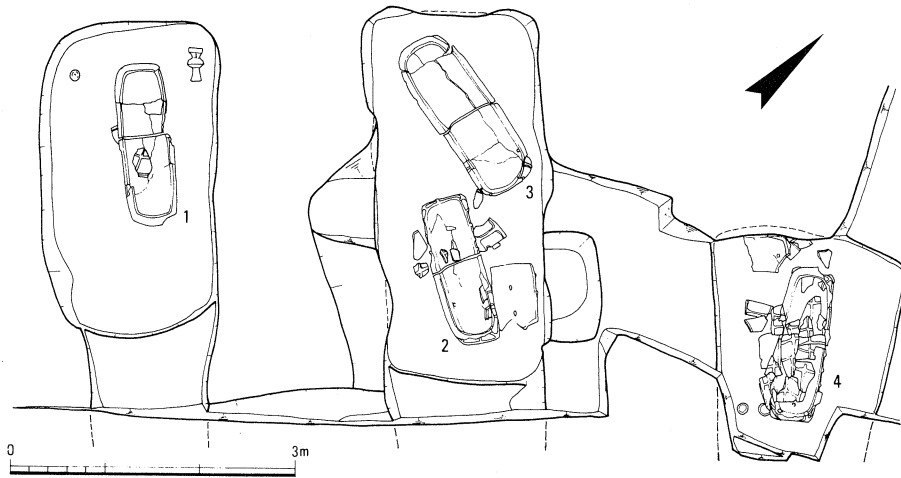
奈良市北部地域では、多くの横穴、陶棺出土地が知られており、調査地周辺でも、山陵町狐塚陶棺出土地、山陵町御陵前陶棺出土地、山陵町上畑陶棺出土地、津風呂町陶棺出土地（位置図中番号1）、歌姫町赤井谷横穴（同2）等の陶棺出土地、横穴の存在が報告されている。山陵町狐塚での陶棺出土地は、狐塚1099-4番地、狐塚1227-2番地の2例が確認されているが、いずれも今回の調査地のごく近隣地にあたり、また既設建物建築時にも陶棺片が出土したとのことなどから調査地周辺に広がる横穴群の存在も考えられる。

## III 検出遺構

以下に、今回検出した横穴3基について記述する。横穴各部分の呼称は、遺骸埋葬部を玄室、玄室の閉塞部を玄門、玄門に至る部分を墓道として報告する。

**1号横穴** 黄褐色砂礫の地山を穿ち、南東に向かって開口する。玄室、玄門部及び墓道の一部を検出した。玄室の平面形は、隅丸方形を呈し、奥壁部での幅員1.8m、玄門部側での幅員1.6m、長さ3.4mを測る。天井部は崩落のため残存しないが、玄室断面は、側面・奥壁が内傾して立ちあがり、尖頭アーチ形に復元されよう。高さ0.7m分が残る。玄門部は幅員1.4mを測り高さ0.6m分が残る。特に、埋葬時の閉塞施設と考え得るものは検出できなかった。墓道は長さ約0.8m分を検出した。更に、南東方向に続くものと思われるが、増築工事による盛土のため延長部は調査できなかった。玄室奥壁より、ほぼ横穴主軸にそって陶棺（陶棺1）が据置かれていた。陶棺は





検出遺構平面図 1/80

2分割した棺身を組み合わせる1個体とする。玄室内を、玄門部より一段掘り下げ、床面を横穴掘削時の土砂で約0.1mの厚さにわたり整地し、その上面に陶棺を据えている。陶棺蓋部は完全に崩壊し、棺内に落ち込んでいるものもみられた。棺内には、人骨、副葬品は遺存しない。玄室奥壁側から、須恵器台付長頸壺、杯身が出土した。これらは、陶棺据置床面より約15cm上面で出土しており、玄室内土層堆積状態等からみて、人為的攪乱を受けている可能性がある。

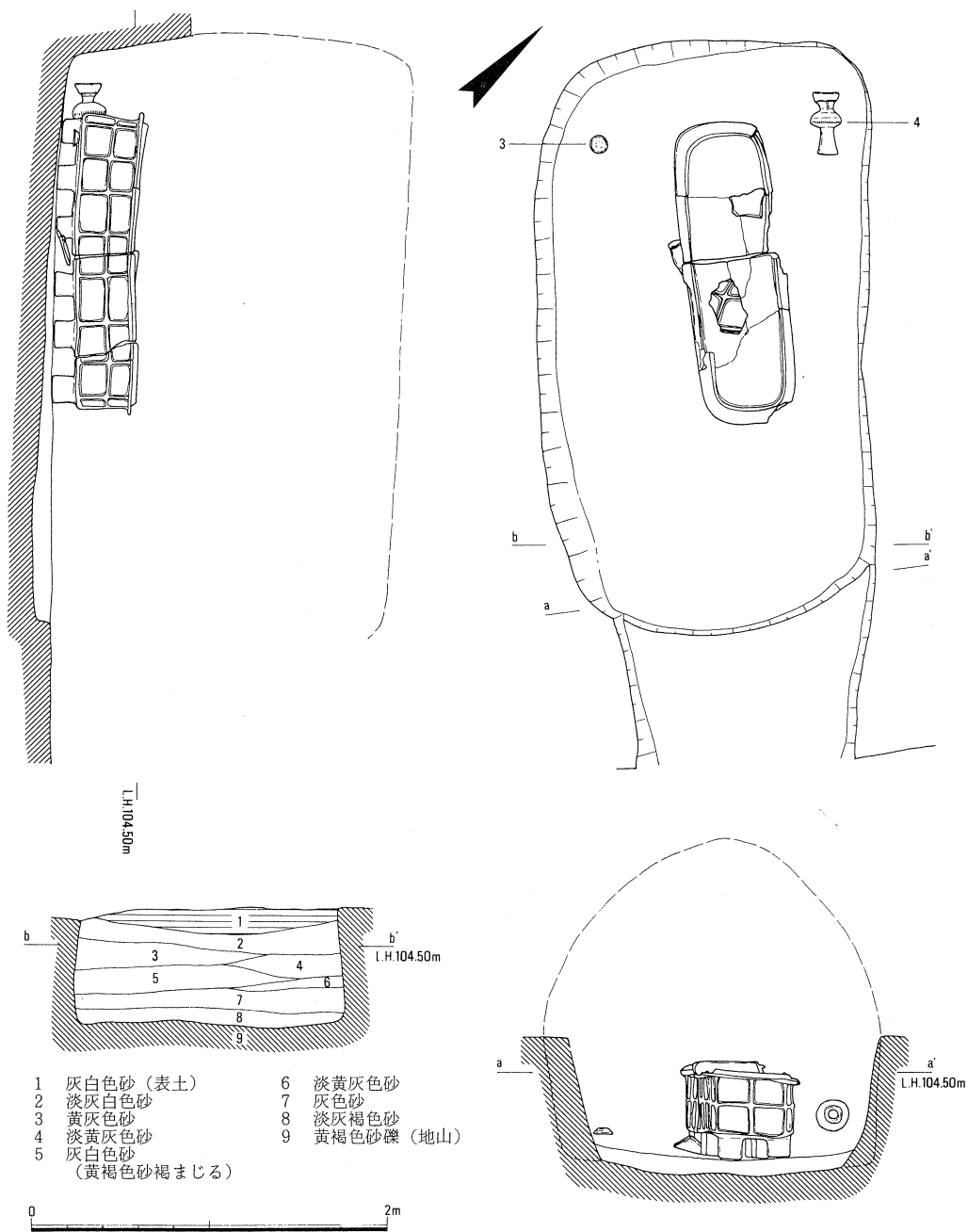
**2号横穴** 1号横穴の東約1.8mを隔てて存在する。住宅基礎工事中に発見されたもので、中央部が基礎掘削作業により破壊されている。玄室、玄門部を検出した。玄室の平面形は長方形を呈し、奥壁部での幅員1.8m、玄門部側での幅員1.6m、長さ3.8mを測る。天井部は残存しないが、奥壁・側壁が内傾して立上り、尖頭アーチ形に復元されよう。高さ1m分が残る。

玄室内には、陶棺2個体が据置かれていた。奥壁に近く、大型の陶棺（陶棺3）が、主軸をほぼ東西に据置かれており、その手前にやや小型の陶棺（陶棺2）が、主軸を北西から南東方向に置かれていた。両棺とも、2分割した棺身を組み合わせる据置く。陶棺3では、基礎掘削工事による攪乱のため、付随する蓋片は確認できなかった。棺内では、棺南側半身部から金環1点が出土した。人骨は遺存しない。棺は南北棺半身が均質のものではなく、既成の異なる2棺を組み合わせる利用したものと考えられる。陶棺2の蓋部は完全に崩壊し、棺身の左右、及び棺身内に落ち込む。棺内では、棺南側半身部から金環1点が出土した。人骨の遺存はみられない。また、玄室内では、陶棺蓋半身3個体分の破片が散乱していた。このうち、1個体分については、出土場所から陶棺2棺身との組み合わせが想定できるが、他については判然としない。

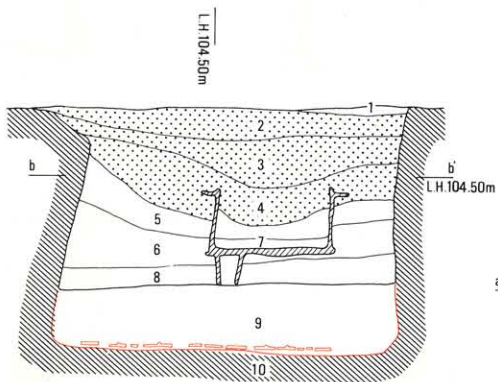
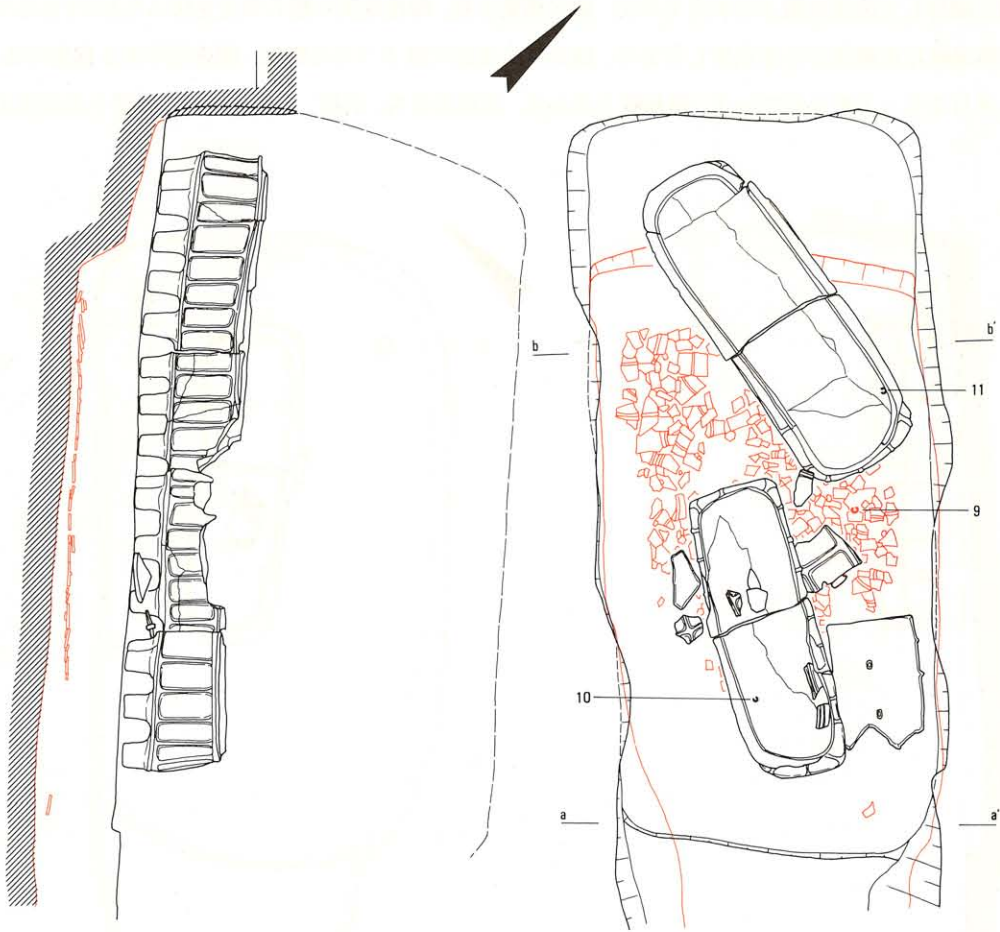
陶棺を搬出した後、玄室内床面を精査したところ、陶棺据置面下約0.4mで、玄門部より一段掘り下げ、玄室中央部に埴輪片を敷きつめる平坦面を検出。奥壁部での幅1.7m、玄門部側での幅1.6m、玄門部からの長さ3.4mを測る。横穴構築当初の床面と想定される。<sup>注1)</sup>埴輪敷は、円筒埴



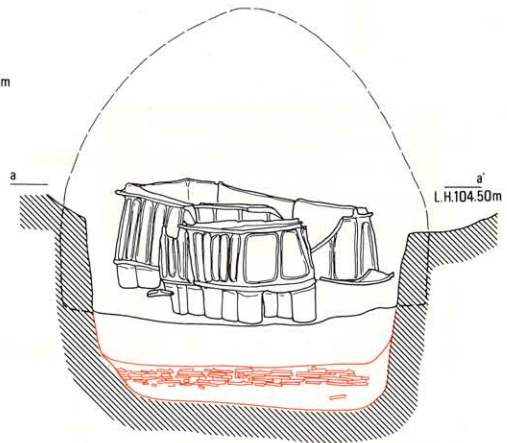
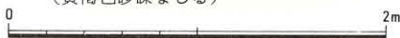
輪を破碎して床面に敷きつめたもので、横穴構築当初、陶棺据置に際し安定を図ったものであろう。円筒埴輪は何個体分かを利用しており、破碎片を床面に敷きつめる際に、個体別のある程度のまとまりをもって敷かれている。埴輪敷上面から、須恵器杯身、高杯、土師器細片、金環1点が出土。



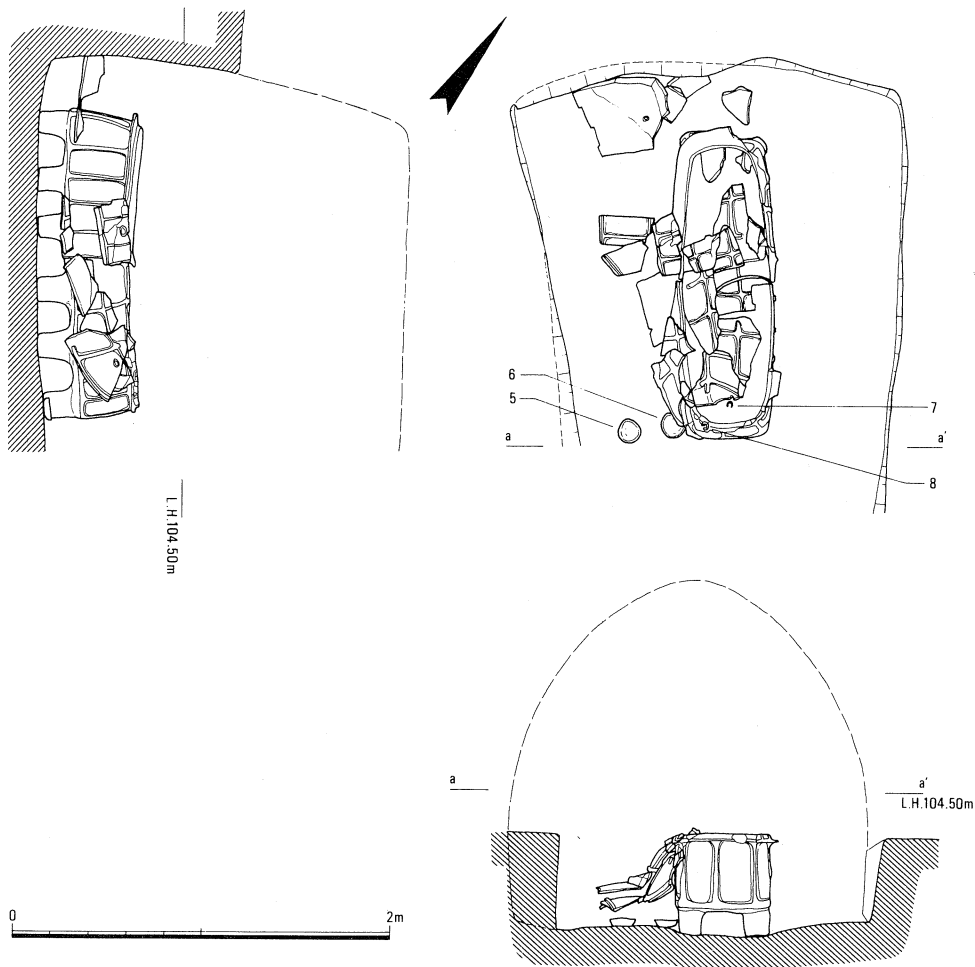
1号横穴平面・立面図 1/40



- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1 茶褐色土 (表土)          | 6 黄灰色砂        |
| 2 黄灰色砂               | 7 茶灰色砂        |
| 3 淡黄灰色砂              | 8 淡灰色砂        |
| 4 灰色砂<br>(黄褐色砂礫まじる)  | 9 淡黄灰色砂       |
| 5 黄灰色砂<br>(黄褐色砂礫まじる) | 10 黄褐色砂礫 (地山) |



2号横穴平面・立面图 1/40



3号横穴平面・立面図 1/40

これらから、2個体の陶棺の据置かれていた床面は、陶棺据置に際し、当初玄室の奥壁を掘削拡張し、掘削した土砂によって埴輪敷上面を整地した上に陶棺を据置いたものと考えられる。

**3号横穴** 2号横穴東側に約1.8mを隔てて存在する。玄門部を検出できなかったため、玄室平面形は不明であるが、奥壁に向かって撥状の拡がりを示す。奥壁部での幅2m、前面部での幅1.7m、長さ2.2m分を検出した、天井部は残存しないが、玄室断面形は、奥壁、側壁が内傾して立上り、尖頭アーチ形に復元されよう。高さ0.5m分が残る。奥壁に近く、ほぼ横穴主軸にそって陶棺（陶棺4）が据置かれていた。陶棺は2分割したものを組み合わせて据置く。陶棺蓋部は完全に崩壊し、棺内外に落ち込んでいた。棺内では、棺南側半身部から金環2点が出土。人骨は遺存しない。玄室前面部棺外右側から、土師器椀2点が出土。棺蓋の崩壊状態からみて、出土副葬品は、それぞれに原位置を保っているものと考えられる。

注1) 床面埴輪敷の類例は歌姫町赤井谷横穴にもある。「奈良市歌姫町横穴」『奈良県抄報』12輯 1959

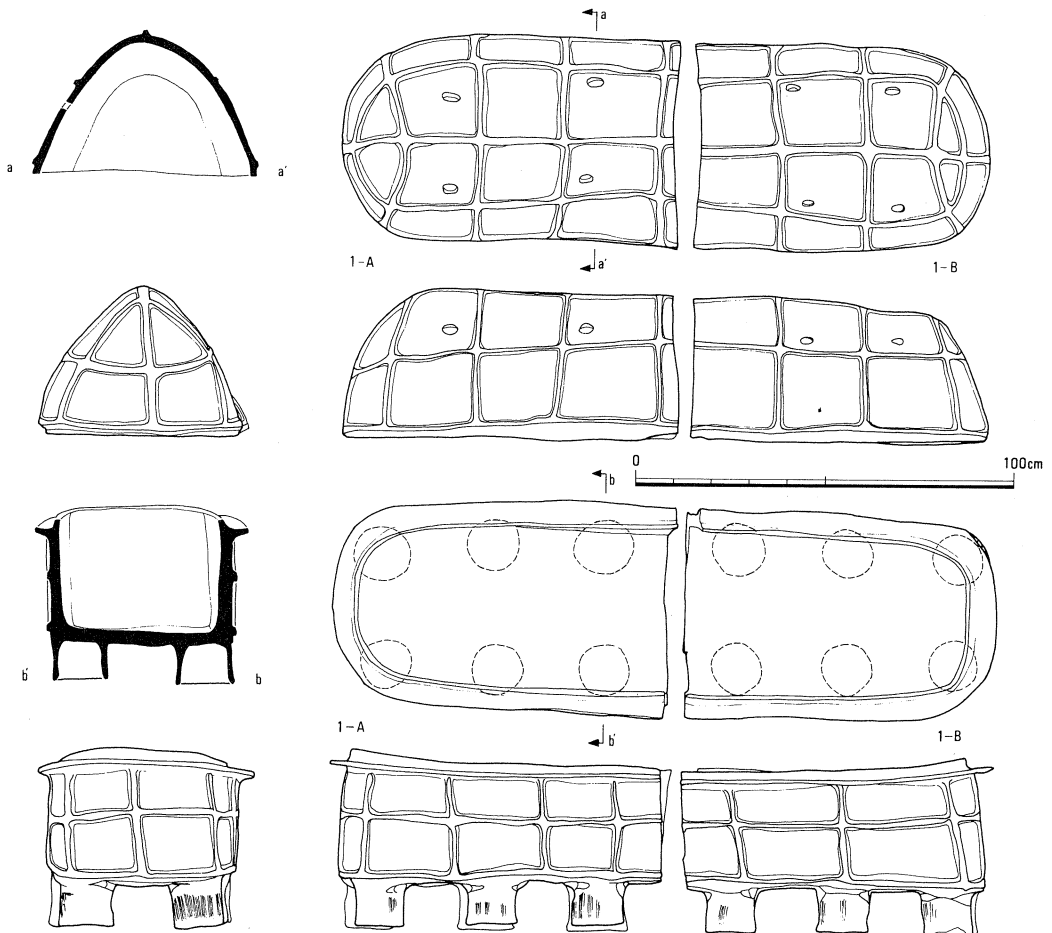
#### IV 陶 棺

1号横穴出土陶棺(陶棺1) 土師質亀甲形陶棺である。棺身・棺蓋ともに中央部で左右に二分割されている。棺身は平面隅丸長方形を呈す。最大長173cm, 最大幅57cmである。周囲の器壁は、わずかに内傾して立ち上る。器壁の周囲には、縦方向に合計17本、横方向に2本の凸帯をめぐらせる。先に横方向の凸帯を貼り付けた後に、縦方向の凸帯を貼り、格子目状とする。器壁の上縁外面に水平に張り出す鏝を貼り付け、棺蓋の受け部とする。棺底部に2行6列12脚の円筒状脚部をもつ。脚外面に縦方向のハケ目調整を施したのちに、棺底部に取り付け、粘土で周囲を補強する。棺底部外面と、脚部下半を除く面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。棺蓋は棺身よりやや小型で、ドーム状となり、最大長164cm, 最大幅55cmを測る。棺身とあわせた総高は84cmとなる。器壁の周囲には、縦方向に合計16本、横方向に3本の凸帯を貼り、格子目状とする。器壁端部を平坦に整え、棺身受け部との安定を図る。側面に4箇所ずつ、計8箇所長円形孔を穿つ。外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。棺身・棺蓋ともに、一体で成形後に、中央部で糸切り、二分割する。棺蓋は、頂部付近に小孔を穿ち、紐を通し切断したものである。

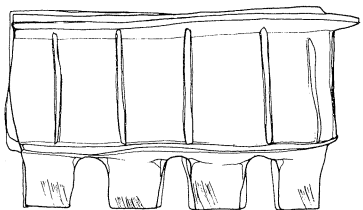
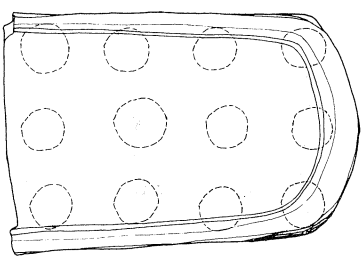
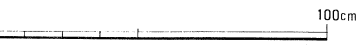
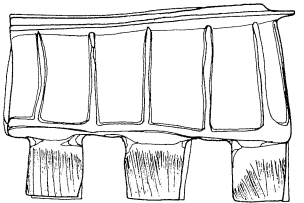
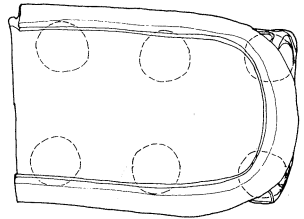
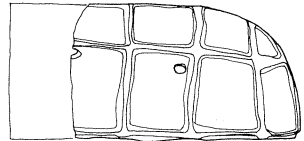
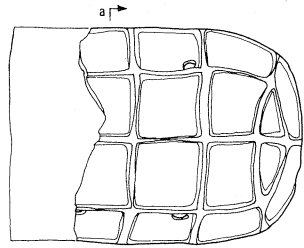
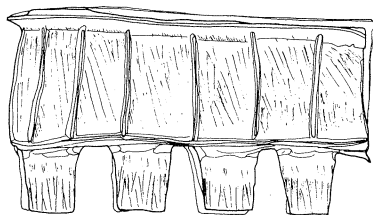
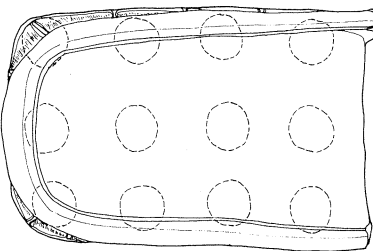
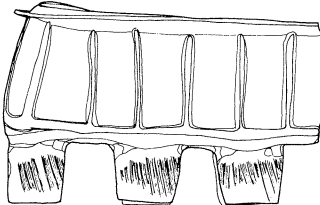
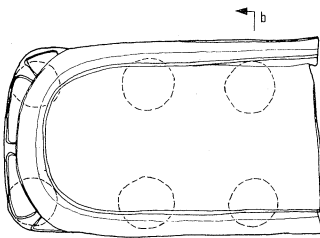
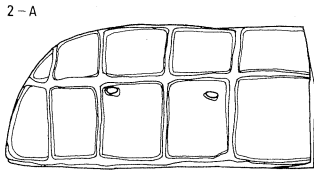
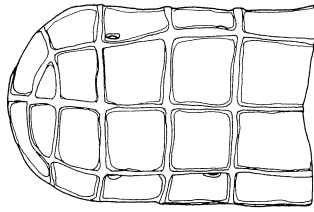
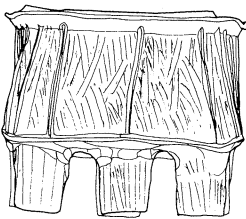
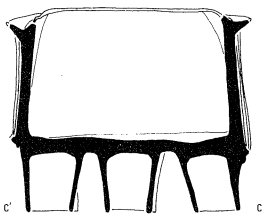
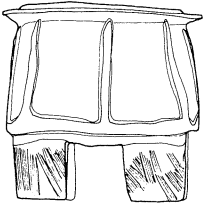
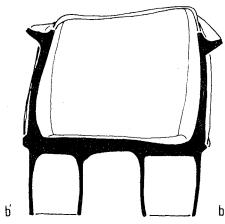
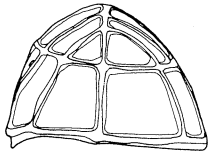
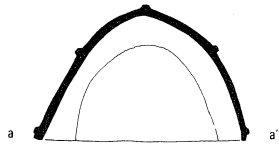
		陶棺1		陶棺2		陶棺3		陶棺4	
		A	B	A	B	A	B	A	B
蓋	長さ (cm)	87.0	77.0	78.0	(57.5)			84.5	78.5
	幅 (cm)	55.0	55.5	53.0	(58.0)			60.5	59.0
	高さ (cm)	39.0	38.5	38.0	(36.0)			42.5	38.5
	器厚 (cm)	1.6~2.7	1.7~2.1	1.5~2.4	1.5~2.2			1.6~2.2	1.7~2.0
	凸帯幅 (cm)	0.8~2.4	1.1~1.9	1.0~2.1	1.2~1.9			0.6~1.6	0.6~1.4
	凸帯厚 (cm)	0.4~1.0	0.5~0.8	1.0~1.5	0.7~0.9			0.4~1.8	0.5~1.2
	縦凸帯数 (本)	9	7	9	(7)			11	9
	横凸帯数 (本)	3	3	3	3			3	3
	透孔数 (本)	4	4	4	(4)			4	4
	内面調整	縦なで	縦なで	縦なで	縦なで			縦なで	縦なで
外面調整	横なで	横なで	横なで	横なで			横なで	横なで	
赤色顔料塗布	有	有	有	有			有	有	
身	長さ (cm)	90.5	82.5	83.5	79.5	93.0	97.5	82.0	82.0
	幅 (cm)	56.0	55.0	52.0	53.5	65.0	63.5	61.5	59.5
	高さ (cm)	47.5	47.0	53.5	53.0	53.5	54.5	53.5	53.5
	器厚 (cm)	2.2~4.3	2.2~4.3	1.9~2.4	1.9~2.8	3.2~4.2	3.4~5.6	2.1~2.9	1.8~3.0
	凸帯幅 (cm)	1.0~1.6	1.1~1.6	1.3~2.7	1.5~2.7	0.9~1.7	0.6~1.2	1.1~1.9	1.0~2.2
	凸帯厚 (cm)	0.6~0.9	0.6~1.0	0.3~0.9	0.2~1.0	0.4~0.9	0.6~1.0	0.5~0.8	0.2~0.4
	縦凸帯数 (本)	9	8	12	11	11	13	11	11
	横凸帯数 (本)	2	2	1	1	1	1	1	1
	内面調整	横なで	横なで	不定方向の なで	不定方向の なで	横なで	横なで	横なで	横なで
	外面調整	横なで	横なで	右下がりの なで	右下がりの なで	横なで	縦方向の ハケ	縦なで	縦なで
赤色顔料塗布	有	有	有	有	有	有	有	有	
脚	数 (本)	2×3	2×3	2×3	2×3	3×4	3×4	2×3	2×3
	径 (cm)	12.5 ~ 15.5		13.0 ~ 14.0		11.0 ~ 14.0		14.0 ~ 15.5	
	高さ (cm)	10.0 ~ 12.0		15.5 ~ 19.5		11.5 ~ 18.0		15.5 ~ 17.0	
	内面調整	なで		なで		なで		なで	
	外面調整	ハケ		ハケ		ハケ		ハケ	
	赤色顔料塗布	有		無		有		有	

陶棺寸法表 (陶棺記号は玄門部側をA, 奥壁側をBとした)

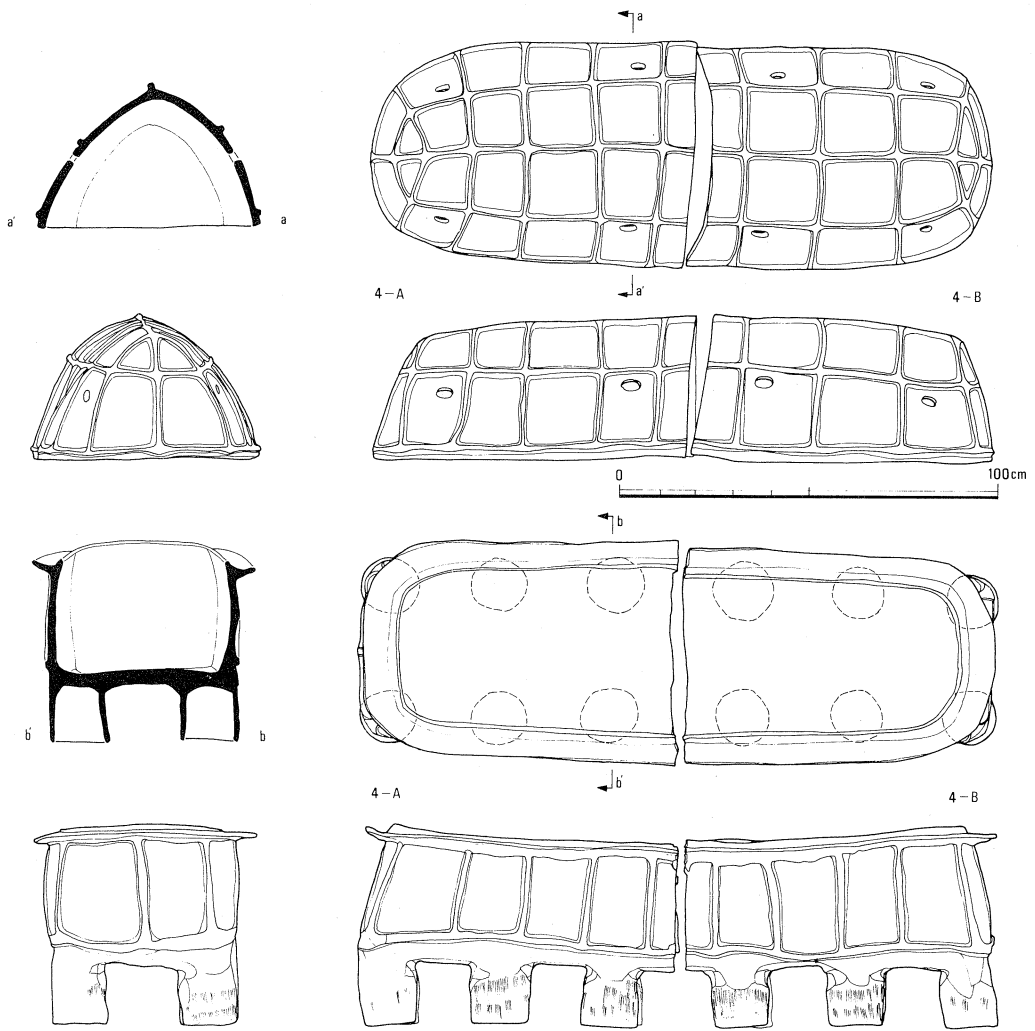
2号横穴出土陶棺（陶棺2・3） いずれも土師質亀甲形陶棺である。陶棺2棺身は、中央部で左右に分割されている。平面形は隅丸長方形を呈す。最大長163cm最大幅53.5cmである。周囲の器壁は、わずかに内傾して立ち上がる。器壁周囲には、縦方向に合計23本、横方向に1本の凸帯をめぐらせる。器壁の上縁外面に水平に張り出す鐔を貼り付け、棺蓋の受け部とする。棺底部に2行6列12脚の円筒状脚部をもつ。脚外面に縦方向のハケ目調整を施したのちに、棺底部に取り付け、粘土で周囲を補強する。棺底部外面と脚部を除く面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。陶棺3棺身は、左右別個の半身を組み合わせて利用しており、側面の凸帯や切断面及び調整手法は一致しない。平面形は隅丸長方形を呈す。周囲の器壁は、わずかに内傾して立ち上る。器壁の周囲には、縦方向に合計24本、横方向に1本の凸帯をめぐらせる。器壁の上端部に棺身の受け部となる鐔をめぐらす。棺身Aでは、器壁上縁外面に水平に張り出す鐔を貼り付ける。棺身Bでは、器壁の上端をほぼ直角に外方へ折返し、その上面内端に高さ約3cmの凸帯状の粘土を貼りつけ、



1号横穴出土陶棺 1/20



2号横穴出土陶棺 1/20



3号横穴出土陶棺 1/20

周縁をつくり受け部とする手法をとる。棺底部に3行8列24脚の円筒状脚部をもつ。脚外面に縦方向のハケ目調整を施したのちに、棺底部に取り付け、粘土で周囲を補強する。棺底部外面と脚部下半を除く面に赤色顔料を塗布する。

棺蓋は1個体分がある。棺身に比して、やや小型のドーム状のものである。棺身とあわせた総高は86cmである。器壁の周囲には、縦・横方向に凸帯を貼り格子目状とする。器壁の端部を平坦に整え、棺身受け部との安定を図る。側辺に、蓋Aは4箇所・蓋Bは残存4箇所に長円形孔を穿つ。外面に赤色顔料を塗布する。蓋Bについては、その幅員から陶棺2棺身Bと組みあわず、陶棺3号身との組み合わせの可能性も考えられる。

3号横穴出土陶棺（陶棺4） 土師質亀甲形陶棺である。棺身・棺蓋ともに中央部で左右に二分割されている。棺身は、平面隅丸長方形を呈す。最大長164cm、最大幅61.5cmである。周囲の

器壁は、わずかに内傾して立ち上る。器壁の周囲には、縦方向に合計22本、横方向に1本の凸帯をめぐらせる。器壁の上縁外面に水平方向に張り出す鐳を貼り付け、棺蓋の受け部とする。棺底部に2行6列12脚の円筒状脚部をもつ。脚外面に縦方向のハケ目調整を施したのちに棺底部に取り付け粘土で周囲を補強する。棺底部外面と、脚部下半を除く面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。棺蓋は、棺身よりやや小型でドーム状となり、最大長163cm、最大幅60.5cmである。棺身と合わせた総高は91cmとやや高い。器壁の周囲には、縦方向に合計20本、横方向に3本の凸帯を貼り格子目状とする。器壁の端部を平坦に整え、棺身受け部との安定を図る。側辺に4箇所ずつ、計8箇所の長円形孔を穿つ。外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。棺身・棺蓋ともに一体成形ののちに、中央部で糸切りされ、二分割される。(立石堅志)

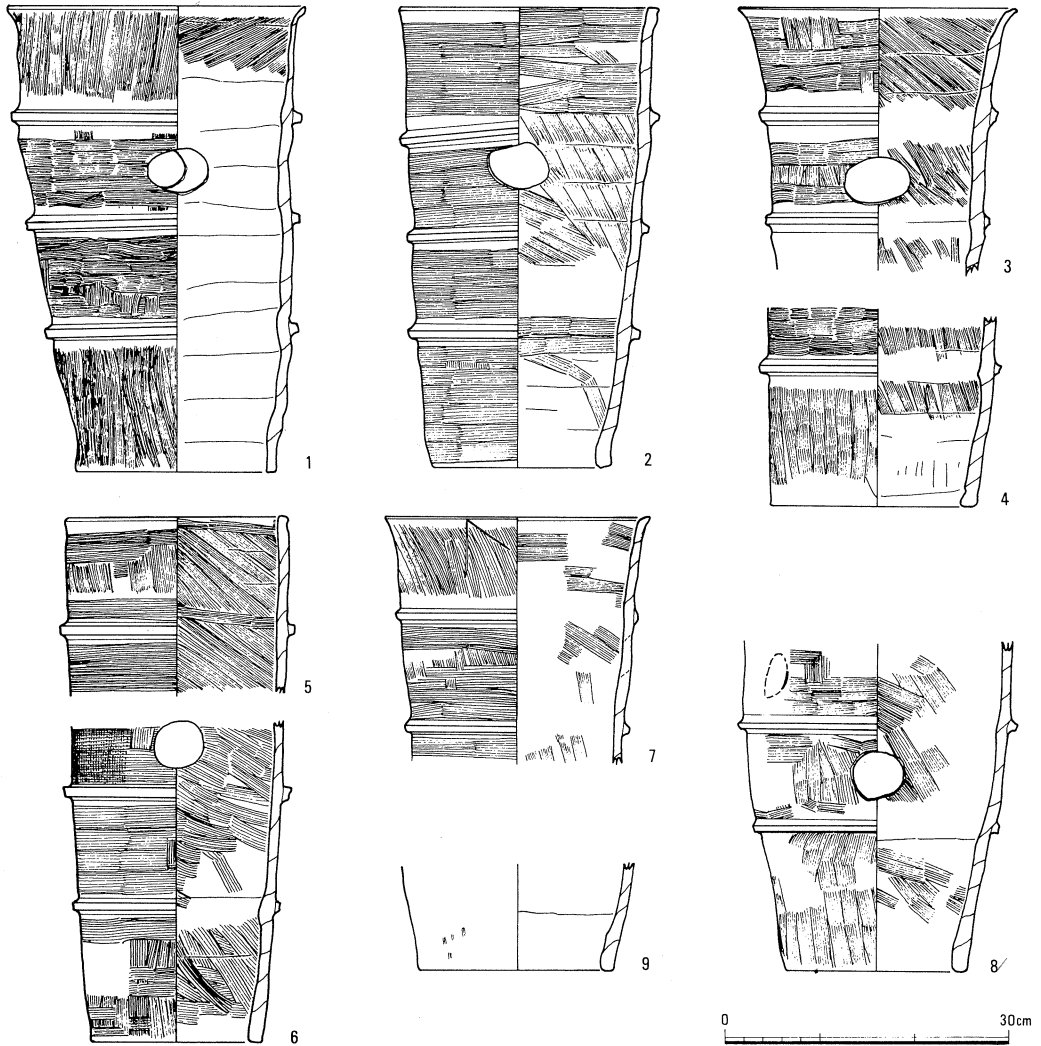
## V 埴輪

2号横穴に敷かれていた円筒埴輪(1~9)がある。

1は3段の凸帯をもつもので、第3段に双孔の楕円形透しがある。第1段の下半は内彎し、上半は外傾する。胴部はほぼ直立しながら口縁部で外反する。外面は第1・4段がタテハケ、第2・3段がタテハケの後、ヨコハケを施す。内面は第4段上半にナナメハケを施す。口縁部内外面にはヨコナデを施す。色調は淡黄褐色で胎土はこまかい。2は3段の凸帯をもつもので、第3段に双孔の楕円形透しがある。第1段下半はやや内彎し上部は外傾する。外面はタテハケの後、全面にヨコハケを施す。内面は第1凸帯内面と第4段がヨコハケ、他はナナメハケを施す。色調は淡黄褐色で胎土中に2~3mmの白色砂粒を含む。3は直立する胴部と外反する口縁部からなる。外面はタテハケの後、粗くヨコハケを、内面はナナメハケを施す。口縁部内外面及び凸帯内面はヨコナデを施す。4は外傾する第1段と直立する第2段が残る。外面は第1段がタテハケ、第2段がヨコハケを施す。内面はタテハケを施すが第1段は粗い。凸帯内面はヨコナデを施す。3・4の色調は黄褐色で、胎土中に2~3mmの白色砂粒を含む。5は直立する胴部と口縁部からなる。外面は第4段がタテハケの後、粗くヨコハケを、第3段はヨコハケを施す。6は内彎する第1段と直立する胴部からなり、第3段に楕円形透しをもつ。外面はタテハケの後、粗くヨコハケを、内面はナナメハケを施す。5・6の色調は淡黄色で胎土中に2~3mmの白色砂粒を含む。7は外傾する胴部と外反する口縁部からなる。外面は第4段がタテハケ、第2・3段がタテハケの後、粗くヨコハケを施す。8は外傾する第1段と直立する第2・3段が残る。第2・3段に楕円形透しをもつ。外面は第1段がタテハケ、他はタテハケの後、粗くヨコハケを施す。内面は粗くナナメハケを施す。9は第1段が残るのみで、表面剥離しているため調整は不明である。7・8・9の色調は赤褐色で胎土中に2~5mmの白色砂粒を含む。ハケ目調整、色調、胎土などからみて3と4、5と6は同一個体の可能性が考えられる。(篠原豊一)

参考文献：奈良市教育委員会「コナベ古墳前方部南外提発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和54年度





2号横穴出土埴輪 1/8

No	口径	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	厚さ	凸帯幅	凸帯高	備考
1	31.5cm	10.3cm	49.2cm	14.0cm	9.8cm	9.4cm	10.8cm	0.5~1.6cm	0.9~2.2cm	1.0cm	○細かいハケメ
2	27.6cm	18.9cm	48.6cm	14.0cm	9.4cm	9.8cm	10.7cm	1.0~1.6cm	0.8~2.2cm	1.0cm	○粗いハケメ
3	29.0cm	—	(28.3) cm	—	(5.2) cm	9.2cm	10.6cm	0.5~1.6cm	0.8~2.0cm	0.6cm	○細かいハケメ(1と類似)
4	—	22.6cm	(20.5) cm	13.5cm	(5.0) cm	—	—	1.5~2.0cm	0.8~2.0cm	0.8cm	
5	25.4cm	—	(19.0) cm	—	—	(6.2) cm	11.2cm	1.0cm	1.0~2.0cm	0.8cm	○粗いハケメ
6	—	18.2cm	(33.5) cm	13.5cm	10.2cm	(6.5) cm	—	1.0~1.6cm	1.0~2.0cm	0.5~1.0cm	
7	27.6cm	—	(26.2) cm	—	(3.5) cm	10.0cm	10.2cm	0.8~1.2cm	0.8~2.0cm	0.8cm	○細かいハケメ
8	—	19.6cm	(11.0) cm	14.5cm	9.0cm	8.0cm	—	1.0~1.8cm	1.0~1.8cm	1.0cm	○細かいハケメ(7と類似)
9	—	20.6cm	(8.5) cm	(11.0) cm	—	—	—	0.8~1.6cm	—	—	○不明

※ ( ) は残存長。底部から第1凸帯までを第1段とし口縁部に向かって第2・3・4段とする。

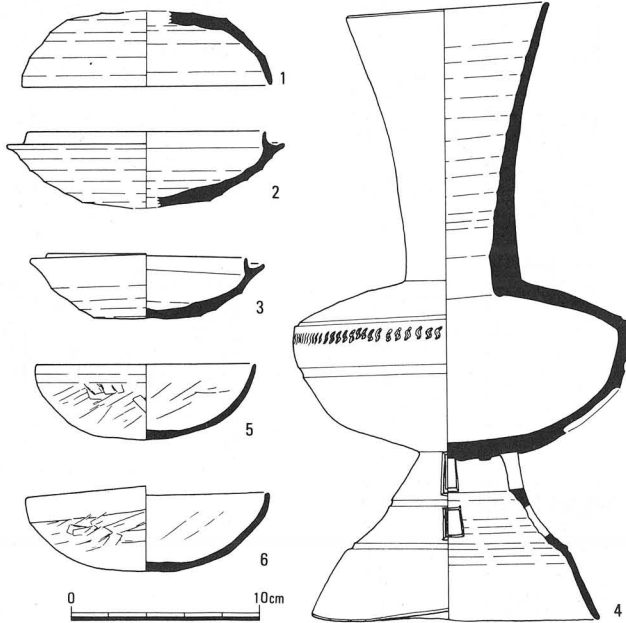
円筒埴輪計測表

VI 出土遺物

1～3号横穴から土師器、須恵器、金環が出土。それぞれの出土位置は第Ⅲ項図中に示した。

**土師器** 碗2点(5・6)がある。ともに、内彎する口縁部を呈し、端部を丸くおさめる。口縁部内外面を横なで、体部外面をへら削りのままとする。内面はへら削りののち、なで調整。

**須恵器** 杯身(2・3)、杯蓋(1)、台付長頸壺(4)等がある。1・2は、2号横穴埴輪敷上面から出土。2は、口径14.8cm。やや扁平な体部を呈す。

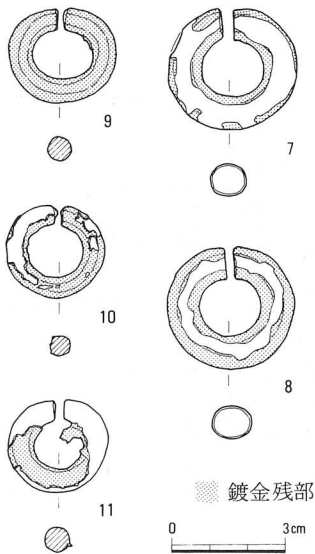


出土土器 1/4

内面、口縁部内外面を回転ナデ調整。体部外面をへら削りののち回転ナデ調整。底部外面はへら切りのままとする。1は頂部をへら切りののち、回転ナデ調整とする。3は、口径12.5cm。扁平な体部と、低い立ち上り部を呈す。内面、口縁部内外面を回転ナデ調整。体部外面をへら削りののち回転ナデ調整とし、底部外面はへら切りのままとする。4は、肩部に二条の沈線をめぐらせ、

間に刻目を施す。脚部上位に2段2方向の長方形透孔をもつ。ミズビキ成形ののち、底部外面をへら削りし、脚部を貼付ける。

**金環** 総数5点が出土した。9・10・11は、いずれも銅丸棒を折り曲げた芯に、銀薄板を巻き下地とし、水銀を媒介に金を塗布したと考えられるもの。9は長径2.8cm、短径2.5cm、厚さ0.65cm、重さ11.5g。10は長径2.6cm、短径2.4cm、厚さ0.55cm、重さ11.7g。11は長径2.7cm、短径2.4cm、厚さ0.7cm、重さ9.5g。7・8は、銅薄板を折り曲げ円筒状とし、両端を円形の銅薄板で塞いだのち、銀薄板を巻き、下地とし、水銀を媒介に金を塗布したと考えられるもの。7は長径3.4cm、短径3.2cm、厚さ0.9cm、重さ6.6g。8は長径3.3cm、短径3.2cm、厚さ0.9cm、重さ10.5gを測る。X線写真撮影により、円筒状の合わせ部の確認を試みたが不詳である。



出土金環 1/2

注) 金環の分析等に関して奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター遺物処理研究室の手を煩わせた。記して感謝いたします。

## Ⅶ まとめ

各横穴の築造時期について、出土遺物から概観する。

1号横穴玄室内出土の須恵器は、従来の編年観からみて、概ね7世紀初頭を前後する時期に比定することができよう。また、2号横穴埴輪敷上面出土の須恵器杯身は、この1号横穴出土の須恵器杯身より、その形態からみて、やや古い時期を示すものとみることが出来る。3号横穴出土の土師器碗については、時期を確定するには至らないが、ほぼ同時期のものとみて大過なからう。

これらのことから直ちに、各横穴の築造時期を決定することはできないが、おそらく、いずれの横穴についても、7世紀を相前後する近接した時期に構築されたものであり、2号横穴については、その後、何らかの理由によって玄室の改修が行なわれたものと考えられよう。

今回の調査では、限られた範囲での緊急発掘調査にも関わらず、横穴3基、陶棺4個体を確認することができ、また、周辺域の調査等にもより、横穴群がさらに西へ広がることも想定された。奈良市北部での開発が進む今日、周辺域の調査等による横穴群の範囲確認が今後の急務とならう。

以下に、奈良市内で確認されている陶棺出土地を表示し、参考資料とする。 (立石堅志)

番号	出土地	遺跡及び古墳	古墳形式	陶 棺 形 状		現 所 在	文 献
				質	形 状		
1	奈良市秋篠町西山		不明		不明	奈良国立博物館	1・6・7
2	奈良市秋篠町東山1180-20		不明	土師	亀甲式棺身		2・6
3	奈良市秋篠町東山1180-20		不明	土師	亀甲式	旧平城尋常高等小学校	2・6
4	奈良市秋篠町東山1180-20		不明	土師	亀甲式棺身	不明	2・6
5	奈良市西大寺町シンドウジ(赤田)		横穴か	土師	亀甲式棺身蓋	奈良国立博物館	1・3・6・7
6	奈良市西大寺町新堂寺		古墳か	土師	亀甲式棺身2蓋1 脚2行6列		4・5・6・7
7	奈良市西大寺町赤田		不明	土師	亀甲式棺身蓋 脚3行10列		1・2・6・7
8	奈良市西大寺町赤田町一丁目7番地の1	赤田横穴群	横穴	土師	亀甲式棺身蓋 脚2行6列	奈良市教育委員会	8
9	奈良市山陵町御陵前		不明	土師	亀甲式棺身蓋 脚3行6列	奈良国立博物館	1・2・6・7
10	奈良市山陵町御陵前森前地		不明	土師	亀甲式棺身 脚3行10列	不明	1・2・6・7
11	奈良市山陵町上畑635		不明	土師	亀甲式	不明	2・6・7
12	奈良市山陵町狐塚1099-4		不明	土師	亀甲式		2・6
13	奈良市山陵町狐塚1227-2		不明	土師	亀甲式		2・6
14	奈良市山陵町狐塚1227-1	狐塚横穴横穴群	横穴	土師	亀甲式棺身4 蓋3	奈良市教育委員会	今回の報告
15	奈良市室米町中尾 第6号墳	室米横穴群	横穴	土師	碓弾4	郡山高校 磯原考古学研究所	1・2・6・7・11
16	奈良市大安寺町		不明		不明	不明	1・2・6・7
17	奈良市津風呂町	津風呂陶棺古墳	土 壙 直 葬	土師	亀甲式棺身 脚3行8列	磯原考古学研究所	9・12
18	奈良市歌姫町赤井谷	歌姫赤井谷横穴群	横穴	土師	亀甲式棺身2蓋1 脚3行8列	磯原考古学研究所	7
19	奈良市法蓮町境村谷						7
20	奈良市佐紀町平城宮跡	平城宮跡	不明	須恵	四注式蓋のみ	奈良国立文化財研究所	10

注1) 後藤守一「壙棺陶棺に就て(三)」『考古学雑誌』14-11 1924

注2) 田村吉永「大和に於ける陶棺出土遺蹟」『大和考古学』3-5 1933

注3) 森口奈良吉「大和西大寺発見の陶棺」『考古界』5-5 1905

注4) 末永雅雄「新堂寺の合葬陶棺」『大和志』2-11 1935

注5) 末永雅雄「生駒郡西大寺村新堂寺合葬陶棺」『奈良県抄報』2 1941

注6) 田村吉永「大和に於ける陶棺出土遺蹟一覽表」『大和志』2-11 1935

注7) 小島俊次「北野耕平「奈良市歌姫町横穴」」『奈良県抄報』12 1959

注8) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』1984

注9) 泉森院「津風呂陶棺古墳」『奈良県文化財報告』28 1976

注10) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅱ」1978

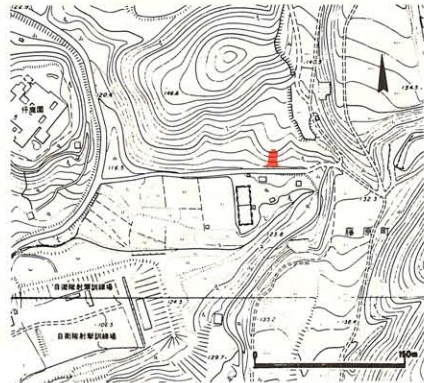
注11) 森本六爾「異形の陶棺を発見した大和国生駒郡佐紀村室米字中尾の遺跡について」『考古学雑誌』14-5 1924

注12) 奈良市史編纂審議会『奈良市史考』1968

### 3. 横井窯跡群の調査

#### I はじめに

昭和59年4月30日、毎日新聞社奈良支局から市教委文化財課へ、横井瓦窯跡が盗掘されているとの通報があった。翌5月1日、文化財課職員が現地へ赴き、付近を踏査したところ奈良県遺跡地図第1分冊登載の8B-19らしき窯跡が盗掘を受け、大きく損壊しており、他にも1ヶ所盗掘の痕跡が確認できた。現状のまま放置すればさらに今後も盗掘を受ける恐れがあり、残存した窯体が崩壊する可能性も十分に考えられる状況だったのである。

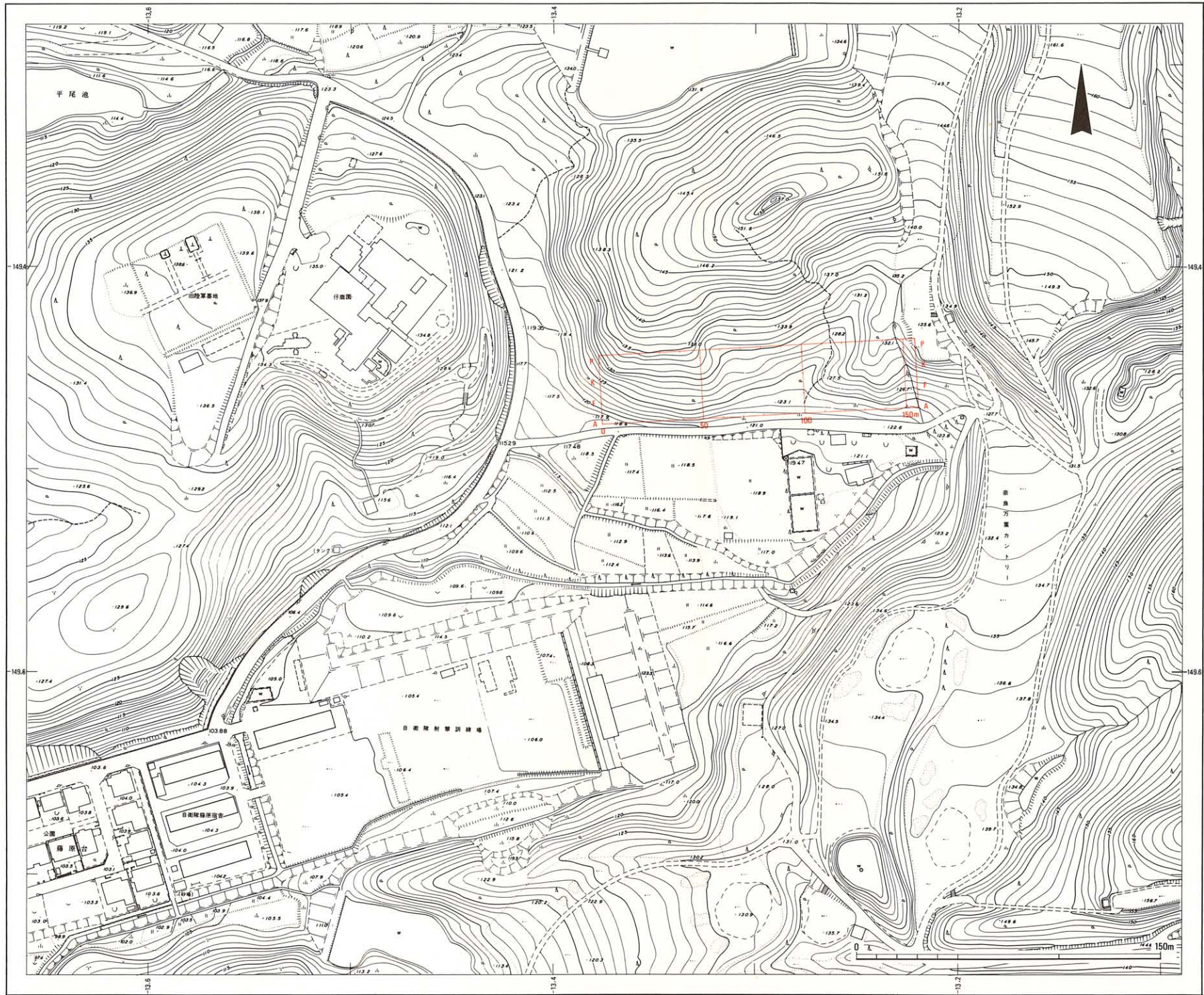


発掘区の位置 1 / 7500

ことの重大さに鑑み、文化財課では応急処置として盗掘を受けた窯跡の前に板柵を設け、損壊部をシートで覆いそれ以上の被害を防止するとともに、奈良県教育委員会、奈良国立文化財研究所と協議の上で、まず、窯体の残存状況を確認し、保存対策を探る目的で発掘調査を行うこととした。当該地の所有者の承諾を得た上で、発掘調査を開始したのは同年5月29日のことである。発掘調査は奈良市文化財保護審議会歴史環境関係小委員会の指導の下に、その目的に照らして盗掘を受けた窯跡のみを対象とした。樹木の伐採と、国土方眼座標に基づく測量基準杭の設置から始めた。調査が進むにつれ、窯体のほとんどが破壊され、遺物の大半が持ち去られていることが明らかになってきた。ほぼ窯体の残存状況が確認できた同年6月22日、さきの小委員会に今後の調査方針と保存対策を諮問し、窯体残存部を完掘しその後新たな土をもって盗掘部を埋め崩壊を防止することの指導を得た。この場合、特に地表に遺跡の輪郭などを表示することはせず、看板をもって盗掘防止を訴えることとした。さらに、この際磁気探査などの方法で窯跡群全体の規模を確認し、今後の保存対策の資料とすることを計画した。

その後、7月2日には調査の成果を新聞発表し広く盗掘の防止を訴え、同年7月5日に現地での発掘調査を終えた。埋め戻し養生は調査終了後7月12日から7月19日まで行った。窯体の残存部と盗掘部の要所に土裏を積み埋め戻した後、表面に芝を張り崩壊を防止した。以上の発掘調査保存のための処置は国庫補助金を受けて実施した。

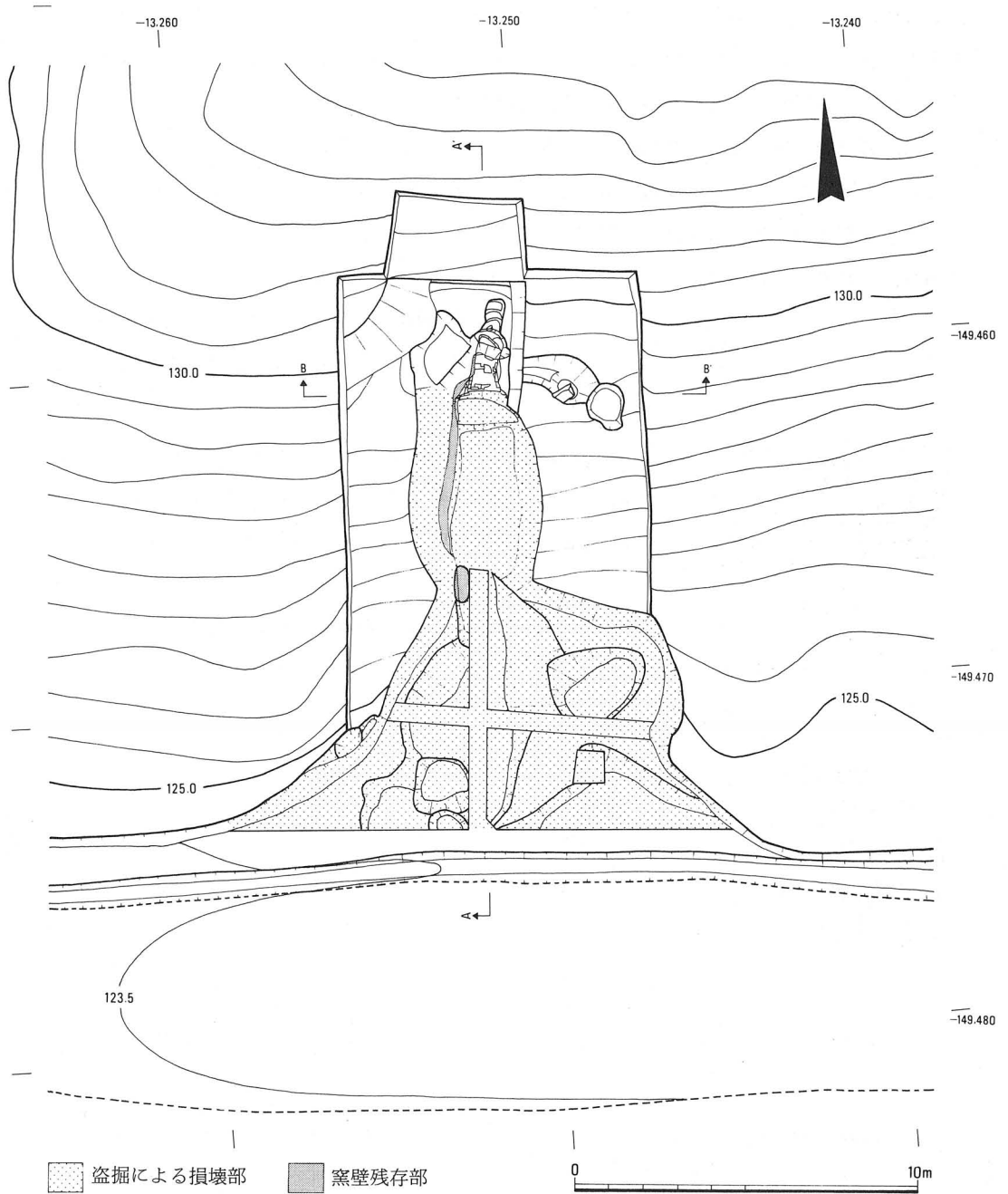
以下に発掘調査の成果の概要を記すが、当該窯では瓦のみでなく土器を焼成した痕跡が認められたので表題を横井窯跡群とし、発掘調査を実施した窯跡を横井1号窯跡として報告する。また磁気探査は奈良国立文化財研究所に依頼し、同研究所埋蔵文化財センター西村康氏には報文を賜った。なお、発掘調査の実施にあたっては土地所有者の承諾と協力が、花園大学文学部考古学研究室に所属する学生諸君の参加があった。記して感謝いたします。



横井窯跡群付近地形図 1 / 2500 (本図は奈良市教育委員会作成の堂所 1 : 1000 を編纂の後縮小したもの。赤色は磁気探査の基線。)

## II 遺 跡

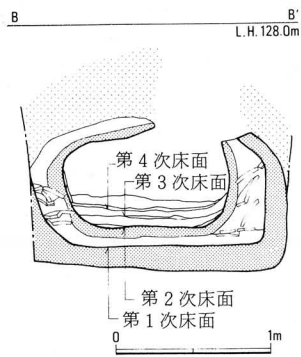
横井窯跡群は奈良市横井町 904 ～ 909 番地に所在する。この地は奈良盆地の東縁、高円山から西へ派生する尾根の南斜面にあたり、眼前には飛鳥時代の寺院とされる横井廃寺跡が広がっている。



1号窯跡平面実測図 1 / 200

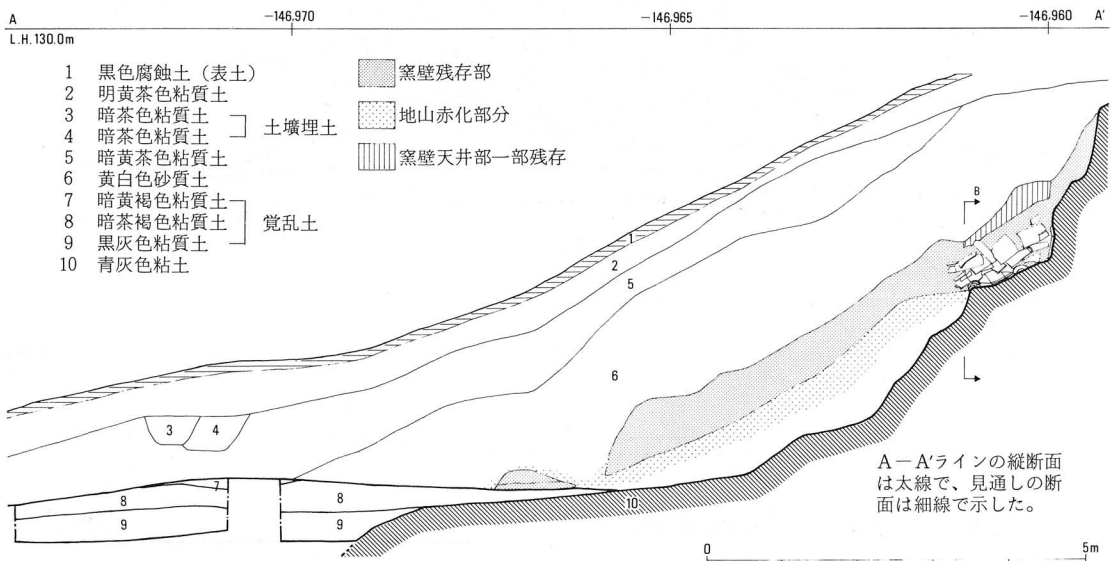
る。遺跡地図によれば尾根南斜面に4基の窯跡の存在が示されているが、現状では雑木林が生い茂り地表にその痕跡を見ることはできず、わずかに窯跡の南を東西に通る農道ぎわの断面に灰原の一部かと思われる土層が観察できるのみである。横井廃寺については古くから研究が進み、その伽藍配置は塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ西面する四天王寺式に想定されており、藤原寺、中臣寺に比定する見解もある。これに対して、窯跡群の認識は遅れ管見では奈良県遺跡地図に初めてその存在が記される。今回発掘調査を行い、1号窯として報告するのは横井町904番地に位置する窯跡で、地形からみて4基のうち東端のものにあたると思われる。

なお、調査中に横井窯跡群が位置する尾根上に横穴式石室の奥壁かと思われる石材が露呈していることを知った。石材には篆書体で「山王宮」と刻まれており、信仰の対象となっていたらしい。また、地元の古老によれば窯跡群に通じる農道わきに「いしのちかしつ」があったとのことであり、これまでこの谷には古墳の存在が知られていないだけに興味深い。



1号窯跡横断面図 1/50

**1号窯跡** 窯体は黄白色砂質土と青灰色粘土の地山を削り抜き、床に段を設けた地下式有段の窖窯である。焚口、燃烧部はほとんど破壊され、わずかに焼成部の一部と煙出しが残る。残存長約1.75m、残存最大幅1.5m、煙出しの長さ約2.15m。床面の傾斜角度は約24°である。天井は崩落しているが、残存部での推定高は約0.75mとなる。窯体主軸は国土方眼方位に対して北で東へ約10°振れ



1号窯跡縦断面図 1/100

る。このように1号窯跡はほとんど破壊されていたというものの、燃焼部付近の床から側壁にかけてのごく一部が残存し、焚口付近で地山が熱により赤色に変化している部分がわずかにある。これをもとに全体の規模を推定復元すると、全長は9.3 m程度、焚口と窯尻の床面との比高差は3.2 m程度となる。床面の傾斜角度は全体としては26°ほどになる。

当窯には計4面の床面がある。第1次床面は直接地山を削り抜き窯体を構築しているが、操業時の熱で壁面が角質化し崩落している。この床面での操業回数は確認できない。その後、第2次床面構築時には大幅な補修を行う。側壁には丸・平瓦や須恵器杯を重ねてあてがい、窯尻には平瓦3枚を凹面を壁に向けて立て並べサ入り粘土で塗り込めている。床面には丸瓦2枚か、丸瓦1枚と平瓦片を横に並べて段の基礎とし粘土で埋め込む。段は2段分が遺存する。第2次床面から第4次床面までは黒色灰層と赤色焼土が互層となって堆積している。

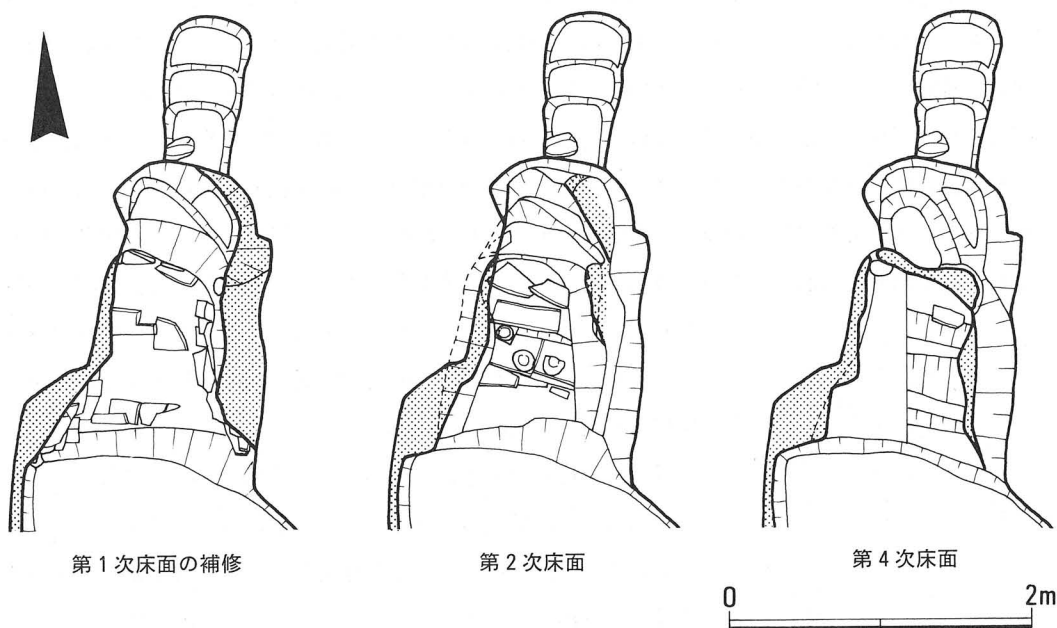
左・右側壁が窯尻で幅約0.6 mとせばまり煙出しに到る。煙出しは径0.7 mほどの不整形な円筒状を呈するが、部分的に壁が崩落しており、本来はもう少し細かったようである。床面からはほぼ垂直に0.65 m立ち上るとやや傾斜をゆるめ、わずかな平坦面をもった後、再度ほぼ垂直に立ち上り開口する。煙出しの上端には長さ25 cm、幅15 cmほどの石を1個据えている。

焚口、燃焼部は破壊されており、その構造は不明。また、灰原も盗掘時に底までさらえられており、発掘区内にはその痕跡を留めない。(西崎卓哉)

注1) 檀原考古学研究所編『奈良県遺跡地図』第1分冊 奈良県教育委員会 1973

注2) 石田茂作『飛鳥時代寺院跡の研究』 1944

注3) 高橋健自「中臣氏の氏寺とその遺址」『歴史地理』第8巻1号 1906



1号窯跡補修変遷図 1 / 50



### Ⅲ 出土遺物

調査期間中には、窯体盗掘のため周辺に散乱していた多量の瓦・須恵器を採集しているが、今回の報告では、これらの表採遺物については記述から除外し、遺構に伴って出土したのみに限って概述することにする。

遺構に伴って出土した遺物の数量は別表に示したとおりである。

	丸瓦	平瓦	須恵器
第2次床面裏込	18	30	1
第2次床面上堆積層	1	21	5
第3次床面上堆積層	1	0	3
第4次床面上堆積層	1	14	6

窯体内層位別遺物出土点数

**丸瓦** いずれも行基葺式のもので、製作は粘土板巻きつけによるものと判断される。凹面には布目を残すが、凸面は叩き目が残らず、縦方向に丁寧なナデ調整が行なわれている。側面は平滑で、分割痕は残存せず、凹凸両面側に面取りがある。端面は狭広とも平滑で凹面側に面取りを行なうものと、狭端のみが未調整の2種類がある。暗灰色で焼成堅緻なものが大半で、赤褐色でこれより幾分軟質なものもある。1・2は第2次床面裏込（壁体補修）に使用されていた製品で、1の凹面には布の綴合わせ痕、粘土板の合わせ目が、2には側縁付近に分割突帯の痕跡が残る。1は全長41.4cm、広端部弧長25.9cm・厚さ1.7cm、狭端部弧長17.7cm・厚さ1.3cm。2は全長39.7cm、広狭部弧長27.6cm・厚さ1.6cm、狭端部弧長16.3cm・厚さ0.9cm。

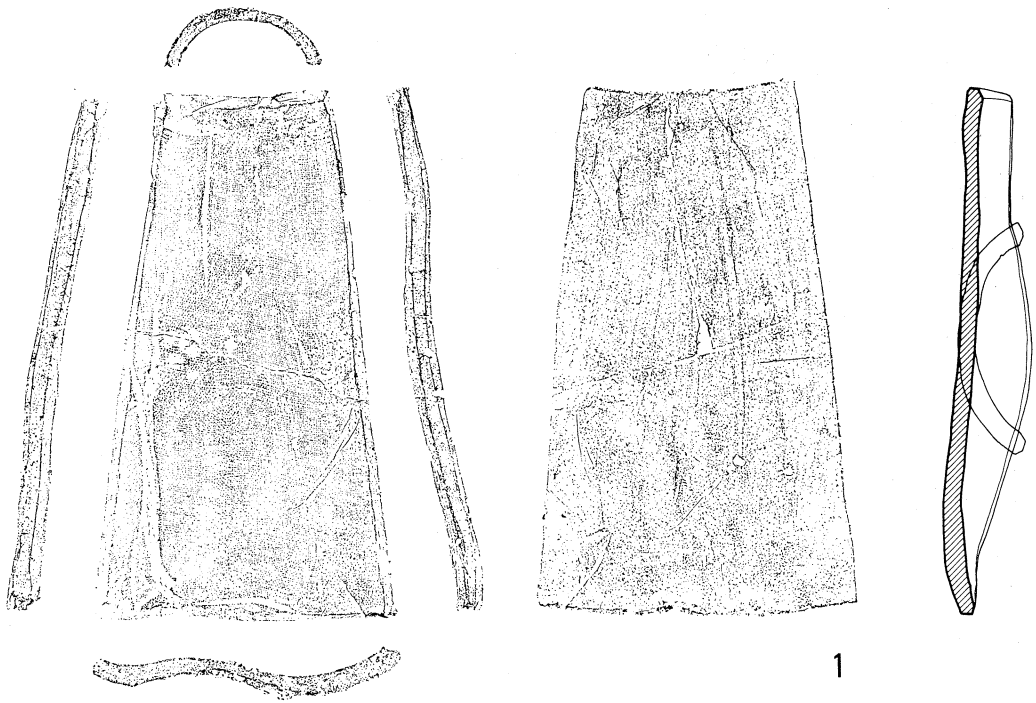
**平瓦** いずれも粘土板巻きつけの桶巻作りによるものと判断される。凸面は縦方向に丁寧なナデ調整を行ない叩き目を消去した例が多いが、格子叩き目の残るものもあり、叩き板には少なくとも2種類あることが知られる(3・4)。凹面には布目と桹板痕が残り、なかに糸切痕、布の綴合わせ痕(5)、粘土板の合わせ目が明瞭に残るものがある。また、端縁付近には狭広いずれか一端にこれに平行して幅5mm、深さ2mmほどの凹線が存在する例がある(7)。桹板相互の締結補強のために桶の外周両端をくくった痕跡と解される。側面は平滑で凹凸両面側に面取りするものが大半を占めるが、分割突帯の痕跡や分割破面(6)を残すものが稀にある。端面は丸瓦と同様で、狭広とも平滑で凹面側に面取りを行なうものと、狭端のみ未調整のもの2種類がある。色調・焼成

も丸瓦と同様の両者がみられる。7は第2次床面裏込に使用されていた製品で、全長39.5cm、広端部弧長34.8cm・厚さ2.1cm、狭端部弧長27.0cm・厚さ1.6cm。

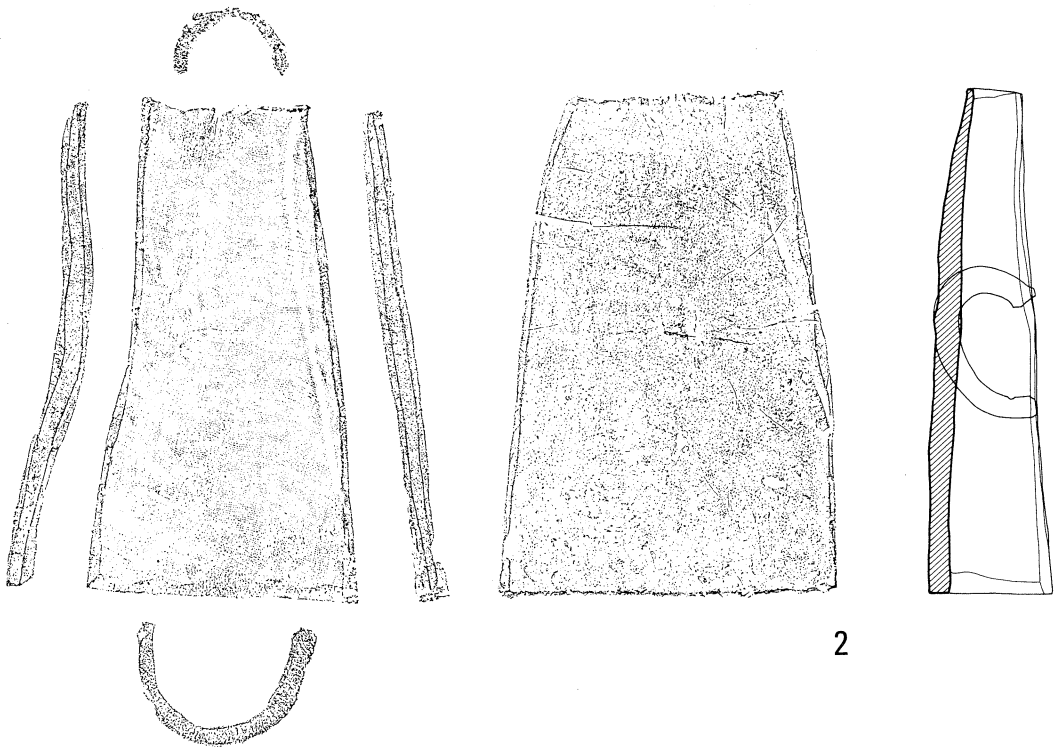
なお、上述の丸・平瓦のほかでは、遺構との関係で出土したものではないが、鷗尾の一部とみられる破片数点と軒丸瓦1点が特筆できる。軒丸瓦はいわゆる花卉端角形点珠型式の素弁8弁蓮花文瓦で、突出した小さな中房に1+4の連子を配している。横井廃寺と姫寺に類例が知られている。



軒丸瓦 1/4

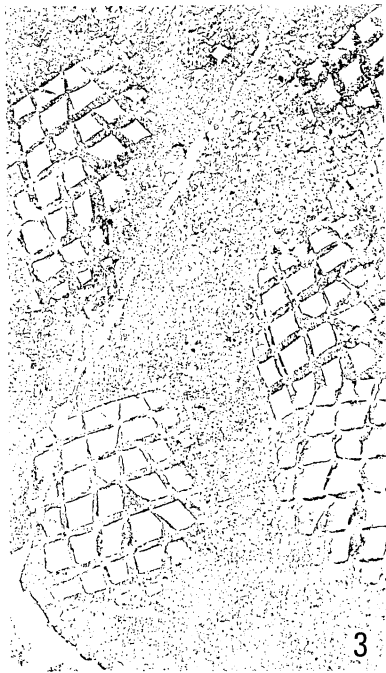


1

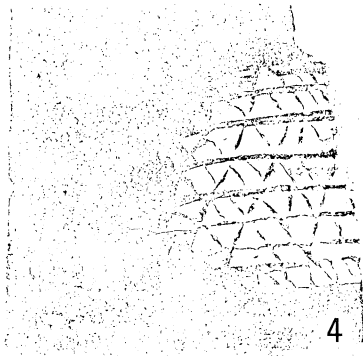
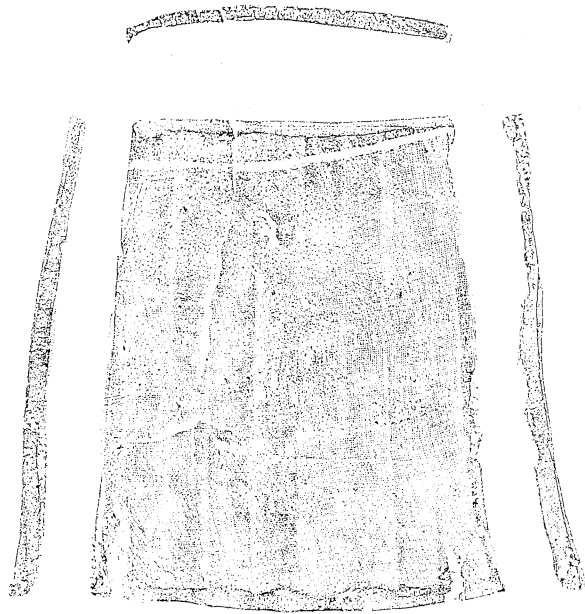


2

出土丸瓦 1/6



3

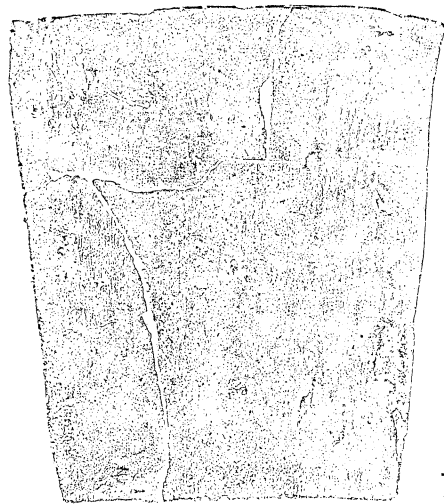


4

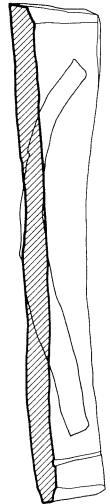


5

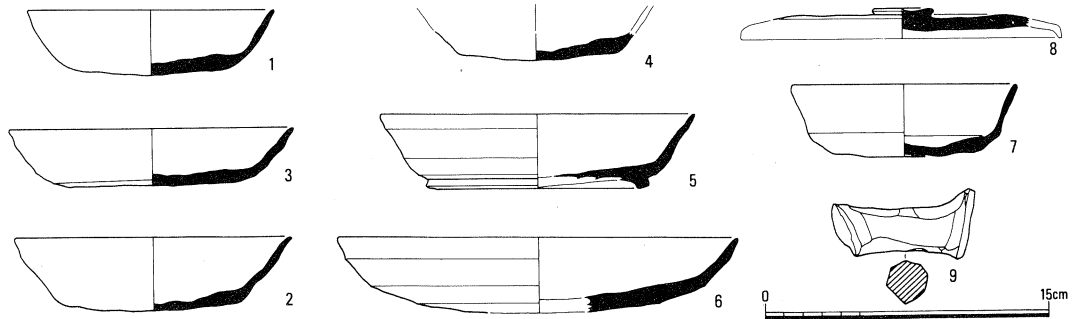
6



7



出土平瓦 3~6·1/3、7·1/6



出土須恵器 1/4

須恵器 遺構に伴って出土したものは、総破片数15点がある。このうち図化し得るものについて、出土層位ごとに記述する。

第2次床面裏込出土土器 杯1点(1)がある。口径12.8cm，器高3.4cmを測るもので、内面を回転ナデ調整。外面体部は回転ナデ調整，底部をヘラ切りのままとする。

第2次床面上堆積層出土土器 杯(2～4)などがある。2は口径14.4cm，器高3.9cmを測る。内面，口縁部外面を回転ナデ調整とし，外面底部はヘラ切りののち，ナデ調整で仕上げる。3は口径14.8cm，器高3.0cmを測る浅い杯。内面，口縁部外面は回転ナデ調整とし，外面底部をヘラ切りののちナデ調整で仕上げる。4は，底径8cmを測る杯底部片。内面を回転ナデ調整，外面底部はヘラ切りののち，ナデ調整を軽く施す。

第3次床面上堆積層出土土器 杯(5)，皿(6)などがある。5は，口径16.4cm，器高3.9cmを測るもので，高台を有する。内外面とも回転ナデ調整とする。6は，口径21.0cm，残存高3.9cmを測る。外面底部をヘラ切りののち，ナデ調整で仕上げる。口縁部内外面とも回転ナデ調整。内面底部を横ナデ調整とする。

第4次床面上堆積層出土土器 杯(7)，蓋(8)，土製品(9)などがある。7は口径11.6cm，器高3.8cmを測る。内面及び口縁部外面を回転ナデ調整とし，外面底部はヘラ切りのままとする。焼成は軟質。赤茶色を呈す。8は，頂部をヘラ削りしたのちに扁平なつまみを貼付ける。内面を回転ナデ調整とする。焼歪みが著しい。9は，長辺にヘラによる7面の面取りを施す。長辺7.5cm，短辺3～3.5cm，厚さ2.3cmを測る。両端に貼付け痕が残り，何らかの把手とも考えられる。

(中井 公・立石堅志)

#### IV まとめ

調査の結果，本窯は当初地山刳貫きの瓦窯で，瓦を焼成していた可能性が強い。しかし，そののち，窯壁の改修を行ない，須恵器を焼成するようになったと考えられる。当初の瓦窯は，窯壁改修に使用されていた瓦片や，周辺の表採資料からみて，7世紀第2四半期に構築されたとみることができる。その後，7世紀後半でも比較的古い時期に，須恵器窯に替えられ，床面に残された資料から，8世紀初頭を前後する時期まで焼成が継続されていたと推察される。(西崎・立石)

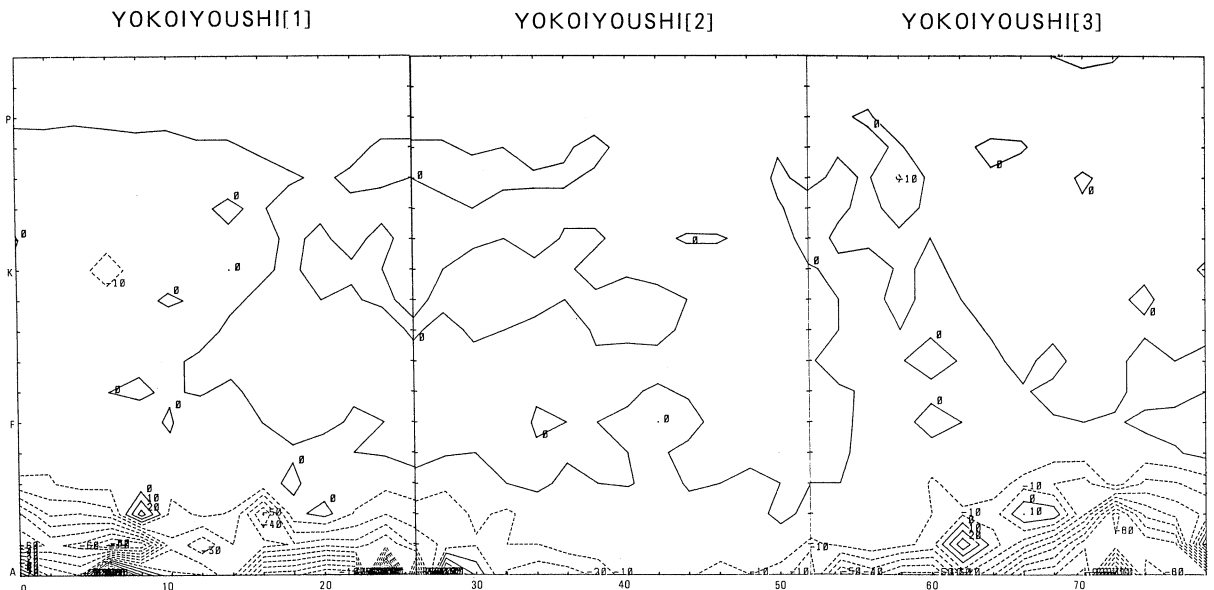
## V 磁気探査

西村 康

窯や炉のような遺構は、それを構成する土壌中の鉄などが、熱を受けたのち冷却する過程で、外部磁場にしがたがって、再び磁性を獲得して熱残留磁気を帯びた個所として存在している。そして、その熱残留磁気を帯びた部分は、周囲よりわずかながら強い磁気を示して、地磁気の極部分的磁気異常をひきおこす原因となっている。

磁気探査は、このように遺構が地磁気へ与えている、極部的磁気異常を検知することにより、その位置・形態・規模を知ろうとする方法である。したがって探査に際しては、対象地域全体の地磁気を測定する必要がある。磁気異常は、他との比較によって、相対的な磁気の強弱の差として認識できるからである。今回の地磁気測定間隔は2mであるが、これはこの地域で知られる既発掘の窯体が、長さ9.3m、最大幅2m以上あることから、決めたものである。

測定に際しては、2台の磁力計を連動させて使用した。一台は定点として固定しておき、他の一台が2m間隔の測点で測定する。2台を使用する理由は、地下遺構の示す程度のわずかな磁気異常より強い異常、すなわち電車や自動車等が原因となった、不規則かつ大きな磁気異常が存在すると、地下遺構に起因する異常は、これらのような、より大きなノイズに埋没してしま<sup>注)</sup>って、検出不可能となってしま<sup>注)</sup>うからである。



探査結果 (1)

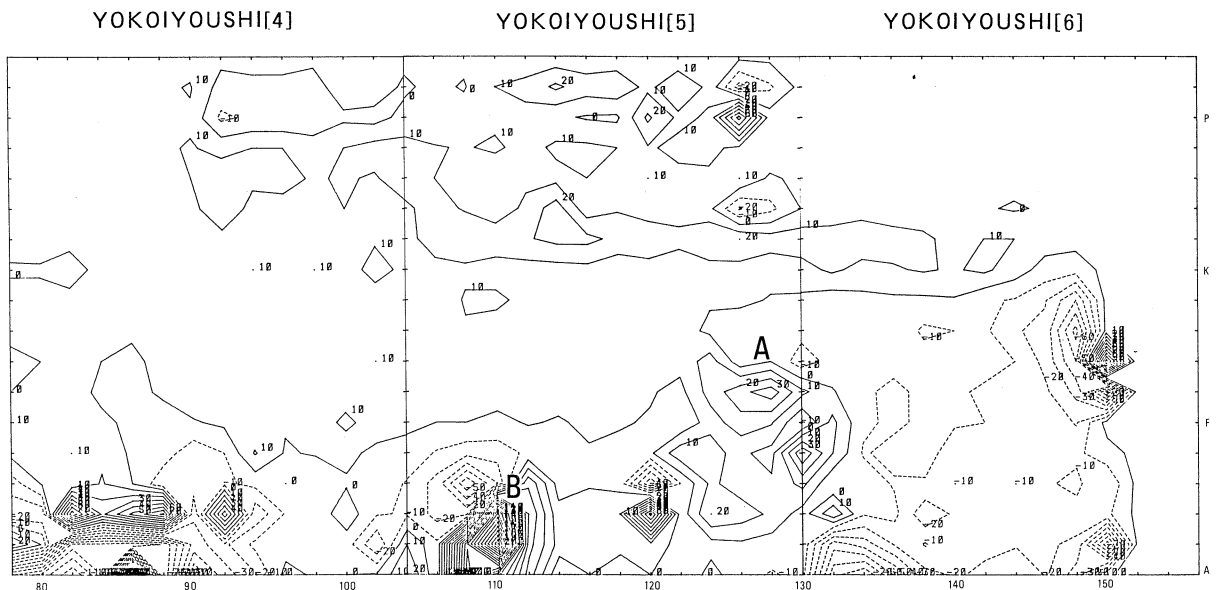
今回の測定に使用した装置は、米国ジオメトリクス社製の磁力計G-816, G-826型の2台である。測定面積は約4,500㎡, 総測定点数約1,200点, 合計2日間の作業であった。

探査結果を、磁気の強弱のコンターマップとして表わしたのが探査結果(1)・(2)の図である。図中の実線は、相対的に磁気の強い部分をプラス値として、点線は弱いものをマイナスとして示している。この中で、Aとした地点は、既発掘の窯体部分にあっている。強い磁気の部分が、二分されているのは、埋め戻した際の土の差か、あるいは鉄などの混入物を反映した結果とみられる。このように、地下に遺構が存在する場合には、磁気の強い個所が完結していて、北側には、磁気の弱い部分が、一対となって伴うのが通例である。

今回の測定範囲内で、Aのような状況の完結した磁気異常は、他には無い。しかしながら、Aの西約15mの地点には、ややこれに類似した異常を示す個所がある。図中にBとしたものがそれである。このB地点は、磁気異常が200ガンマンをこえる非常に大きな値となっていて、窯体に起因するものとは理解し難いが、鉄製品と複合したものと考えれば、遺構の存在する可能性を否定することはできない。したがってこの地点は、ボーリングあるいは試掘調査など何らかの手段によって、窯体の存在の有無を確認する必要のある場所となる。

磁気探査によって指摘できる、遺構の存在する可能性のある地点は、上に述べたBのみである。南半部に多くみる極部的磁気異常は、すべて鉄板・空カンなど鉄製品に起因するものである。

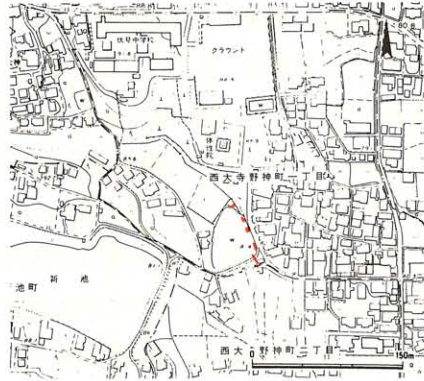
注) 西村康・岩本圭輔「遺跡探査法の開発」 『奈良国立文化財研究所年報』1977



探査結果 (2)

#### 4. 平城京右京一条四坊七坪の調査

本調査は、奈良市西大寺野神町1576番地において実施した西大寺野神緑地整備に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元によると、左京一条四坊七坪に相当し、称徳陵兆域に推定されているところである。現在は野神池と呼ばれる溜池となっている。この池は比較的古くから存在していたようで、永仁5年(1267)の西大寺古図には既に描かれており、それによると、「<sup>いもじ</sup>鑄師池」、「奉鑄四天池」と呼ばれていたようである。また池の北側にある民家の敷地から鑄物屑が出土することが以

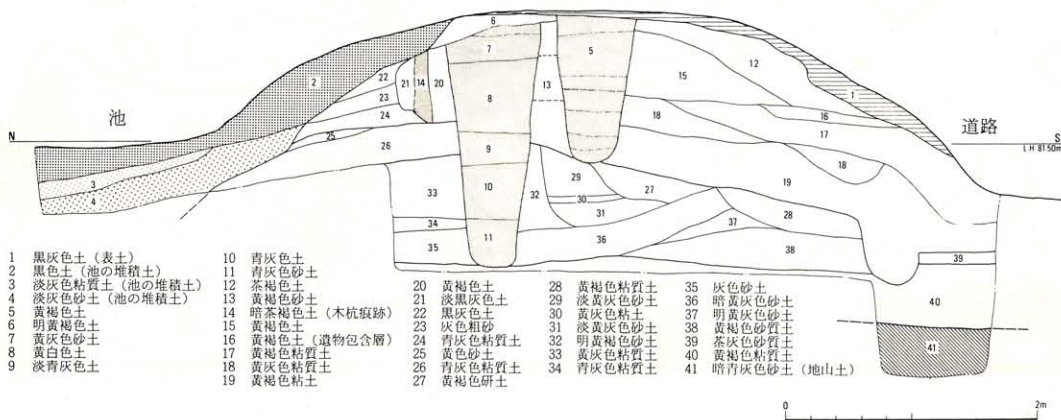


発掘区の位置 1 / 7500

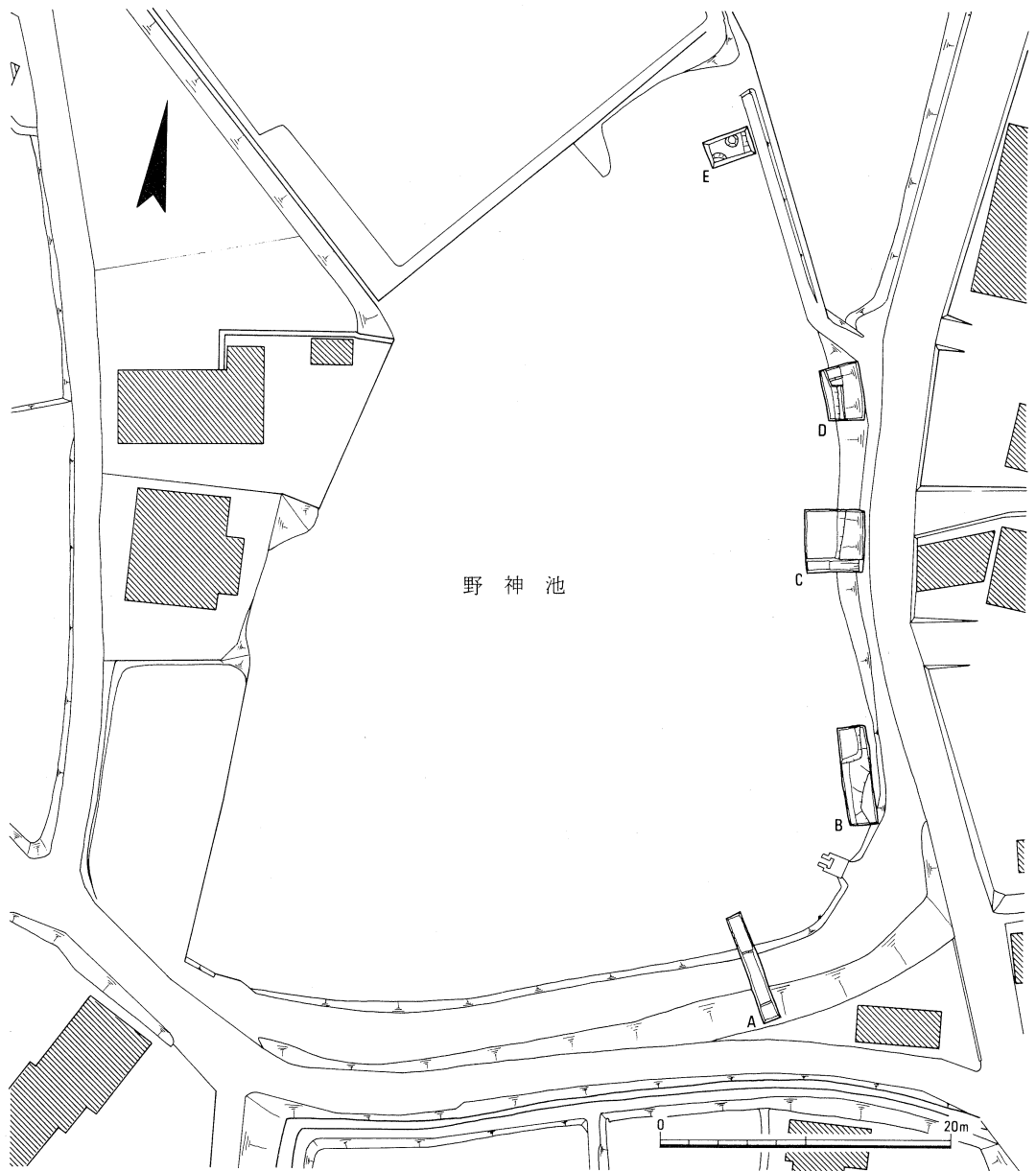
前から知られており、この周辺に鑄物に関連した遺物、遺構の存在が予想された。調査は、池の築造年代を明らかにするとともに鑄物に関する遺構を検出することを目的として、5箇所のトレンチを設定して行なった。調査期間は昭和60年1月18日から1月30日までである。

**堰堤部の調査** 堰堤部に東西1.2 m、南北7.5 m (発掘面積9.0 m<sup>2</sup>) のAトレンチを設定して堤の土層観察をした。地山は、谷部が暗青灰色砂土(地山Ⅰ)、尾根部が黄褐色粘質土(地山Ⅱ)となる。この地山上面から三層(上・中・下)に大別できる堤(断面台形状、頂部幅2.5 m、下部幅6.7 m以上、高さ2.3 m)を築きあげている。以下、堤の構築順に記す。

先ず地山Ⅰから約0.5 mの厚さで黄褐色粘土(下層)がつかまれる。この層は地山Ⅰ及びⅡの混合土でしまりが無い。奈良時代の平瓦片が出土した。次に、層の上に0.5~1.0 mの厚さで地山Ⅱ系の砂土、粘質土(中層)が複雑に積み上げられており、固くしまっている。この部分は、堤の



Aトレンチ東壁土層図 1/60



検出遺構平面図 1 / 500

基底部にあたると考えられる。奈良時代の須恵器片、瓦片とともに16世紀の瓦質土器片が出土した。最後に、中層から頂部までを1.2 m前後の厚さで地山Ⅱ系の粘質土、砂土（上層）をレンズ状に積み上げるが、固くしまっていない。近世の陶磁片が出土した。頂部には、表土下約0.1mから、堤に沿ってU字状の溝が2条掘られている。池側の溝は深さ1.9 m、堤中央部の溝は深さ1.2 m、溝幅はともに0.7 mである。溝内は、0.1～0.3 m単位の厚さで地山Ⅱ系の粘土、砂土を版築状に築固めている。この部分は「はがね」と呼び、現在でも同様に用いられる方法である。



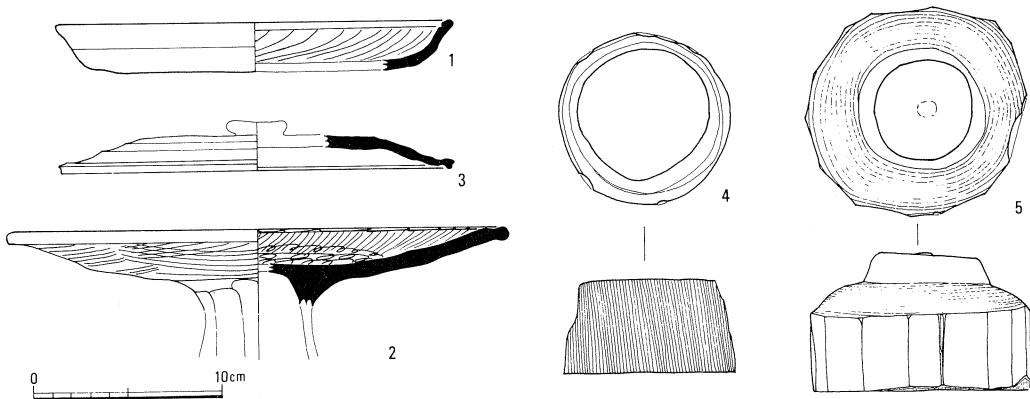
調査の結果、現存する堤はその出土遺物からみて16世紀以後に造られたものと考えられよう。

**池東岸の調査** 東岸の3箇所にトレンチを設定した。Bトレンチは東西2.0 m、南北6.8 m、Cトレンチは東西4.0 m、南北4.2 m、Dトレンチは東西1.5 m、南北3.5 mで、計34.8㎡である。各トレンチは地表から約0.6 mの厚さで近年の堆積土である黒色の砂土や粘質土が厚くおおいその下がすぐに地山Ⅱとなる。調査の結果、目ぼしい遺構はなかったが、各トレンチの東側で池の東岸である地山Ⅱの西斜面を検出した。斜面には現代の杭列が残り、しがらみによって護岸されていたと考えられる。

**池北岸の調査** Dトレンチの北側に東西2 m、南北3 m（発掘面積6㎡）のEトレンチを設定して行なったが、完掘後湧水のため三方の壁が崩壊したため調査の継続を断念せざるを得なかった。土層は地表から黒色土（盛土）、灰色砂土、灰色粘土、青灰色粘質土、暗灰色砂土、灰色砂質土と続き、地表下1.9 mで青灰色砂土（地山Ⅰ）に達する。青灰色粘質土からは近世の陶磁器片が、暗灰色砂土、灰色砂土からは奈良時代の遺物が出土した。遺構は灰色砂質土の上面で検出した。調査の結果、土壇2基と池の北岸を検出した。土壇はともに径約0.8 m、深さ約0.2 mの円形の土壇で、埋土は暗灰色砂土である。土壇内からは炭化した木屑、ロクロ挽きの残る丸材(5)、栓状木製品(4)、土師器片、須恵器片、瓦片が出土した。奈良時代の包含層である暗灰色砂土、灰色砂土を池の堆積土と考えるならば、池の年代が奈良時代までさかのぼる可能性もあるがその確証を得ることはできなかった。また、暗灰色砂土からは、平瓦、丸瓦、奈良時代前半頃の特徴をもつ土師器杯A・皿A(1)・高杯(2)・甕B、須恵器杯A・杯B蓋(3)・皿・甕、炭化した木屑、木炭、スサの混る炭化した炉体、ふいごの羽口、鋳物屑などが出土したことからみて、この池の周辺に奈良時代の鋳物工房跡が存在していたと考えられる。

（篠原豊一）

注）奈良国立文化財研究所「平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告」  
付編 1. 西大寺古図と「称徳天皇御山荘」 1984年12月



Eトレンチ出土遺物 1 / 4

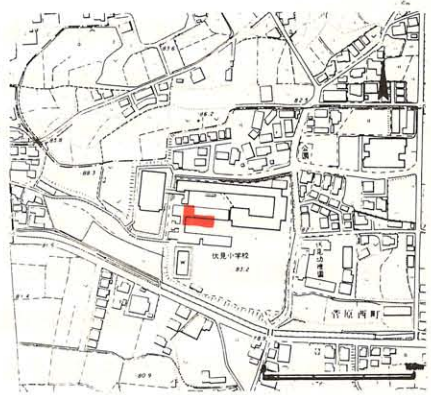
## 5. 平城京右京二条四坊五・六坪の調査

本調査は、奈良市管原町 370 番地他において実施した奈良市立伏見小学校木造校舎改築に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元によると、右京二条四坊五・六坪に相当し、小路の存在が推定されるところである。調査は、小路確認のために面積約 400 m<sup>2</sup>の発掘区を設定し、昭和59年9月6日から9月22日まで行なった。

発掘区内の土層堆積状態は、約 0.2 m の厚さで造成土があり、その下はすぐに地山である灰白色粗砂となっている。

奈良時代の遺構は何ら検出することはできず、木造校舎の基礎の抜きとり痕及びごみ捨て場が残るだけであった。出土遺物もない。伏見小学校周辺は丘陵上にあるものの、調査地の北側には二条条間路の条坊地割痕跡及び西三坊大路の地割痕跡を留める水田が残るなど条坊が施行されていた可能性はある。今後の調査を待ちたい。

(奈良美穂)



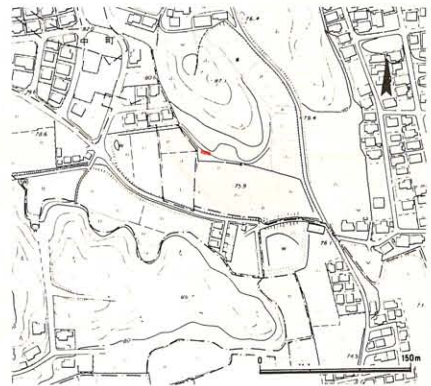
発掘区の位置 1 / 7500

## 6. 平城京西四坊大路の調査

本調査は、奈良市平松町 607, 608 番地において実施した、榊栗実住宅届出の宅地造成工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊では右京五条四坊十五坪に西接する西四坊大路に推定され、西の京丘陵（標高 80～90 m）から派生した丘陵支尾根にはさまれた谷部に相当する。既に造成工事が行なわれ家屋の建築が先行したため、発掘区は、西四坊大路が推定される箇所にて東西 6.5 m、南北 1.2 m（発掘面積 7.8 m<sup>2</sup>）と制約を受けた。調査期間は、昭和59年5月17日から5月19日までである。

発掘区の土層堆積状態は、表土を取り除くと地表下約 0.7 m で明黄色粘土の地山となる。自然地形を確認しただけで、奈良時代の遺構は何ら検出することはできず、西四坊大路について何の手懸りを得ることもできなかった。また、出土した遺物もない。今後の周辺の調査に期待したい。

(篠原豊一)



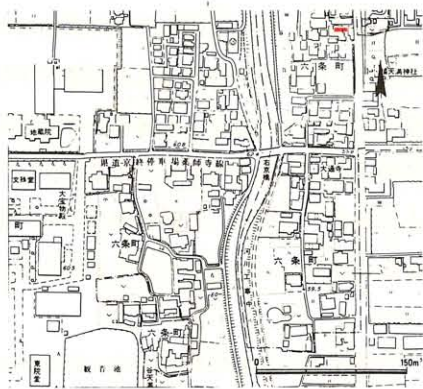
発掘区の位置 1 / 7500

## 7. 平城京西一坊大路の調査

本調査は、奈良市六条町 274 番地において実施した佐脇秀治氏届出による住宅改築工事に伴う事前発掘調査である。調査地は、主要地方道奈良・大和郡山・斑鳩線に東面し、平城京の条坊復元では薬師寺宿院地推定地の東辺と、西一坊大路西側溝の存在が予想される位置にあたる。狭い既造成地内での調査のために、十分な発掘面積の確保は困難であったが、大路側溝の確認を主眼に東西 11.3m、南北 3m のトレンチを設定することができた。調査期間は、昭和 59 年 9 月 12 日から 14 日までの 3 日間である。

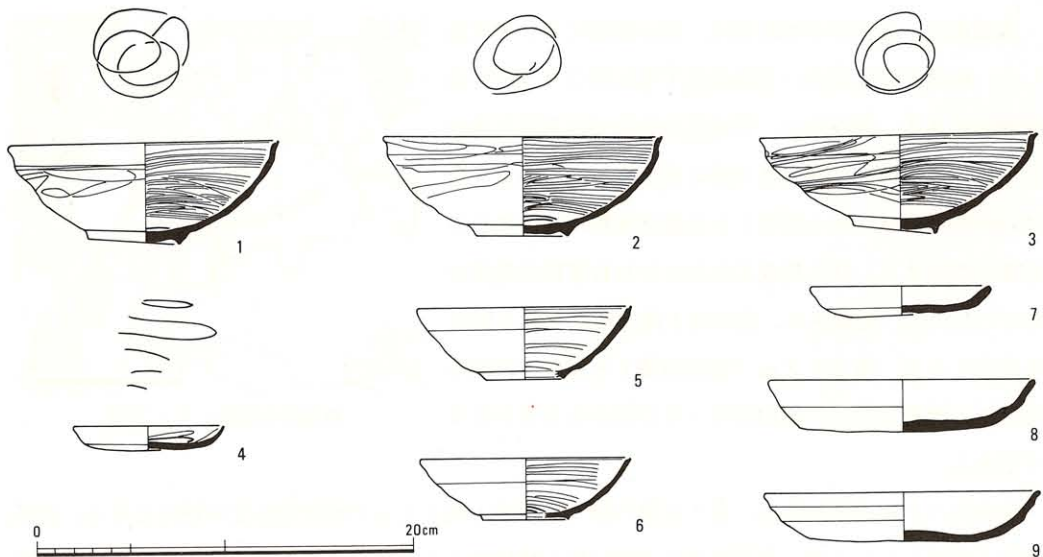
調査の結果、後世の土取りが全面に及び、目的とした遺構は既に残存しなかった。トレンチ内の土層は、約 0.4 m までが造成盛土、以下順に黒色腐蝕土（旧耕土）、灰褐色砂土（床土）、灰褐色砂、暗灰色土があり、地表下約 1.3 m で黄褐色粘土の地山となる。土取りはこの地山から掘込まれ、暗灰色粗砂の埋土からは 12 世紀後半の瓦器椀や土師器皿が出土している。ここでは、比較的残存状態の良いものを抽出し図示する。

(中井 公)



発掘区の位直 1 / 7500

□ □



出土土器 1 / 4

## 8. 平城京左京一条三坊十二・十三坪の調査

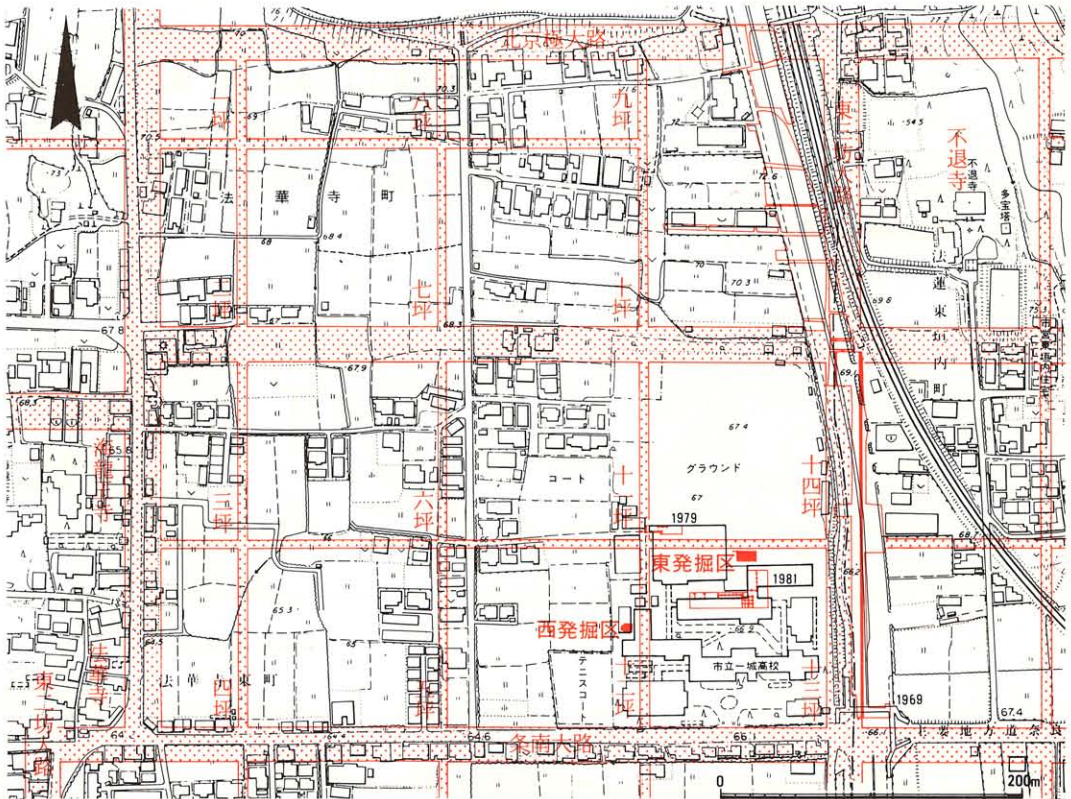
### I はじめに

本調査は、奈良市法華寺町1351番地において、奈良市立一条高等学校書庫及びトレーニング室建設に伴ない実施した事前発掘調査である。一条高等学校校地は、平城京条坊復元では、左京一条三坊のうち、十三・十四坪の全域と、十一・十二坪の一部を占めている。今回の調査地は、このうちの十二坪の東辺部と十三坪の北辺部に相当する地点である。調査期間は、昭和59年11月20日から、12月4日にかけてである。調査面積は、東発掘区72.5㎡、西発掘区60㎡である。

一条高等学校校地内では、これまで2回の発掘調査を実施した。昭和54年度の調査では、十四坪の西限を示すものと考えられた柱列を検出し、また昭和56年度の調査においては、十三坪の東西中軸線上に位置する建物を検出し、十三坪の一坪利用の可能性を指摘した。

注1) 奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和54年度 1980

注2) 奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和56年度 1982



発掘区の位置と周辺の条坊 1 / 5000

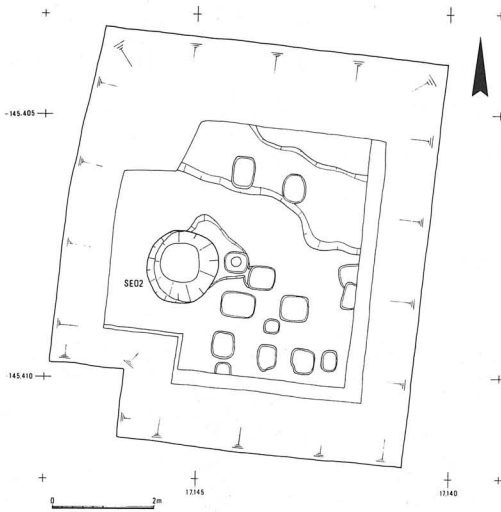
## II 検出遺構

東発掘区・西発掘区にわけて記述する。

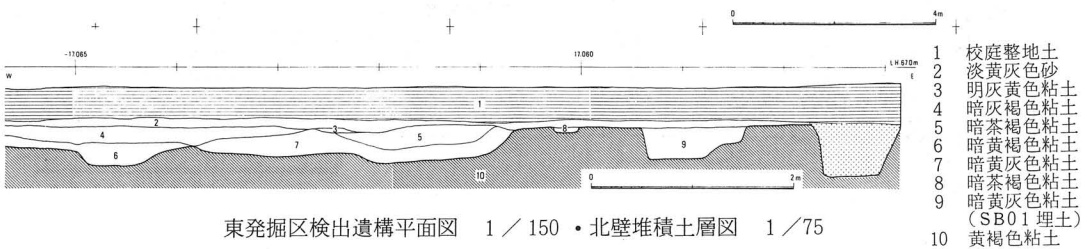
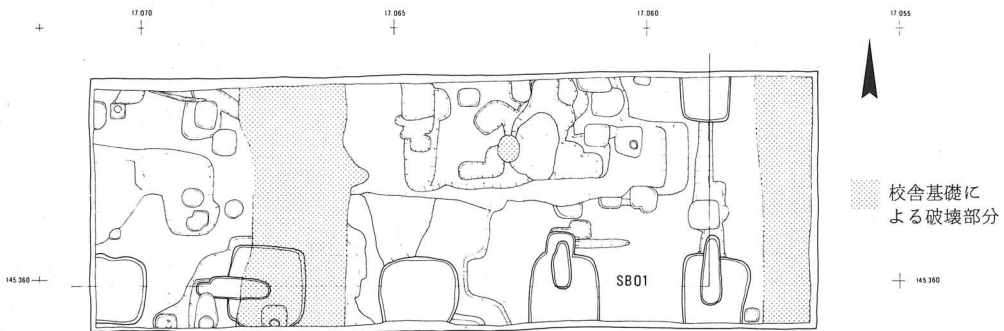
**東発掘区** 発掘区は、旧木造校舎跡地にあたり、現運動場整備工事等のため、遺構面はかなりの削平をうけており、部分では完全に破壊されていた。発掘区北半部の中央において、東西約6m、南北約2mの範囲で整地土層の残存が認められる以外は、校庭造成土以下、直ちに地山である黄褐色粘土に至る。検出した顕著な遺構は、建物一棟であるが、他に柱穴・土壇等がみられた。これらは地山である黄褐色粘土上面及び整地土層上面において検出した。建物SB01は、桁行4

間(12m)以上、梁行1間(3.6m)以上の東西棟である。柱間は桁行が10尺等間、梁行が12尺である。いずれの柱掘形も、一辺約1.2mの隅丸方形となる。柱抜き取り穴から若干量の埴が出土した。

**西発掘区** 発掘区内の土層堆積状態は、校地造成時の盛土が表土下約1.5mまで続き、以下旧耕土、床土となり、地表下約1.7mで地山である黄褐色粘土に至る。遺構は全てこの黄褐色粘土上で検出した。検出した顕著な遺構は井戸一基であるが、他に柱穴・自然流路がみられた。井戸SE02は、上部の直径約



西発掘区検出遺構平面図 1/150



東発掘区検出遺構平面図 1/150 ・北壁堆積土層図 1/75

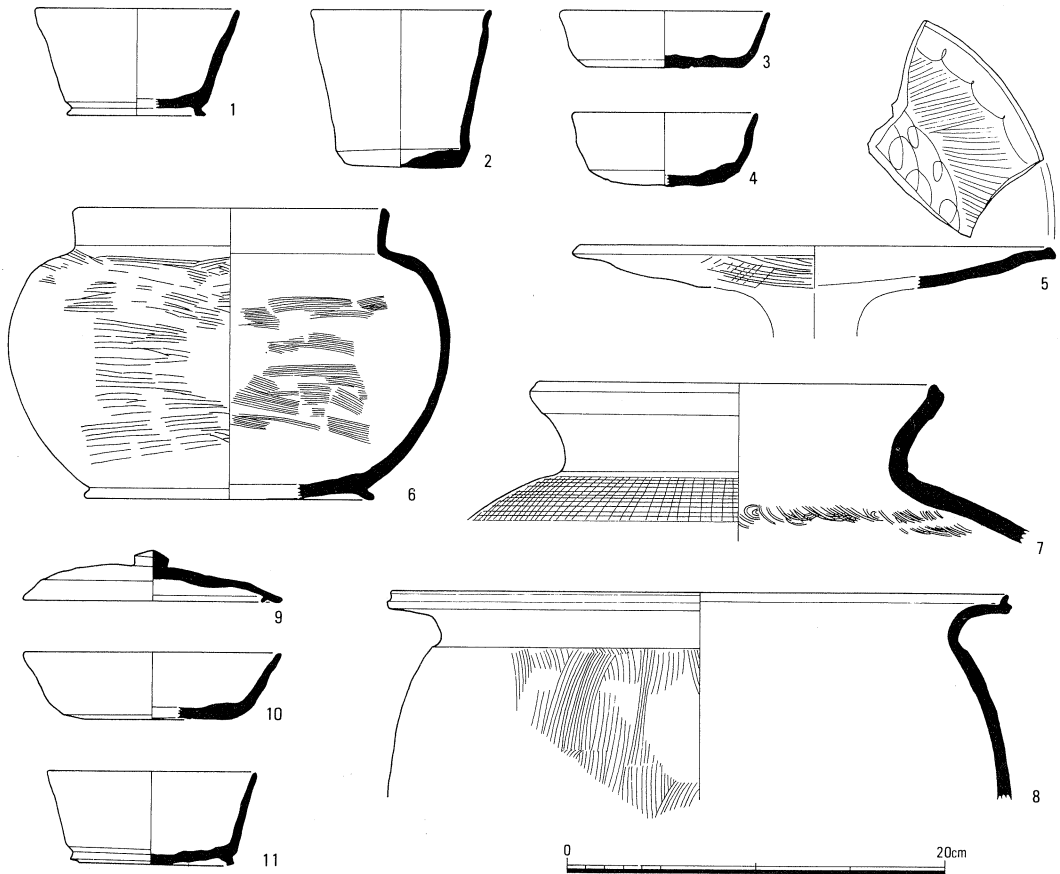
- 1 校庭整地土
- 2 淡黄灰色砂
- 3 明灰黄色粘土
- 4 暗茶褐色粘土
- 5 暗茶褐色粘土
- 6 暗黄褐色粘土
- 7 暗黄灰色粘土
- 8 暗茶褐色粘土
- 9 暗黄灰色粘土 (SB01埋土)
- 10 黄褐色粘土

1.5 mの円形掘形を呈し、壁面は垂直に掘り込まれている。検出面からの深さ約2.5 mを測る。井戸枠は存在せず、おそらくは素掘りのまま利用されたものであろう。井戸埋土から、若干量の土器とともに、木簡・木製品数点 及び埴輪片数点が出土した。

### Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、遺構中、東発掘区整地土内、及び遺物包含層から瓦埴類・土器・木簡・木製品・及び埴輪片が出土した。以下にその概要を記す。

**瓦埴類** 丸瓦・平瓦・軒平瓦・埴が出土した。軒平瓦は、重弧文軒平瓦の破片2点が出土。ともに平瓦部から剥離した幅広い顎部に弧文2条が残る。平瓦部と顎部の接合に際し、顎部下面から平瓦部に通じる小孔を穿ち、これに粘土、鋳状のものを充填し留める技法をとる。同工の技法のものは、姫寺に類例が知られる程度の特異なものである。埴は20点ある。うち、ほぼ完形に近いもの8点がある。いずれも方形埴で、おおむね長辺18cm、短辺16cm、厚さ6 cmを測る。面は全て平滑に削って仕上げられる。



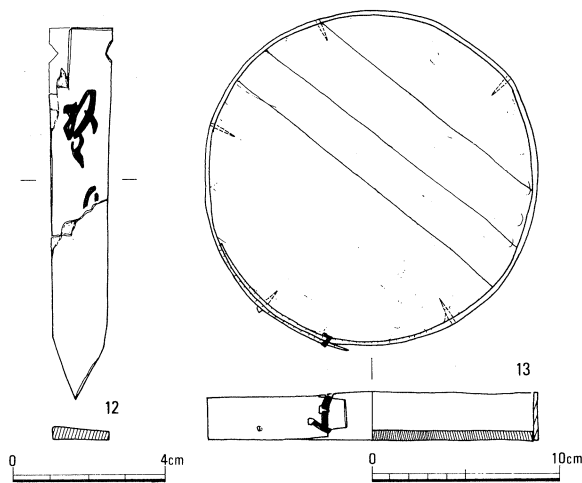
出土土器 1/4

**土器** 井戸SE02出土土器を中心に、図化し得るものについて記述する。今回出土した土器類は、概ね奈良時代前半期のものであるが、7世紀末葉頃の須恵器も若干出土した。SE02からは須恵器椀B(1)、椀X(2)、杯A(3・4)、甕B(7)、土師器高杯(5)、壺A(6)、甕A(8)等が出土した。1は杯Bの器形をやや深い形態にしたもので、口縁端部は内傾する。2は厚めの底部とほぼまっすぐに立ち上がる体部からなり、口縁部を強くヨコナデするため、口縁端部がやや外反する。3・4はともに小型の杯で、3は口径11.0cm、4は口径9.8cmを測る。外面底部はヘラ切りのままとする。7は体部をタタキ成形のち、外面をカキメ調整し、平行タタキ目をかき消している。5は、脚部を欠き、浅く外方へ広がる杯部のみ残る。内面及び外面口縁部を丁寧によこなで調整する。杯部内面は、螺旋状暗文と、一段の斜放射状暗文、及び連弧状暗文を施す。外面は斜め方向のへら磨きを施す。6は外面に斜方向のへら磨きを密に施す。内面底部はよこなで、体部以上・頸部までをヨコハケ調整する。8は丸みを帯びた胴部と強く外反する口縁部からなり、口縁端部を上方へつまみ出す形におさめる。外面をたて方向のハケ目調整とし、内面はなでて仕上げる。東発掘区整地土からは、須恵器杯蓋(9)、杯A(10)、杯B(11)等が出土した。9は頂部をへラケズリし、やや腰高の宝珠形のつまみをつける。内面に断面三角形の低いかえりを有する。10は平坦な底部と、斜め外方へ広がる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさめている。

**木簡・木製品** 井戸SE02埋土植物層から木簡4点、黒褐色粘土層から盆形曲物1点が出土した。木簡4点のうち、ほぼ原形を留め、墨痕の明らかなもの1点がある(12)。柾目材の薄板を加工したもので、長方形の材の上端に切り込みを入れ、下端を尖らしたものである。上端の一部を欠損する。表面に墨痕2字分が残るが判読できない。表面には墨痕はみられない。<sup>(注)</sup>

12 「V□□」

98×15×3 033



出土木簡1/2・木製品1/4

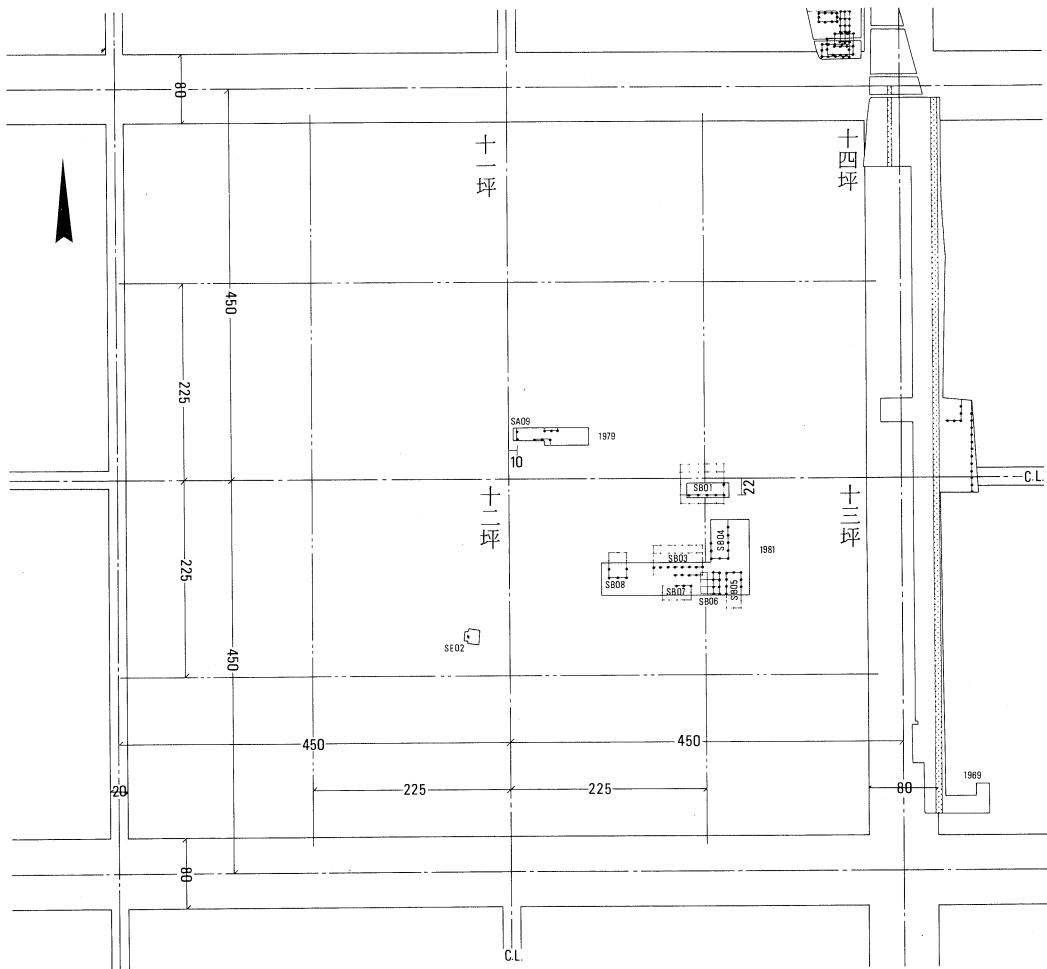
他の3点については、折損により原形が明らかでなく、墨痕も判読不可能である。盆形曲物(13)は、直径17.0cmの底板に高さ2.5cmの側板を6方向から木針で固定した浅い盆である。側板は板目材を用いる。縫い合わせ部では厚みを減じ、内面に約5mm間隔で刻み目を入れる。縫いは2段くぐり2列の樺皮縫いである。底板は柾目材を用い、表裏面を鉋削りで整形する。

注) 表記方法型式番号は、木簡学会『木簡研究』創刊～六号 1979～1984に準拠した。

#### IV まとめ

以上、今回の調査で検出した遺構、遺物について記した。ここでは、今回検出した建物SB01の十三坪内に占める位置の検討とともに、前2回的一条高等学校校地内における調査で検出した遺構による成果と併せて、平城京の条坊計画の中で占める位置について検討する。

十三坪の東を限る東三坊大路については、既に昭和44年の奈良国立文化財研究所の調査により<sup>注1)</sup>その東側溝が明らかにされている。その成果をもとに、東三坊大路東側溝心と平城宮朱雀門心との距離を求めると、国土方眼位を介して1599.630mの距離にあることがわかる。しかし、平城京の造営南北方位は、朱雀大路で国土方眼位に対して $N0^{\circ}15'41''W$ 振れていることが知られているため、この振れをとり、修正を加えると、両者心々間の距離は1602.369mとなる。この距離<sup>注2)</sup>を両者心々間の想定造営計画尺5440尺〔(5400尺(3坊幅)+40尺(推定東三坊大路 $\frac{1}{2}$ 幅))で



十三坪周辺条坊概念図（単位は天平尺）



除すると、この場合の造営単位尺は、0.2946 mとなる。

ところで、最近の調査成果から平城京の条坊計画線が、各条坊道路において、国土方眼位に対しての振れの数値に若干の差異がみられること、更に、東西条坊道路計画方位と、南北条坊道路計画方位が厳密に直交するのではないことなどが明らかになっている。今、建物SB01の位置を検討するに際して、その南北基準方位を朱雀大路心に、東西基準方位を二条大路計画線に求め、行なう。二条大路の計画方位については、平城宮南面大垣が国土方眼位に対して、平均E0°3'53" N振れていることから、これに平行し同様の振れをもち、朱雀大路計画線上で朱雀門心から南へ80尺の地点を通る東西線を想定し、これを二条大路計画線とした。

SB01南側柱列心の位置は、朱雀大路計画線と想定二条大路計画線の交点から、国土方眼位を介して北へ658.058mにあることがわかる。これに基準とした条坊計画方位の振れの修正を加えると、両者間の距離は656.34 mとなる。一方、十三坪・十四坪の坪境計画線の位置を二条大路計画線から2250尺〔1800尺(1坊幅)+450尺(1坊幅)〕北にあるとし、先の造営単位尺を利用して両者間の計画距離を求めると、662.85mとなる。ここで、この計画距離と先の二者間の距離を比較すると、SB01南側柱列は坪境計画線の南6.51m(22尺)にあることがわかる。SB01の梁行柱間距離(12尺)を考慮すると、SB01は十三坪・十四坪間の坪境計画線上に位置する建物であるといえよう。このことから、少なくともSB01存続期間には、十三坪・十四坪坪境施設は存在しなかったことになる。さらに、東西方向の位置についての同様の操作により、SB01は十三坪東西中軸線上にも位置することがわかる。昭和56年度調査では、建物SB06について、十三坪東西中軸線上に位置することが示され、十三坪の一括土地利用が推定されている。このようにみると、十三坪・十四坪においては、両坪を一括して土地利用した可能性も、ひとつに指摘できよう。また、昭和54年度の調査において検出したSA09の位置について、ここで再検討しておく。昭和54年度調査報告時に求められた東三坊大路東側溝心との造営距離は、条坊計算値に誤りがみられるため、これを訂正し検討を加えると、479.49尺となり、十一坪・十四坪間の坊間小路東側溝心と、東三坊大路東側溝心との造営計画距離480尺に極めて近似する。このことから坊間小路の側溝心々間距離が想定幅2丈より狭いか、または坊間小路等の坪境施設が存在しない可能性が指摘されよう。

(立石堅志)

地 点	X	Y	備 考
S B 01 南側柱列心	-145360.000	-17064.672	今 回 の 調 査
S A 09 心	-145340.000	-17128.120	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和54年度 『平城宮発掘調査報告VI』から
東三坊大路東側溝心	-145390.420	-16986.680	
平城宮朱雀門心	-145994.490	-18586.310	

注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』 1975

注2) 奈良市『平城宮朱雀大路発掘調査報告』 1974

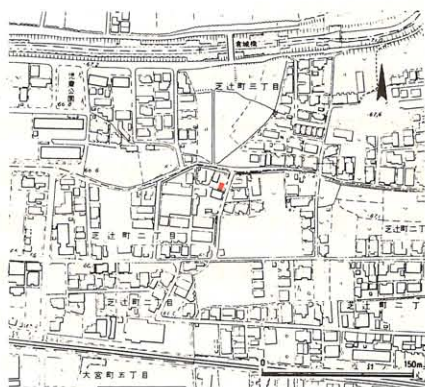
## 9. 平城京左京三条三坊九坪の調査

本調査は、奈良市芝辻町2丁目232番地の3において実施した、㈱サカイヤ地所届出の事務所付共同住宅建築に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊では左京三条三坊九坪と接する二条大路に推定される。調査は、二条大路の南側溝を確認するために、東西4.5m、南北9.0m（発掘面積40.5㎡）のトレンチを設定して行なった。調査期間は、昭和59年6月25日から6月28日までである。

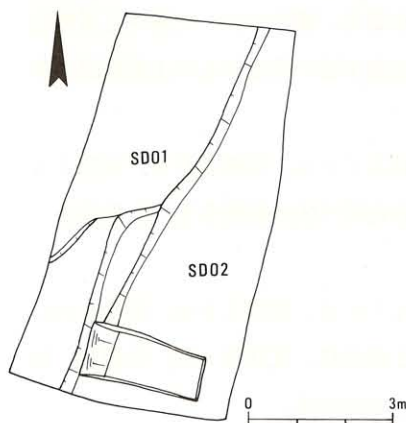
トレンチの土層堆積状態は、地表面から約0.9mまでは敷地造成の際の盛土（黄灰色土）であり、以下、順に旧耕土、床土、明黄色土と続き、地表下1.3mで自然流路（SD01）の堆積土となる。

SD01 トレンチを南北に流れる自然流路。流路の堆積状態からA・B期に分けられる。A期の堆積はトレンチ全域におよび、黄灰色、灰色の砂礫層と灰色、青灰色の細砂や粘土が互層となっている。B期の堆積は、A期の堆積層を切り込む形で上層から順に黄灰色土、淡赤灰色土、灰色粘質土、青褐色砂土が約0.7mの厚さで堆積する。A期の流路底を調べるため、トレンチの南側を一部掘り下げたが、1m掘り下げたところで湧水が著しくなり掘り下げを断念した。出土遺物には、近世の土師器皿や羽釜、陶磁器片及び平瓦、円筒埴輪などがある。この他に、A期の灰色粘土層から出土した木簡がある。

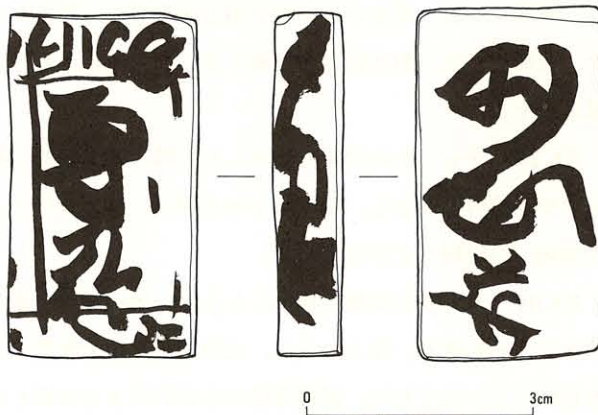
調査地は、水田の地割等の乱れから考えて、調査地北側を流れる佐保川の旧河道に推定される位置にあたり、今回検出したSD01も河道の一部と考えられよう。（篠原豊一）



発掘区の位置 1 / 7500



検出遺構平面図 1 / 160

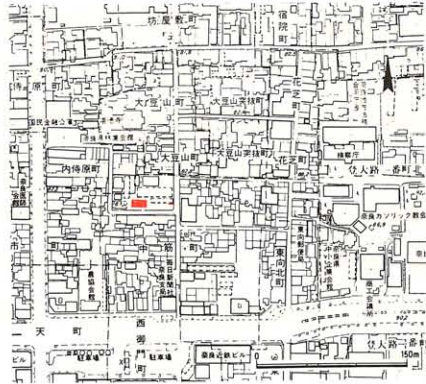


出土木簡 1 / 2

## 10. 平城京左京（外京）三条六坊十坪の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市中筋町31番地の1において実施した奈良市計画の近鉄奈良駅前駐輪場建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京（外京）三条六坊十坪に推定され、南北小路をはさんで興福寺旧境内果園・園地推定地と接する位置にあたる。調査は、十坪内の様相を知るために東西14.7m、南北6.0m（面積88.2m<sup>2</sup>）のAトレンチ及び十・十五坪の坪境小路の西側溝確認のために東西4.0m、南北1.2m（面積4.8m<sup>2</sup>）のBトレンチを設定して行なった。調査期間は、昭和59年4月21日から同年5月15日までである。



発掘区の位置 1/7500

調査期間は、昭和59年4月21日から同年5月15日までである。

### II 検出遺構

**Aトレンチの調査** トレンチの土層堆積状態は、地表から0.2mまでは灰色砂利（盛土）があり、それ以下は3時期に及ぶ整地層が続き、地表下1.0～1.3mで春日野台地特有の挙大の礫を含む明黄褐色礫土の地山へと至る。地山面から上へ、0.3mの厚さで暗灰色土（第1回整地層）、0.5mの厚さで茶褐色土・淡茶褐色土（第2回整地層）、0.3mの厚さで淡灰色土（第3回整地層）が堆積する。各整地土層の年代は、出土遺物から考えて、第1回整地層が15世紀後半以前、第2回整地層が19世紀後半以前、第3回整地層が19世紀後半以後に求められよう。

検出した遺構には素掘り溝2条、池1、土塋8、小土塋などがある。

**SK02** トレンチ北東隅で検出した土塋で、トレンチ外北へのびる。地山面から掘り込んでいる。東西0.8m、南北0.8mの平面方形を呈し、深さ0.6mを測る。境内には、上層から茶褐色土、茶褐色砂土、黄灰色土が堆積する。茶褐色土からは12世紀後半頃の特徴をもつ土師器皿が多量に出土した。

**SK03** トレンチの中央で検出した土塋。地山面から掘り込んでいる。東西2.6m、南北2.6mの平面楕円形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土からは、13世紀前半頃の特徴をもつ土師器皿、瓦器碗、白磁碗などが出土した。

**SK04** SK03の南側で検出した土塋。地山面から掘り込んでいる。東西2.8m、南北1.8m、深さ0.4mを測る。埋土からは、13世紀前半頃の特徴をもつ土師器皿、瓦器碗・皿、白磁碗、須恵器鉢などが出土した。重複関係からSK03よりは新しいことがわかる。

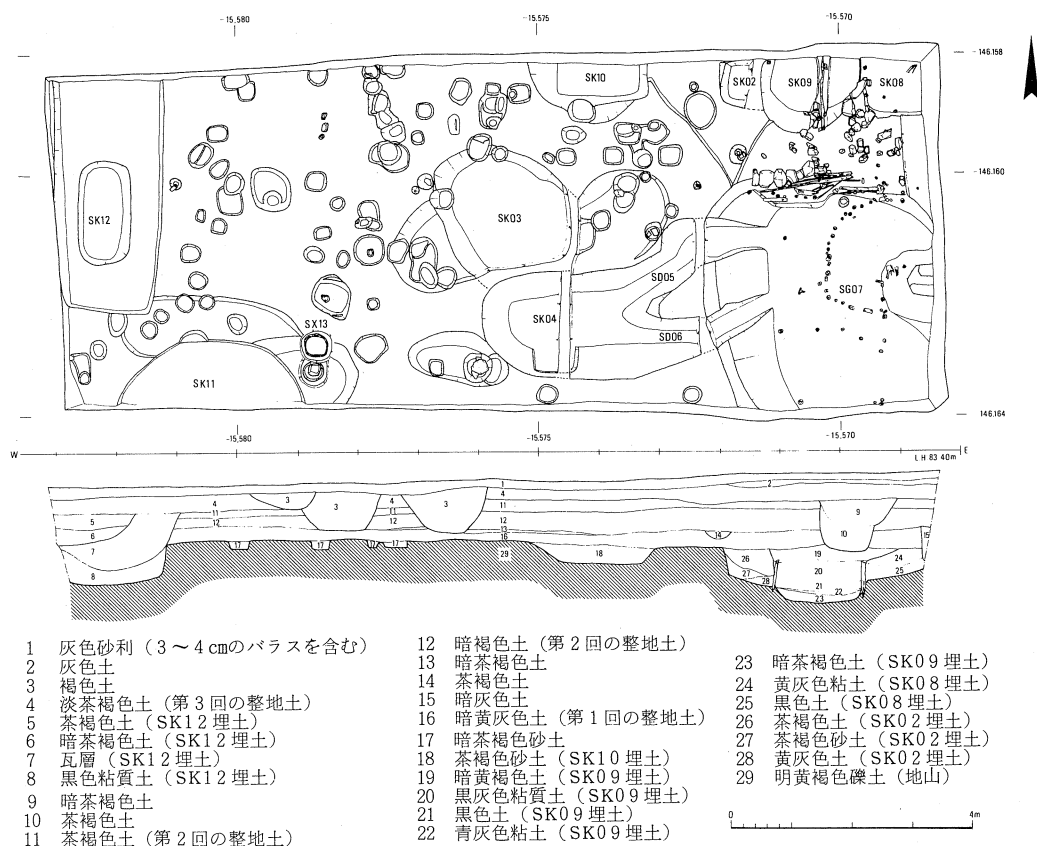
**SD05・06** SK04の東側で検出した東西方向の素掘り溝2条である。地山面から掘り込んでい

る。いずれも、幅 0.6 m、深さ 0.3 m、長さ 2.0 m を測る。埋土からは、13 世紀前半頃の特徴をもつ土師器皿、瓦器碗が出土した。出土遺物から SK04 と同時期のものと考えられよう。

**SG07** トレンチの南東部で検出した池で、さらにトレンチ外東南へのびる。第 2 回整地土上面から掘り込んでいる。東西 3.6 m 以上、南北 3.6 m 以上、深さ 0.3 m を測る。池の北東部には、半円状（径 1.8 m）に、木杭が打ちこまれている。また、池の北東隅が溝状を呈しており、この部分から水が流れ込んでいたと考えられる。北岸には、木杭を一列に打ち込み、その裏側に横板をあてがい護岸とする。埋土は 2 層に大別され、上層には暗茶褐色土が下層には黒灰色粘質土が堆積する。上下 2 層ともに 15 世紀後半の特徴をもつ土師器皿・甕・羽釜、瓦器羽釜・搦鉢や下駄、曲物底板などが出土した。

**SK08** トレンチの北東隅で検出した土壌で、トレンチ外北東へのびる。地山面から掘り込まれている。東西 1.0 m 以上、南北 1.0 m 以上、深さ 0.5 m を測る。出土遺物はない。

**SK09** SK02・08 の間で検出した土壌で、トレンチ外北へのびる。地山面から掘り込まれている。埋土から土師器皿、瓦器搦鉢が少量出土した。重複関係から SK02・08 よりも新しいことがわかる。



A トレンチ検出遺構平面図・北壁堆積土層図 1 / 125

SK10 トレンチの中央北辺で検出した土壌で、トレンチ外北へのびる。地山面から掘り込まれている。東西2.0 m、南北0.6 m以上の平面方形を呈し、深さ0.4 mを測る。埋土からは15世紀後半頃の特徴をもつ土師器皿、羽釜などが出土した。

SK11 トレンチの西側南辺で検出した土壌で、トレンチ外南へのびる。第1回整地土上面から掘り込まれている。東西3.2 m、南北1.1 m以上の平面円形を呈し、深さ1.0 mを測る。

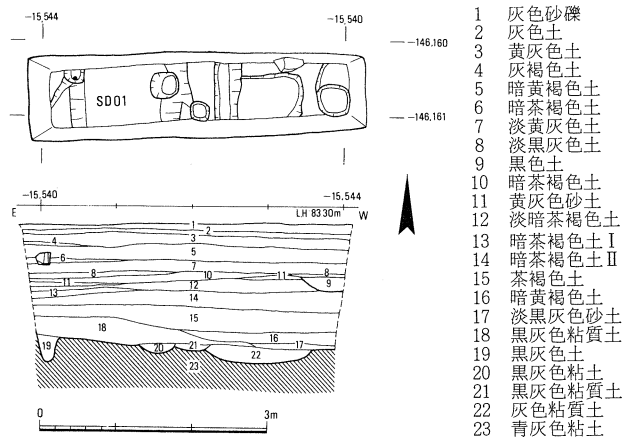
SK12 トレンチの西辺で検出した土壌で、トレンチ外南へのびる。第2回整地土から掘り込まれている。東西1.8 m、南北4.0 mの平面長方形を呈し、深さ1.2 mを測る。埋土からは19世紀後半頃の特徴をもつ陶磁器片や多量の瓦片が出土した。瓦溜めとして利用されていたものであろう。

SX13 SK11の北側で検出した土壌。第2回整地土上面から掘り込まれている。東西0.4 m、南北0.4 mの平面円形を呈し、深さ0.08 mを測る。壙内には、桶が埋置されており、その下部だけが残存している。出土遺物はない。

この他に、小土壌を多数検出した。いずれも、径0.3～0.5 mの平面円形を呈し、深さ0.1～0.2 mを測る。このうち、壙内に平瓦片や平坦面をもつ自然石を敷くものがあり、建物の柱穴となるものもあろう。だが、建物の規模を明らかにすることはできなかった。

**Bトレンチの調査** トレンチ内の堆積土層状態は、地表面から約0.1 mまでは灰色砂礫の盛土があり、それ以下は、大きく4層に大別できる整地層が続き、地表面下1.5 mで青灰色粘土の地山へと至る。第1回整地層は、地山面から上に、暗黄褐色土、茶褐色土、暗茶褐色土、淡暗茶褐色土が0.8 mの厚さで堆積する。第2回整地層は、焼土及び炭化物を多く包含する淡黒灰色土、淡黄灰色土が0.2 mの厚さで堆積する。淡黄灰色土層には、平坦面をもつ人頭大の自然石がみられる。第3回整地層は、暗茶褐色土、暗褐色土が0.2 mの厚さで堆積する。この2層は、小石混りの固くしまった整地層である。第4回整地層は、灰褐色土、黄灰色土、灰色土が0.2 mの厚さで堆積する。各整地土層の時期は、トレンチの面積が狭く出土遺物も少ないため、明らかにすることはできなかった。検出した遺構には、溝、小土壌がある。いずれも地山面で検出した。

SD01 南北方向の素掘り溝。幅1.4 m、深さ0.3 mを測る。埋土からは8世紀代の瓦片、土師器、須恵器や円筒埴輪片などが出土した。SD01心は、周辺の発掘調査成果からみて、推定十・十五坪の坪境小路西側溝心よりも大幅に西へずれる。十坪内の溝と考えることができよう。(篠原豊一)



Bトレンチ検出遺構平面図・南壁堆積土層図 1 / 100

### Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、検出した土壌SK02～04・10・12、池SG07などそれぞれの埋土から中世・近世の土器類や瓦類が多量に出土した。これらのうち、数量的・时期的にまとまりをもつ土器類について、以下説明する。

**SK02 出土土器**（1～10） 土師器皿，緑釉陶器盤がある。土師器皿には，口径9cm前後，器高2cm未満のもの（1～4）と口径12cm前後，器高2.5cm前後のもの（5～9）がある。いずれも内面と口縁部外面上半によこなで調整を行ない，底部外面には，成形時の凹凸を残す。緑釉陶器盤(10)は，中国南方窯系の製品と考えられる。底部内面に草花文を刻線で表現し，緑釉は全面に施釉されるが底部内面の施釉は薄い。胎土は粗く，灰褐色を呈す。12世紀後半に位置づけられる。

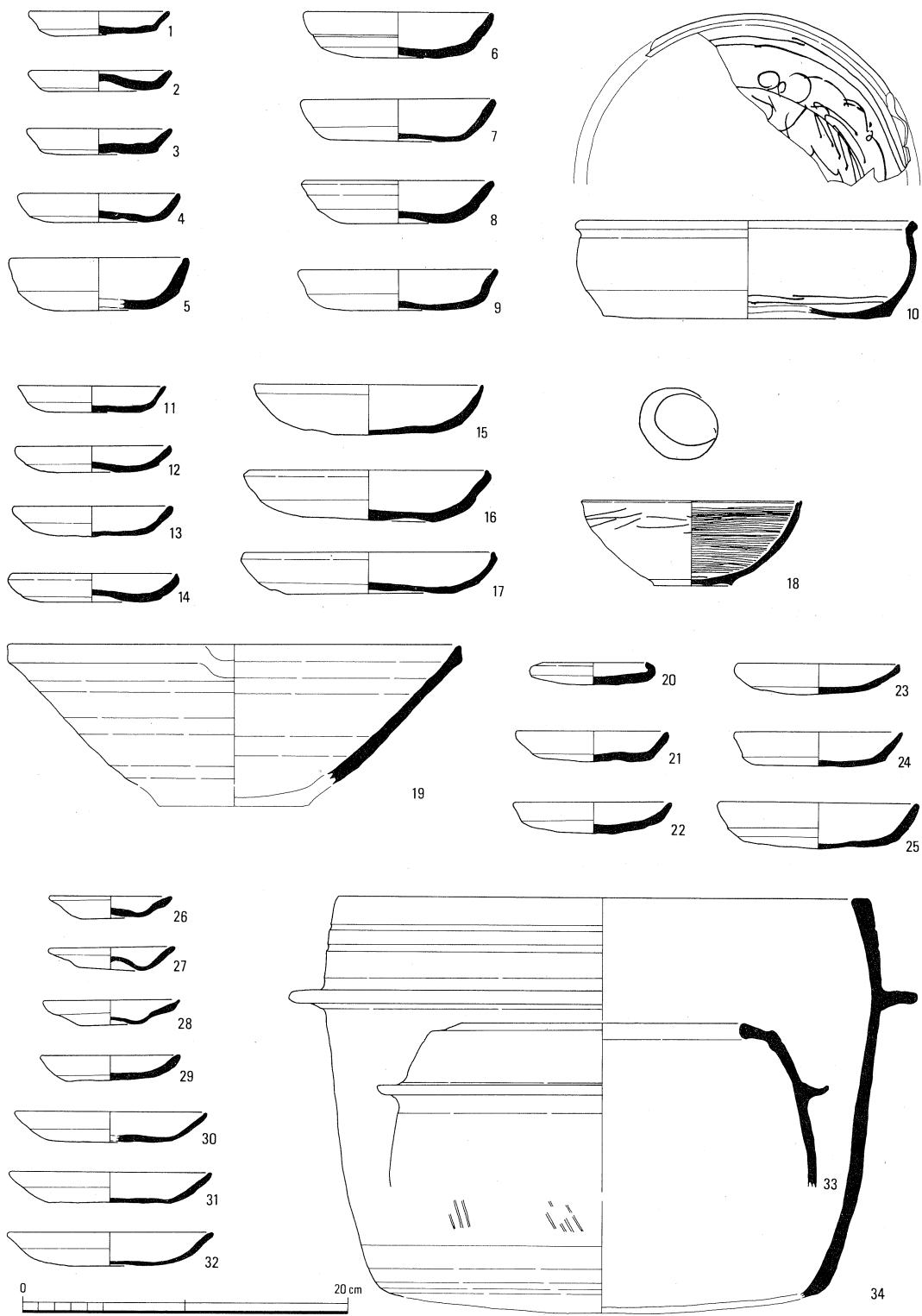
**SK03 出土土器**（11～19） 土師器皿，瓦器椀，須恵器鉢がある。土師器皿は，口径10cm前後のもの（11～14）と口径15cm前後のもの（15～17）があり，調整手法は，SK02出土のものと同様だが，やや大型である。瓦器椀(18)は，口縁部内面に連続したやや粗いへら磨きを，底部内面には渦状のへら磨きを施すもので，外面にも部分的にへら磨きがみられる。13世紀前半にその時期が求められる。須恵器鉢(19)は，片口をもつと考えられるもので，東播系の製品であろう。

**SK04 出土土器**（20～25） 土師器皿がある。口径10cm前後のもの（21～24）と口径13cm前後のもの（25），口縁部を内側に折り曲げた小皿(20)がある。20は，口縁部をよこなで調整するが，底部外面は未調整である。13世紀前半にその時期が求められる。

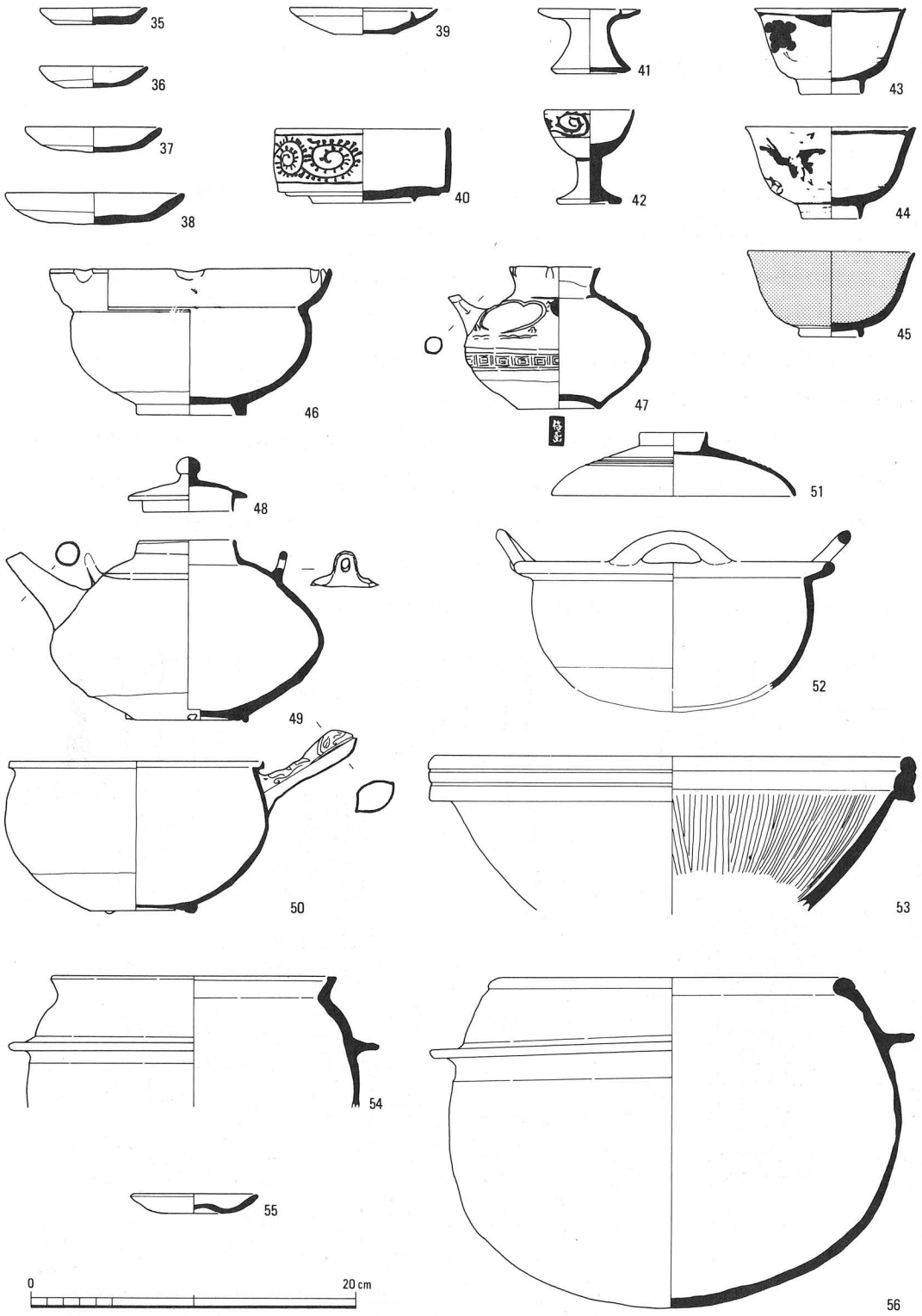
**SG07 出土土器**（26～34） 土師器皿・羽釜，瓦器鉢・羽釜・火舎などがある。土師器皿には，口径8cm未満で，底部を内側に突出させるもの（26～28），口径9cm前後でやや器壁が厚いもの（29），口径12cm前後の大型のもの（30～32）がある。内面と口縁部上端のみよこなで調整を行なう。土師器羽釜(33)は，口縁部を内側に付加したもの。瓦器羽釜(34)は，直立した口縁部と平底に近い底部をもつもので，口縁部に2条の沈線がめぐる。時期は，15世紀後半に位置づけられよう。

**SK10 出土土器**（54～56） 土師器皿（55）と土師器羽釜（54・56）がある。土師器羽釜には，口縁部を外傾させ，口縁端部を平坦におわらせるもの（54）と頸部を内彎させ，口縁端部を外側に折り曲げ肥厚させるもの（56）などがある。時期は，SG07出土土器と同じく15世紀後半に求められる。

**SK12 出土土器**（36～53） 土師器皿（35～38），陶器燈明皿（39），陶器乗燭（41），陶器椀（45），磁器段重（40），磁気仏飯器（42），磁器椀（43・44），陶器鉢（46），陶器急須（47），陶器土瓶（49），陶器鍋（52），陶器行平（50），陶器搦鉢（53）などがある。陶器のうち47・48が銅釉，52が乳白色を呈する土灰釉を施釉しており，信楽，伊賀系の製品と考えられ，他の淡緑灰色の釉を施釉したもの（39・41・46・50）や，鉄釉のもの（45）も同地域の製品である可能性が高い。時期は19世紀前半に位置づけられよう。 （森下恵介）



出土土器 1/4



出土土器 1 / 4



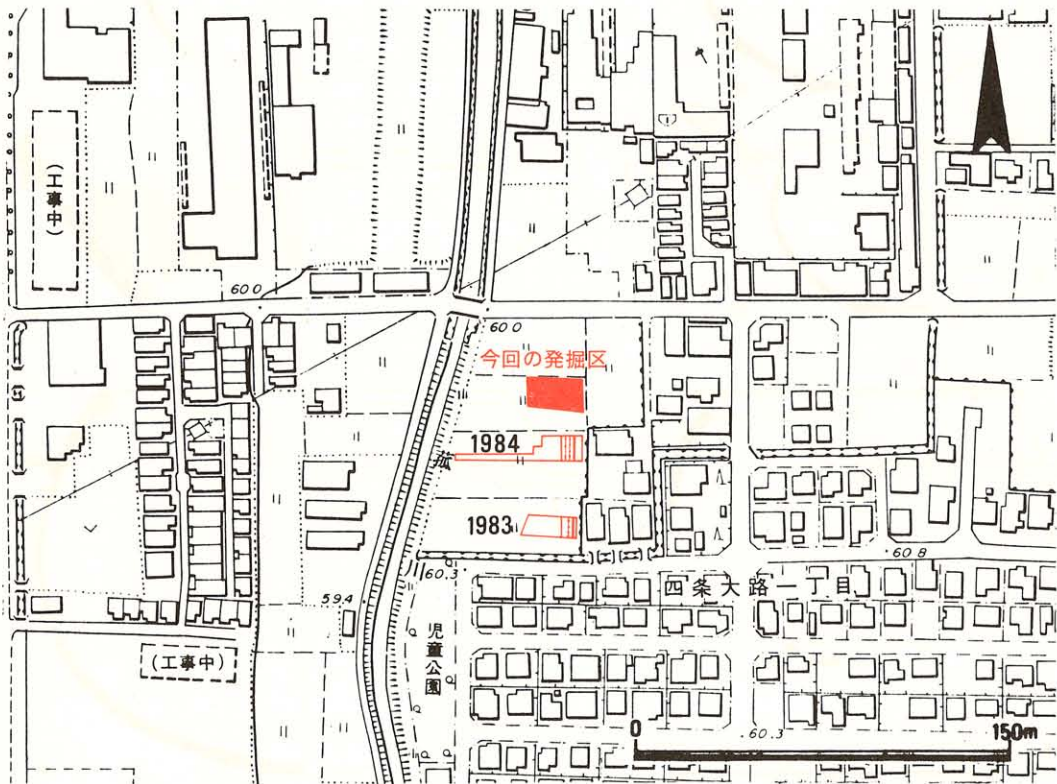
## 11. 平城京左京四条二坊七坪の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市四条大路1丁目741-1番地において実施した、高辻春雄氏届出の個人住宅建設に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では、左京四条二坊七坪にあたり、東二坊坊間路をはさんで、東には藤原仲麻呂の邸宅である田村第推定地が位置する。調査地は、七坪の坪東辺北寄りにあり、東二坊坊間路の存在が想定された。このため、坊間路の確認を目的に、発掘区を調査地東側に、東西26m、南北15m（発掘面積390㎡）で設定した。調査期間は、昭和59年10月9日から、同年11月20日までである。

昭和58年度には、同坪内の南接する地点で、2回にわたり調査を実施した。東二坊坊間路とその西側溝、七坪の東辺を限る築地痕跡、柵列等の条坊遺構、及び七坪内の様相を示す建物、井戸等の遺構を検出している。このため、今回の調査においても、当初から条坊遺構の検出が予想され、また、七坪内の占地等の様相を知る資料の充実が期待された。

注）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告』昭和58年度 1984



発掘区の位置 1/3000

## II 検出遺構

検出した遺構は、東二坊坊間路、同西側溝、掘立柱建物、柱列、井戸、土壇などである。

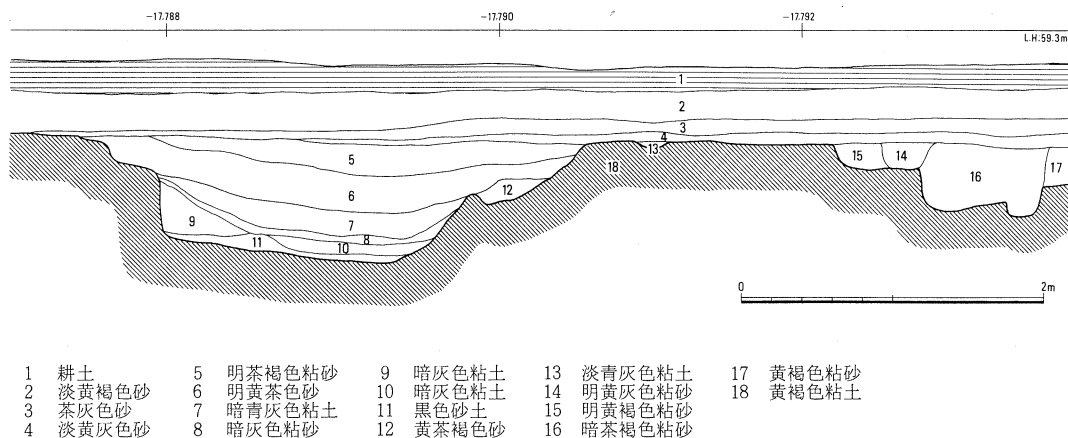
発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土の下、淡黄褐色砂・茶灰色砂・淡黄灰色砂が続き地表下約0.5mで黄褐色粘土の地山へと至る。発掘区中央部以西は、地山が序々に下降し、発掘区西端では、地表下約0.7mで地山面を確認した。地山の下降に従い、中央部以西では、茶褐色粘砂の整地土が約0.2mの厚さで堆積する。遺構は、基本的に発掘区東部では地山上面・発掘区西部では整地土上面で検出した。

**SF01** 発掘区東部で検出した南北方向の道路であり、七坪と十一坪を画する東二坊坊間路と考えられる。黄褐色粘土の地山上面が路面となっている。西側溝SD02を検出したことにより、その西限が判明したが、路幅については不明。発掘区内では、路肩からの幅4.5m分を検出した。

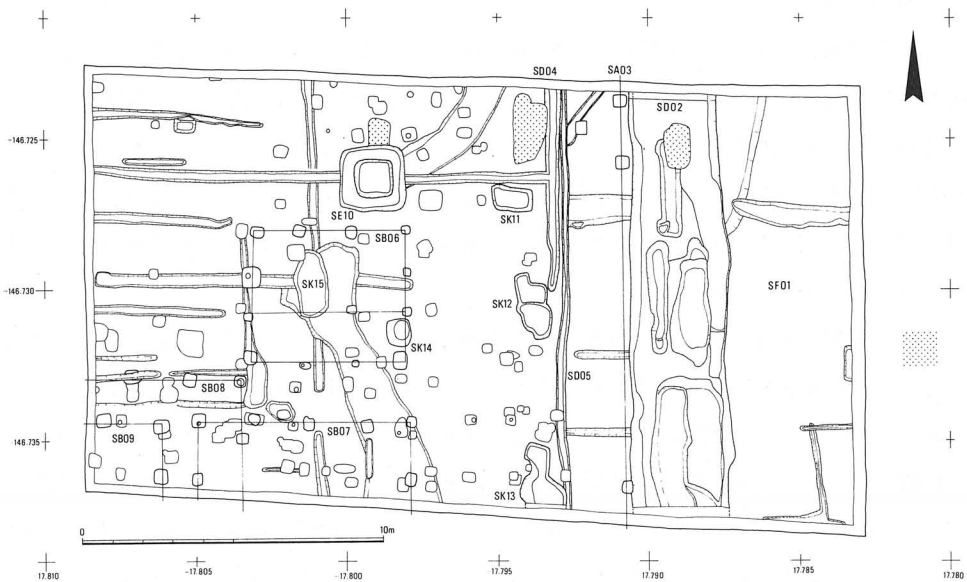
**SD02** 東二坊坊間路SF01の西限を画す、南北方向の素掘り溝である。坊間路西側溝に相当するものと考えられる。幅1.9~3.1mを測り、深さは北側で検出面から約0.3m、南側最深部で約0.8mを測る。側溝内埋土は、上下2層に大別できる。埋土下層は、概ね2層に分かれ、北部では一部に路肩を浸蝕した形での堆積がみられる。上層の堆積土は、下層の埋土を掘り込む形で、やや西にずれて堆積しており、最深部が、下層堆積の最深部に比してやや西に片寄りを見せる。上層埋土は北端で2層、南端で5層に細分できる。側溝内埋土からは、軒丸瓦(6227D, 6348Ab型式)、軒平瓦(6721Hb型式)とともに奈良時代後半の土器類及び木簡・木製品が出土した。

**SA03** 七坪の東辺を限る南北方向の柱列で、塀と考えられる。削平のため柱穴が、ほとんど遺存しないが、発掘区北端で柱間2.1mを測る。築地痕跡は確認できなかった。

**SD04** SD02に平行して検出した南北方向の素掘り溝。幅0.5m、検出面からの深さ0.4m前後を測る。SD02心との心々間距離13尺となる。昭和58年度に検出した築地雨落ち溝に続くものとも考えられる。



南壁堆積土層図 1/50



検出遺構平面図 1 / 250

**SD05** SD04と一部重複し、平行する素掘り溝である。幅0.4m、検出面からの深さ0.2mを測る。SD02心との心々間距離9尺となる。重複関係から、SD04・SK12よりも新しい。

**SB06** 発掘区中央で検出した桁行3間(5.4m)、梁行3間(4.8m)の東西棟建物で南廂をもつ。柱間寸法は、桁行1.8m等間、梁行1.5m等間で廂の出は1.8mである。

**SB07** SB06の南で検出した桁行4間(7.2m)、梁行1間(1.8m)以上の東西棟建物。柱間寸法は、桁行1.8m等間、梁行1.8mである。

**SB08** 発掘区南西で検出した東西2間(3.6m)以上、南北1間(1.8m)以上の建物である。柱間寸法は、東西1.8m等間、南北1.8mである。

**SB09** SB07西隣で検出した東西1間(1.8m)以上、南北1間(1.8m)以上の建物である。

**SB10** 発掘区中央北部で検出した井戸である。掘形一辺2mの隅丸方形を呈す。検出面から約0.9m掘り下げたところで、中央部を更に一辺1.2mの隅丸方形に約0.75m掘り下げる。枳板は残存しない。埋土中から奈良時代後半の土器類とともに軒丸瓦(6227A型式)が出土した。

**SK11** SE10東側で検出した長辺1.4m、短辺0.8mの長方形土壇。検出面からの深さ0.1m。

**SK12** SK11南側で検出した不整形の土壇。検出面からの深さ0.1mを測る。

**SK13** 発掘区中央南端で検出した不整形の土壇。検出面からの深さ0.2mを測る。

**SK14** 発掘区中央で検出した長辺1.0m、短辺0.8mの長方形の土壇。検出面からの深さ0.3m。SK11～SK14の埋土からは、奈良時代後半の土器、及び瓦埴類が出土した。

**SK15** SK14西側で検出した長辺2.2m、短辺1.0mの長方形の土壇。検出面からの深さ0.23mを測る。埋土から奈良時代後半の土器とともに、軒丸瓦(6348Ab型式)が出土した。

### Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、遺物包含層及び、溝・井戸・土壙などの遺構から瓦埴類・土器類・木簡・木製品が出土している。いずれも、奈良時代の遺物であり、奈良時代中頃以降の遺物が大半を占める。以下に、遺構に伴ない出土したものを中心に図示し、記述する。

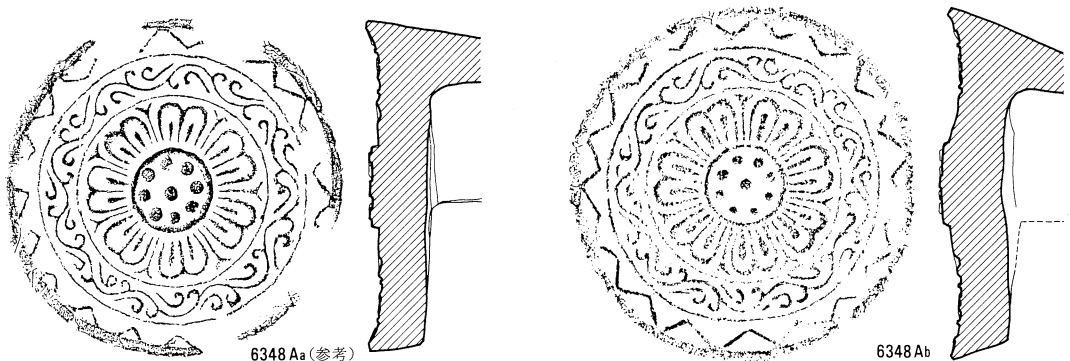
**瓦類** 瓦は坪内部の遺構面を覆う遺物包含層から多量に出土した。丸・平瓦が大半を占め、軒瓦には軒丸瓦16点と軒平瓦11点がある。発掘面積1 aあたりの軒瓦出土点数は6.9個で、同坪の過去の調査分(発掘面積460 m<sup>2</sup> 出土軒瓦25点)、を加えても6.1個である。これは従来の京内宅地の調査例と比べるとかなり高い数値であることが指摘できる。

軒丸瓦は平城宮6151A(1点)、6227A(1点)・D(3点)、6296A(1点)、6308B(1点)6313A(1点)、6348A(6点)の各型式が出土し、他に型式不明2点がある。6151Aは単弁8弁蓮華文瓦で、蓮弁と間弁とが重なり合うように表現されるのが特徴である。Aaと彫り直しのAbとが知られ、Aaでは各弁の基部が中房から離れるのに対し、Abでは両者が接する。本例はAaの彫り直して弁の基部と中房とが接するものの、追刻はAbまでには至らない。すなわち本例がAbとなり、従来のAbはAcとなる関係にある。6313Aは小型の複弁4弁蓮華文瓦で、中房蓮子が1個のみなのが特徴的である。Aaと彫り直しのAbとがあり、Abは内区全体が盛り上がる。本例もまたAaの彫り直してでありながら、Abまでには追刻が進んでいない。同様に本例がAbとなり、従来のAbはAcとなる関係にある。6348Aは複弁7弁蓮華文瓦で、外区内縁に唐草文、外縁に線鋸齒文がめぐる。Aa一種のみが知られていたが、今回新たに彫り直しのAbが出土した。Abは弁区から中房にかけて著しく盛り上がる(下図参照)。Aaが1点、Abが5点出土した。

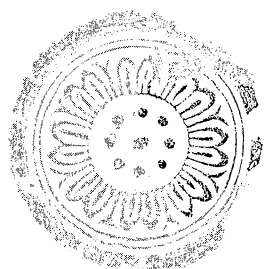
軒平瓦は平城宮6663F(1点)・H(2点)、6664F(1点)、6670A(1点)、6671B(1点)、6675A(2点)、6688A(1点)、6721Hb(1点)が出土し、他に型式不明1点がある。6670Aは小型の3回反転均整唐草文瓦で、<sup>注1)</sup>従来左京四条二坊十五坪にAa1点と<sup>注2)</sup>左京六条一坊十二坪に彫り直しのAb1点が知られるのみ。本例は線太であるためAbと判断できる。

注1) 奈文研『昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983

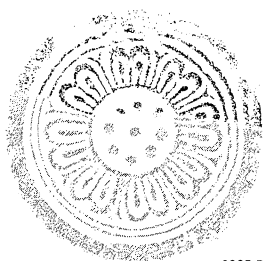
注2) 奈良市教委『昭和58年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』1984



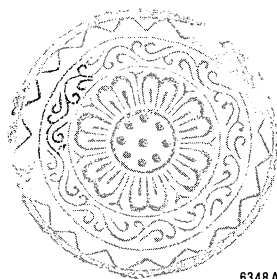
平城宮6348型式軒丸瓦



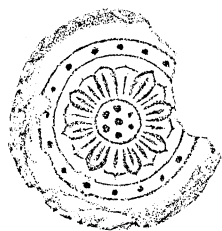
6227 A



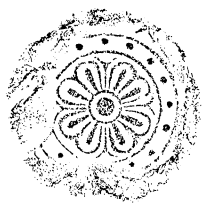
6227 D



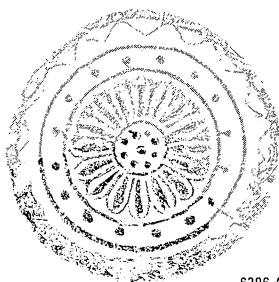
6348 Aa



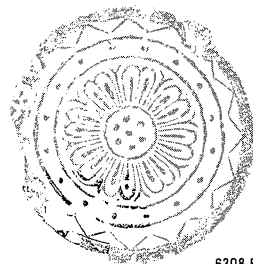
6151 Ab



6313 Ab



6296 A



6308 B



6663 F



6671 B



6663 H



6675 A



6664 F



6721 Hb



6688 A



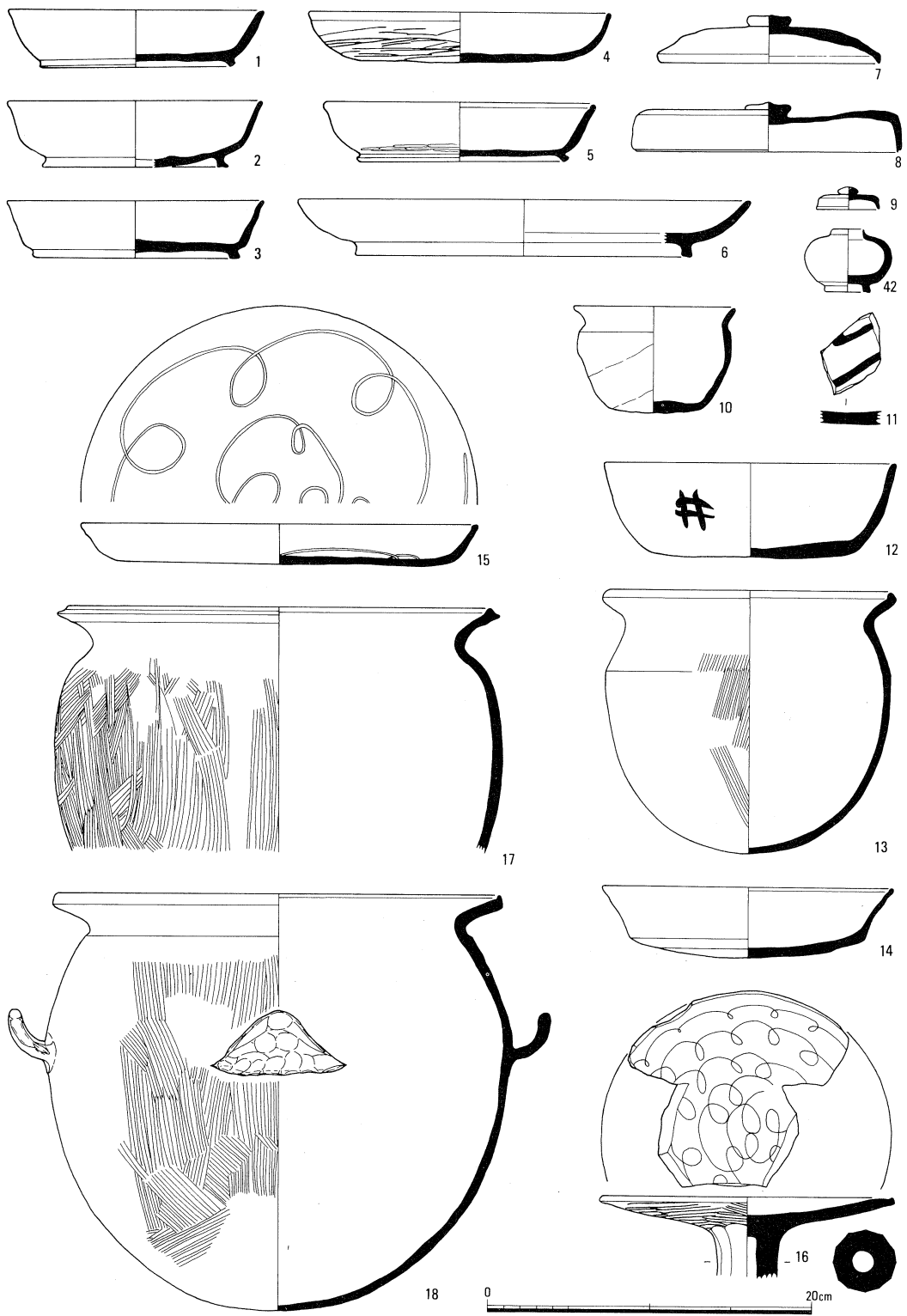
6670 Ab

**土器類** 土器類は、SD02、SE10、SK11・12・13・14・15などから出土しているが、遺物包含層からのものが多数を占める。ここでは、遺構内から出土したものを中心に記述する。

**SD02出土土器** 土師器、須恵器などが出土。土師器には、杯B(1・5)、皿A(4)、壺B(10)、甕A(13)等がある。4は、平坦な底部から内彎して立ちあがる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。内面は横なで調整、外面は口縁部を横なで、以下をへら削りとした後、へら磨きを施す $b_0$ 手法とする。1・5はともに内面は横なで、外面は横なで調整ののちへら磨き、底部高台内はへら削りとする。10は、丸みを帯びた平底と球形に近い胴部をもち、口縁部が強く外反するもの。口縁部を強い横なでとするため頸部に稜をもつ。胴部には粘土紐痕が残る。13は、球形に近い胴部と外反する口縁部からなる。胴部外面はハケ目調整とし、頸部下端にまで及ぶ。口縁部は横なで調整。須恵器には、杯A、杯B(3)、杯L(2)、杯E(12)、皿B(6)、杯B蓋(7)、壺A蓋(8)、ミニチュア壺蓋(9)等がある。2は、銅鏡の形態を模倣したもので、体部中位で内に折れ、ゆるい稜をつくる。口縁部上位で外反気味となる。内外面ともナデで仕上げる。6は、平坦な底部から内彎して立ちあがる体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整。12は、銅鏡の形態を模倣したもので、平坦な底部と内彎する口縁部からなる。口縁端部はやや内傾する。内面はナデ調整。外面体部上半はナデ調整。底部はへら切りのままとする。体部外面に「井」の墨書がみられる。7は、笠形の蓋部頂上をへら削りし、扁平なつまみを貼り付ける。転用硯として利用されたもの。9は、径3.8cm、器高1.4cmを測る小型の壺蓋。

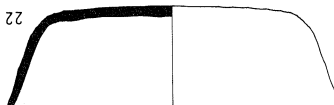
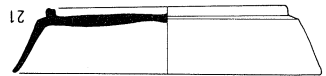
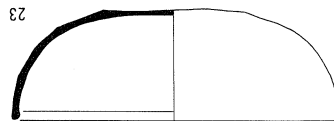
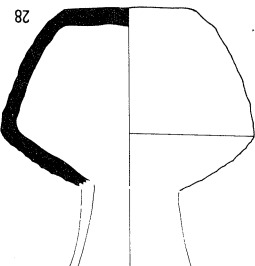
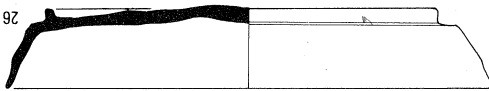
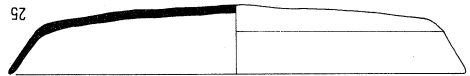
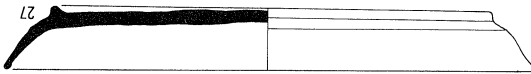
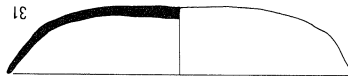
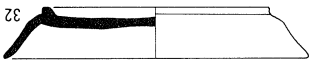
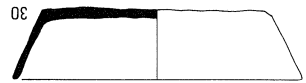
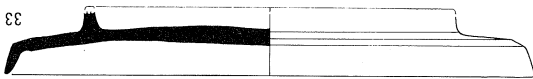
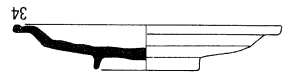
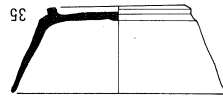
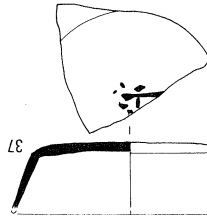
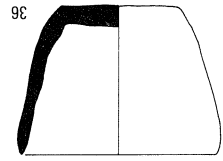
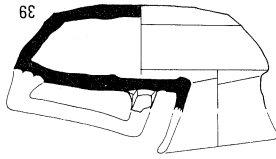
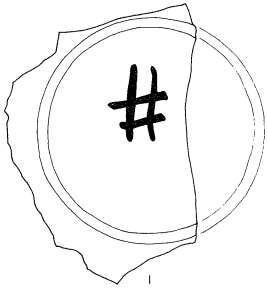
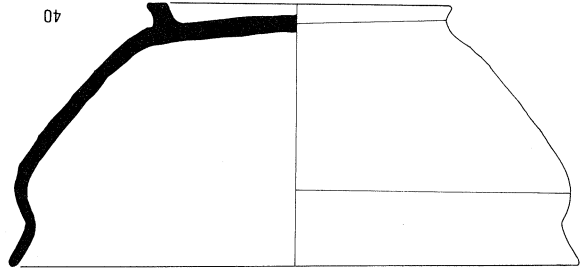
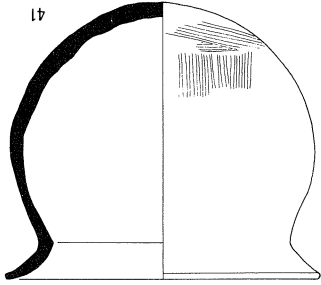
**SE10出土土器** 土師器、須恵器が出土。土師器には、皿A(15)、高杯(16)、甕A(17)、甕B(18)等がある。15は、平坦な底部と内彎しながら立ちあがる口縁部からなり、口縁端部を内側へ肥厚させる。内面はなで調整の後に、螺旋状暗文を施す。外面は $b_0$ 手法とする。16は、へらによって12面に面取りした脚部に、外方へ開く浅い杯部を付したものの。脚部は、芯棒の上に粘土紐を巻きあげて成形。杯部内面は、よこなで調整後、螺旋状暗文を時計回りに外側から中心に向かって施す。外面はなで調整後、斜方向のへら磨きを分割して施す。17は、球形に近い胴部とつよく外反する口縁部からなる。口縁端部に粘土細紐を貼り付け、断面三角形に成形する。内面なで調整。外面は胴部をハケ目調整、頸部以上を横なで調整とする。18は、肩部に三角形の把手を付す。内面はなで調整。外面は胴部をハケ目調整とし、頸部以上を横なで調整とする。頸部に強い横なでによる稜ができる。須恵器には杯A(14)等がある。14は、丸みを帯びた平底と外反して立ちあがる口縁部を呈す。内面を細かいハケ目状に調整。外面口縁部は横なで、底部はへら切りのままとする。外面底部にへらによる線刻がある。

**SE12出土土器** 土師器・須恵器などが出土。土師器には皿B(27)、皿C(19)などがある。19は、内面及び外面口縁部を横なで、以下を無調整とする。須恵器には、杯A(20・22)、杯B(21)皿A(24・25)、皿B(26)、椀(23)、壺K(28)などがある。20は、内面及び外面口縁部を横なで調整、底部をへら切りのままとする。22は口径17.4cm、器高5.5cmを測る深い形態。内面を横ナデ、外面



出土土器 1/4

出土玉器 1/4





体部上半を横ナデ，以下へう削りとする。23は銅器の形態を模倣したもので薄い器壁を呈し，平坦な底部と大きく内彎して立ちあがる体部からなる。口縁端部は，やや内傾する。胎土は精良，軟質なもので灰白色を呈す。内面は丁寧なナデ，外面は体部上半を横ナデ，以下をへう削りとする。

**SK 13 出土土器** 土師器甕A(41)，須恵器杯B(35)などがある。41は球形に近い胴部と，外反する口縁部からなる。外面下半にハケ目による調整が残る。

**SK 15 出土土器** 土師器・須恵器などが出土。土師器には，皿A(31)等がある。31は内面をなで調整。外面は，全面をへう削りするC手法とする。須恵器には杯A(29・30)，杯B(32)，皿D(33)等がある。33は平坦な底部と短い口縁部からなる皿部に腰高の高台を貼り付けるもの。

その他の出土土器，遺物包含層等から多くの土器が出土している。須恵器杯A(37)，杯B(38)の外底部には墨書がみられる。37は判読不可能。38は「井」を記す。須恵器壺(42)は器高3.9 cmを測る小型のもので，肩部に灰釉を掛ける。

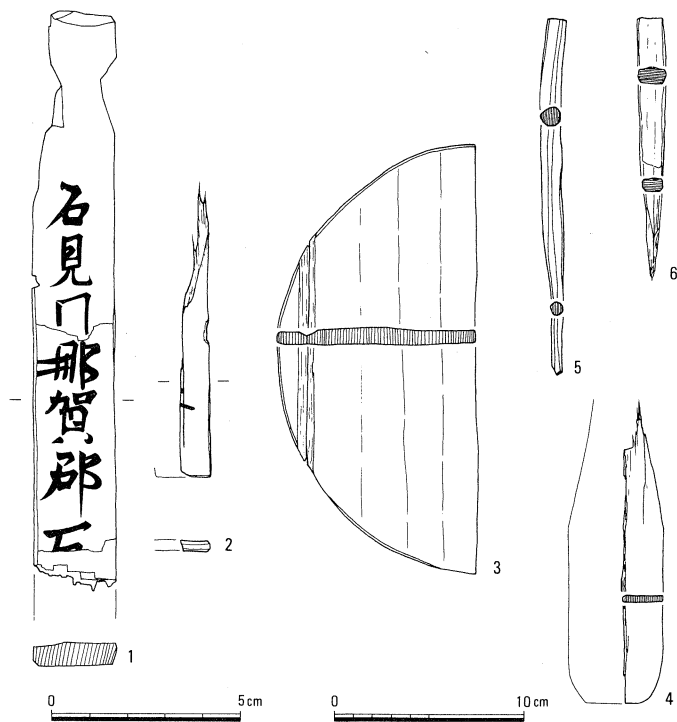
**木簡** SD02埋土灰色粘土から出土したもの。1は，柁目材の薄板を加工したもの。長方形の材の上端に切り込みをいれる。下端は折損。2は，板目材の薄板を加工したもの。形態は不詳。

- 1 「V石見国那賀郡石<sup>(石見か)</sup>」 (152) × 21 × 5 039  
2 □」

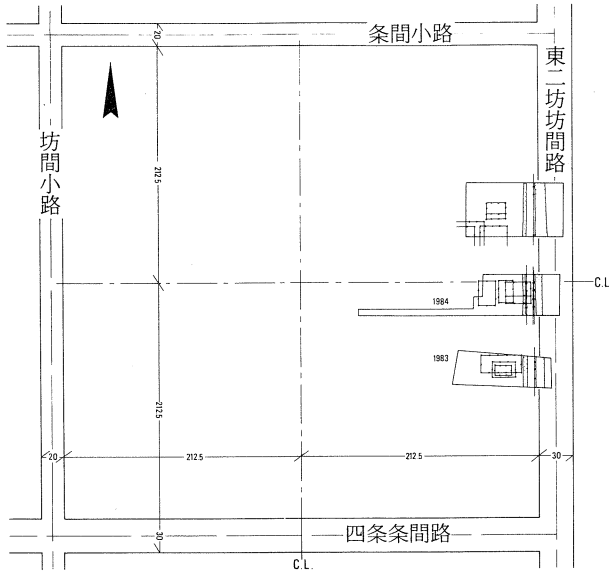
(8) × (0.8) × 2.5 081

**木製品** SD02埋土灰色粘土から出土したもの。曲物底板(3)，杓子形木製品(4)，棒状木製品(5・6)などがある。3は，柁目材を正円形につくり，側面を垂直に削ったもので，全体の約1/2が残る。4は扁平な柁目材から杓子を形どったものであり，側面を垂直に削る。全体の約1/2が残る。5・6は，割材を細く棒状に加工したもので，5は両端を直截する。6は一端を直截し他端を尖らす。

注) 木簡の表記方法・型式番号は木簡学会『木簡研究』創刊～6号 1979～1984に準拠した。



出土木簡1/2・木製品1/4



七坪の占地概念図 (単位：天平尺)

方位の東西、南北方向が直交するものと想定し、先の西側溝の振れを採り、修正を加えると、両者心々間の東西距離は、793.446mとなる。左京三条二坊の調査では、東二坊坊間路の幅員を30尺に復元しており、今回も同様に想定すると、造営単位尺は0.2955mとなる。従来の調査成果による造営単位尺は、0.295～0.296mの範囲内に落ちつく傾向をもつことから、この数値も妥当なものと言える。しかしながら、最近の調査成果から、条坊計画方位が、必ずしも直交するものでないこと、京内条坊道路の幅員が、必ずしも一定しないことなどが明らかにされている。今回の条坊復元作業においても、これによる誤差は、充分想定できるが、昭和58年度の調査結果などからみて、現段階ではSF01を東二坊坊間路に、SD02を同西側溝に比定して大過ないと考える。

七坪内の調査は、昭和58年度調査面積を合わせても850㎡であり、坪全体の面積のわずか6%にすぎない。坪内の宅地割の全貌については、今後の坪中央部での調査によるところが大きいと言えるが、これまでの調査で比較的小規模な建物が、少なくとも4時期に重複して存在していることが知られている。昭和58年度調査においては、想定七坪南北中軸線上に位置する建物3棟を検出した。このことからみて、七坪内においては、南北を二分割する施設は存在せず、広い宅地割のもとに土地利用がなされていた可能性も、指摘できよう。(立石堅志)

地 点	X	Y	備 考
S D 02 心	-146736.000	-17789.340	今回の調査
平城京左京三条二坊七坪西側溝心	-146254.563	-17791.583	平城宮第118-23次調査
平城宮朱雀門心	-145994.490	-18586.310	『平城宮発掘調査報告IX』

計測座標表

注1) 奈良国立文化財研究所『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1980

注2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和58年度 1984

#### IV まとめ

今回検出した条坊遺跡が、平城京条坊計画のなかで占める位置について検討を加えておきたい。

昭和54年に行なわれた左京三条二坊七坪の調査では、東二坊坊間路西側溝が検出されている。その西側溝心と、今回検出したSD02心から、国土方眼位に対する西側溝の振れを求めるとN0°16'01"Wとなる。今、SD02心の位置を求めると、朱雀門心から国土方眼位を介して東に796.

97mの位置にある。これを条坊計画

## 12. 平城京四條々間路の調査

### I はじめに

本調査は、井上明太郎氏届出の奈良市四条大路2丁目881～883番地及び東中久好氏届出の同四条大路2丁目20番地における、いずれも住宅新築に伴う事前発掘調査である。前者は昭和59年4月23日～同年5月11日に、位置図に示した第1・2発掘区計約146㎡を、後者は昭和59年10月16日～同年11月5日に第3発掘区約120㎡を調査した。両調査地はたがいに隣接しており、後述するよう一連の遺構を検出したのでここに一括して報告する。



発掘区の位置 1 / 7500

なお、第2発掘区については、調査中の降雨で壁が崩壊し、調査地北側の水田に影響を及ぼしそうな状況になり、調査途中で埋め戻さざるをえなかった。

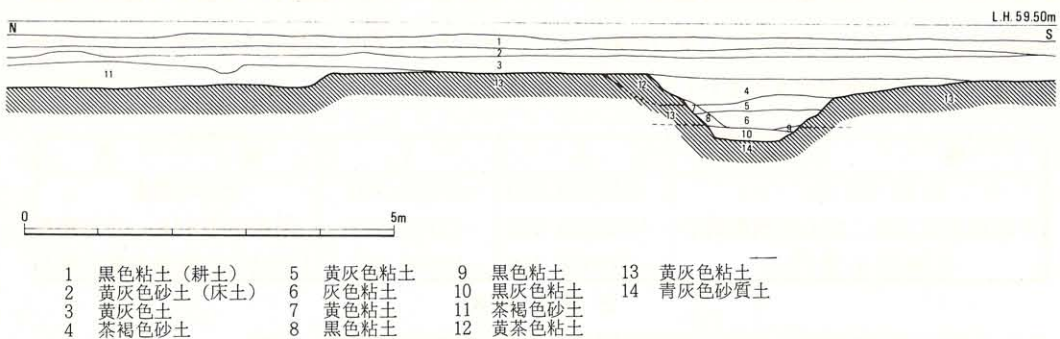
### II 検出遺構

当該地は地割の遺存状況からみて、平城京四条々間路と左京四条一坊十四坪の北辺部に相当すると考えられた。そのため調査の主な目的を条間路の確認においた。調査の結果、道路1条、溝3条、土壌、落ち込みなどを検出した。これらの遺構には弥生時代のものと同奈良時代のものがある。以下に、検出した遺構の概要を記す。

**土層** 発掘区内の基本層序は以下のようなものである。まず、第1発掘区では黒色粘土（耕土）以下、黄灰色砂土（床土）、黄灰色土と続き地表面下約50mで地山である黄灰色粘土層に達する。第3発掘区では床土の下に灰色土層が加わる。遺構はいずれの発掘区も地山面で検出した。

**S F 01** 第1・2発掘区南端、第3発掘区北端で検出した東西道路。四条々間路に相当する。南・北両側溝をもち、路面幅は7.55m前後。検出範囲がわずかであり、路面の状況などは不明。

**S D 02** 第1発掘区で検出した東西溝。四条々間路の北側溝にあたる。検出した溝幅は3.3～



第2発掘区東壁堆積土層図 1 / 100

4.0mであるが、路面側の肩が削り取られたようになっているので、溝最深部と北肩との距離を折り返した2.7m前後が本来の幅員と考えられる。溝底は東へ向って下り勾配で、東端の深さ0.86m。

**SD 03** 第3発掘区で検出した東西溝。四条々間路の南側溝にあたる。幅は1.45～2.5mと一定ではない。溝底は東へ向って下り勾配で、深さは西端で0.28m 東端で0.75m。SD02との心々間距離は10.55m程度となる。

**SD 04** 第3発掘区で検出した斜行溝。幅35cm前後、深さ37cm前後。埋土から弥生土器が出土した。西北端がSD03により破壊されている。

**SK 05** 第3発掘区で検出した小土壇。平面形は不整形で、幅86cm、長さ112cm以上。深さ49cm。一部がSD03により破壊されており、埋土から弥生土器が出土した。

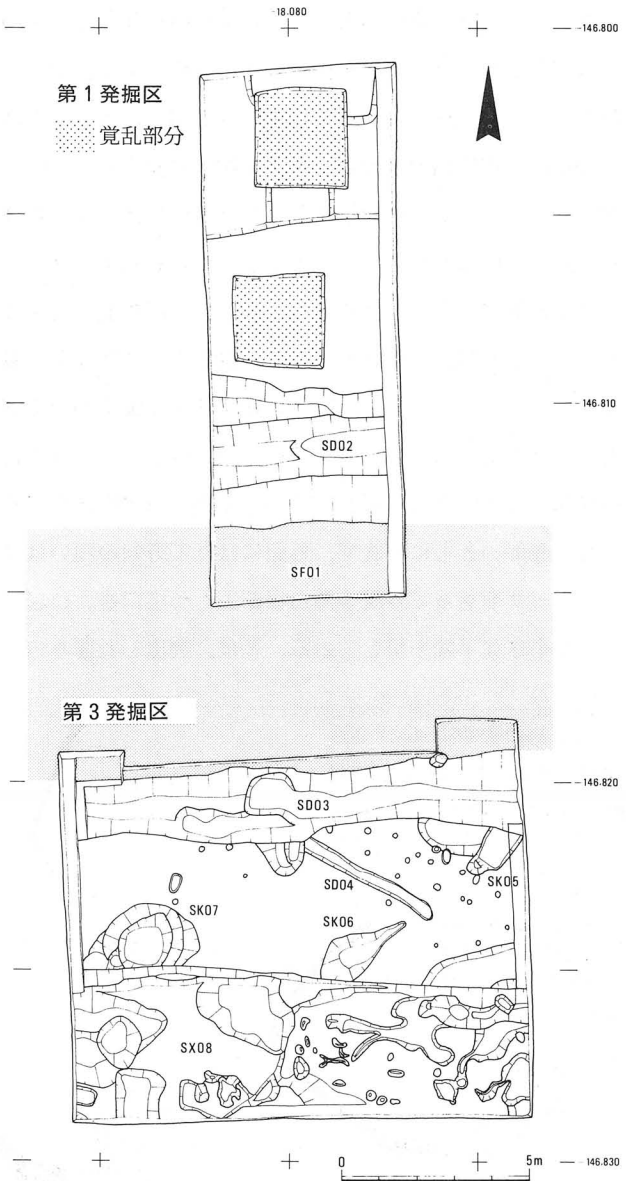
**SK 06** 第3発掘区で検出した浅い土壇。平面形は不整形で、幅119cm、長さ270cm以上。深さ28cm。埋土から弥生土器が出土した。一部がSX08に破壊されている。

**SK 07** 第3発掘区で検出した土壇。平面形は円形で、東西294cm、南北168cm以上。深さ100cm。一部がSX08により破壊されており、埋土から弥生土器が出土した。

**SX 08** 第3発掘区でその一部を検出した落ち込み。北肩はほぼ一直線に東西にのびるが、南・東・西の三方は発掘区外へ続き、その範囲は不明。底は平らではなく、部分的に深くなる。深さは、比較的平らな部分で43cm、最深部で71cm。埋土からは奈良時代の土器が出土した。

以上のほか、SD03の南側で検出したピット群がある。いずれも深さ5cm前後と浅く、出土遺物もない。一部がSD03に破壊されているものがある。

(西崎卓哉)

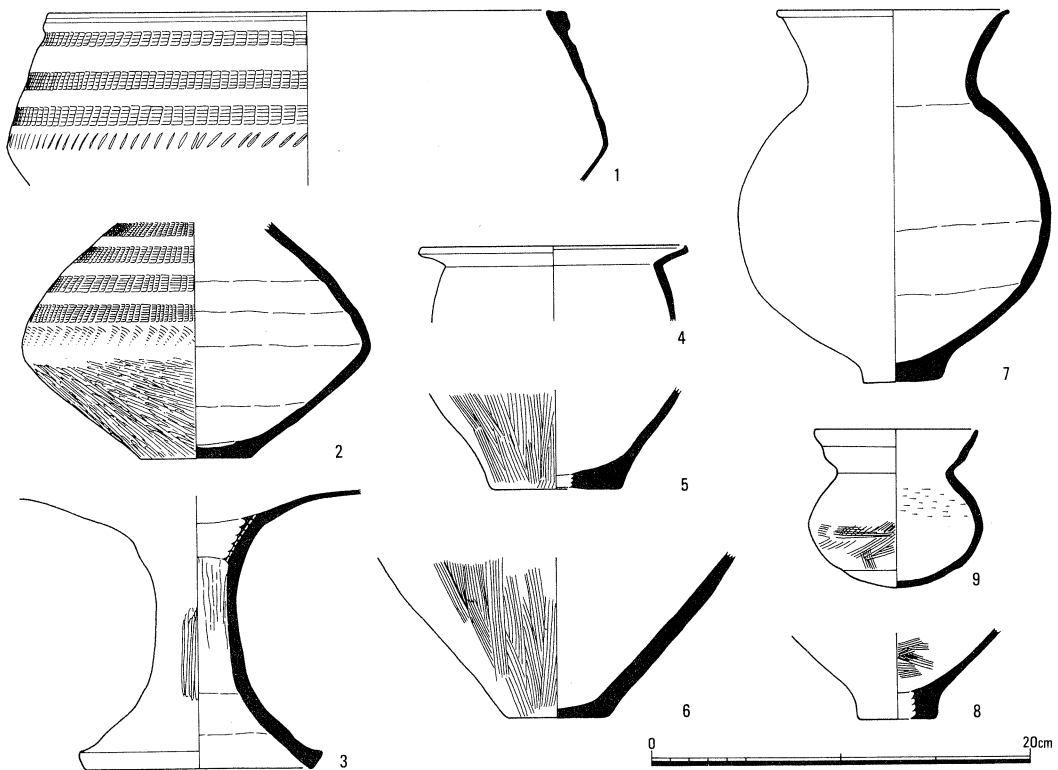


検出遺構平面図 1/200

### Ⅲ 出土遺物

検出した遺構、遺物包含層からは弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代の遺物が出土した。土器が大半であり、他に石器と若干の瓦片がある。以下、比較的まとまっている土器を中心に概要を記しておこう。なお、土器番号は実測図の番号と石器番号は写真図版の番号と対応する。

**SK 07・旧流路出土土器** 第3発掘区で検出したSK07からは弥生時代後期の土器が、第2発掘区で一部を検出した旧流路からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土。1は体部下半で屈曲し、口縁部がわずかに内傾しながら立ち上る鉢。口縁端部は段状口縁をなす。体部外面には3条の簾状文と刻み目を施し、段状口縁部外面には1条の凹線文をめぐらせる。2は、そろばん形を呈した胴部に平底をもつ壺、胴部上半には4条の簾状文と扇形浮文を施し、下半にはへら磨きを行っている。3は、細長い柱状部から脚部が短く開く高杯。脚端部がやや上下に拡張する。外面にはたて方向のへら磨きを行ない、内面にはしぼり目が残る。4は、張りの少ない体部から、口縁部が大きく外方に屈曲してひらく甕。口縁端部をわずかに上方へつまみ上げている。5・6は甕の底部。ともに平底で、外面にはたて方向の粗いはけ目を施す。7は、球形の体部とゆるやかなカーブをもって外反する口縁部をもつ広口壺。口縁端部はわずかに外側へ肥厚し、底部は突出した小さな平底を呈している。8は、突出した厚みのある平底を呈しており、壺の底部かと思

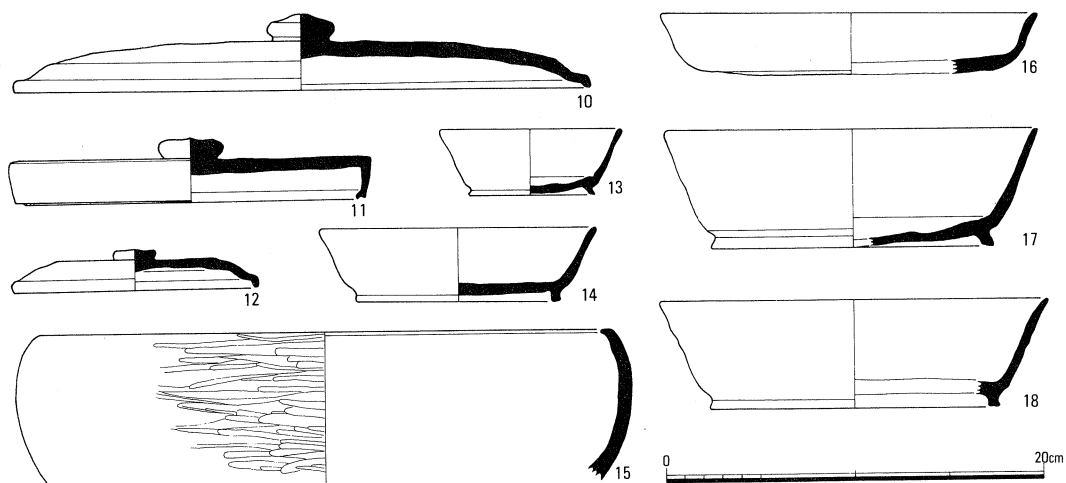


SK 07・旧流路出土土器 1 / 4

われる、内面には逆時計回りに細かいはけ目を施す。9は、いわゆる布留式土器に属すると思われる小型の丸底壺。口縁部はわずかに内彎しながら外方へひらき、口縁端部をわずかに内側へま  
とめておわる。胴部中位に最大径をもち、底部は丸底を呈す。胴部外面には乱方向の細かいはけ  
目を施し、内面上半にはへら削りを行う。1～6は土壙SK07出土、7～8は第2発掘区旧流路  
出土。

**SX08 出土土器** 奈良時代の須恵器杯B、杯B蓋、皿B蓋、皿C、壺A蓋、鉢Cなどがある。  
以下に図示できたものの概要を記す。10は大型の蓋。皿Bの蓋であろうと思われる。復原径31.0  
cm。外面はへら削りによって調整する。11は平坦な頂部に、内傾して直角に折れ曲る縁部をもつ  
壺Aの蓋。口縁部内端を下方に突出させ、外側に段をつくる。12は扁平なボタン状のつまみをも  
ち、頂部が丸く笠形を呈する杯Bの蓋。内外面ともに回転ナデにより調整されている。杯B（13  
・14・17・18）には、径9.4 cmと小型のもの（13）と、径14.8cmとひとまわり大きいもの（14）、  
径20.4cmと大型で深いもの（17・18）がある。15は、内彎しながら立ち上る口縁部をもつ鉢A。  
口縁端部はへらにより平坦に面取りされている。体部外面はへら磨きによって調整されている。  
16は口縁部が短く外反する皿C。

**SK 05・遺物包含層出土石器** 弥生土器とともに石器が出土している。19・20は直線的な刃部  
とわずかに外反する背部をもつ石庖丁。ともに片刃であり、両面から穿孔する。21は、片面を3  
等分するかのよう稜があり、側辺・底辺は面取りされ平坦面をもつ。他の片面は剥離しており  
原形をとどめないが、断面は扁平な八角形を呈するものになるうかと思われる。石剣の基部であ  
ろうか。22は磨製の石斧。刃部と両側面の一部には磨研部が残るが、その他は剥離し平滑さを失  
っている。23は凸基有茎式の石族。全長3.75 cm、重さ3.2 g。19～21はSK05から出土、22・23  
は遺物包含層から出土した。 (服部芳人)



S K 08 出土土器 1 / 4

#### IV まとめ

今回の調査では弥生時代と奈良時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構は溝と土壌であるが発掘面積が狭いこともありまとまった成果を得るまでにはいたっていない。だが、本調査地に比較的近い左京五条一坊一・八坪の調査でも弥生時代の遺構を検出、若干の遺物が出土しており遺構の分布範囲や平城宮南西隅下層の弥生時代遺跡との<sup>注1)</sup>かかわりなど、今後資料の増加をまって検討せねばならない課題を残した。

奈良時代の遺構では平城京四条条間路に相当すると考えられる東西道路 S F 01 を検出した。この S F 01 について若干の検討をしておこう。これまでのところ他に四条条間路の検出例がなく今回の S F 01 と幅員などを比較することや、道路の国土方眼方位に対する振れを求めることはできない。そこで、S F 01 の南・北の側溝である S D 02・03 の心間距離 9.46 m の中点を道路心だと考えて、この地点と朱雀門心との南北距離を求めてみる。この場合、国土方眼方位での距離は 821.13 m であるが、平城京の条坊方位が東西方向の条坊道路では東でわずかに北へ振れていることがわかっているので、今仮に朱雀大路と四条条間路は直交するものとして朱雀大路の振れ  $N0^{\circ}14'41''W$  で距離を修正すると 823.445 m となる。一般に、京の計画寸法は一坊の幅が道路心で 1800 尺、二条大路の計画心は朱雀門心から南へ 80 尺の地点にあるとされるので、朱雀門心と四条条間路心との計画寸法は 1 坊幅 (1800 尺) + 1 / 2 坊幅 (900 尺) + 朱雀門心と二条大路計画心との距離 (80 尺) = 2780 尺となる。この計画寸法でさきに求めた実長距離 823.445 m を徐してみると、この場合の 1 尺あたりの距離は 0.2962 m となる。従来の調査成果からみて、京造営にあたっての基準尺は 1 尺あたり 0.295 ~ 0.296 m の範囲におさまる場合が多く、今回求めた数値はこれにくらべてわずかに大きい。だが、仮に朱雀大路と四条条間路は直交すると考えたことや、検出した遺構はあくまでも廃絶時の姿であることを考えあわせれば、1 尺: 0.2962 m はほぼ納得できる値だといえよう。以上のことから、検出した東西道路 S F 01 を平城京四条条間路に比定することが妥当であると考ええる。

なお、調査地付近では 15 ~ 19 m 幅の東西に細長い水田が連なり四条条間路の痕跡となっている。今回 S D 02 をほぼその中央で検出し S D 03 は南に隣接する水田で検出したことから、四条条間路の遺存地割が東一坊付近ではわずかに北へずれていることになる。 (西崎卓哉)

注 1) 奈良国立文化財研究所「昭和 39 年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報』1965

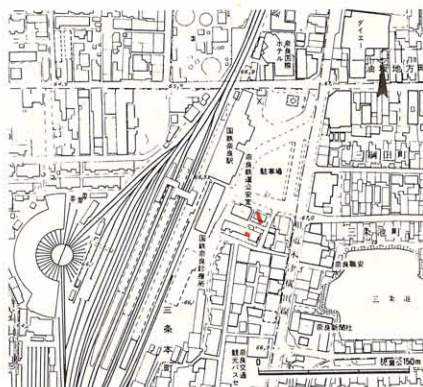
地点名	X	Y	備考
朱雀門心	- 145,994.49	- 18,586.31	奈文研『平城宮発掘調査報告IX』
S D 02 心	- 146,810.89	- 18,077.50	今回の調査
S D 03 心	- 146,820.35	- 18,077.50	今回の調査
S F 01 心	- 146,815.62	- 18,077.50	今回の調査

計測座標表

### 13. 平城京左京（外京）四條五坊七坪の調査

本調査は 奈良市三条本町1-1番地において、昭和59年6月7日に実施した、(株) 駅レンタカー関西届出の国鉄奈良駅前駐輪場建設に伴う事前発掘調査である。

当該地は、平城京条坊復元では、四条条間路に相当するが、明治20年測図の京阪地方仮製貳萬分壹地形図「奈良」によれば、測量当時、池沼であったことがわかる。発掘区は、条間小路の確認のため、調査地中央に南北12m 東西1.5m のトレンチ及び、西隅に東西5m、南北1.5m のトレンチの2箇所を設定した。両トレンチともに、



発掘区の位置 1/7500

堆積土層は、表土の黒褐色土の下、黄色粘土、青灰色粘砂、植物層を成す黒褐色粘土と続き、約1.3m で湧水の著しい青灰色砂礫層へと至る。黒褐色粘土層からは近世の陶磁器片が数点出土した。地表下約1.5m まで掘り下げたが、湧水により発掘区壁が崩壊したため、写真撮影、断面実測ののち、同日中に埋め戻した。条間小路の痕跡は確認できなかった。 (立石堅志)

### 14. 平城京左京四條四坊十六坪

本調査は、奈良市三条宮前町39、40-5番地において実施した(株)クボタハウス届出のマンション建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元によると左京四條四坊十六坪に相当し、北には三条大路が西には九坪と十六坪の坪境小路が推定されている所である。また、左京四條四坊は、1979年に奈良市此瀬町で発見された太安萬侶墓誌によって明らかになった、太安萬侶の居住地である。調査は、大路及び坪境小路、十六坪内の様相を知るために、東西10m、南北20mの発掘区



発掘区の位置 1/7500

(面積200㎡)を設定し、奈良県教育委員会文化財保存課と奈良市教育委員会文化財課とが連携して行なった。調査期間は、昭和60年2月20日～3月7日までである。発掘区内の層序は、地表から約1.0m までは造成土があり、以下漆黒色粘質土、淡灰色粘質土、灰褐色粘質土と続き地表下約1.8m で黄褐色粘土の地山に達する。検出した遺構は、粘土採集を目的とした土壌を多数確認しただけで、条坊遺構及び建物跡を検出することはできなかった。 (奈良美穂)



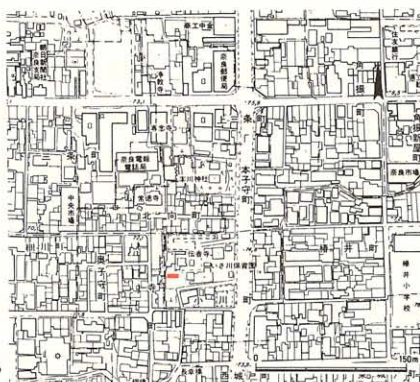
## 15. 平城京左京（外京）四條六坊七坪の調査

本調査は、奈良市小川町24番地で行った私立率川幼稚園の園舎新築に伴うその事前調査である。調査地は、筒井氏菩提寺として知られる伝香寺の境内でもあり、その遺構の有無の確認も調査目的のひとつとした。発掘区は約36㎡で、調査期間は、昭和59年8月30日から9月1日までである。

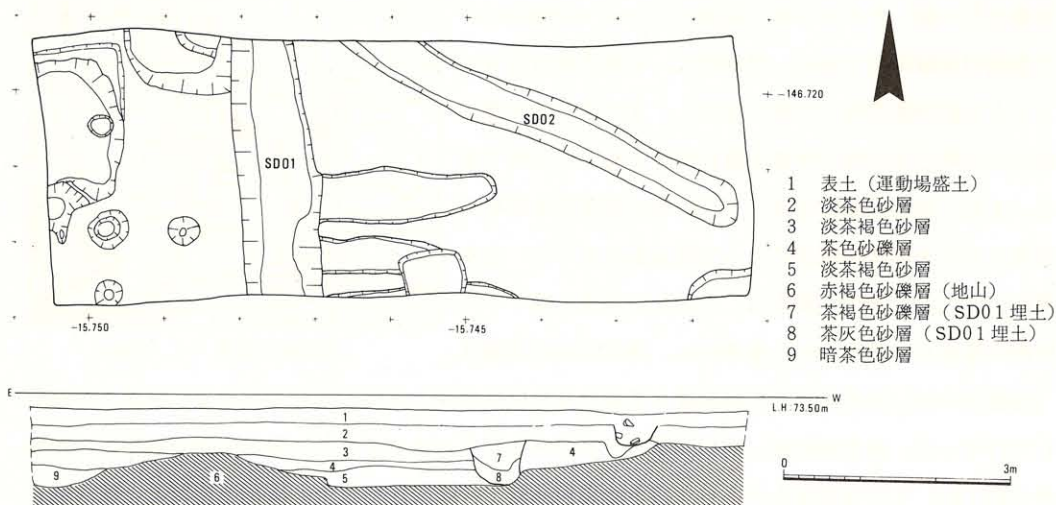
発掘区の基本的な層序は、表土（幼稚園運動場盛土）以下、淡茶色砂層、淡茶褐色砂層、赤褐色砂礫層であり、現地表面から約80cmで地山である赤褐色砂礫層となる。

赤褐色砂礫層の上面では、南北方向の溝SD01（幅約1m、深さ約60cm）と、西北から東南へ斜行する溝SD02（幅約70cm、深さ約30cm）の2条の溝の他、いくつかの土壌を検出した。円筒埴輪片がその埋土から出土した溝SD02を除き、その他は、近世から近代にかけてのもので、伝香寺に関する遺構や奈良時代の遺構は、まったく検出できなかった。また、溝SD02から出土した円筒埴輪は、外面をタテハケの後、連続的なヨコハケを全面に施すもので、コナベ古墳や、ウワナベ古墳のものと同手法的に共通し、5世紀にその時期が求められる。周辺では、調査地の西北約500mに開化天皇陵古墳（坂上山古墳）がある他には、古墳は知られておらず、溝の性格の検討を含めて、今後の調査に期待したい。

（森下恵介）



発掘区の位置 1 / 7500



検出遺構平面図・南壁堆積土層図 1 / 100

## 16. 平城京左京五条四坊四坪（五条大路）の調査

本調査は、奈良市大安寺町891番地の2において実施した大西耕司氏届出の住宅改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京五条四坊四坪の南辺に相当し、五条大路北側溝が推定される場所である。調査は、北側溝の確認を目的としたトレンチを設定したが、建物基礎部分を避けたため、東西3m、南北0.8m（発掘面積2.4㎡）と小規模なものとなった。調査期間は、昭和59年4月12日に実施した。

トレンチ内の堆積土層状態は以下のようなものであった。地表下約0.2mまでが茶褐色土、黄褐色土の造成土で、以下茶灰色土の旧耕土と続き、地表面から約0.6m下がったところで黄灰色砂礫土の地山に達する。この地山面で浅い土壌を検出したが、条坊遺構は検出することはできなかった。土壙からは、奈良時代の土師器、須恵器が若干出土した。

（篠原豊一）



発掘区の位置 1/7500

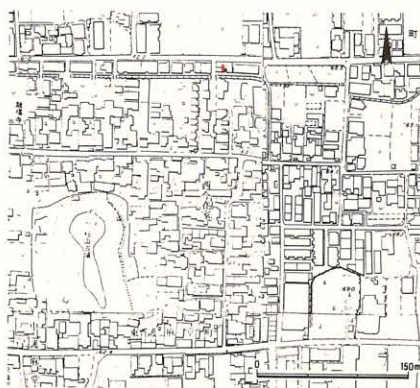
## 17. 平城京五条大路の調査

本調査は、奈良市大安寺町904番地の1において実施した大西武雄氏届出の倉庫改築に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元によると、左京六条四坊九坪の北側に相当し、五条大路の存在が予想される場所である。調査は、大路及び大路南側溝の確認を主目的として、東西2.5m、南北4.5m（面積11.25㎡）のトレンチを設定した。調査期間は昭和59年10月1日に実施し、同日中に埋め戻した。

トレンチ内の堆積土層状態は、地表下約1.4mまでが盛土で、以下青灰色砂と続く。青灰色砂を約0.2m掘り下げたところで湧水が著しくなり、トレンチの壁が崩れるなどしたために掘り下げを断念せざるを得なかった。検出した遺構及び出土遺物はない。

奈良市による昭和57年度の五条大路の調査でも、佐保川の氾濫のために条坊遺構を検出することはできなかった。今後の調査に期待したいところである。

（奈良美穂）



発掘区の位置 1/7500

## 18. 平城京左京五条一坊一・八坪の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市が市内柏木町8番地他の地内に計画した仮称奈良市立第18中学校建設工事に伴う事前の発掘調査である。調査対象地は、その面積が約30,000㎡あり、平城京条坊復元によると、左京五条一坊一坪の全域と二坪、七坪、八坪の一部に相当する。

発掘調査は、このうち、校舎の建設が予定され、坪の全域が含まれる一坪を中心に行ない、坪内の利用状況の把握に主目的をおいた。調査は、まず、昭和59年2月29日に調査地内の土層観察のための試掘調査を行なうことから始め、東西80m、南北46mの発掘区を一坪の東寄りから八坪にまたがる部分に設定した。表土排除を行なった後、同年3月21日から本格的に開始した。また、このうち、用地買収の完了を待って、同年5月には、発掘区を一坪を中心に大規模に拡張し、最終的には、総面積10,400㎡について発掘調査を行ない、昭和59年8月25日に終了することができた。調査で検出した一坪中央部の主要遺構の一部は、市建築課との協議の結果、校舎基礎の設計変更により、保存されることになった。



発掘区の位置 1/5000

## II 検出遺構

調査地の基本的な属序は、耕土、床土の下、マンガンが沈着した黄褐色砂質土（10～20cm）が堆積し、地表下約40cmで地山に達する。地山には、暗茶褐色砂質土と旧河道の氾濫によって生じたと考えられる黄灰色細砂とが互層になっている部分もある。また、発掘区北辺部及び西辺部には、多量の瓦を包含した、暗灰色粘質土の整地層がある。遺構は、地山である暗茶褐色砂質土上面で検出した。主な検出遺構は、道路1条、素掘り溝8条、柱列10条、掘立柱建物24棟、井戸3基、土壌などである。以下、遺構の概要について記す。

**SF01** Cトレンチで検出した七坪と八坪の坪境小路で、地山上面で検出した。路面には整地などの痕跡は認められなかった。路面幅は3.6～4.2mで、南北両側溝の両者心々間の距離は、4.9m～5.4mを測る。

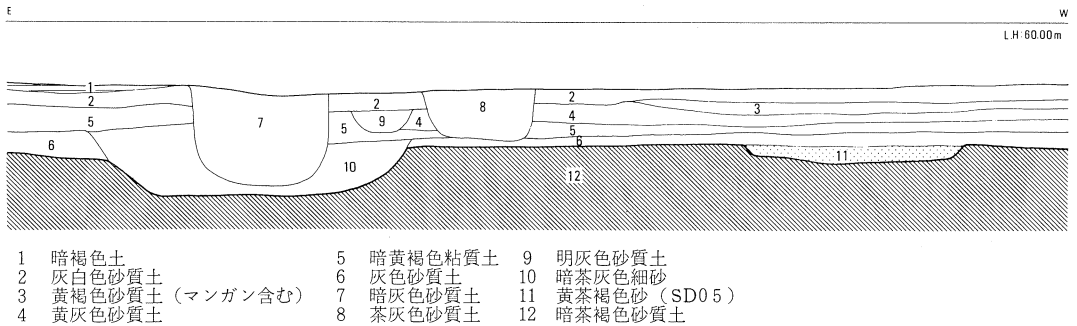
**SD02** Cトレンチ南端で検出した溝幅1.6m、検出面からの深さ約0.3mを測る。溝内には黄灰色粘質土と灰褐色粘質土が堆積する。奈良時代の土師器、須恵器片が少量出土した。

**SD03** SF01の南側溝。溝幅0.9～2.2m、検出面からの深さ約0.3mを測る。溝内には褐色粘土のブロックを含んだ暗灰色砂が堆積する。奈良時代の軒平瓦が1点、土師器片、須恵器片なども少量出土した。

**SD04** SF01の北側溝。SA10と重複して検出した。溝幅0.6～1.3m、検出面からの深さ0.2mを測る。溝内には暗褐色土が堆積する。奈良時代の土師器片、須恵器片が少量出土した。

**SD05** SD04と直交する素掘り溝。一坪と八坪の坪境小路の側溝であろうか。溝幅約1.3～1.8m、検出面からの深さ0.1mを測る。溝内は灰褐色粘質土が堆積する。奈良時代の軒丸瓦1点、土師器、須恵器、陶硯が出土した。

**SD06** SD05の東側で検出した南北方向の素掘り溝。溝幅0.3～0.5m、検出面からの深さ0.1mを測る。SD05との溝心々間距離は3.7mである。溝内は灰褐色粘質土が堆積する。奈良時代の土師器、須恵器片が出土した。



南壁堆積土層図 1/50

**SD07** 発掘区北辺部で検出した東西方向の素掘り溝。北辺部整地土上面から掘られたものである。溝幅 0.2～0.9 m，検出面からの深さ 0.2 m を測る。溝内からは，土師器，須恵器が出土した。

**SD08** 発掘区西辺で検出した南北方向の素掘り溝。西辺部の整地層上面から掘られたものである。全長 18.8 m，幅 0.6 m，検出面からの深さ 0.1 m を測る。奈良時代の須恵器壺 M が 1 点出土した。

**SD09** 発掘区中央で検出した東西方向の素掘り溝。全長 5.0 m，溝幅 0.2 m，検出面からの深さ 0.1 m を測る。奈良時代の軒丸瓦が 1 点出土した。

**SA10** SD04 と重複して検出した東西柱列。5 間分（9.5 m）を検出した。柱間は，ほぼ 1.9 m 等間である。主軸は国土方眼方位東に対し南偏する。

**SA11** 発掘区中央部で検出した 13 間（全長 31.2 m）の東西柱列。柱列のほぼ中央部は 6.0 m あき，門となる。柱間は，2.0～2.5 m と不揃いである。柱掘形は，0.5～0.9 m の平面方形を呈す。主軸は，国土方眼方位東に対し南偏する。

**SA12** SA11 の東端から南方へ曲がる 16 間（全長 38.0 m）の南北柱列。柱間は，2.0～2.5 m と不揃いである。柱掘形は，0.6～1.1 m の平面方形を呈し，南へ行くにしたがって大きくなっている。主軸は国土方眼方位北に対し西偏する。

**SA13** SA12 の南端から西方へ曲がる 14 間（全長 32.7 m）の東西柱列。柱列のほぼ中央部は 4.2 m あき，門となる。柱間は，1.8～2.3 m と不揃いである。主軸は，国土方眼方位東に対し南偏する。

**SA14** SA11 の西端から南方へ曲がる 10 間（全長 24.1 m）の南北柱列。柱間は，1.8～2.3 m と不揃いである。SA14 の南端の柱穴と SA13 の西端の柱穴との隔りは 14.3 m ある。北から 3 番目の柱穴は，近世の土壌で壊されている。主軸は，国土方眼方位北に対し西偏する。

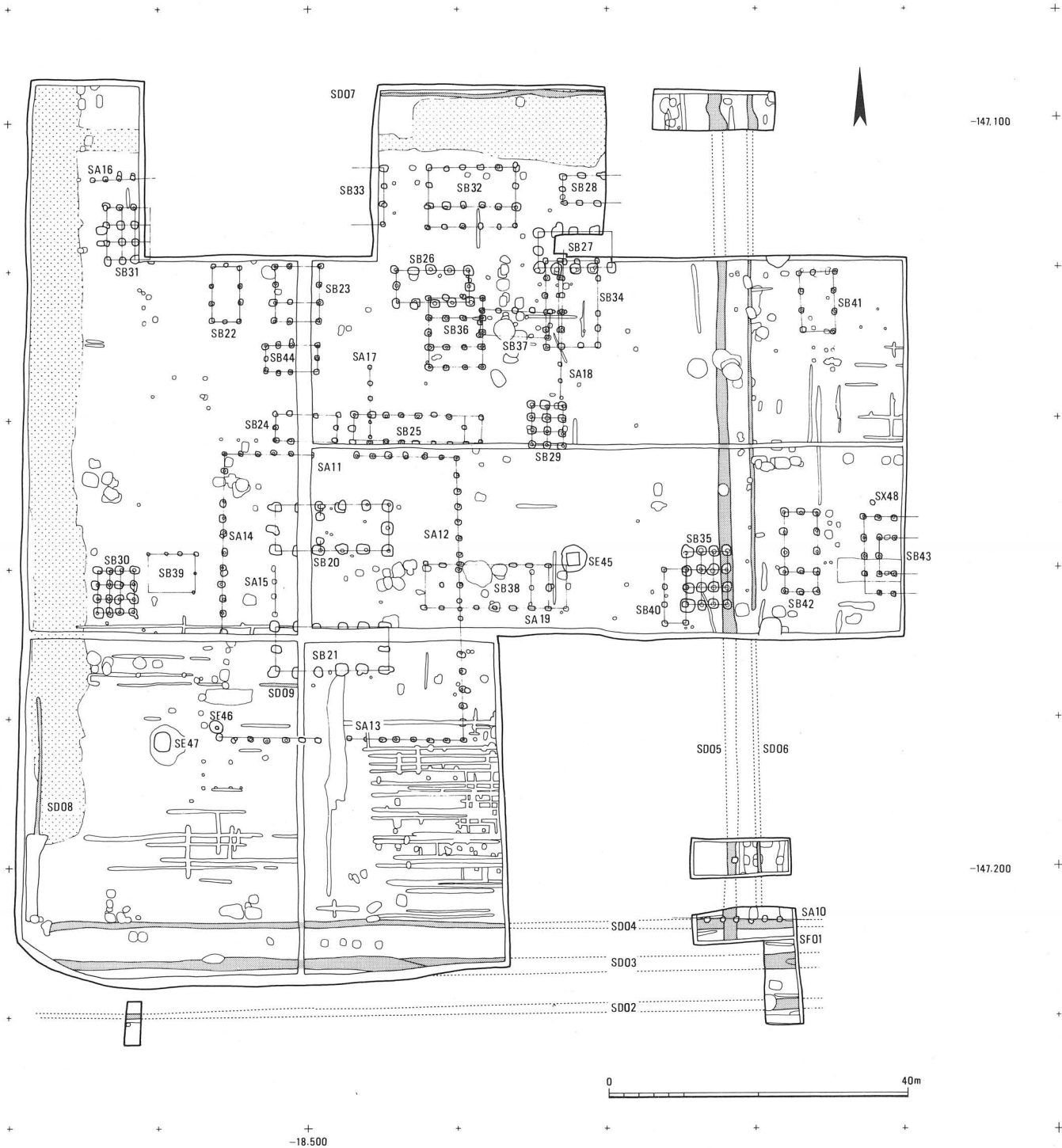
**SA15** SB19 と SB20 の間で検出した 3 間（全長 6.3 m）の南北柱列。柱筋は，SB19 と SB20 の西妻柱列を揃えている。柱間は，2.1 m 等間。主軸は国土方眼方位と一致する。

**SA16** 発掘区北西隅で検出した東西柱列。4 間分（18.1 m）を検出し，東側は発掘区外へのびる。柱間は，いずれも 1.8 m 等間である。主軸は国土方眼方位東に対し北偏する。

**SA17** SA11 の北側で検出した 5 間（全長 9.4 m）の南北柱列。柱間は，北から 2.2 - 2.1 - 3.0 - 2.1 m と不揃い。柱掘形は，いずれも小さく不整形である。主軸は国土方眼方位と一致する。

**SA18** SA17 の東側で検出した南北柱列。8 間分（18.4 m）を検出したが，北側は発掘区外へのびる。柱間は 2.2～2.4 m と不揃いである。主軸は国土方眼方位北に対し東偏する。

**SA19** SA12 の東側で検出した 2 間（全長 4.3 m）の南北柱列。柱間は，北から 2.0 - 2.3 m と不揃いである。柱掘形は，いずれも一辺約 0.3 m を測り，小さく不整形である。主軸は国土方眼方位と一致する。

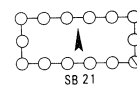


検出遺構平面図 1 / 800

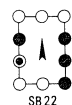
**SB 20** 発掘区中央で検出した桁行5間(15.0m)、梁行2間(6.0m)の東西棟建物。柱間は、桁行、梁行ともに3m等間である。西から3番目の柱筋に間仕切りの柱穴を設ける。主軸は国土方眼方位と一致する。



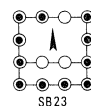
**SB 21** SB 20の南側で検出した桁行5間(15.0m)、梁行2間(6.0m)の東西棟建物。柱間は、桁行、梁行ともに3m等間である。SB 20と桁行の柱筋を揃える。南東隅の柱穴には、柱の抜きとり痕跡がみられた。主軸は国土方眼方位と一致する。



**SB 22** 発掘区北半部で検出した桁行3間(7.2m)、梁行2間(3.6m)の南北棟建物。柱間は、桁行2.4m、梁行1.8m等間である。4箇所の柱穴には、柱根が残存していた。主軸は国土方眼方位と一致する。



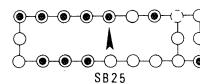
**SB 23** SB 22の東側で検出した桁行3間(5.7m)、梁行2間(4.8m)の東西棟建物で南に廂をもつ。柱間は、桁行1.9m、梁行2.4m等間である。廂の出は2.4m。主軸は国土方眼方位と一致する。



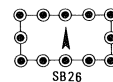
**SB 24** SB 20の北側で検出した桁行3間(8.2m)、梁行2間(3.2m)の東西棟建物。柱間は、桁行が西から2.2-3.0-3.0m、梁行が1.8m等間である。主軸は国土方眼方位東に対し南偏する。



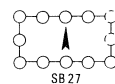
**SB 25** SB 24の東側で検出した桁行7間(15.0m)、梁行2間(3.4m)の東西棟建物で東に廂をもつ。柱間は、桁行が西から2.2-2.1-2.1-2.1-2.2-2.1-2.2mとやや不揃い。梁行は1.7m等間。廂の出は、2.1m。主軸は国土方眼方位東に対して南偏する。



**SB 26** SB 23の東側で検出した桁行4間(9.6m)、梁行2間(4.2m)の東西棟建物。柱間は、桁行が2.4m、梁行が2.1m等間。柱穴は一辺が約1.2mの方形掘形をもち、4柱穴には柱根が残存した。主軸は国土方眼方位と一致する。



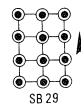
**SB 27** SB 26の東側で検出した桁行4間(9.6m)、梁行2間(4.8m)の東西棟建物。柱間は、桁行・梁行ともに2.4m等間である。主軸は国土方眼方位と一致する。



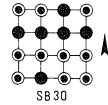
**SB 28** SB 27の北側で検出した桁行2間(4.8m)以上、梁行2間(3.6m)の東西棟建物。柱間は、桁行が2.4m、梁行が1.8m等間である。主軸は国土方眼方位と一致する。



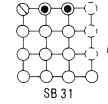
**SB 29** SA 18の南側で検出した桁行3間(5.2m)、梁行2間(4.2m)の総柱建物。柱間は、桁行がほぼ1.7m等間、梁行は2.1m等間である。主軸は国土方眼方位と一致する。



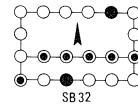
**SB30** 発掘区西端で検出した南北3間(5.6m)、東西3間(4.8m)の総柱建物。柱間は、南北柱列が北から1.9-1.9-1.8m、東西柱列が西から1.5-1.5-1.8mと不揃いである。6柱穴には柱根が残存していた。主軸は国土方眼方位と一致する。



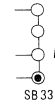
**SB31** 発掘区北西部で検出した南北3間(7.2m)、東西3間(5.8m)の総柱建物。柱間は、南北が2.4m等間、東西が2.0-1.8-2.2m。主軸は国土方眼方位と一致する。



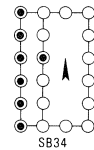
**SB32** SB28の西側で検出した桁行5間(11.7m)、梁行2間(5.2m)の東西棟建物で南に廂をもつ。柱間は、桁行が西から2.4-2.1-2.4-2.4-2.4m、梁行が北から2.4-2.8mと不揃い。廂の出は2.7m。2柱穴に柱根が残存していた。主軸は国土方眼方位と一致する。



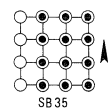
**SB33** SB32の東側で検出した梁行3間(7.6m)の東西棟建物で桁行は発掘区外へのびる。柱間は、北から2.4-2.4-2.6m。SB32と梁行の柱筋をほぼ揃えており、南に廂をもつ同規模の建物になるとも考えられる。主軸は国土方眼方位と一致する。



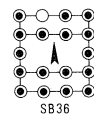
**SB34** SA18と重複して検出した桁行5間(11.1m)、梁行2間(5.1m)の東西棟建物で西に廂をもつ。柱間は、桁行が北から2.0~2.4m、梁行は西から2.6-2.4mと不揃い。廂の出は、2.1m。重複関係からSA17よりも古いことがわかる。主軸は国土方眼方位と一致する。



**SB35** SD05と重複して検出した南北3間(7.2m)、東西3間(6.0m)の総柱建物。柱間は、南北が2.4m等間、東西が西から2.4-1.8-1.8m。重複関係からSD05よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位と一致する。



**SB36** SB26と重複して検出した桁行3間(6.9m)、梁行2間(3.3m)の東西棟建物で北と南に廂をもつ。柱間は、桁行が2.3m等間、梁行が2.0m等間である。廂の出は、北が2.8m、南が2.7m。3柱穴には柱根が残っていた。重複関係からSB26よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位と一致する。



**SB37** SB36と重複して検出した桁行4間(9.0m)、梁行2間(3.3m)の東西棟建物。柱間は、桁行が西から2.2-2.1-2.3-2.4m、梁行は北から1.6-1.7mと不揃いである。重複関係からSB36よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位東に対し南偏する。



※建物模式図凡例 ●柱根残存 ●柱根跡を確認 ○掘形のみ確認 ○抜き取り ○推定



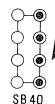
SB38 発掘区中央部で検出した桁行5間(12.0m)、梁行2間(5.7m)の東西棟建物で東と西に廂をもつ。柱間は、桁行が2.3~2.5m、梁行が北から2.8-2.9mと不揃い。廂の出は、東が2.2m、西が2.4m。柱掘形は、平面小判形を呈している。主軸は国土方眼方位と一致する。



SB39 SB30の東側で検出した桁行3間(6.4m)、梁行2間(5.2m)の東西棟建物。柱間は、桁行が西から2.4-1.8-2.2m、梁行は2.6m等間。柱掘形はいずれも小さい。主軸は国土方眼方位と一致する。



SB40 SB35と重複して検出した桁行3間(7.2m)、梁行1間(2.9m)の南北棟建物。柱間は、桁行が2.4m等間である。重複関係からSB35よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位と一致する。



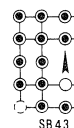
SB41 発掘区東半部北辺で検出した桁行3間(8.1m)、梁行2間(4.8m)の南北棟建物。柱間は、桁行が2.7m等間、梁行は西から1.9-2.9mと不揃い。2柱穴には柱根が残存していた。主軸は国土方眼方位北に対し西偏する。



SB42 SB35の東側で検出した桁行4間(10.5m)、梁行2間(4.2m)の南北棟建物で北から4番目の柱筋に間仕切りの柱穴を設ける。柱間は、桁行が2.4~2.7m、梁行が2.1m等間。主軸は国土方眼方位と一致する。



SB43 SB42の東側で検出した桁行1間(2.1m)以上、梁行2間(4.8m)の東西棟建物で四面に廂をもつと考えられる。東側は発掘区外へのびる。柱間は、梁行が2.4m等間。廂の出は、北が2.7m、西が2.1m、南が2.7m。柱掘形はいずれも小さい。主軸は国土方眼方位と一致する。



SB44 SB23の南側で検出した桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.5m)の東西棟建物。柱間は、桁行が1.65~1.8m、梁行が北から1.7-1.8mと不揃いである。主軸は国土方眼方位と一致する。



建物	棟方向	規模・(廂)	梁行m(尺)	桁行m(尺)	廂m(尺)	建物	棟方向	規模・(廂)	梁行m(尺)	桁行m(尺)	廂(尺)
S B20	東西	2×5	6.0(20)	15.0(50)		S B33	東西	3×1間以上	7.6(25)		
S B21	東西	2×5	6.0(20)	15.0(50)		S B34	東西	2×5(西)	5.1(17)	11.1(37)	2.1(7)
S B22	南北	2×3	3.6(12)	7.2(24)		S B35	南北	3×3	6.0(20)	7.2(24)	
S B23	東西	2×3(南)	4.8(16)	5.7(19)	2.4(8)	S B36	東西	2×3(北・南)	4.0(13)	6.9(23)	北2.8(9) 南2.7(9)
S B24	東西	2×4	3.2(11)	8.2(27)		S B37	東西	2×4	3.3(11)	9.0(30)	東2.2(7) 西2.4(8)
S B25	東西	2×7(東)	3.4(11)	15.0(50)	2.1(7)	S B38	東西	2×5(東・西)	5.7(19)	12.0(48)	
S B26	東西	2×4	4.2(14)	9.6(32)		S B39	東西	2×3	5.2(17)	6.4(21)	
S B27	東西	2×4	4.8(16)	9.6(32)		S B40	南北	1×3	2.9(10)	7.2(24)	
S B28	東西	2×2以上	3.6(12)	4.8~(16)		S B41	南北	2×3	4.8(16)	8.1(27)	
S B29	南北	2×3	4.2(14)	5.2(17)		S B42	南北	2×4	4.2(14)	10.5(35)	
S B30	南北	3×3	4.8(16)	5.6(19)		S B43	東西	2×1間以上(四面)	4.8(16)	2.1以上(7)	南・北2.7(9) 西2.1(7)
S B31	南北	3×3	5.8(19)	7.2(24)		S B44	東西	2×4	3.5(12)	7.2(24)	
S B32	東西	2×5	5.2(17)	11.7(39)	2.7(9)						

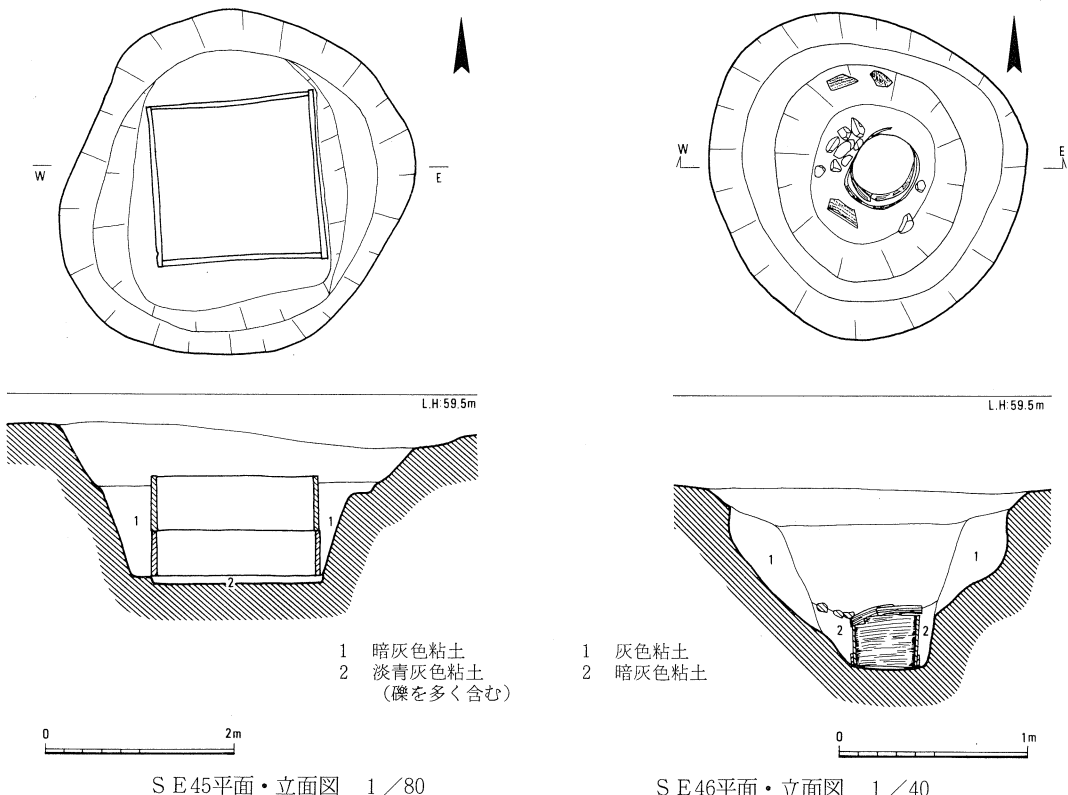
検出建物一覧

SE 45 発掘区中央部で検出した井戸。掘形は、東西 3.7 m、南北 3.6 m の平面円形を呈し、検出面からの深さ 1.7 m を測る。掘形中央には内法一辺 1.6 m の井龍組井戸枠が据えられており、平城京内では最大級のものである。下から二段分を確認した。枠板は、長さ 160 ~ 178 cm、幅 53 ~ 56 cm、厚さ約 5 cm を測り、接合部は F 字状に相欠きし、組み合わせの仕口としている。枠板の上下の組み合わせは、下段に上段を重ね合わせたもので、枠板の上下には柄穴は穿たれない。井戸枠内からは、軒丸瓦・軒平瓦、奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

SE 46 発掘区南半部で検出した井戸。掘形は、東西 1.6 m、南北 1.7 m の平面方形を呈し、検出面からの深さ約 1.0 m を測る。井戸底には、曲物が残存していたが上部の構造は不明である。曲物の下端にはタガが巻かれ補強されていた。曲物寸法は、外径 35 cm、高さ 26 cm、厚さ 0.8 cm を測る。井戸枠内からは、斎串、軒丸瓦、奈良時代の土師器、須恵器が少量出土した。

SE 47 SE 46 の南西で検出した井戸。掘形は、東西 2.4 m、南北 2.6 m の平面方形を呈し、検出面からの深さ 1.2 m を測る。井戸枠は抜き取られて残存しない。奈良時代の土師器、須恵器が少量出土した。

SX 48 発掘区東端、SB 43 の北側で検出した土壌。東西 0.7 m、南北 0.6 m の平面円形を呈し、検出面からの深さ 0.3 m を測る。壙内には、地鎮具あるいは胞衣を入れたと考えられる須恵器の壺に蓋をした状態で埋置されていた。  
(森下恵介・奈良美穂)



SE 45 平面・立面図 1/80

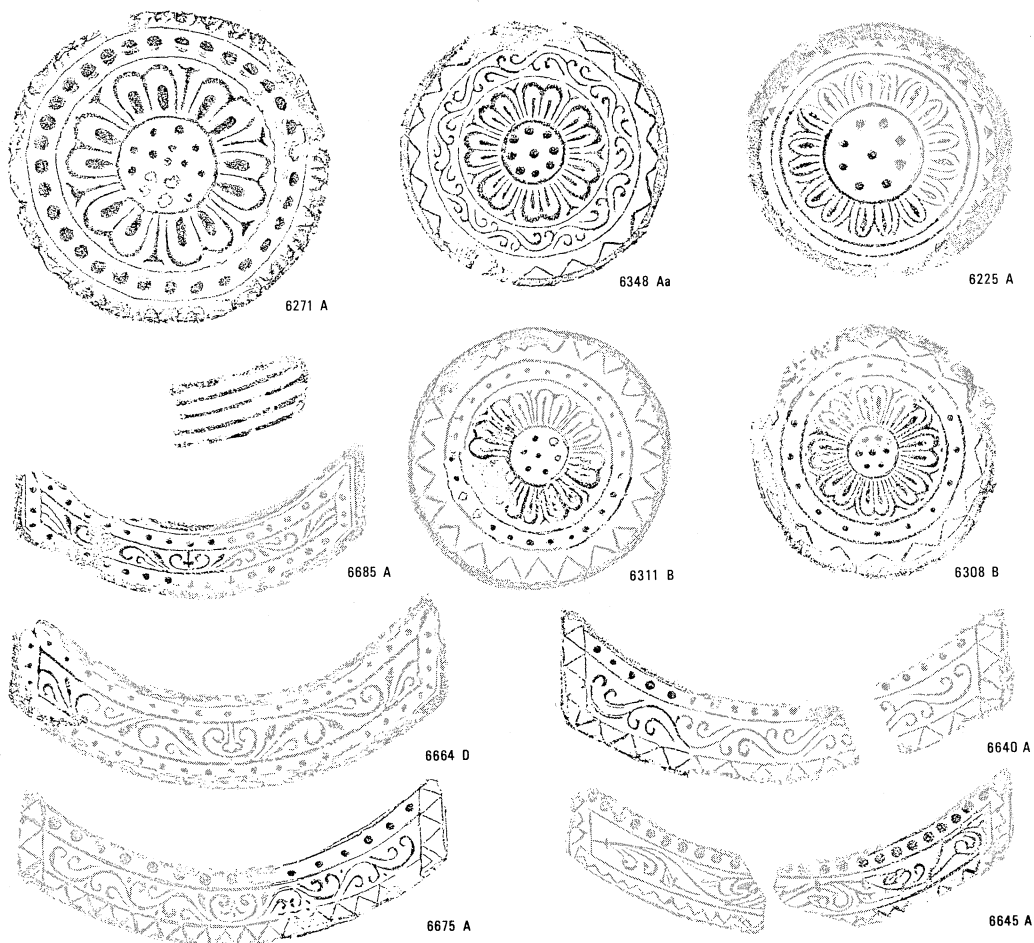
SE 46 平面・立面図 1/40

### Ⅲ 出土遺物

瓦類 瓦は一坪の西辺部を中心に出土したが、出土量は少ない。軒瓦は軒丸瓦18点と軒平瓦25点があるのみで、発掘面積1 aあたりの出土点数に勘算すると0.4個にすぎない。

軒丸瓦は平城宮6271A（4点）、6225A（1点）、6308B（2点）、6311B（1点）、6348Aa（5点）の各型式が出土し、他に型式不明のもの5点がある。このうち6271Aの2点には瓦当裏面に布圧痕が残る。軒平瓦は平城宮6640A（7点）、6645A（4点）、6664D（1点）、6675A（6点）、6685A（3点）の各型式と五重弧文軒平瓦（1点）が出土し、他に型式不明のもの3点がある。このうち6640Aには段顎のものと曲線顎のものの両者がみられる。

また、遺構から出土したものは次のとおりである。SD03（6640A 1点）、SD05（6308B 1点、6675A 1点、6685A 2点）、SE45掘形（6640A 2点）・同枠内（6271A 2点、6348Aa 3点、6645A 1点）、SE46枠内（6271A 1点）。  
(中井 公)



出土軒瓦 1 / 5

**土器類** SD04・05・07, SE45・46・47及び遺物包含層などから奈良時代の土師器, 須恵器が出土した。また, 発掘区南寄りで検出したいくつかの土壌からは弥生時代の土器片も出土している。発掘面積に比して全体の出土量は極めて少ない。しかしながらSE45から出土したものは量的に多く, 時期的にもまとまりがあるので, 以下SE45出土土器を中心に記述する。

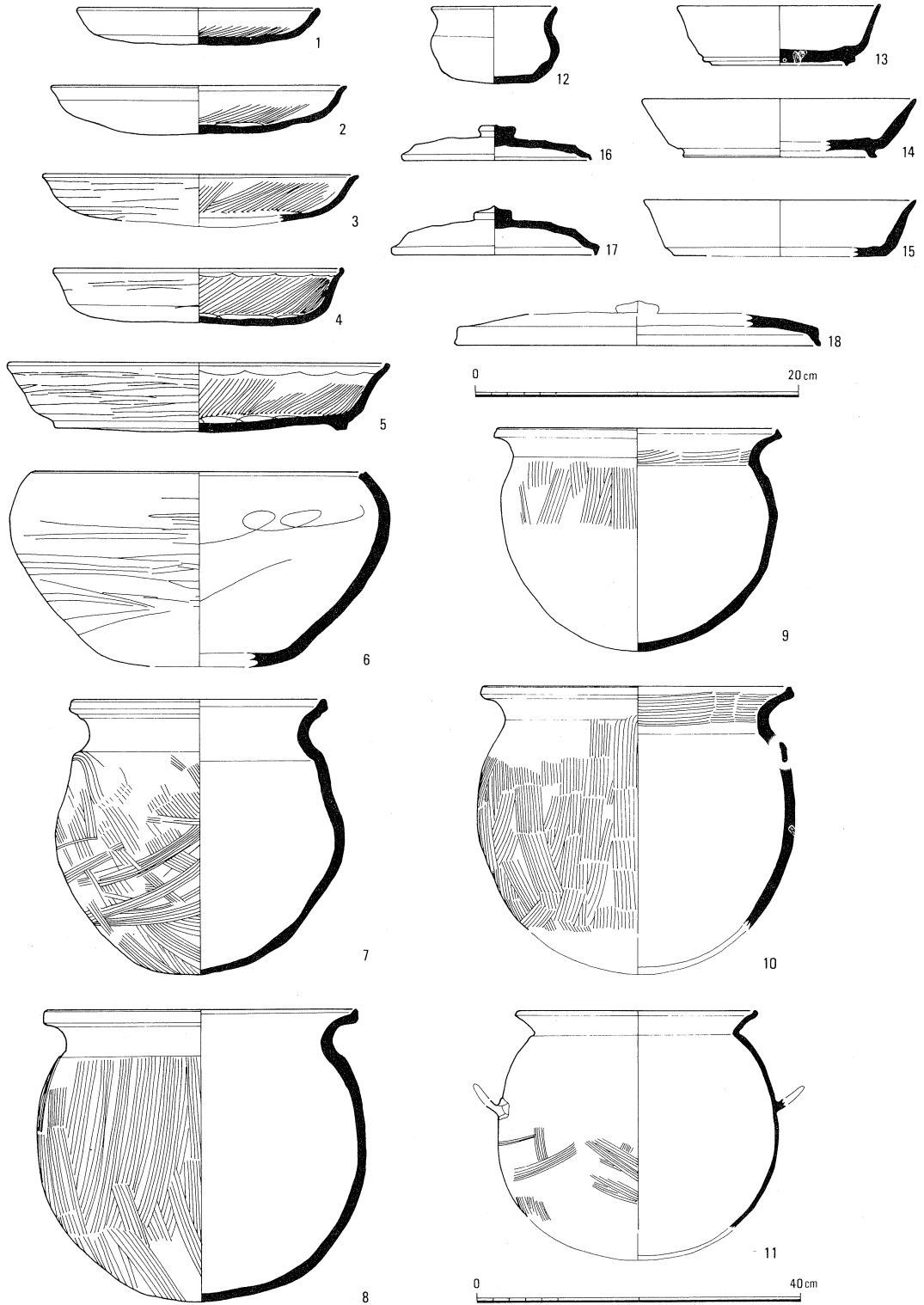
**SE45出土土器** (1~25) 土師器, 須恵器がある。時期的には平城宮土器Ⅲに属すが, 一部に平城宮Ⅱのものをまじえている。土師器と須恵器の割合は, 52:48で両者はほぼ等しい。器種構成は左下の表に示したとおりである。このうち, 食器の占める割合が少なく, 50%近くは貯蔵器が占めている点が注目される。

**土師器** 杯A, 杯B, 杯C, 皿A, 皿B, 鉢A, 鉢B, 高杯, 壺A, 壺C, 甕A, 甕B, 甕Cがある。杯A(4)は, 底部外面は未調整のまま, 口縁部内外面を横なでしたのちに口縁部外面だけにへら磨きを施すa<sub>1</sub>手法で調整する。へら磨きの間隔は粗い。口縁部内面にはラセン状暗文+一段の斜放射状暗文+連弧状暗文を施す。この他に, a<sub>1</sub>手法で調整したものが2点ある。杯Bは, 1点出土したが, 器面の磨滅が著しく調整は不明である。杯C(2・3)は, 丸底ふうの平底と内彎ぎみに立ち上がる口縁部からなり, 口縁部先端が内傾するのを特徴としている。2は, 底部外面をへら削りし, 口縁部内外面を横なでするb<sub>0</sub>手法で調整している。内面には, 一段の斜放射状暗文を施している。3は, 底部外面は未調整のまま, 口縁部だけを横なでしたのちに全面にへら磨きを施すa<sub>3</sub>手法で調整する。内面には, 一段の斜放射状暗文を施している。皿A(1)は, 底部外面は未調整で, 口縁部だけを横なでするa<sub>0</sub>手法で調整する。内面には一段の斜放射状暗文を施す。完形である。この他に, a<sub>0</sub>手法で調整したものが1点ある。皿B(5)は, a<sub>3</sub>手法で調整する。内面にはラセン状暗文+一段の斜放射状暗文+連弧状暗文を施している。高杯は, 脚部だけが出土した。鉢Aは, 胴部外面に粗いへら磨きを施している。器面の剥離が著しい。鉢B(6)は, 平底に近い底部と内彎ぎみに立ちあがる口縁部からなる。口縁部外面には粗いへら磨きを, 口縁部内面にはラセン状暗文を施している。壺Aは, 肩の張った胴部と直立する短い口縁部からなるものである。口縁部の破片が1点ある。壺C(12)は, やや丸味をおびた胴部に外反する

土師器	個体	合計	%
杯 A	3	} 6	13.7
杯 B	1		
杯 C	2		
皿 A	2	} 3	
皿 B	1		
高杯	1	1	
壺 A	1	} 3	38.4
壺 C	2		
鉢 A	1	} 2	
鉢 B	1		
甕 A	15	} 23	
甕 B	7		
甕 C	1		
小計	38	38	52.1
須恵器	個体	合計	%
杯 A	3	} 7	9.6
杯 B	2		
杯 B 蓋	2		
盤	1	1	
壺 B	2	2	38.4
甕 A	19	} 25	
甕 B	4		
甕 C	2		
小計	35	35	48.0
総計	73	73	100.1

	用途	土師器	須恵器	計
SE45	食器	10 (13.7)	7 (9.6)	17 (23.3)
	貯蔵	5 (6.8)	28 (38.4)	33 (45.2)
	煮炊	23 (31.5)	0	23 (31.5)
	合計	38 (52.1)	35 (47.9)	73 (100)

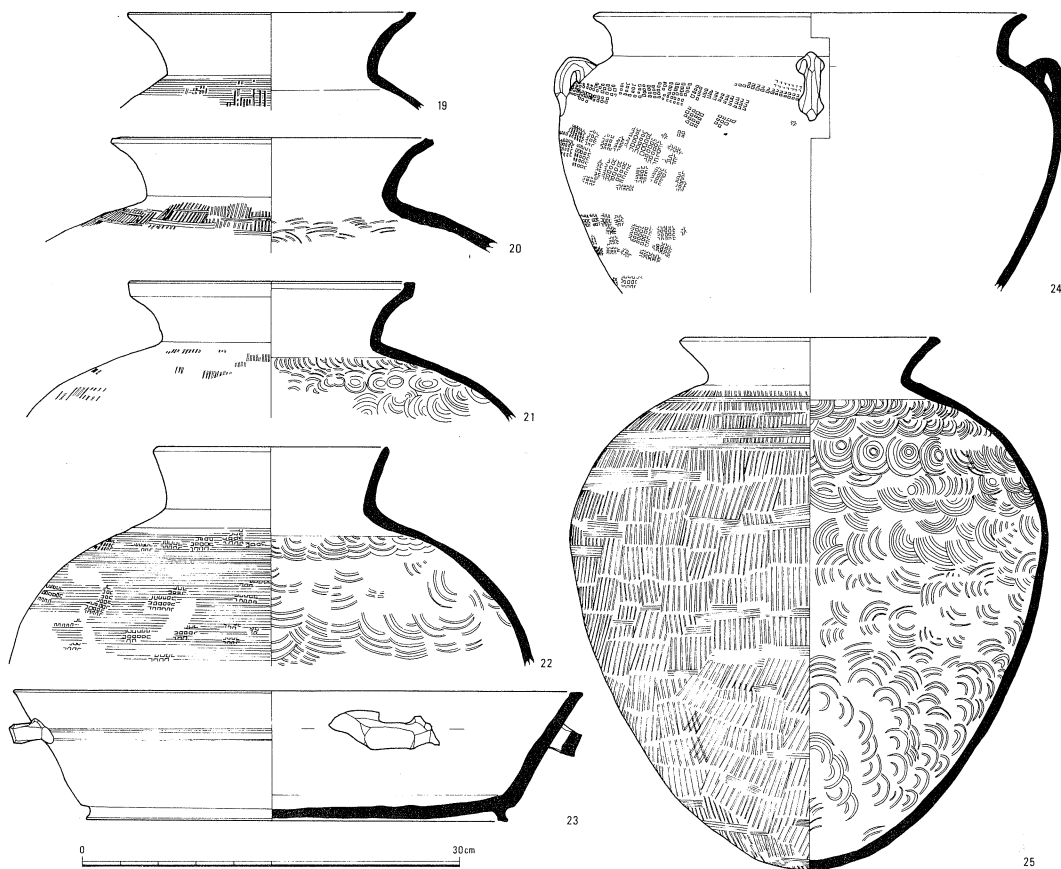
出土土器個体数表



S E45出土土器(1) 1 / 4

口縁部からなる。口縁部だけを強く横なでし、胴部は調整をしない。完形である。この他、口縁部の破片が1点ある。甕A(7~10)は、半球に近い胴部と強く外反する口縁部からなる。いずれも胴部外面にハケ目調整をしている。7は斜め方向に、8~10は縦方向に施す。9・10は、口縁部内面にも横方向のハケ目調整をする。この他、口縁部の破片が11点ある。甕B(11)は、半球状の胴部に一對の把手がついたものである。胴部外面の磨滅が著しく胴部下半に斜め方向のハケ目が残るだけである。この他、6点あるがいずれも器面の磨滅が著しい。甕C(図版60-28)は、丸底の底部と長い胴部、斜め上に開く口縁部からなる。胴部外面は、縦方向のハケ目で調整する。底部外面には、粗いヘラ削りで調整する。胴部外面には籠目のあとが残っている。

**須恵器** 杯A, 杯B, 杯B蓋, 皿B蓋, 盤A, 甕A, 甕B, 甕Cがある。杯A(15)は、平底の底部と斜め方向に開く口縁部からなる。底部外面をロクロ削りし、口縁部内外面はロクロナデ調整をする。この他に、破片が2点あるがいずれもロクロナデ調整で仕上げている。杯B(13・14)は、杯Aの形態は高台をつけたものである。13は、口縁部内外面をロクロナデ調整し、底部外面はヘラキリしたのちナデを加えて調整している。14は、全面ロクロナデ調整をする。杯B蓋(16・



S E 45出土土器(2) 1 / 6

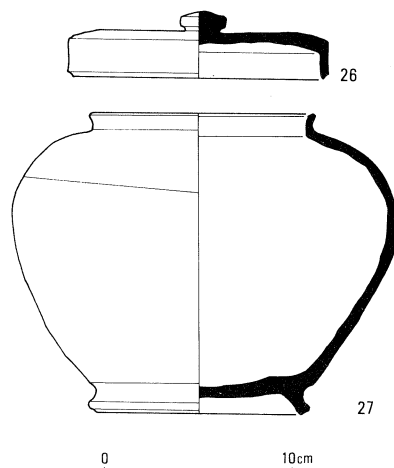
17) は、いずれもA形態に属すもので、屈曲している縁部が特徴である。内外面ともにロクロナデ調整をしている。いずれも完形である。皿B蓋(18)は、平坦な頂部と直立ぎみに折れ曲がる縁部からなる。縁部内外面ともにロクロナデ調整をする。盤A(23)は、平坦な底部に高台を付したもので、外傾する長い口縁部をもつ。口縁部上半には半環状の把手が一对つく。内面には漆が付着しており、漆を入れる容器として用いられたとも考えられる。底部外面の叩き及び底部内面の同心円文をナデ調整で消している。底部外面には「大」と小さく墨書きされている。壺Bは平底で斜め上に立ち上がる体部と、比較的平坦な肩と短い直立する口縁部からなる。口縁部の破片が2点ある。甕A(20・21・25)は、卵形の体部に外反する口縁部をつけたものである。20・25は、胴部外面に縦方向の叩き目の上に、カキ目調整を加えている。21は、縦方向の叩き目の上からナデ調整をしている。この他に、口縁部の破片が16点ある。甕B(19・22)は、卵形の体部に内彎ぎみに立ちあがる口縁部からなる。19は、縦方向の叩き目の上に、カキ目調整を加えている。22は、格子状叩き目の上からカキ目調整を加える。この他、口縁部の破片が2点ある。甕C(24)は、肩の張った胴部と短い口縁部からなり、肩部には四耳を付す。胴部外面には、格子目状の叩きの上からナデ調整を加える。内面は、ナデ調整により、同心円文を消している。

**SX48出土土器(26・27) 須恵器壺A, 壺A蓋が出土した。**

壺A(27)は、平底で斜め上に立ちあがる体部と、比較的平坦な肩部と短い口縁部からなる。底部には高台がつく。肩部と口縁部との境は明瞭ではなく、にぶい稜をなす。いわゆる「葉壺」と呼ばれているものである。胴部外面は、ロクロヘラ削りをし、口縁部内外面をロクロナデ調整している。壺A蓋(26)は、平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなる。頂部には扁平なボタン状のつまみがつく。頂部外面をロクロヘラ削りし、縁部内外面をロクロナデ調整をする。

**金属製品** 金属製品には、佐波理の鏡、青銅製の箸がそれぞれ1点ある。

佐波理鏡(図版60-29)は、底部だけが残存し、口縁部を欠く。高台のつくタイプのものである。底部外面には、ロクロ痕跡がみられる。器厚は約0.15cm測る。発掘区北半部の遺物包含層から出土した。青銅製の箸(図版60-30)は、全長21.8cm、直径0.25cmを測り、両端を丸くおさめた棒状のもので、完形を保つ。重さは11.7gを量る。表面はていねいに研磨されており、淡黄緑色の光沢を放っている。片方の端部は、もう一方のそれと比べるとかなり磨滅し、使用した痕跡かとも考えられる。発掘区北辺部の整地層から出土した。宮・京では初例である。



S X 48出土土器 1 / 4

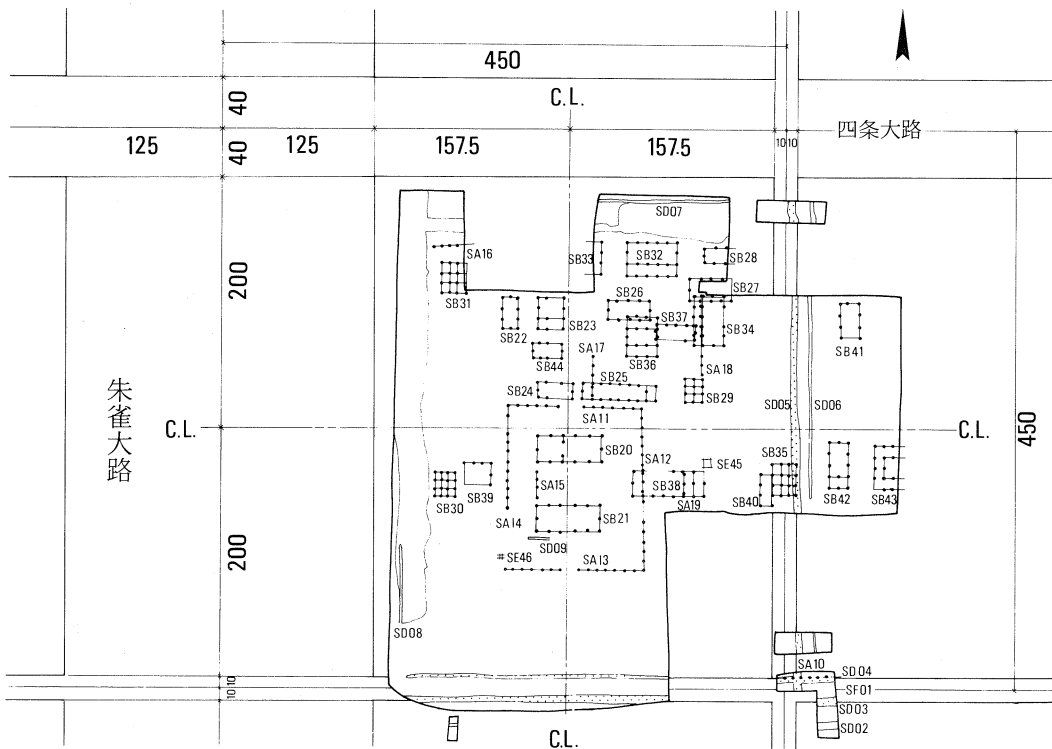
#### IV ま と め

今回の調査では、左京五条一坊一坪で約9割、八坪では約1割の面積を発掘し、一坪では全体の利用状況をうかがう上で貴重な資料を得ることができた。ここでは、既述の調査成果をもとに、一坪の遺構を中心に若干のまとめを行ない、今後の調査研究の資料としたい。

##### 1. 占 地

一坪は、西が朱雀大路、北は四条大路に面し、東と南はそれぞれの坪境小路に、八坪は、北が四条大路に面し、残る三方はそれぞれの坪境小路に接していると考えられる。調査地周辺の遺存地割からも大路、小路などの条坊痕跡をたどることができる。そこで、検出した条坊関係の遺構が平城京の条坊の中でどのように位置づけられるかを検討したのちに、一坪で検出した建物群が坪内で占める位置について考えてみる。

まず、七・八坪の坪境小路について検討してみよう。SF01の路心は、平城宮朱雀門心から南へ1218.01mの位置にある。この値を朱雀大路で確認している条坊方位の振れN0°15'41"Wで修正すると1,218.678mの数値が求められる。ところで、朱雀門心から五条一坊七・八坪の坪境小



一坪の占地概念図（単位は天平尺）



路心までの造営計画距離は4130尺〔80尺+3600尺（2条幅）+ 450尺（1坪幅）〕であり、南北距離 1218.678 mを4130尺で除すと0.2950 mの単位尺を得る。従来の条坪関係遺構の調査で確認している造営基準尺は、0.2950～0.2960 mの範囲に落ちつく傾向にあることからみて、今回得た単位尺も適当な数値といえよう。このことから、SF01は、七・八坪の坪境小路であると裏づけられる。次に、一・八坪の坪境小路について検討する。一・八坪の坪境小路に想定される付近にSD05・06の溝を検出した。しかし、両者の溝心々間距離は3.7 mしかなく、この間を一・八坪の坪境小路とみるには、従来の調査で検出されている小路の幅員と比べると狭く妥当とは言えない。ところで、左京八条一坊三・六坪の調査では、三・六坪の坪境小路の東側溝が検出されている。この側溝を条坊方位の振れを考慮して北方へ延長すると、今回検出した溝SD05に続くことがわかった。今仮に、SD05を東側溝と考えると、当然SD05の両側には西側溝が存在するはずである。だが、西側溝に相当する溝は検出できず、削平されてしまったとも考えられる。あるいは、一坪は、周辺の条坊に規制されているため、小路をつくらず、条坊計画線上よりやや東、つまりSD05・06間に坪を区間する施設が存在していた可能性も考えられる。

次に、一坪で検出した中心的建物が坪内で占める位置について検討してみよう。一坪の中心的建物であるSB20・21は、同規模の建物であることは既述したとおりである。SB20の南北心は、 $X = -147154.800$  m、SB21の南北心は $X = -147171.000$  mのところであり、東西心は両者とも $Y = -18497.200$  mにある。まず、建物東西心が一坪で占める位置について考えてみる。計算による朱雀大路と小路の心々間を基準とした場合の坪の中軸は、推定朱雀大路心から東へ225尺（1坪の $\frac{1}{2}$ 幅）のところとなる。SB20・21の東西心は、推定朱雀大路心から東へ284尺（83.816 m）に位置しており、道路心々間の中軸とは大きく異なり、少なくとも道路心々間を基準として配置されたものではないことがわかる。では、側溝についてはどうであろうか。朱雀大路の幅員は両側溝心々間で250尺あることが知られており、ここでもその成果を採用する。計算による溝心々間の坪の中軸は、推定朱雀大路東側溝から東へ157.5尺のところとなる。一方SB20・21の東西心までは、159尺（46.905 m）を測り、坪の中軸線とほぼ一致することがわかった。つぎに建物南北心が一坪で占める位置についてみる。先述のとおりSB20・21は溝心々間で割りつけられた公算が大きいので、南北心においても、溝心々間による中軸を想定した。四条大路の幅員を80尺と仮定した場合、坪境小路北側溝心から北へ200尺（59.0 m）が中軸となり、その座標値は $X = -147148.780$  mである。この数値は、SB20の北側柱列とほぼ一致することがわかった。このように一坪の中心的建物は、側溝を基準として中軸を決め配置されていたようである。二棟をとり囲む塀は、その主軸は国土方眼方位とも一致せず、柱間寸法にもばらつきがめだち、さほどの規格性はうかがえない。だが、SA11・13の中央付近に開く門は、ほぼ坪の中軸にあわせている。またSA12・14は、朱雀大路東側溝心から105尺間隔で配置されており、この距離は、計算による側溝心々間距離（315尺）の3等分に等しいことを付け加えておく。

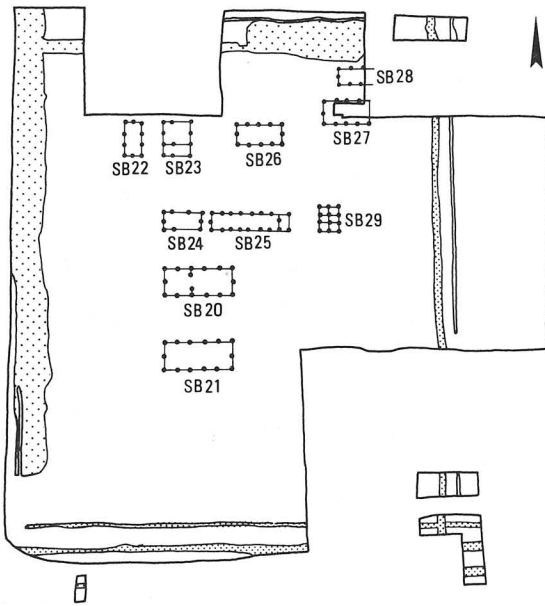
## 2. 時期区分

調査によって検出した一坪の遺構を時期的に分類すると、建物の重複関係、配置関係の検討によって、大きくⅡ期の変遷があり、さらにⅠ期はA・Bの2時期に細分できる。

**Ⅰ期-A** 建物SB20～29、溝SD05が属す。同規模の中心的建物二棟を南北に並列させ、その北側には比較的規模の小さい建物が南北に配される。先にもふれたように、SB20・21は、坪の中軸に建物の東西心をおき、またSB20は、坪の南北心にその北側柱列を揃えることから、二棟の建物は前殿・後殿として一坪の中心的建物であったことがうかがえる。建物SB20・21は、梁行の柱筋が揃えられ、建物心々間は16.2m(55尺)を測る。この北側には、建物SB22～29などの比較的小さい建物が、ほぼ南北二列に並んで配されている。このうち、SB23・24の西妻柱列は、SB20・21の西妻柱列と揃えられており、SB22・23・26はそれぞれの北側柱列を揃え、なおかつこの柱列とSB27の南側柱列をも揃えている。また、SB24・25及び倉と考えられる総柱建物SB29もその東西の柱筋を揃えて建てられている。Ⅰ期-Aの年代を直接示す手懸りはないが、Ⅰ期-Bとの関係から奈良時代中頃以前と考えられる。

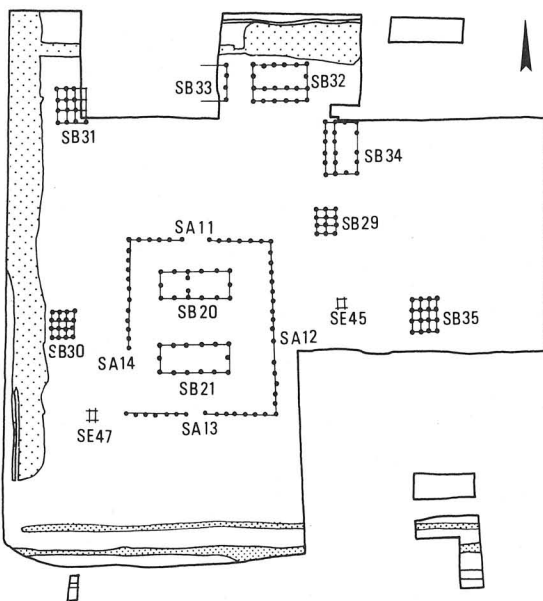
**Ⅰ期-B** 建物SB20・21・29は引き続き存続し、建物SB30～35、塀SA11～15、井戸SE45が属す。SD05が廃絶され、一坪以上の利用へと移り変わる。中心的建物を塀でとり囲み、小さい建物はとりこわされ、

A期



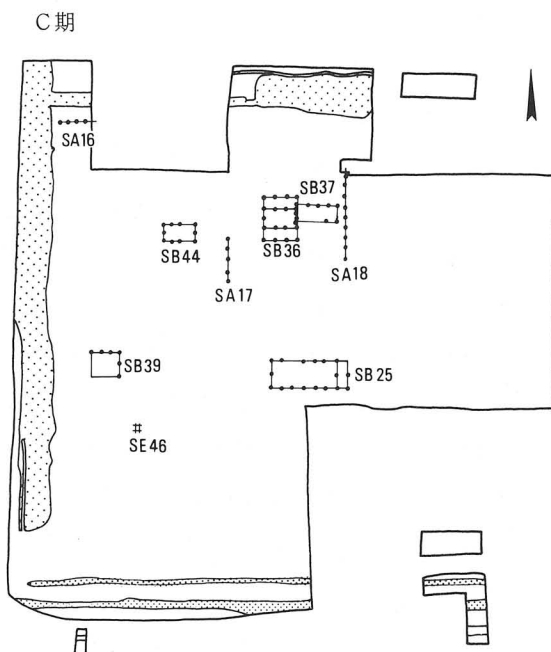
遺構変遷模式図

B期



遺構変遷模式図

廂をもつ規模の大きい建物をL字状に配す。先にもふれたように、前殿・後殿の建物をとり囲む塀は、さほど規格性をもっていない。この塀でとり囲まれた一画の西側には、SB30、東側にはSB35、西北部にはSB31などの総柱建物が配されている。SB30の建物南北心は、前殿・後殿の心々間距離を二等分する東西線上に置かれている。SB35南北心は、この東西線上よりも北へ1.2m（4尺）ずれている。前殿・後殿の東西心を結ぶ南北の軸の心から、SB30の建物心は西へ95尺、SB31は北へ160尺、SB35は東へ190尺を測る。北側には、SB32とSB33は、梁行の柱筋が揃えられ、この二棟の前方にはSB34を建て、L字形に配置している。前殿・後殿の北側と南側には広大な空閑地が広がる。井戸SE45は、前殿・後殿との心から東へ110尺のところ



遺構変遷模式図

ろにおかれる。枠内埋土からは、「平城宮土器Ⅲ」に編年される土器が出土しており、少なくともI期-Bの建物群は、奈良時代中頃に排絶されたと考えられる。

II期 建物SB36～40・42、塀SA16～19、井戸SE46が属す。この時期になると様相は一変する。中心的建物は廃絶され、小さい建物が点在するだけとなる。坪の南北を二等分する軸を境に、北側には建物SB36・37・44、南側にはSB38～40が配される。南北方向の塀SA18が坪の東西を6等分する線上に位置する他は、建物の計画性をうかがうことはできない。だが、I期に存在していた前殿・後殿が建っていた跡及び坪の南辺部には後世になっても建物が建つことはない。この時期は、SB36・37などの重複関係から、なおも細分できるが、中心的建物の廃絶後の時期として一括して取り扱った。

### 3. 結 語

今回の調査で検出した遺構のうち、とりわけ注目されるのはI期-A及びBとした時期の遺構である。I期-Aにおいては、南北に並列する前殿・後殿を一坪の中央部に置き、さらにその北側には付属建物と考えられる建物群が二列に配置される。I期-Bにおいては、一・八坪との間を区画する施設はなく、二坪以上の利用がなされたものと考えられる。前殿・後殿は塀で囲われ、周辺には倉と考えられる四棟の総柱建物が配される。そして、北側の付属建物を整理する形で、廂付建物をL字状に置く建物配置をみる。ところで、これまでの京内の調査により、一町以上を

利用して建物群を配置している遺跡が幾つか存在することがわかっている。このうち、一坪のよ  
 うに、その中心的建物が東西棟建物で南北に並列する配置をとる例は、左京一条三坊十五・十六  
 坪、左京三条二坊十五坪、左京三条四坊七坪などの例が知られ、そのいずれもが有力貴族の邸宅  
 と推察されるものである。ただ、こうした検出例においては、その中心的建物は廂付の大規模な  
 主屋の建物であるのに対して、今回検出した二棟の東西棟建物とは、大きな違いを見せている。  
 例えば、塀による中心的建物の遮蔽、倉と考えられる総柱建物の配置、広場が存在するなど、従  
 来の宅地とは相違する点が多い。出土遺物には、日常生活で使われていたと考えられる土器類な  
 どの遺物は少なく、佐波理椀、青銅製の箸などの儀器として使用されたとみられる金属器の出土  
 がある。坪内からの瓦類の出土は少なく、瓦葺き建物の存在は考えられない。塀や建物の配置に  
 は、全体的には大まかな計画性が存在するようではあるが、細部においては、柱間寸法のばらつ  
 きがあるなどあまり厳密な規格性がなく、仮設的、一時的な性格さうかがうことができる。こ  
 のことは、建物が少なく、広大な空闲地が存在することとも関連するのではないだろうか。Ⅱ期  
 になって、前殿・後殿は排絶されるが、後世に至ってもその跡には、建物が建てられていないこ  
 とにも注意を払わねばならない。仮設的な建物、広場、そして儀器の出土などから、極めて祭儀  
 的な性格をうかがうこともできる。京内ではこのような性格をもつと考えられる遺構を検出した  
 例はなく、その実体を明らかにすることはできなかった。ただ、文献からあたってみると京内  
 においても仮設な祭儀の場は存在していたようである。今回検出した一坪の遺構の性格について  
 もそういった可能性を含め、これからの京内の調査成果との比較検討の上で行なうべきものと考  
 えられる。  
 (森下恵介・奈良美穂)

注1) 奈良国立文化財研究所「平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告」 1985

注2) 奈良国立文化財研究所「平城京朱雀大路発掘調査報告」 1982

注3) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告VI」 1974

注4) 奈良国立文化財研究所「平城京左京三条二坊」 1975

注5) 奈良国立文化財研究所「平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報」 1980

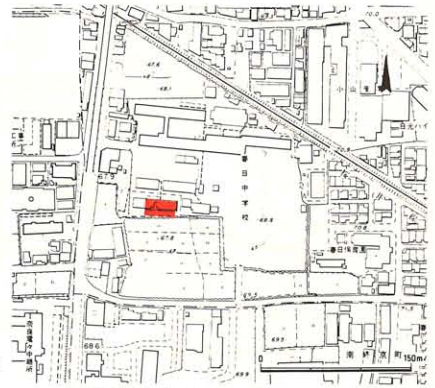
注6) 仮設的な祭儀の場が存在したであろうことは、続日本書紀天平勝宝元年11月乙卯に「於南薬園  
 新宮大嘗」、同年11月戊寅に「於宮南梨原宮新殿以為神宮」などの記事からうかがうこともでき  
 る。

地 点	X	Y	備 考
平城宮朱雀門心	- 145994.490	- 18586.310	『平城宮発掘調査報告IV』
左京八条一坊三・六坪	- 149031.000	- 18435.650	奈文研『平城京左京八条一坊 三・六坪発掘調査報告』1985
SF01心	- 147212.500	- 18437.000	今回の調査
SD05心	- 147140.000	- 18444.460	今回の調査

計 測 座 標 表

## 19. 平城京左京（外京）五条五坊五坪の調査

今回の調査は、奈良市西木辻町67番地において実施した。奈良市立春日中学校夜間学級校舎建設に伴う事前の発掘調査である。平城京の条坊では、左京（外京）五条五坊五坪のほぼ中央部に推定される。調査は校舎建築部分に、東西30m、南北15m（発掘面積450㎡）の発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和59年9月7日から10月6日までである。



発掘区の位置 1/7500

発掘区の土層堆積状態は、地表から黄灰色土の整地土、黒色土の旧耕土、茶褐色砂土の床土、茶灰色砂土、黄褐色粘質土と続き、地表下0.5mで黄灰色粘質土の地山となる。遺構はすべて地山面で検出した。

主な検出遺構には、柱列2条、掘立柱建物3棟、溝1条、土壌1がある。

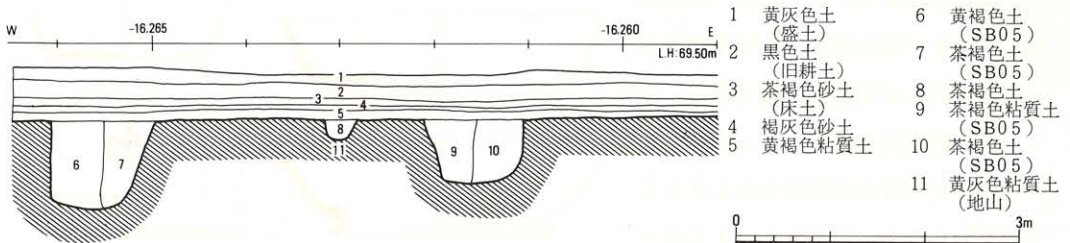
**SA 01** 発掘区の北西隅で検出した東西3間（3.6m）の掘立柱柱列。柱間寸法は、1.2m（4尺）等間。柱掘形は径約0.3m前後の円形。主軸は、国土方眼方位東に対し北偏する。

**SA 02** 発掘区の北東隅で検出した東西2間（2.7m）の掘立柱柱列。柱間寸法は、1.35m（4.5尺）等間。柱掘形は一辺0.3m前後の方形。主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

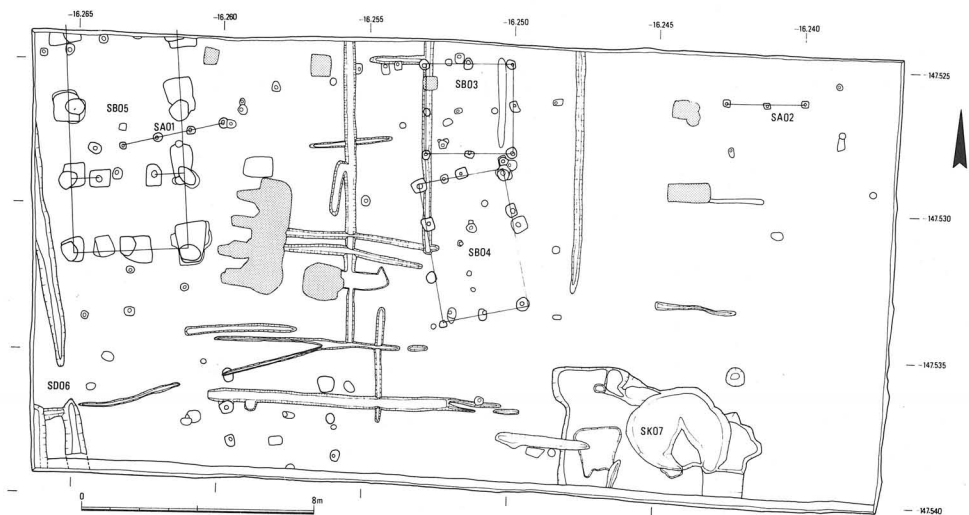
**SB 03** 発掘区の中央北で検出した2間四方（3.0m）の掘立柱建物。柱間寸法は1.5m（5尺）等間。柱掘形は径0.3m前後の円形。主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

**SB 04** SB 03の南側で検出した桁行3間（4.8m）、梁行2間（3.0m）の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は、梁行が1.5m（5尺）等間であるのに対し、桁行は1.28～1.76mと不揃い。柱掘形は一辺0.3～0.5mを測る。主軸は、国土方眼方位北に対して西偏する。

**SB 05** 発掘区の北西隅で検出した桁行3間（7.4m）以上、梁行2間（3.9m）の掘立柱南北棟建物で、南から1間目に間仕切りがある。柱間寸法は、桁行2.56m（約8.5尺）、梁行1.92m（約6.5尺）と等間で、間仕切りは中央間1.92m、両脇間は0.96mを測る。柱掘形は一辺1.0m



北壁堆積土層図 1/80



検出遺構平面図

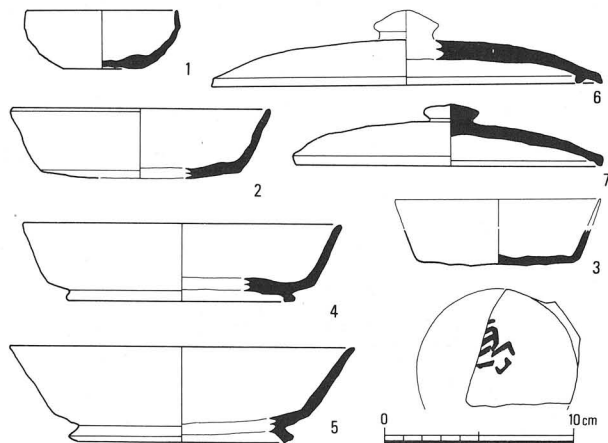
前後の方形で、間仕切り以外の柱穴には抜取痕跡がある。掘形埋土からは奈良時代の土師高杯が出土した。主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

**SD 06** 発掘区の西辺で検出した幅60cm、深さ7cmの浅い素掘り溝。埋土は茶褐色土で、若干の土師器片を含む。主軸は、国土方眼方位に対して西偏する。

**SK 07** 発掘区の南東部で検出した東西6.8m、南北4.0m、深さ0.2mの平面不整形の浅い土塹。埋土からは須恵器、土師器など7世紀末から8世紀初頭にかけての遺物が出土した。

今回検出した遺構を出土遺物、主軸の振れなどから、主軸がNWへ振れるSA 01、SB 04、SD 06は7世紀後半に、主軸が国土方眼と一致するSA 02、SB 03・05は奈良時代に区分できよう。出土遺物には、古墳時代の須恵器及び埴輪片や奈良時代の須恵器、土師器などがある。ここでは、特にSK 07出土遺物を中心に述べる。

土師器には杯、皿、甕などがあるが、いずれも小片で観察にたえない。須恵器には、杯A(2・3)、杯B(4・5)、杯(1)、杯B蓋(6・7)、壺、甕などがある。2・3は、底部外面にヘラキリ痕を残す。3は底部外面に墨書が残るが判読不可能である。4・5は口縁部内外面をロクロナデ。6・7は丸い頂部と身受けのかえりをもつ縁部からなる。いずれも7C末～8C初頭の特徴をもつ。(篠原豊一)



SK 07 出土土器 1/4

## 20. 平城京左京六条三坊十五坪の調査

今年度は、十五坪内の近接する二箇所を発掘調査を行ったため、これをまとめて報告する。調査地は共に六条条間路を踏襲している県道京終停車場薬師寺線に北接する位置にあたり六条条間路北側溝が推定される。

**84-1 次調査** 奈良市大安寺町92番地において実施した増田健治氏届出の住宅新築に伴う事前の発掘調査である。調査は既存の住宅が建っている中で行なったため発掘区の設定には制約をうけた。調査地のほぼ中央部分に東西7.3m、南北6.0m（発掘面積43.8㎡）の発掘区を設定した。

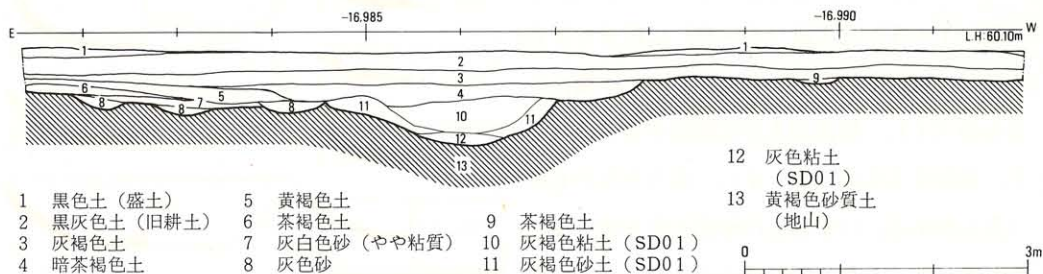


発掘区の位置 1 / 7500

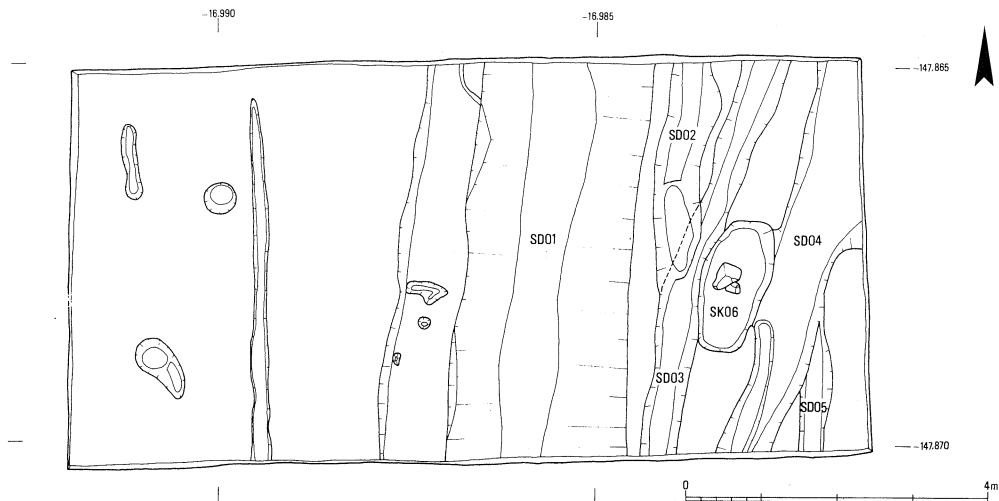
調査の期間は昭和59年5月24日～29日までである。発掘区の土層堆積状態は地表から黒灰色土の旧耕地、黄褐色土の床土、灰色砂土と続き、地表下0.3mで黄褐色砂礫土の地山となる。調査の結果、顕著な遺構は検出できなかった。

**84-2 次調査** 奈良市大安寺町96番地の1において実施した、熊木 健氏届出の住宅新築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、十五坪の南東隅にあたり、東三坊大路が推定される場所である。調査は、六条条間路北側溝と東三坊大路西側溝が交差する地点に東西10.4m、南北5.2m（発掘面積約54㎡）の発掘区を設定し行なった。調査期間は昭和59年8月27日～9月3日までである。発掘区の基本的な土層堆積状態は、地表から整地土、旧耕地、床土と続き、地表下0.3mで黄褐色砂土の地山となる。だが、発掘区東半部は、床土の下0.2mまでに暗茶褐色土、黄褐色土、茶褐色土が堆積し地山に至っている。地山面で遺構を検出した。調査の結果、条坊遺構は何ら検出することはできなかったが、溝5条と土壇1を検出した。

**SD01** 発掘区の中央を南北に流れる幅2.8cm、深さ0.5mの素掘り溝。埋土は上層から灰褐色粘土、灰褐色砂土、灰色粘土となり、灰褐色粘土からは瓦器碗、土師器皿、奈良時代の軒瓦（



84-2 次調査南壁堆積土層図 1 / 80



検出遺構平面図 1 / 100

平城宮 6091 A, 6712 A 型式) や奈良時代以降の軒瓦, 平瓦などが出土した。

**SD 02** SD 01 と並行に流れる幅 0.6 m, 深さ 8 cm の浅い素掘り溝。

**SD 03** やや南西方向へ斜行して流れる幅 0.6 m 深さ 9 cm の浅い素掘り溝。重複関係から SD 02・03・04・05 よりは新しいことがわかる。

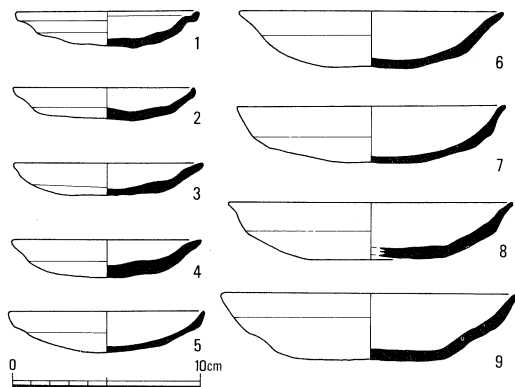
**SD 04** SD 03 と並行して流れる幅 0.6 ~ 1.0 m, 深さ 0.1 m の浅い素掘り溝。

**SD 05** SD 01・02 と並行して流れる幅 0.3 m 深さ 10 cm の浅い素掘り溝。重複関係から SD 04 よりも古いことがわかる。

**SK 06** SD 03・04 に重複して検出した東西 0.96 m, 南北 1.75 m, 深さ 0.2 m を測る平面長円形の浅い土壇。土壇中央には人頭大の自然石が残り, 黒灰色粘質土の埋土からは多量の土師器皿が出土した。重複関係から SD 03・04 よりは新しいことがわかる。

SD 01 ~ 05 から出土した遺物には, 土師器, 須恵器, 瓦器, 軒丸瓦 (平城宮 6091 A, 6137 A

型式), 軒平瓦 (6712 型式), 丸・平瓦などがある。今回は, SK 06 から出土した土師器皿について述べる。土師器皿はその大きさから小皿 (1 ~ 5) と大皿 (6 ~ 9) に区分できる。小皿は口縁端部の形態から, 「て」の字状になるもの (1), 端部が上方に肥厚するもの (2), 外反するもの (3・4), 尖りぎみのもの (5) がある。いずれも口縁部上半を強く横な



でしている。これらの特徴からみて, 11世紀後半

(篠原豊一)

SK 06 出土土器 1 / 4



## 21. 平城京左京（外京）三条五坊四坪の調査

### I はじめに

本調査は奈良市大宮町1丁目65番地の5で行った株式会社中村屋代表取締役中村忠司氏届出のビル建設に伴う発掘調査である。当該地は京の条坊復元では左京（外京）三条五坊四坪にあたる。この坪ではこれまで2回の調査を行っており、その成果を踏まえ今回の調査に入った。<sup>注1)</sup>敷地面積 1078㎡に対し発掘面積は約 380㎡。調査期間は昭和60年2月15日から同年3月14日である。



発掘区的位置 1 / 7500

### II 調査の概要

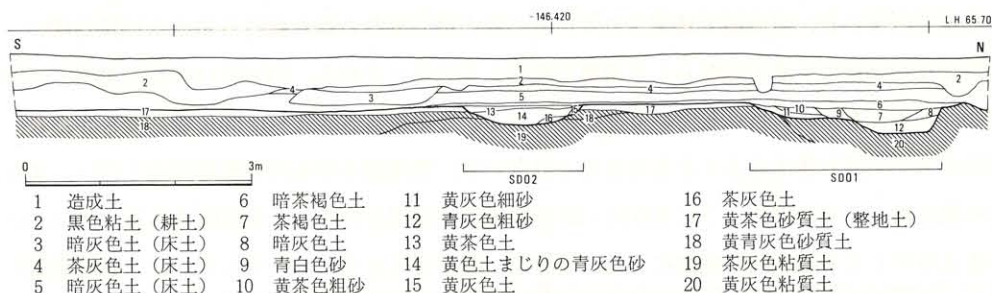
まず、発掘区内の基本層序を記しておく。造成土が30cmほどあり、以下黒色粘土（旧耕土）、茶灰色土、暗灰色土と続き地表面下約65cmで奈良時代の整地層である黄茶色砂質土層に達する。この整地層は厚さ10cmならず、以下には黄青灰色砂質土あるいは茶灰色粘質土がある。遺構は黄茶色砂質土層をわずかに削り込み、奈良時代の東西溝2条、掘立柱建物2棟を検出した。

**SD 01** 発掘区北端で検出した素掘りの東西溝。発掘区西半では南・北両肩を検出したが、東半では南肩のみを検出した。幅 2.15 ~ 2.6 m、深さは発掘区西端で38 cm、東端で30 cm。埋土から少量の土師器・須恵器片が出土した。三・四坪境の小路南側溝にあたる。

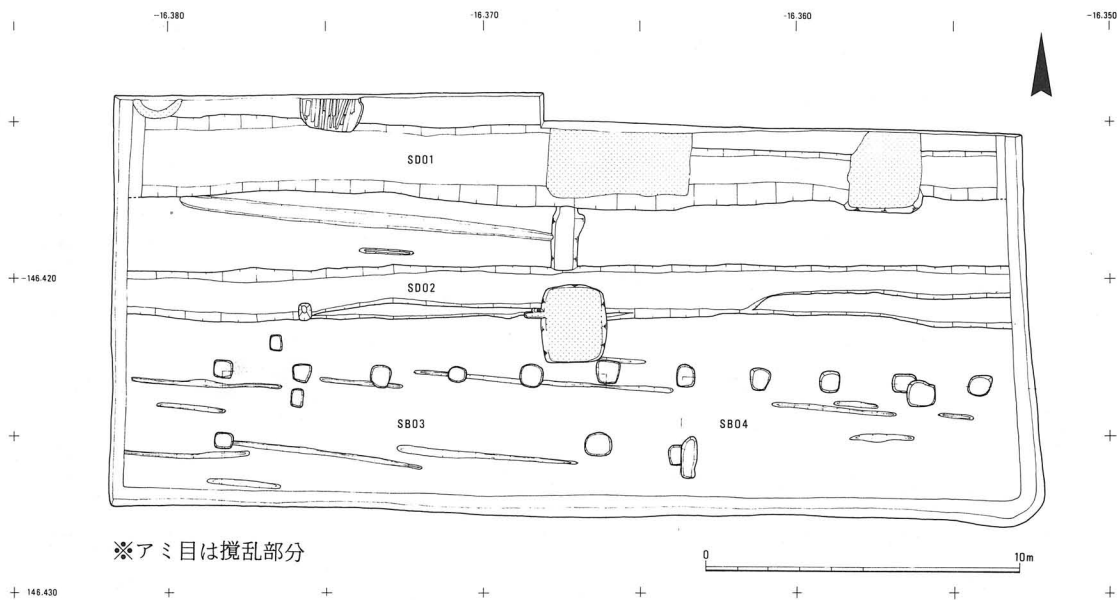
**SD 02** 発掘区中央で検出した素掘りの東西溝。幅 1.35 ~ 1.7 m、深さ25 cm前後とSD 01にくらべひとまわり小さい。SD 01・02 心心間距離は4.4 m程度。

**SB 03** 桁行5間（12.15 m）、梁行1間（3 m）以上の掘立柱東西棟建物。桁行の柱間は西から2間が2.52 mとわずかに広く、他は2.37 m等間。梁行は2.37 m。

**SB 04** 桁行4間（9.47 m）以上、梁行1間（2.96 m）以上の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が2.96 m等間、梁行が2.96 m。棟方向が国土方眼方位に対し西で北偏する。



発掘区西壁堆積土層図 1 / 100



検出遺構平面図 1/250

以上の遺構，整地土層からは通常用いる遺物整理箱で9箱ほどの奈良時代の瓦片，土師器・須恵器片と数片の弥生土器が出土したが，いずれも小片で図示できない。

### Ⅲ ま と め

さきに記したように四坪での調査は今回で3回を数え，発掘面積も計1680㎡ほどとなった。いずれの調査で検出した遺構も小規模で，密度が希薄であることも共通している。これは，平城京外京域の通常の坪の様相の特徴を示すものであるのかもしれない。

検出した東西溝のうちSD01は三・四坪境小路の南側溝にあてられよう。これまでに，今回の調査地では三・四坪境小路となる条間小路の，南北両側溝を検出した例はないが，南側溝のみを確認した例が2例ある。位置図に示した今回の西隣りの調査（B点）と左京三条四坊四坪の調査（C点）である。今回の調査（A点）を含めた3地点を相互に結び国土方眼方位に対する振れを求めてみると，A～Bの振れはE1'43"Nとなり，B～CではE13'42"Nとなる。また，直接A，Cを結ぶとE12'16"N振れていることになる。今のところ，これを当該条間小路の振れであると断定することはできないが，宮南面で確認されている二条大路の振れと似た傾向を示すのは興味深い。

昭和58年の調査でも溝の痕跡らしき遺構を検出していることから，SD02は小路南側溝と平行して四坪北辺部を東西に貫通していると考えられる。この場合SD01・02間に築地塀を想定し，SD02をその雨落ち溝とみることもできなくはないが，築地塀そのものの痕跡は全くない。また，左京八条三坊九・十坪例のようにSD01・02間を道路状遺構をみることも可能である。だが，いずれをとるにしても積極的な根拠に欠け，現状では断定するまでにはいたらない。（西崎卓哉）

注1) 奈良国立文化財研究所『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』1984

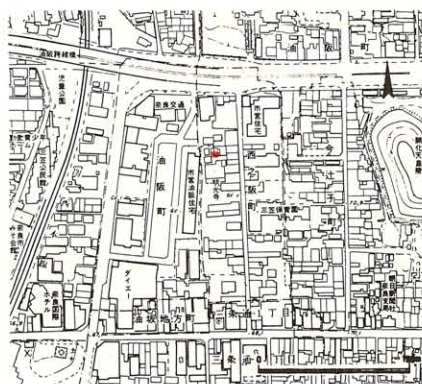
注2) 奈良国立文化財研究所『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1984

注3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』奈良県1976

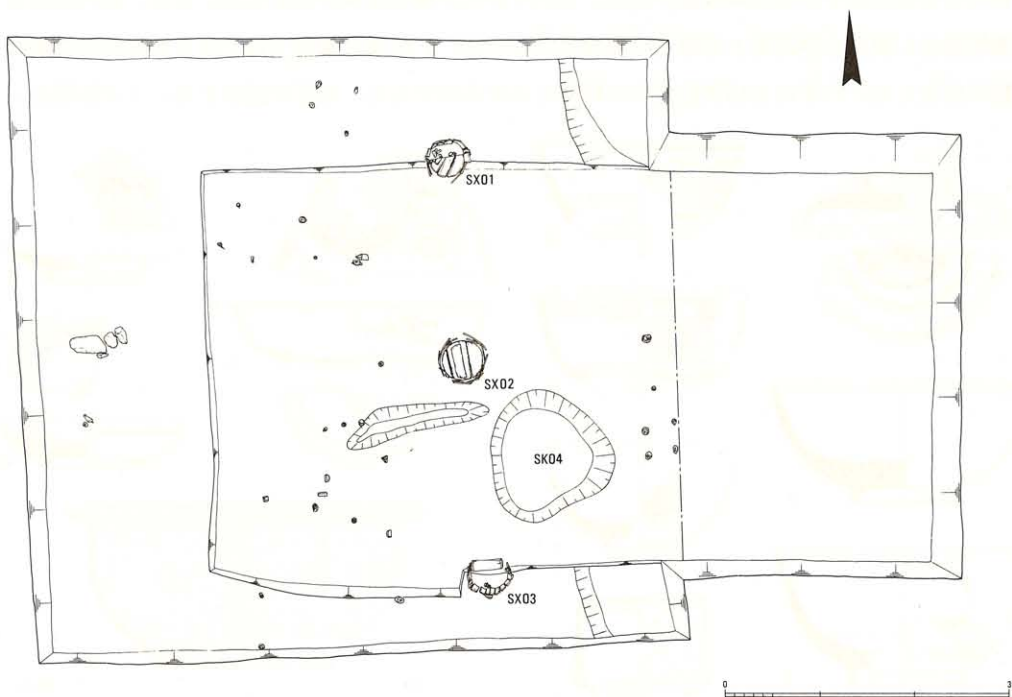
## 22. 平城京左京(外京)三条五坊十四坪の調査

はじめに 本調査は、奈良市西之阪町38—1番地他において実施した、奈良市西之阪地区集会所建設に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では左京(外京)三条五坊十四坪に相当する。発掘区は、調査地中央に東西9m、南北45mで設定し、調査進行に伴って東西10m、南北6.5m(総面積65㎡)に拡張した。調査期間は、昭和60年3月1日から同月18日までである。

検出遺構 発掘区内の基本的土層堆積状態は、前建物解体後の整地土以下、茶褐色粘土、黒灰色粘土、茶褐色砂、茶灰色粘質土と続き、地表下約2.3mで地山と考えられる青灰色粘土に至る。茶褐色粘土層は近代に入ってから建物建築時の整地土であろう。黒灰色粘土層には、多量の近世陶磁器が包含されている。今回の遺構は、主にこの上面で検出した。以下の堆積土層からは、全く遺物は出土



発掘区的位置 1/7500



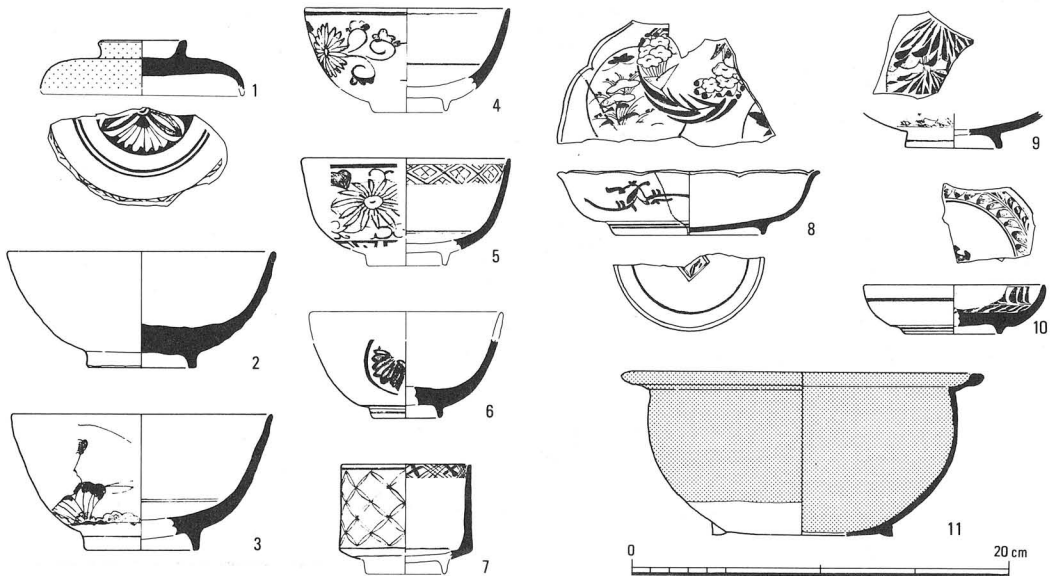
検出遺構平面図 1/80

せず、池沼の自然堆積土と考えられる。

黒灰色粘土上面では、これを掘り込む木棺土壌墓3基、杭列及び土塋1を検出。木棺土壌墓は発掘区中央で南北方向に約2mの間隔をおき一列に並ぶ。墓棺はいずれも結桶棺で、直径30cm程度のいわゆる「一尺棺」と呼ばれるものであり、小児用の墓棺と考えられる。棺上部は、いずれも削平されている。木棺墓SX01、SX03は、いずれも底板、桶側及び桶側固定の竹製タガ2段分が残る。SX02は、底板と最下段のタガ部が残るのみである。桶棺の底板はいずれも数枚の板材を合わせ、円形に成形したものであり、周囲の端面を断面台形に削る。接合面の数箇所、直径0.3cm程度の穴を穿ち、両端を細くした竹針で留める。桶側は、底板周囲を長方形の割材で囲み、竹製のタガで締め、留める。SX03の桶側外面に「(音カ)画」の焼印が残る。結桶職人に関わるものであろうか。また、木棺土壌墓の東西両側で、杭列を検出した。これらは、いずれも直径10cm前後の丸杭であり、先端を尖らし打ち込んだものである。墓棺を限る区画施設とも考えられる。

これらの木棺土壌墓は、調査地南隣に近世寺院が存在することから、おそらくは寺院墓地内に構築されたものと考えられよう。また、調査地西隣は、昭和30年代まで池沼であったことが知られている。当該地も、発掘区内の土層状態からみて、近世の前半期に池沼を埋め立て、現西之阪集落が形成され始めた初期に、一時期墓地として利用され、後に宅地化されたものであろう。

**出土遺物** SX01棺内から骨片とともに若干の近世陶磁器、数珠玉1点が出土。SX03棺内から骨片とともに若干の近世陶磁器が出土。SK04から多量の瓦類が出土した。また、黒灰色粘土(遺物包含)層から伊万里・唐津系の陶磁器(1~10)、信楽の陶器(11)など多量の近世期の遺物が出土した。いずれも18世紀前半の特徴を示すものである。以下に図示する。(立石堅志)

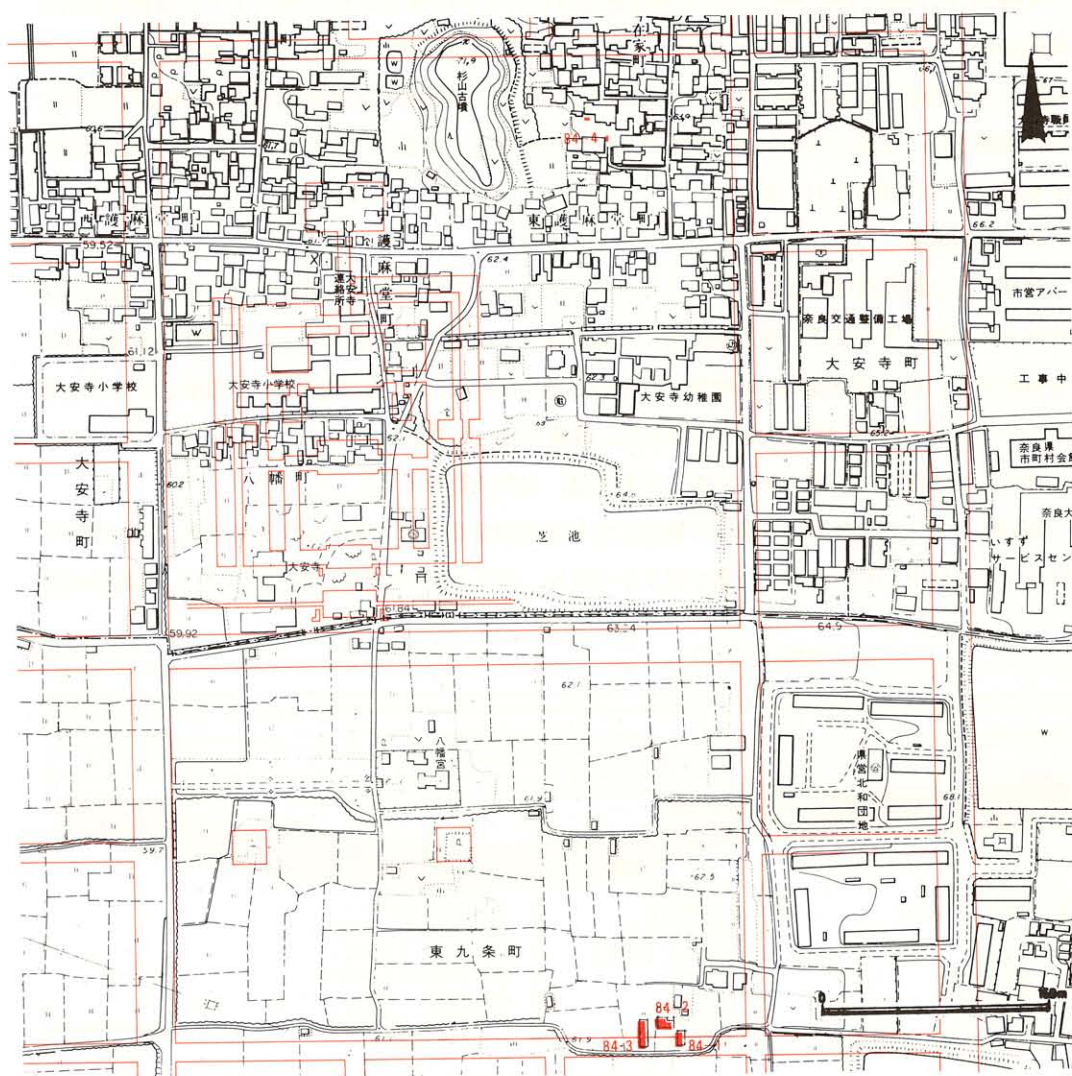


出土土器 1/4

## 23. 史跡 大安寺旧境内の調査

本年度は大安寺旧境内において4箇所の発掘調査を実施した。84-1～3次調査は、花園院推定地の南東隅において実施したもので、個人住宅及び共同住宅の新築に伴う事前の調査である。84-4次調査は、食堂井大衆院内において実施したもので、個人住宅の増築に伴う事前の調査で、杉山古墳の東側にも相当するところである。いずれの調査も発掘面積が小規模なものではあったが、84-1・3次調査では、七条条間路の北側溝を検出することができた。以下、各調査についての概要を記す。

(奈良美穂)



発掘区の位置 1 / 5000

# 84—1・2・3 次の調査

## I はじめに

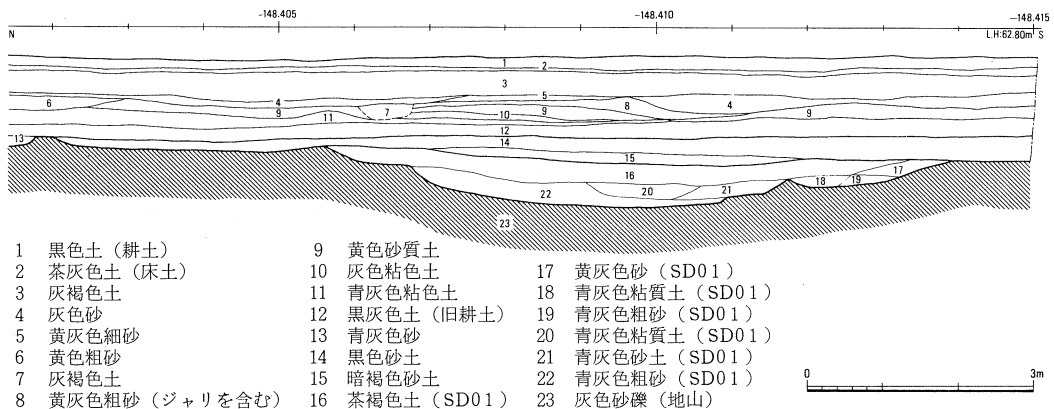
今年度は、花園院推定地の南東隅3箇所を発掘調査したためその調査結果をまとめて報告する。84—1次調査は奈良市大安寺町1373番地の1において実施した大西保夫氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査は七条条間路北側溝を確認するために東西5.6m、南北11.5m（発掘面積64.4㎡）の発掘区を設定して行なった。84—2次調査は奈良市大安寺町1373番地の1において実施した分譲住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査は花園院推定地の南辺に東西8.8m、南北8.0mの発掘区を設定して行なったところ、発掘区南東隅で土壌を検出したため東側へ東西3.2m、南北4.8m拡張した。発掘面積は合わせて85.8㎡となった。84—1・2次調査期間は昭和59年6月1日から23日までである。84—3次調査は奈良市大安寺町1371・1372番地において実施した共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査は七条条間路北側溝の確認を目的とした東西5.6m、南北17.6m（発掘面積98.6㎡）の発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和59年8月6日から25日までである。

## II 検出遺構

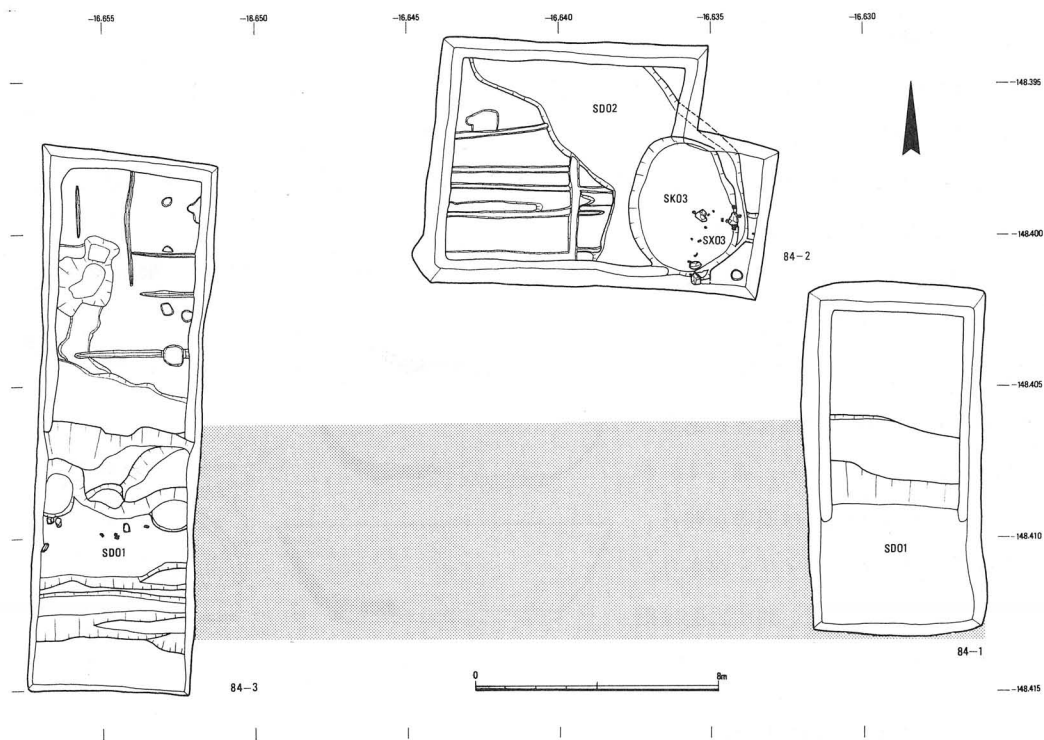
発掘区の土層堆積状態は以下のようなものであった。地表から下、黒灰色土の耕土、茶灰色土の床土、灰褐色土と続き、砂と砂質土の互層が厚さ0.4～0.8m堆積する。この層は調査地の南側を西流する岩井川の氾濫の際に堆積したものと考えられる。以下、黒灰色土の旧耕土となり地表下1.0～1.5mで黄褐色粘土の地山に達する。遺構は地山面で検出した。

検出した遺構には、溝1条、土壇1がある他、自然流路がある。

**SD01** 1・3次発掘区の南辺で検出した七条条間路北側溝と考えられる東西溝。1次調査では北岸のみ検出した。素掘りの溝で幅7.2～8.4m、深さ0.9mを測る。埋土は大きく3層にわけら



84—3次調査東壁堆積土層図 1/100



検出遺構平面図 1 / 250

れ、上層から暗褐色砂、黒色砂土、茶灰色土層、青灰色砂土の層、青灰色粘質土、青灰色粗砂の層となる。溝底の北側東西に4本の丸杭がほぼ一列に遺存しており、北岸をしがらみで護岸していたと考えられる。杭の周辺では人頭大の自然石を検出した。埋土からは土師器、須恵器、軒瓦、灰釉陶器、緑釉陶器など8世紀～9世紀後半にかけての遺物が出土した。この他に、凝灰岩の切石も出土した。

**SD02** 2次発掘区で検出した南北に流れる幅4mの自然流路。埋土は灰色粗砂で遺物は出土しなかった。

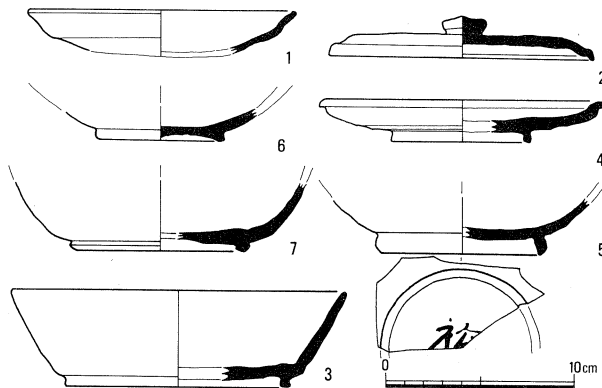
**SK03** 自然流路SD02の南端で検出した平面楕円形の土壇。東西1.8m、南北2.2m、深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘質土で土師器皿、須恵器、瓦器碗、陶磁器など11世紀末～12世紀初頭にかけての遺物が出土した。

**SX04** SK03と同位置で検出したL字状の木杭列。木杭列は幅20cmで南北1.0m、東西1.2m分検出し発掘区外へのびると考えられる。木杭は表皮の残る径5cmぐらいの丸棒で不規則に打ち込まれている。杭列の隅とSK03の壁面に接する部分には人頭大の自然石や凝灰岩の切石が杭の間に据えられている。重複関係からSK03より新しいことがわかる。

今回の調査では、大安寺花園院の内部様相こそ判明しなかったものの、七条条間路北側溝の検出により、花園院の南辺を明らかにすることができ大きな成果となった。

### Ⅲ 出土遺物

出土遺物には、瓦類、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器碗、青磁碗などがあるが、SD01から出土したものについて記す。SD01からは軒丸瓦（平城宮6138E型式）、軒平瓦（平城宮6712B型式）、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、黒色土器A碗、灰釉陶器、緑釉陶器が出土した。土師器には、皿（1）、杯、高杯、羽釜などがある。1は口縁部を外反させ端部を上方につまみ上げるもの。須恵器には、杯A・B（3）、杯B蓋（2）、皿、高杯などがある。灰釉陶器には、碗（5）、皿（4）がある。5の底部外面には墨書が残る。緑釉陶器には、碗（6・7）があり、7は蛇ノ目高台である。共に表面は銀化し黒緑色を呈する。（篠原豊一）



SD01 出土土器 1 / 4

## 84— 4 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1099番地における今西勇氏届出の個人住宅増築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、大安寺食堂并大衆院に想定されると同時に杉山古墳の周濠東部分にあたる場所である。調査は、寺域内部の様相を知ることを目的として東西2.0m、南北1.6mのAトレンチ（面積3.2㎡）を、さらに杉山古墳の周濠確認のために東西3.8m、南北2.0mのBトレンチ（面積7.6㎡）を設定して行なった。調査期間は、前者が昭和59年8月29日から30日まで、後者は昭和60年2月2日から8日までである。

A・B両トレンチの基本的な層序は、表土（約10cm）の下、黄褐色砂礫（約15～30cm）、暗茶色粘砂土（約10～20cm）が堆積し、地表から約60cmで黄褐色砂の地山へと至る。この地山面で遺構を検出した。

調査の結果、Aトレンチでは、19世紀初頭頃の平面円形の土壇を確認しただけで奈良時代の遺構は検出することはできなかった。Bトレンチでは、土壇1、溝1条を検出した。溝は、東肩から西へ0.8mぶんまでを確認し得た。埋土は上下2層に大別され、上層には明茶灰色砂質土（約50cm）が下層には青灰色砂質土（約10cm）が堆積する。上下2層から埴輪片及び奈良時代の土器片が数点出土した。

従来の調査により、周濠南側部分については除々に明らかにされつつあるものの、東側については発掘例がなく、今回検出し得た溝が周濠の一部であると判断するのは現状では難しい。今後の調査に期待したい。（奈良美穂）

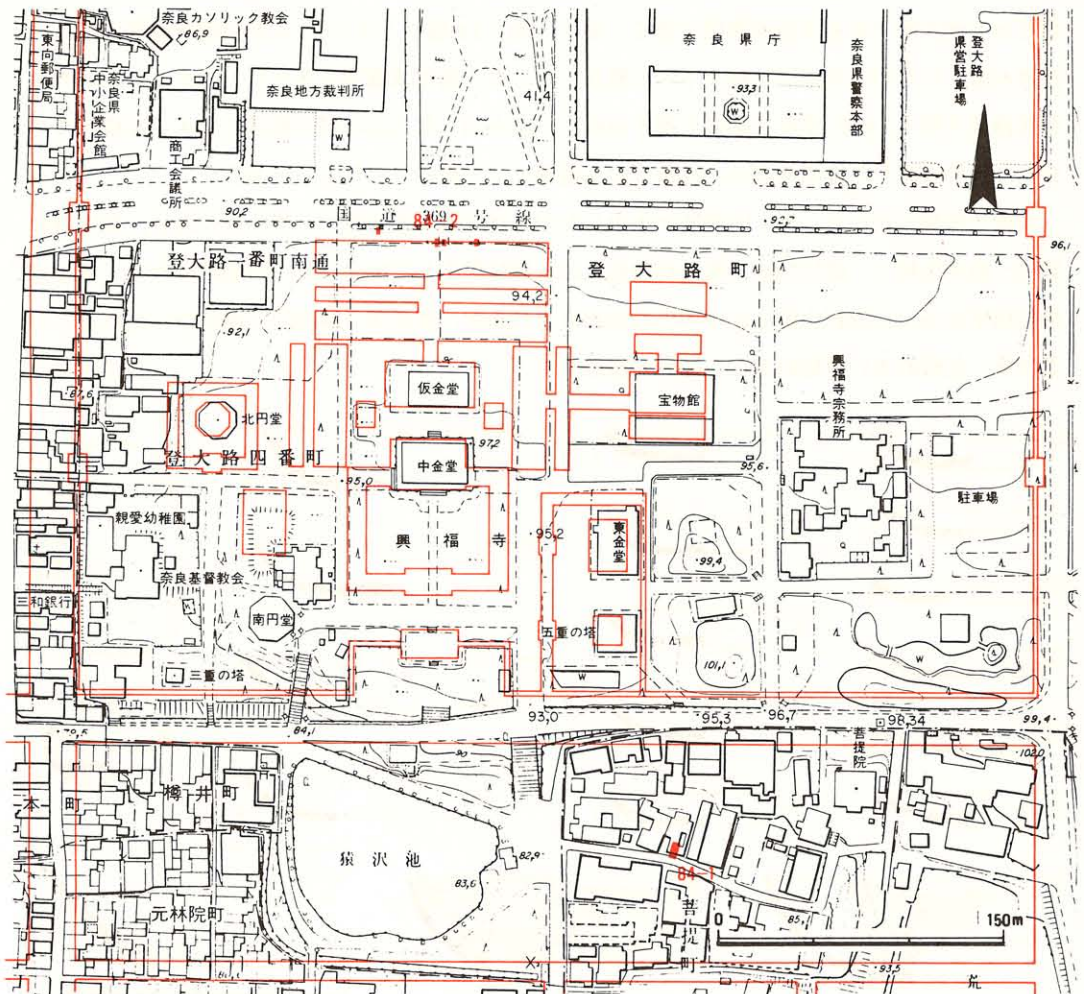


## 24. 興福寺旧境内の調査

興福寺旧境内においては、本年度2件の調査を行なった。84-1次調査は、興福寺南花園推定地内において、店舗付住宅建設に伴う事前調査として実施した。84-2次調査は、史跡興福寺旧境内の指定内において、上水道管改良工事に伴う現状変更の事前調査として実施した。調査地には、興福寺北室下階僧房が推定された。いずれも小規模な調査であり、明確な遺構を検出したものではないが、以下各調査についてその内容を記しておくたい。(森下恵介)

注) 大岡 實「興福寺」『南都七大寺の研究』中央公論美術出版

太田博太郎「興福寺一」『奈良六大寺大官』第七巻 岩波書店



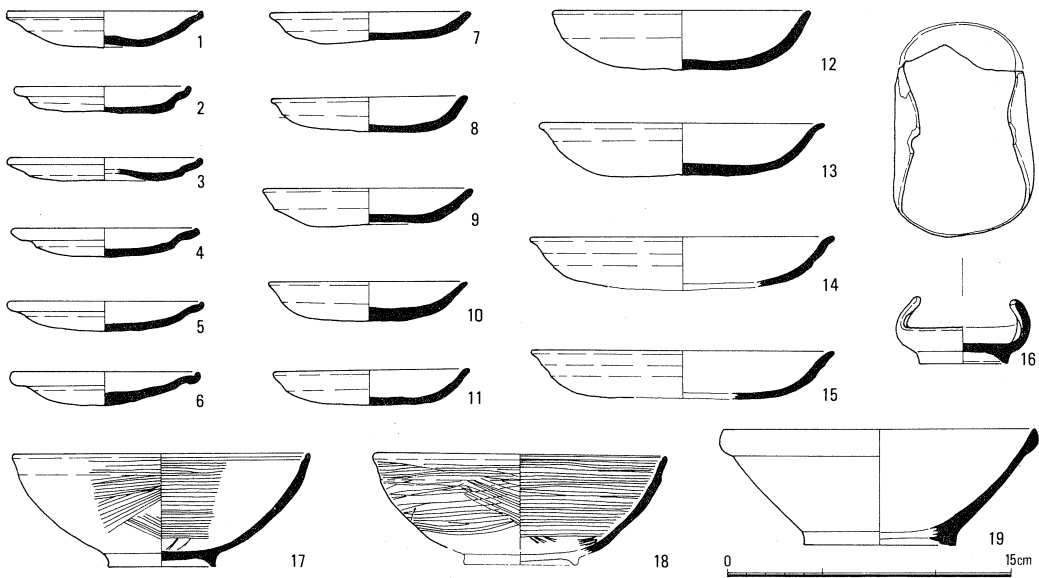
発掘区的位置 1/4000

## 84— 1 次調査

本調査は、奈良市高畑菩提町1122の18・19番地において実施した、(有)日本水業、榎木義治氏届出の店舗兼住宅建物建築に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元において興福寺南花園に推定されており、現在は暗渠となっているが、川路を塞止めて造られた猿沢池への導水路である菩提川が東から西へ流下する地点に相当する。発掘区は、調査地中央に南北8m、東西5m(面積40㎡)の南北トレンチを設定した。調査期間は、昭和59年5月11日から同月18日にかけてである。

調査地は、従前の建物建築時に約0.6mの造成整地がなされており、発掘区内の基本的な堆積土層は、造成土以下、茶色砂質土、茶褐色砂質土、黒灰色砂質土、黄灰色砂質土、茶灰色砂質土、暗灰色砂質土、黒灰色砂、青灰色粘土、黒褐色粘質土、暗灰色砂、暗茶褐色粘土と続き、地表下約2mで湧水層である灰色砂礫層に至る。更に、約0.5m掘り下げたが、灰色砂礫が同様に続き、湧水が激しいためそれ以下の掘り下げを断念した。何ら遺構は確認できなかったが、トレンチ中央部地表下約1.5mで、暗灰色砂質土層を浸蝕し、南方向へ落ち込む河岸肩状を呈する堆積がみられた。今回確認した堆積各層は、菩提川の氾濫等により形成されたものであろう。

堆積土各層にわたり、多くの遺物が出土したが、特に茶褐色砂質土、黒灰色砂質土、茶灰色砂質土、青灰色粘土、暗灰色砂、暗茶褐色粘土の各層に集中して出土した。時期的にみて、概ね12世紀前半から、13世紀中葉にかけてのものがみられるが、層位間で時期的な混在がみられる。ここでは、比較的古い時期のものを抽出し図示する。(立石堅志)



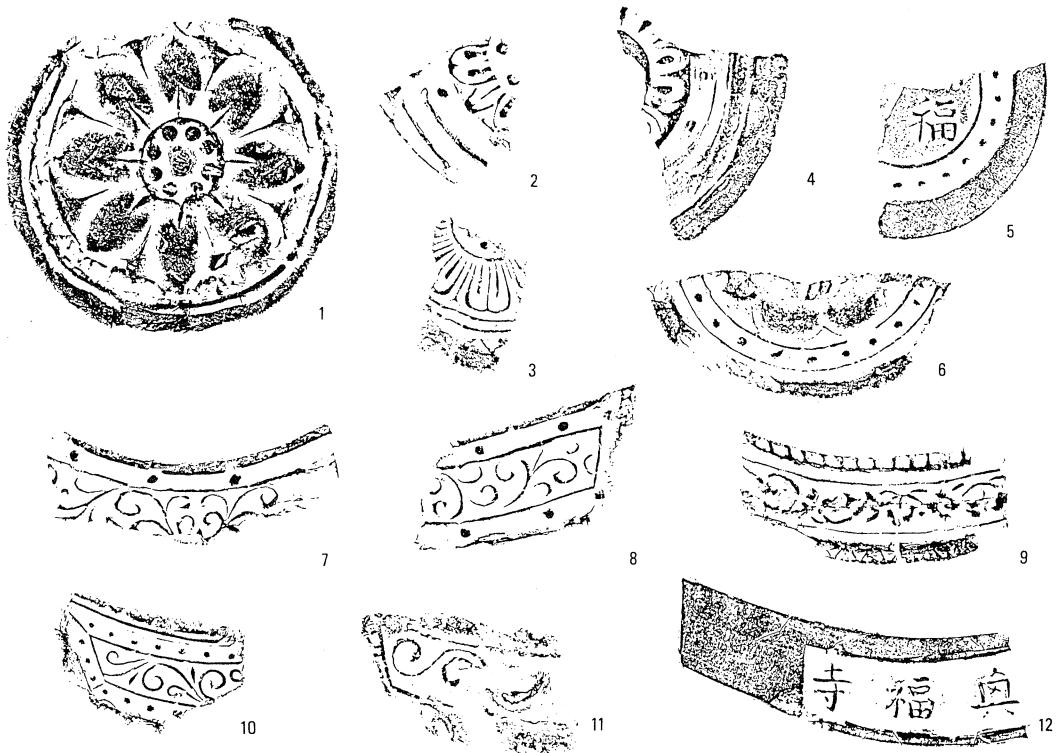
出土土器 1/4

## 84—2 次調査

上水道配水管改良工事に伴う事前調査として実施した。調査地は、国道 369 号線（登大路）南側歩道部分で、興福寺の伽藍復元によれば、北室下階僧房の北辺が推定される位置にある。この歩道南辺には、従来から、礎石と考えられる石が 1 箇所、路面に露出しており、調査は、この石を中心に、その北側に推定される基壇縁部の確認に主眼をおき、歩道内の 4 箇所に発掘区（発掘面積約 19㎡）を設定した。調査は昭和 60 年 1 月 18 日から 1 月 25 日にかけて行った。

発掘区の基本的な層序は、歩道盛土の下、褐色砂礫層、黄色砂礫層であり、路面下 60cm～1m で地山である淡黄色砂礫層となる。褐色砂礫層には、近現代のガラス片、陶磁器片が含まれ、黄色砂礫層には、瓦類と焼土が含まれる。また、礎石と考えられる石は、黄色砂礫層を掘り込む土壌内に入りており、この埋土からは、近現代の陶磁器が出土することから、原位置を保つものではないことがわかった。その他、石の北側や他の発掘区でも、僧房の基壇らしき遺構は、まったく検出できなかったが、路面に露出した礎石の西約 20m（僧房復元柱間 3 間分）に設定した発掘区からは、平坦面をもつ自然石が出土し、動かされた礎石の可能性も考えることができる。黄色砂礫層から出土した瓦類の中には、軒丸瓦 6 点と軒平瓦 6 点があり、奈良時代から近世までのものがみられる。

（森下恵介）



出土軒丸瓦・軒平瓦 1 / 4

## 付編 25. 平城京左京六条三坊十坪（東堀河）の調査

本調査は、昭和58年度に行なったもので、検出遺構については、既に報告を行なっており、今回は、整理作業が遅れていた出土遺物について、その報告を行なう。

### I 出土遺物

遺物の大半は、平城京東堀河SD02の最下層に堆積した灰色粗砂層から出土したもので、奈良時代の土師器・須恵器を中心とした多量の土器類と、若干の瓦類、金属製品、木製品の他、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器や埴輪などもある。なお土器類の記述は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠する。

#### A 土器類（第1図～第7図、図版76～78）

東堀河SD02からは、土師器約1200点、須恵器約850点におよぶ土器が出土した。出土土器のうち、土師器と須恵器とでは、土師器が多いが、土師器のうち、壺Bなど祭祀用土器類を除いた日常容器で須恵器との比較を行なうと、その比率はほぼ同率となる。土器の年代は、8世紀中頃～後半が中心で、土師器、須恵器のほかには、黒色土器、灰釉陶器が少量ある。

**土師器** 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・椀A・椀C・皿A・皿B・皿C・高杯・鉢B・盤B・壺A・壺B・壺E・甕A・甕B・甕C・甑・羽釜・竈の器種がある。

杯A（1～5） 広く平らな底部と、斜め上に広がる口縁部からなる。1は底部外面に成形時の凹凸を残すa<sub>0</sub>手法、2・3は底部から口縁部にかけて外面全面をへら削りするc手法である。4は外面全体をへら削りした後、口縁部、底部外面をへら磨きするc<sub>3</sub>手法、5は底部外面をへら削りした後、外面全面をへら磨きするb<sub>3</sub>手法で、底部内面にラセン暗文、口縁部内面に一段の放射暗文・連弧暗文を施す。

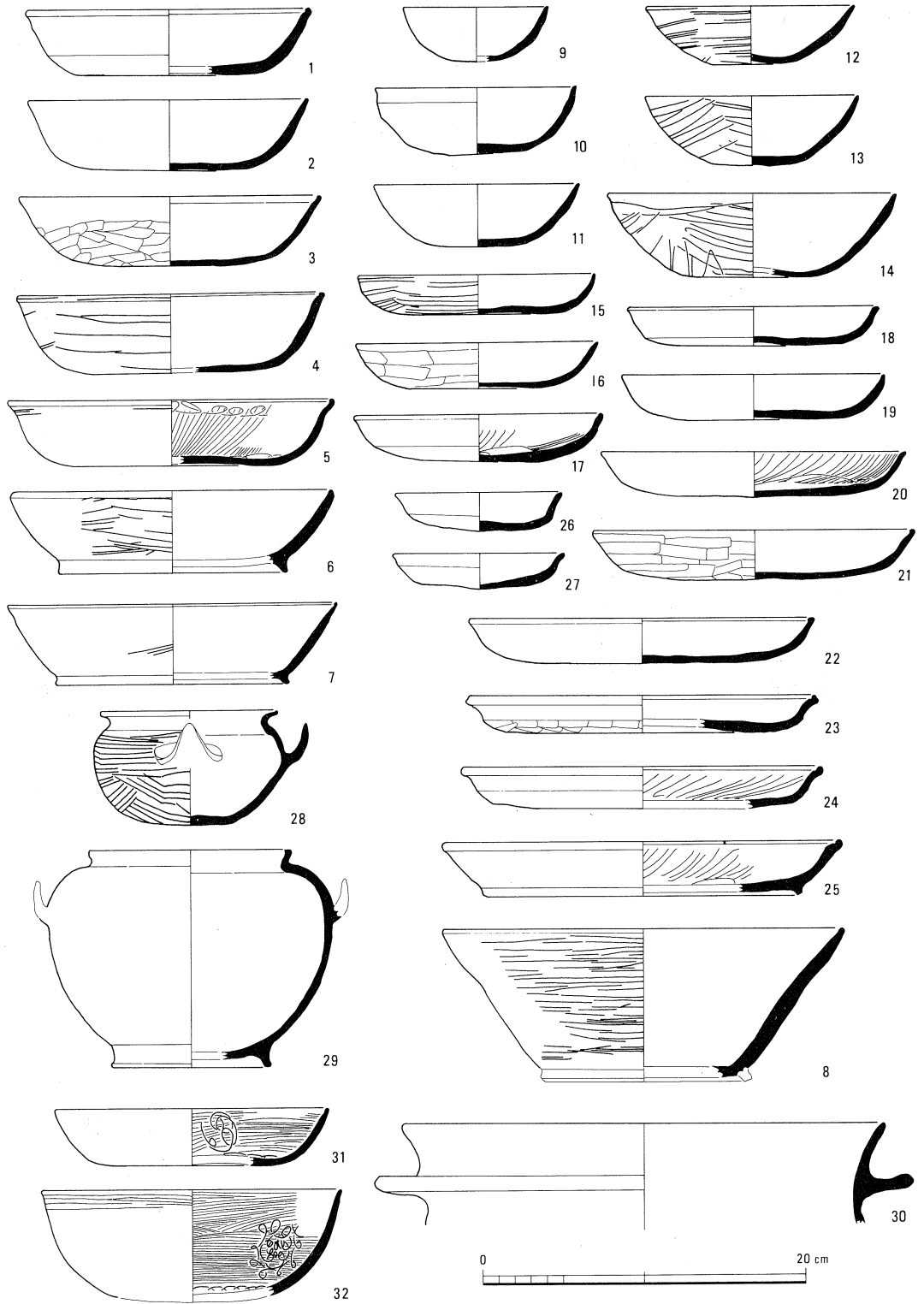
杯B（6～8） 平底と斜め上に開く口縁部からなり、高台をもつ。6・7は外面全体をへら削りした後、口縁部外面をへら磨きするc<sub>1</sub>手法で仕上げる。8は大型で器壁も厚い。

椀（9～14） 丸みをおびた平底と内彎しながら立ち上がる口縁部からなる。10は椀Cで、口縁部上端を幅せまくよこなでし、その下は底部外面まで、不調整のままにするe手法によって仕上げる。その他は椀Aで、9・11がc<sub>0</sub>手法、12・13がc<sub>3</sub>手法、14がa<sub>3</sub>手法による。

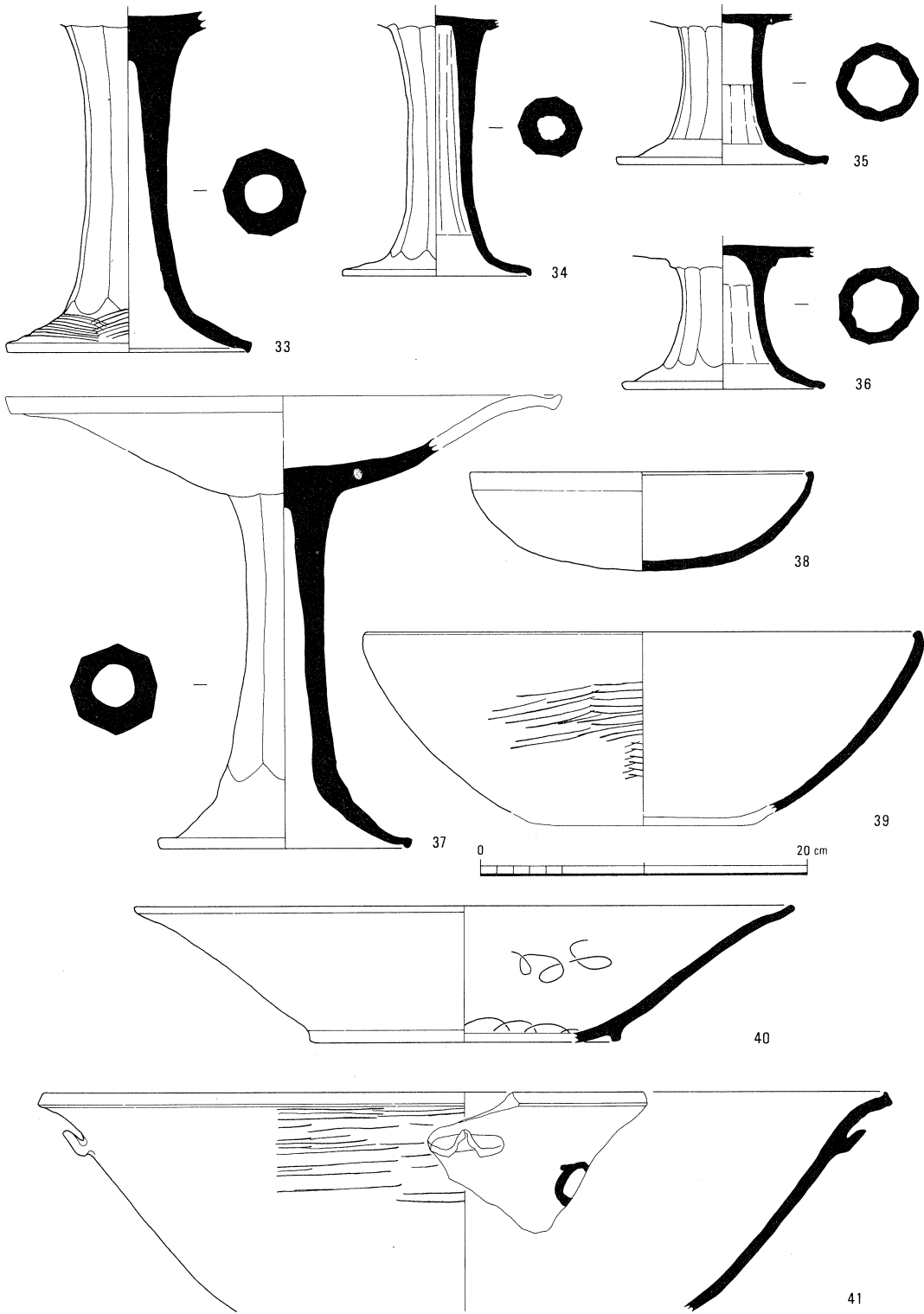
皿A（15～25） 広い平らな底部と斜め上にひろく短い口縁部からなる。15がc<sub>3</sub>手法、16・19・21・22がc<sub>0</sub>手法、17・18・24がa<sub>0</sub>手法、20・23がb<sub>0</sub>手法による。17・20・24は底部内面にラセン暗文、口縁部内面に一段の放射暗文を施す。

皿B（25） 皿Aに高台をつけたもの。内面にラセン暗文と一段の放射暗文を施す。

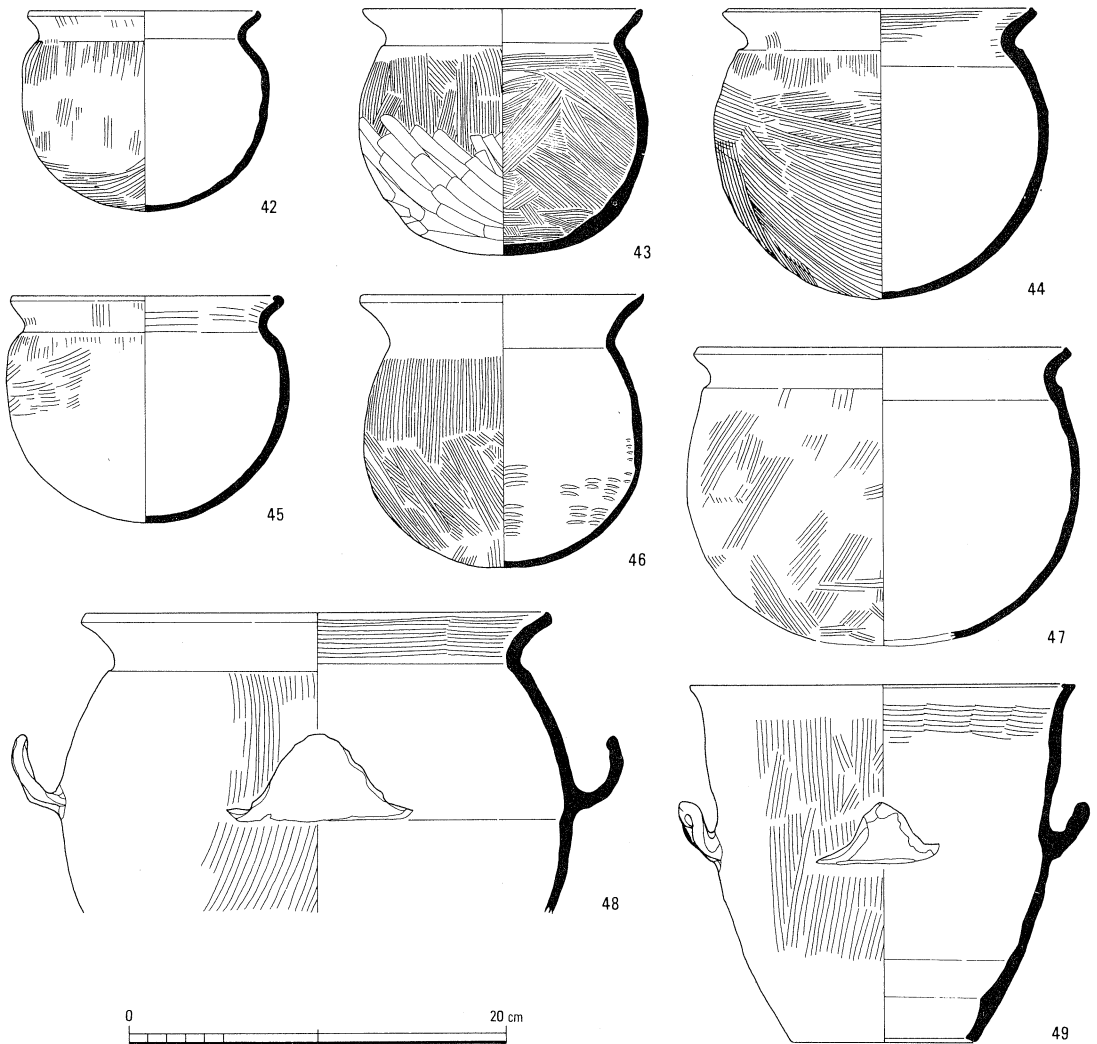
皿C（26・27） 皿A、皿Bよりも器壁が厚い小型の皿で、すべてe手法によって仕上げられる。



第1図 東堀河SD02出土土師器 1 1/4



第2図 東堀河SD02出土土師器2 1/4



第3図 東堀河SD02出土土師器3 1/4

壺A (28・29) 肩の張った胴部と短い口縁部からなり、28は一方、29は二方、それぞれ肩部に上方に強く折り曲げた三角形把手をつける。28は高台をもたず、口縁部は外反する。いずれも胴部外面は、へら削りの後、へら磨きを施しているが、29は遺存状態が悪く、観察が困難な部分が多い。

高杯 (33~37) 杯部を残すものはない。34~36は脚部を粘土紐巻き上げないし輪積によってつくるもの(円筒技法)で、33・37は棒状の芯に粘土紐を巻き上げて脚部をつくるもの(芯棒接合法)である。33の裾部外面は5分割した平行方向のへら磨きが施されている。

鉢B (38・39) 丸みをおびた平底と内彎ぎみに直立する口縁部からなる。口縁端部は内側にかかるく巻き込む。38の底部外面はへら削り、38・39とも口縁部外面は、横方向にへら磨きする。

盤(40・41) 40は高台をもつ盤B, 底部内面, 口縁部内面にラセン暗文を施す。41は口縁部外面をへら磨きする。二方に把手がつき, 墨書痕が部分的に残るが, 意味不明である。

甕(42~48) 球形に近い胴部とつよく外反する口縁部からなる甕A(42~47), 肩部の二方に把手をつける甕B(48)の他, 胴部が長い甕Cがある。42・44~48は胴部外面をハケ目調整し42・45は口縁部にもハケ目が及ぶ。42・44・45・48の口縁部内面はハケ目調整する他, 胴部はなで調整するが, 成形時の凹凸も残る。46の内面下半には, 同心円当具痕を残す。43は胴部外面上半をハケ目調整, 下半をへら削りするもので, 内面はハケ目調整する。

羽釜(30) 長い胴部と外反する口縁部からなり, 頸部に鏝をめぐらす。

甗(49) 底部のややすばまった円筒形の体部の両側に把手をつけたもの。外面は縦方向のハケ目, 内面上部も横方向のハケ目調整を行なっている。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯E・杯L・皿A・皿B・皿C・椀・鉢A・鉢D・盤・壺A・壺B・壺C・壺E・壺G・壺H・壺K・壺L・壺M・壺N・壺Q・甕A・甕B・甕C・平瓶・横瓶などの器種がある。

杯A・C・E(50~56) 53は土師器杯Aの形態をもつ杯C, 55は平底と内彎する口縁部からなる銅鏡形の形態をもつ杯Eで底部をロクロ削りする。他の杯Aの底部はいずれもへら切りのままで, 口径12cm前後のものから18cm前後のものまでがある。

杯B・L(64~70) 68は杯Eと同じく銅鏡形の形態をもつ杯Lで, 口縁端部が外反する。杯Bには, 口径10cm前後のものから20cm前後のものまでがある。

杯B蓋(57~63) 63は環状のつまみをもつ。57~60は頂部が丸く, 縁部があまり屈曲しない。61・62は平らな頂部と屈曲する縁部からなる。

椀(71・85~87) 杯を深くした形態をもち, 高台をもたない71・85と高台をもつ86・87がある。

皿(72~74・77・78) 72・73は口縁端部が平坦な皿C。74は口縁部が内彎する特異なものである。77・78は高台をもつ皿B。皿類にはこの他に皿Aが出土している。

皿B蓋(75・76) 杯B蓋と同じく頂部が丸いもの(76)と平らな頂部で縁部が屈曲するもの(75)がある。

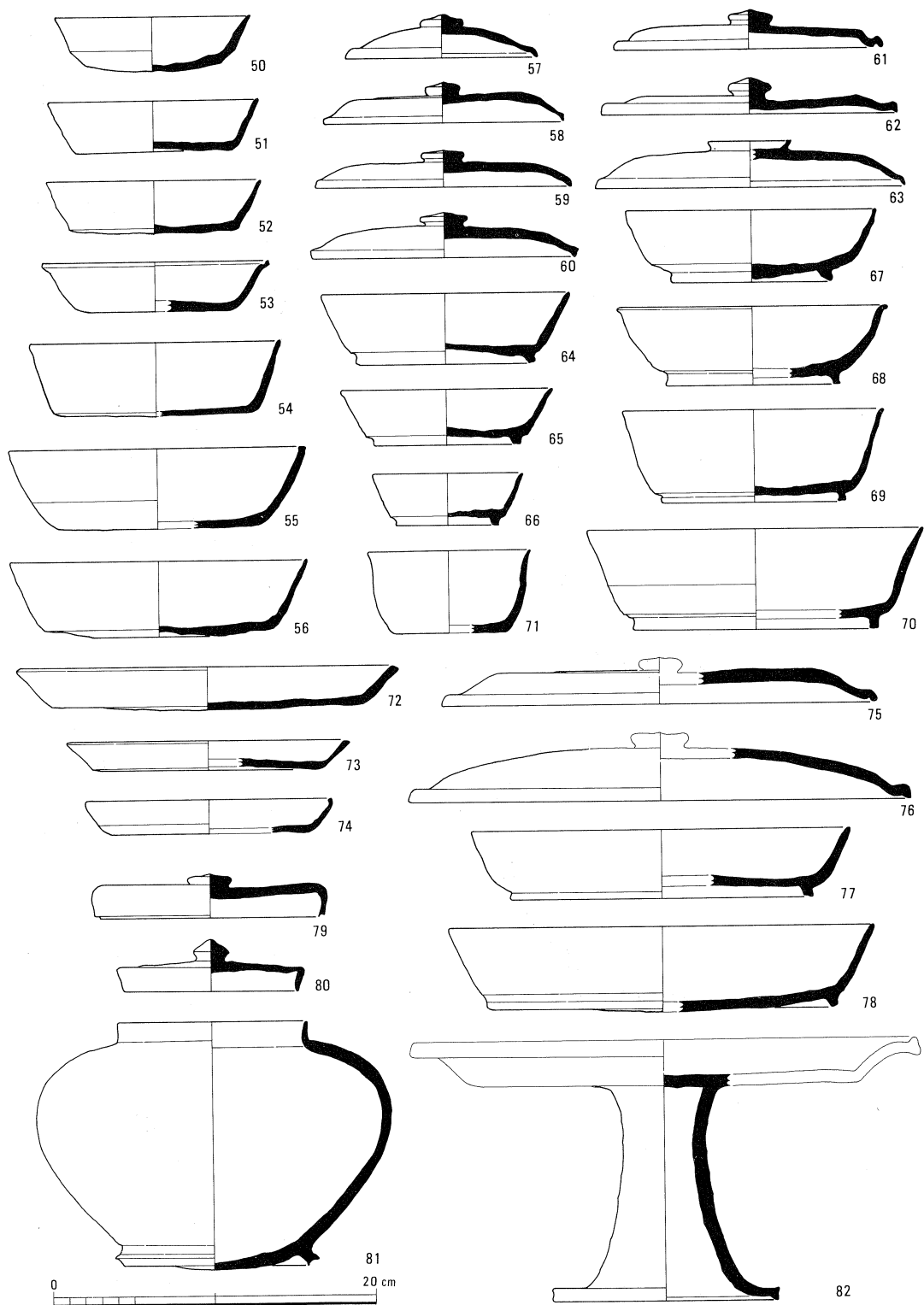
高杯(82) 脚部の破片が多く, 杯部を知り得るものはない。大きく裾部へ広がる脚部と平坦な杯部をもつものと思われる。

鉢(83・84) 83は直立ぎみの口縁部と肩の張った体部からなる鉢D。84はいわゆる鉄鉢形の鉢Aで外面はロクロ削りの後, ロクロナデで仕上げる。

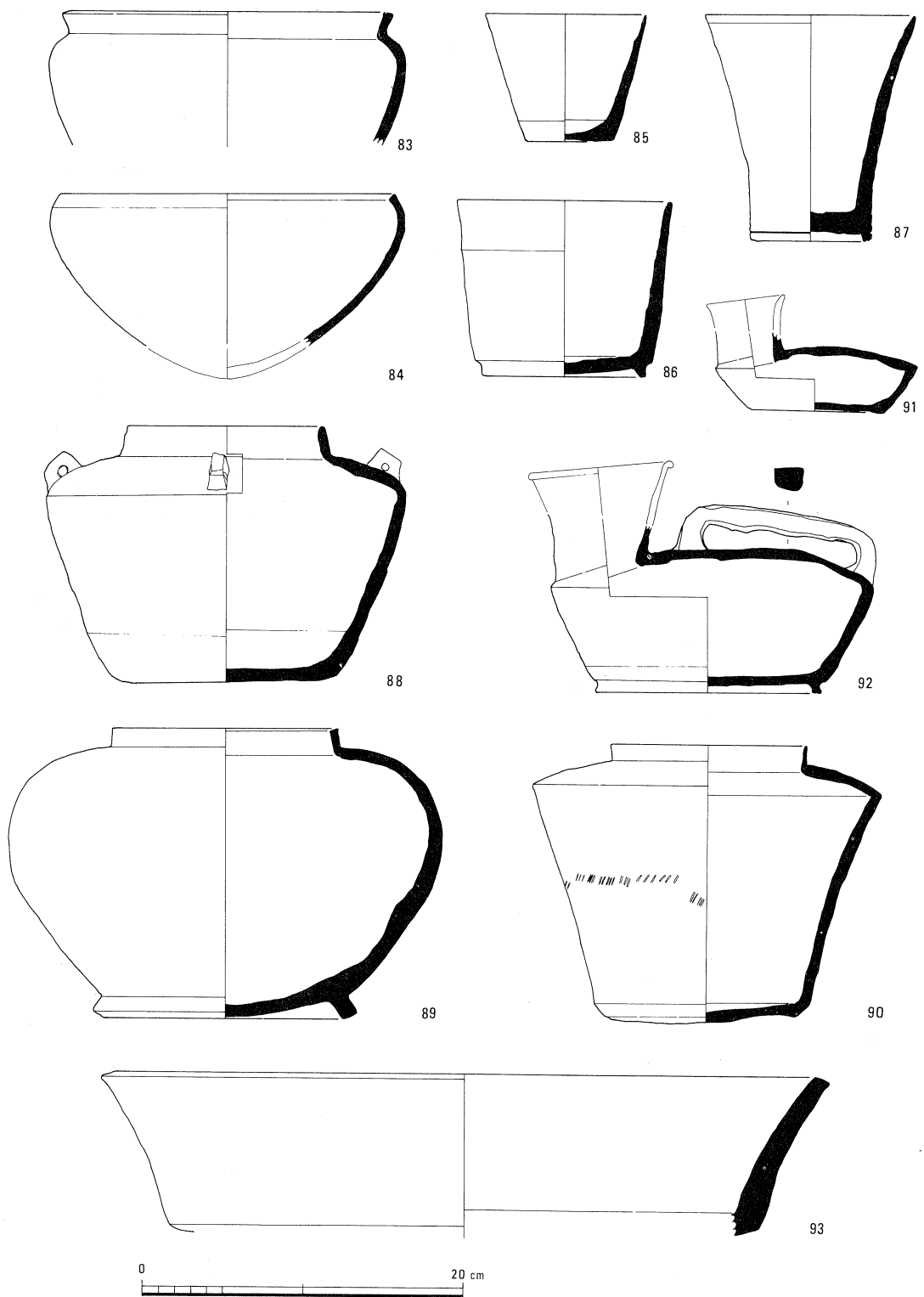
平瓶(91・92) 平底で扁平な体部の上面の一端に口縁部をつけたもの。92には把手と高台がつく。いずれも外面をロクロナデで仕上げるが, 92の体部下半にはロクロ削り痕を残す。

盤(93) 平底で外傾する口縁部をもつ。内外面ともナデ調整する。

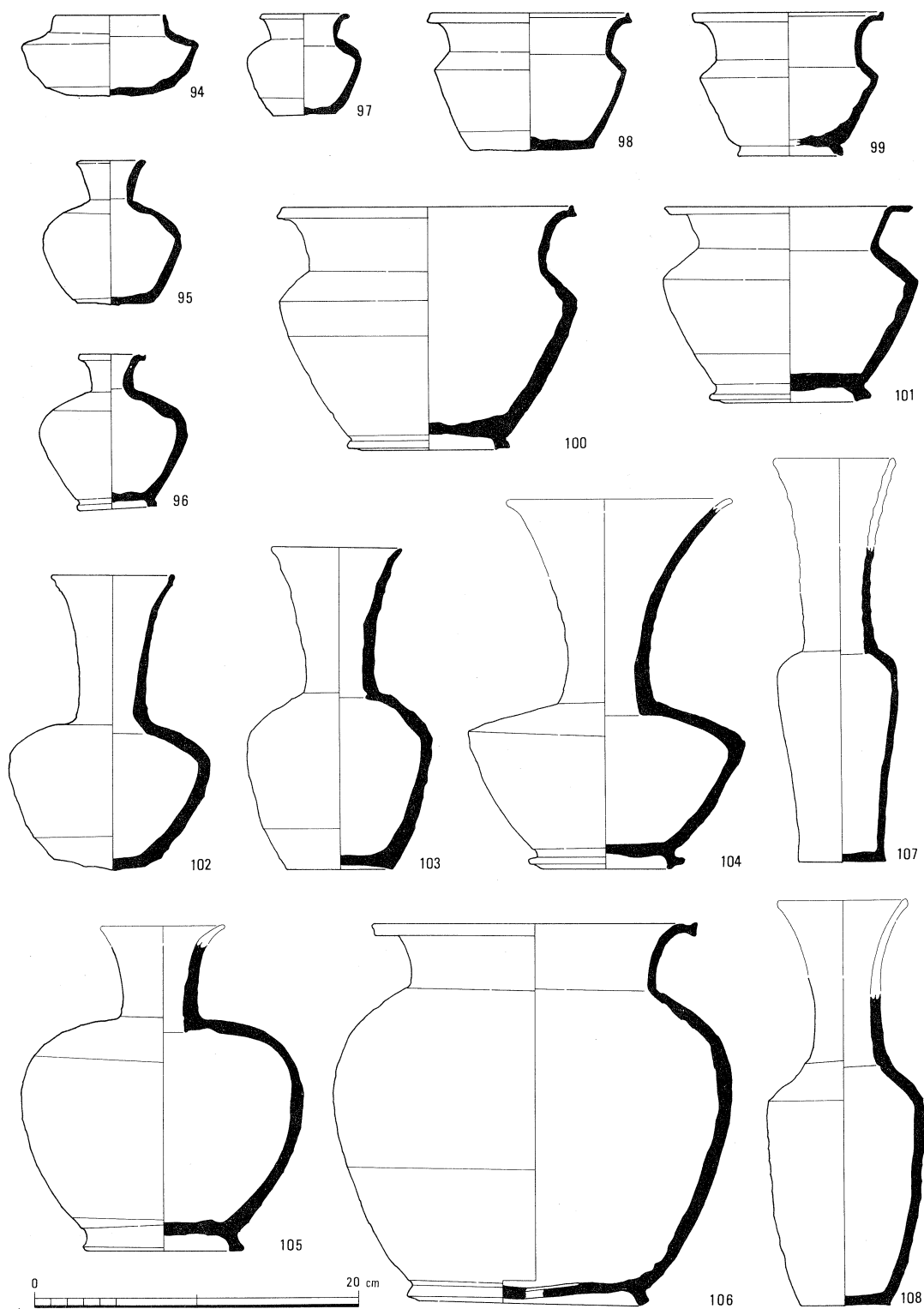




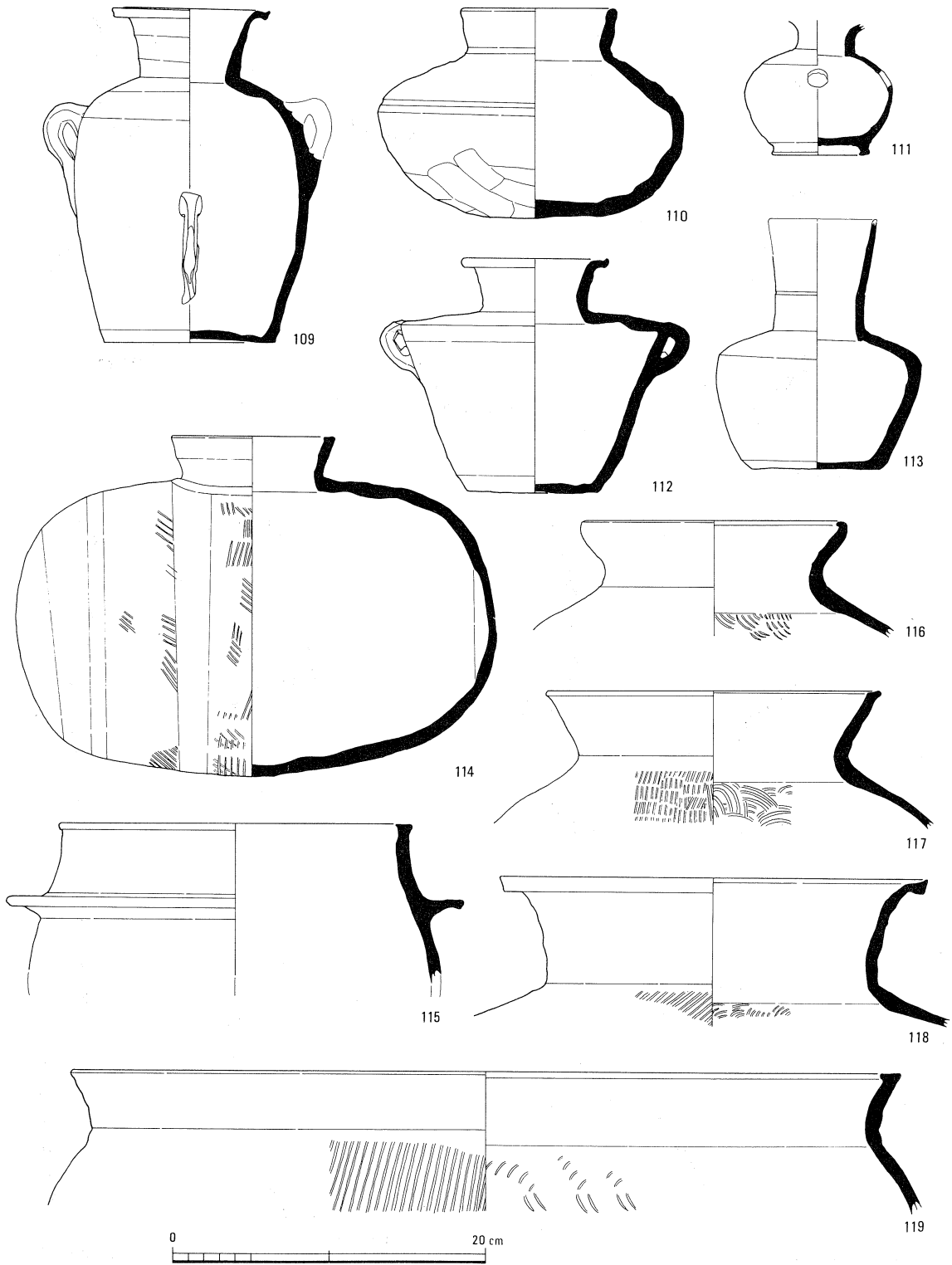
第4図 東堀河SD02 出土須恵器 1 1/4



第5図 東堀河SD02出土須恵器2 1/4



第6图 東堀河SD02出土須惠器3 1/4



第7図 東堀河SD02出土須恵器4 1/4

壺A・壺A蓋(79~81・89) 肩の張った胴部に直立する短い口縁部と高台がつく。蓋は平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなる。壺Aの胴部下半はロクロ削りする。

壺B(88・90) 平底で斜め上に立ち上がる胴部と平坦な肩部と短い直立する口縁部からなり88には肩部四方に台形の耳がつく。いずれも体部下半はロクロ削りしており、90の外面には叩き目が残る。

壺C(94) 肩部に稜をもつ扁平な胴部と直立する短い口縁部とからなる。胴部下半はロクロ削りの後、ロクロナデする。

壺H(98・99) 口縁部が大きく外反する広口の壺。高台をもつものもたないものがある。胴部下半は、ロクロ削りする。

壺Q(100・101) 壺Hを大型にした形態をもつ。胴部外面下半をロクロ削りする他、ロクロナデによって調整する。

壺M(95・96) 肩の張った小型の壺。96は高台をもつ。口縁端部が屈曲するものが多いが、95だけが底部をへら切りのままとどめ、口縁部をまるくおさめている。

壺K(102~104) 肩の張った胴部と細長い口頸部からなる壺。底部をへら削りするもの(102)が6点、底部を糸切り、体部外面下半をロクロ削りするもの(103)が2点ある。104は高台をもち、体部外面下半と底部外面には叩き目を残す。103は壺Gの粗型となる可能性がある。

壺L(105) 肩の張った胴部に外反する口縁部をもつ。胴部下半はロクロ削りする。

壺G(107~108) 縦長の胴部と細長い口縁部からなる。底部にはいずれも糸切り痕を残す。

壺N(109) 平底で卵形の胴部に直立する口頸部をもつ。耳状の把手を肩部の両側と、胴部下半の一箇所にとりつける。胴部外面下半はロクロ削りの後、ロクロナデによって仕上げる。

壺F(110) 平底で肩の張った胴部に直立する短い口縁部がつく。底部外面はへら削りする。

その他の壺(97・106・111~113) 97は広口の小型壺。底部および胴部外面下半をロクロ削りし、上半はロクロナデによっていねいに仕上げられる。106は広口の壺で高台をもつ。胴部外面下半をロクロ削りした後、全体にロクロナデを行なう。焼成後、底部中央を穿孔している。111は壺Mと同様の形態をもつが、肩部に一箇所、製作時に穿孔している。112は平底で、斜め上に立ち上がる胴部と平坦な肩部、外反する口縁部からなり、胴部上端の二方に耳状の把手をつける。胴部外面はロクロ削りの後、ロクロナデで仕上げる。113は肩の張った平底の胴部と直立する長い口頸部をもつ壺で、頸部に一条の沈線が施される。平城京左京九条三坊の東堀河から、同型のものが出土している。古墳時代の所産とする考えがあるが、京内では、左京八条三坊の東堀河、左京五条一坊の五条条間路北側溝からの出土例もあり、奈良時代のものとするのが妥当である。

横瓶(129) 横に長い俵形の胴部上面に外傾する口縁部をとりつけたもの。胴部は、粘土紐の巻き上げによってつくられ、上端を粘土板で充填した後、側面を穿孔し、口縁部をとりつける。

胴部内外面ともナデ調整によって仕上げられるが、外面には部分的に叩き目を残す。

甕（116～119） 118は外反する口縁部をもつ甕A、116・117は外傾あるいは内彎する口縁部をもち、口縁端部が内傾する蓋B、119は広口短頸の甕Cである。いずれも胴部外面に叩き目、内面に同心円当具痕を残すが、ナデ調整によって消しているものもある。

羽釜（115） 須恵器としては特異な鏝をもつ羽釜形の土器。口縁部はやや内傾し、端部は平坦である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

黒色土器 杯A（32）・皿A（31）の他、蓋が出土している。内面のみ炭素を吸着させる黒色土器A類である。31・32とも外面は全面へら削りする。31は口縁部内面、32は口縁部内面と口縁部外面上端に、それぞれ横方向のへら磨きを行い、底部内面と口縁部内面にはラセン暗文を施す。

灰釉陶器 杯、浄瓶の破片が少量出土している。

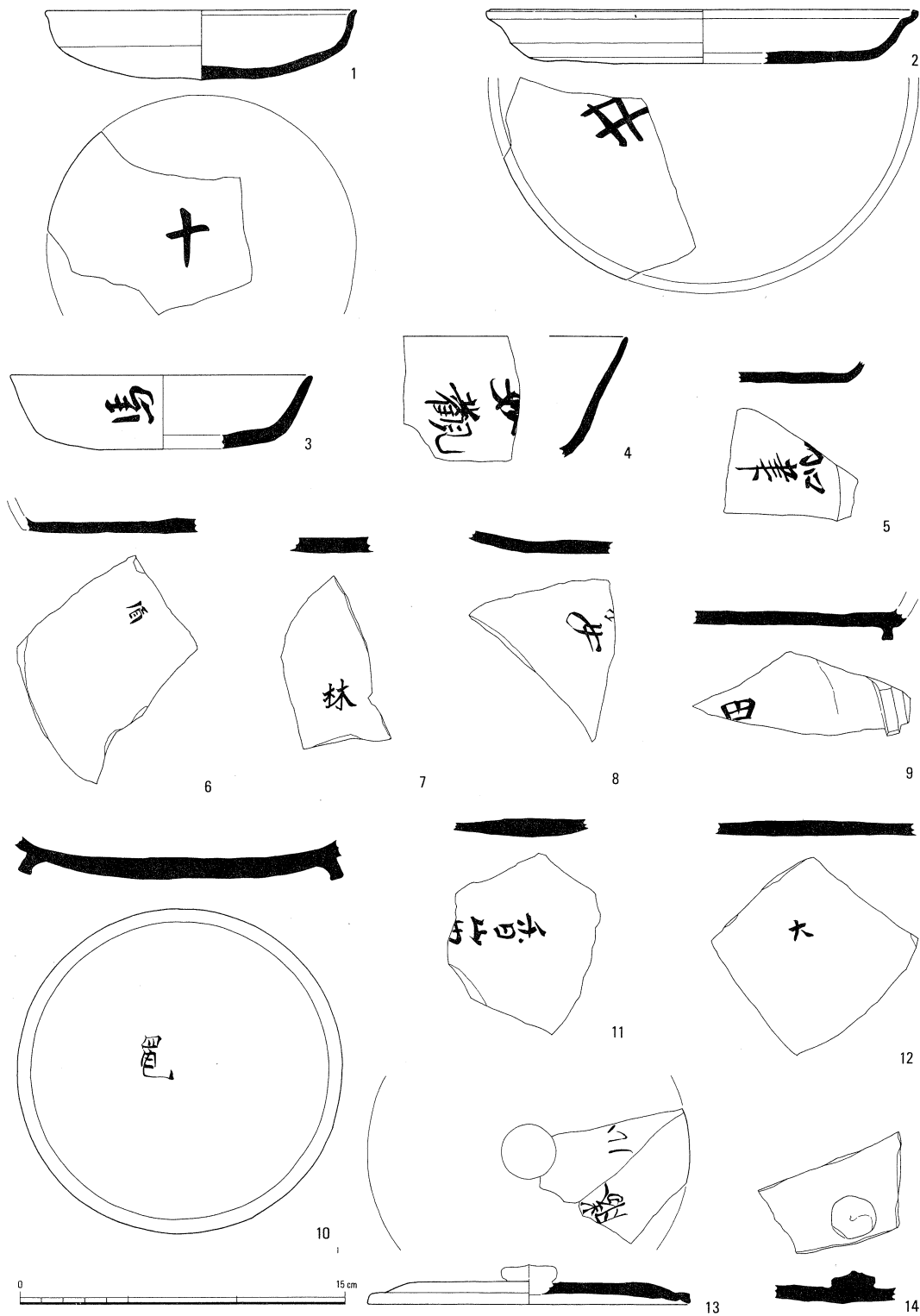
製塩土器 製塩土器と考えられる器壁が厚く（0.5～1.0 cm）、胎土に砂粒を多く含む土器片が総破片数約300点を越え出土した。細片が多く形態がわかるものはない。色調は赤褐色から暗褐色、内外面を粗いなでで仕上げており、内面に布目を残すものもみられる。

漆附着土器 土師器の壺B、須恵器の杯A・鉢D・壺K・甕などの内面に漆が付着しているものがある。土師器が43点、須恵器が54点で総破片数は97点を数える。

## B 墨書土器（第8図）

東堀河からは土師器17点、須恵器18点の墨書土器が出土した。そのうち記載内容が判読できるのは14点で、表に示す。

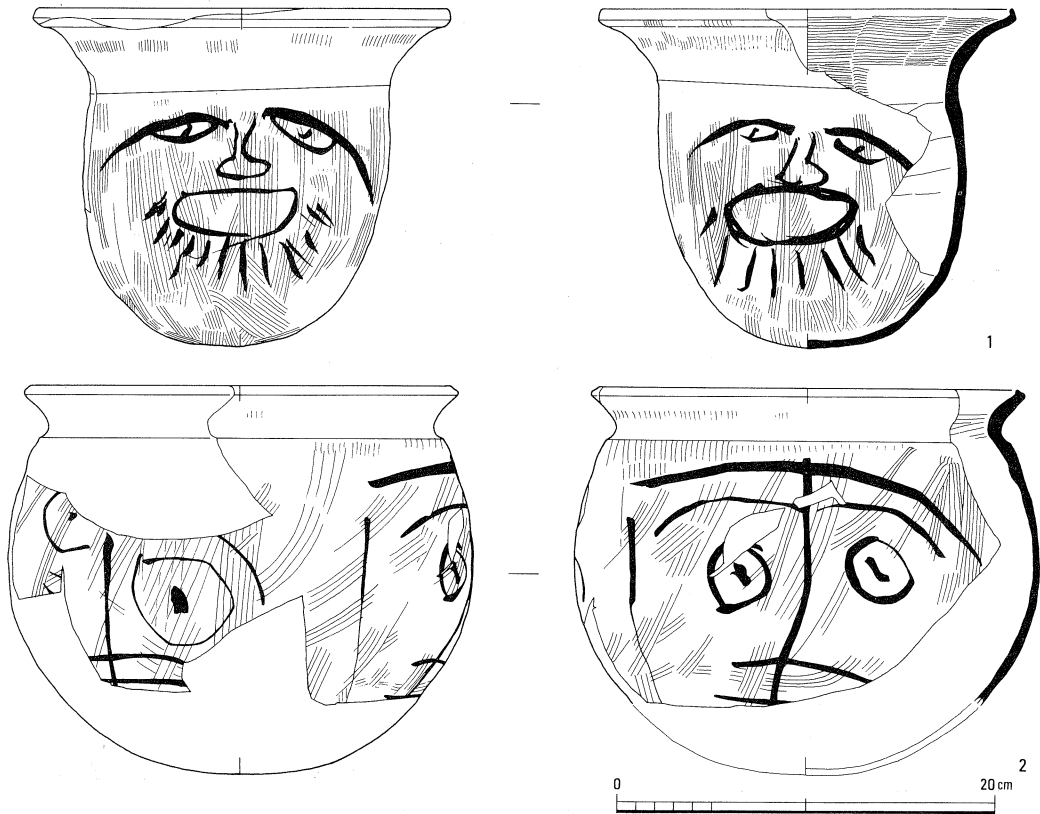
	記 載 内 容	器 種		記 載 位 置
1	十	土師器	皿A	底部外面
2	井	土師器	皿A	底部外面
3	馬	須恵器	杯A	口縁部外面
4	妙 観	須恵器	杯A	口縁部外面
5	加 聿	須恵器	杯A	底部外面
6	盾	須恵器	皿A？	底部外面
7	林	須恵器	杯A？	底部外面
8	□ 女	土師器	杯A？	底部外面
9	𠂔	須恵器	杯B	底部外面
10	×	須恵器	壺	底部外面
11	香山□	土師器	高杯	杯部外面
12	大	土師器	皿A？	底部外面
13	勝	須恵器	杯B蓋	頂部外面
14	待 依	須恵器	杯B蓋	頂部外面



第8图 東堀河SD02出土墨書土器 1 / 3

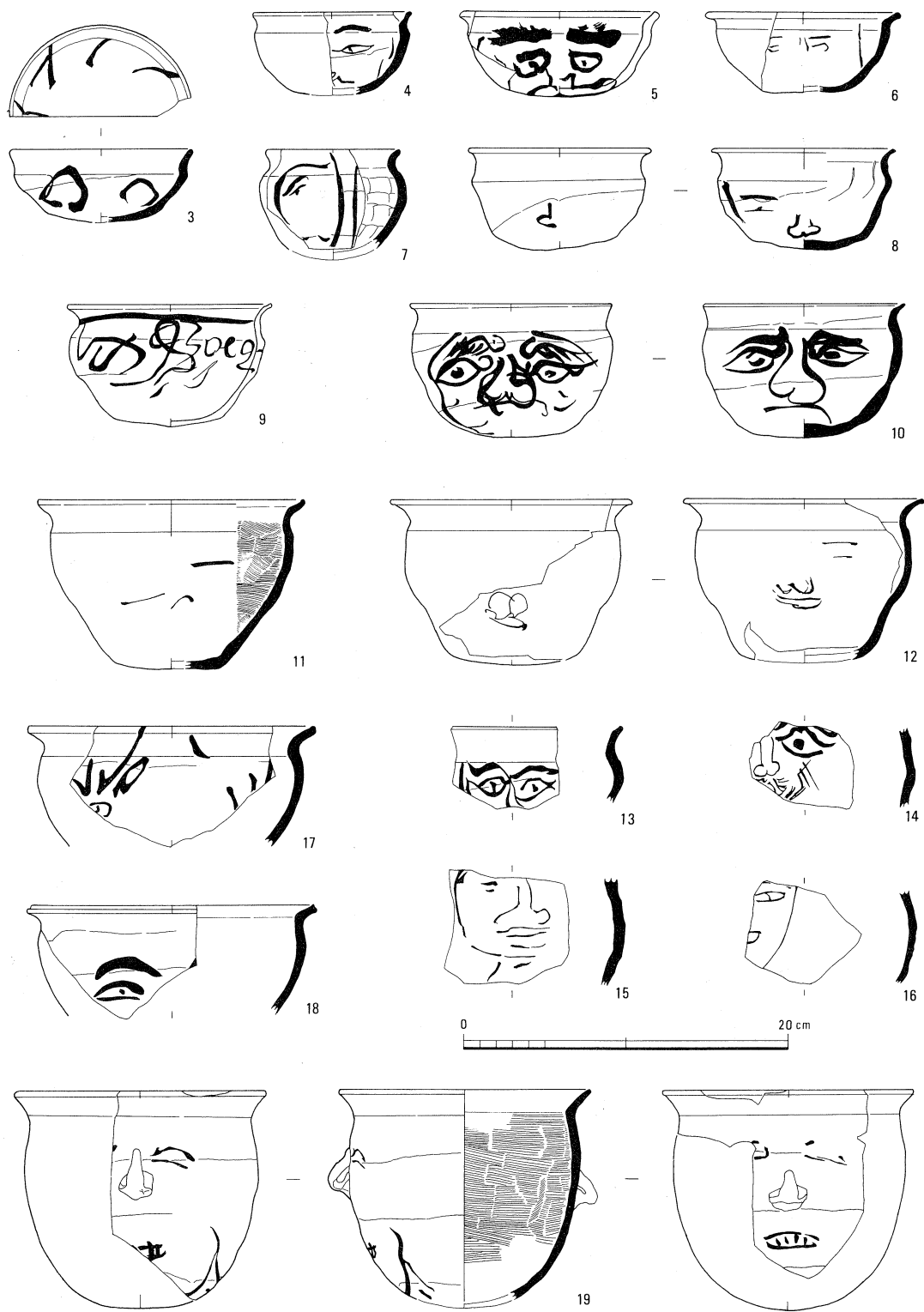
C 祭祀用土器・土製品

墨書人面土器（第9図・第10図） 人面や墨線を組み合わせた文様を描いた土器が、総数104点東堀河から出土した。このような人面や墨線による文様を描いた土器は、第2図の土師器盤を除くと土師器甕と土師器壺B・壺Cといった器種に限られている。日常使用する甕に人面を描いたものは1と2で、1は土師器甕C、2は土師器甕Aの胴部の相対する位置に人面を墨で描いている。祭祀用につくられたと考えられる壺B（9・12・14・19・32・33・40～43）や小型の壺C（3～8・13・20～31・34～39）では、墨書しないものが、壺Bで約70点、壺Cで約50点出土しており、人面や文様を描いたものと同じく祭祀に使用された可能性が高い<sup>注1)</sup>。壺B、壺Cともさまざまな形態があるが、いずれも胴部外面の調整が行なわれないため、壺Bでは、底部をつくる際の外型の痕跡と粘土紐の巻き上げの痕跡、壺Cでは粘土紐巻き上げの痕跡を胴部外面に残している。調整、内面はなで調整するものが多いが、11・19の内面はハケ目調整、33の内面は下半をへら削り、上半をハケ目調整している。また、19の胴部外面には、両側に把手がつけられており、その把手を鼻にみたてた人面が描かれる。人面を描いたもので、1/2以上残存するものは、すべてその胴部の相対する位置に2面の同じ趣のもった人面が描かれる。人面以外の文様を描いたものは、3と9で、3は内面にも放射状に墨線を描く。

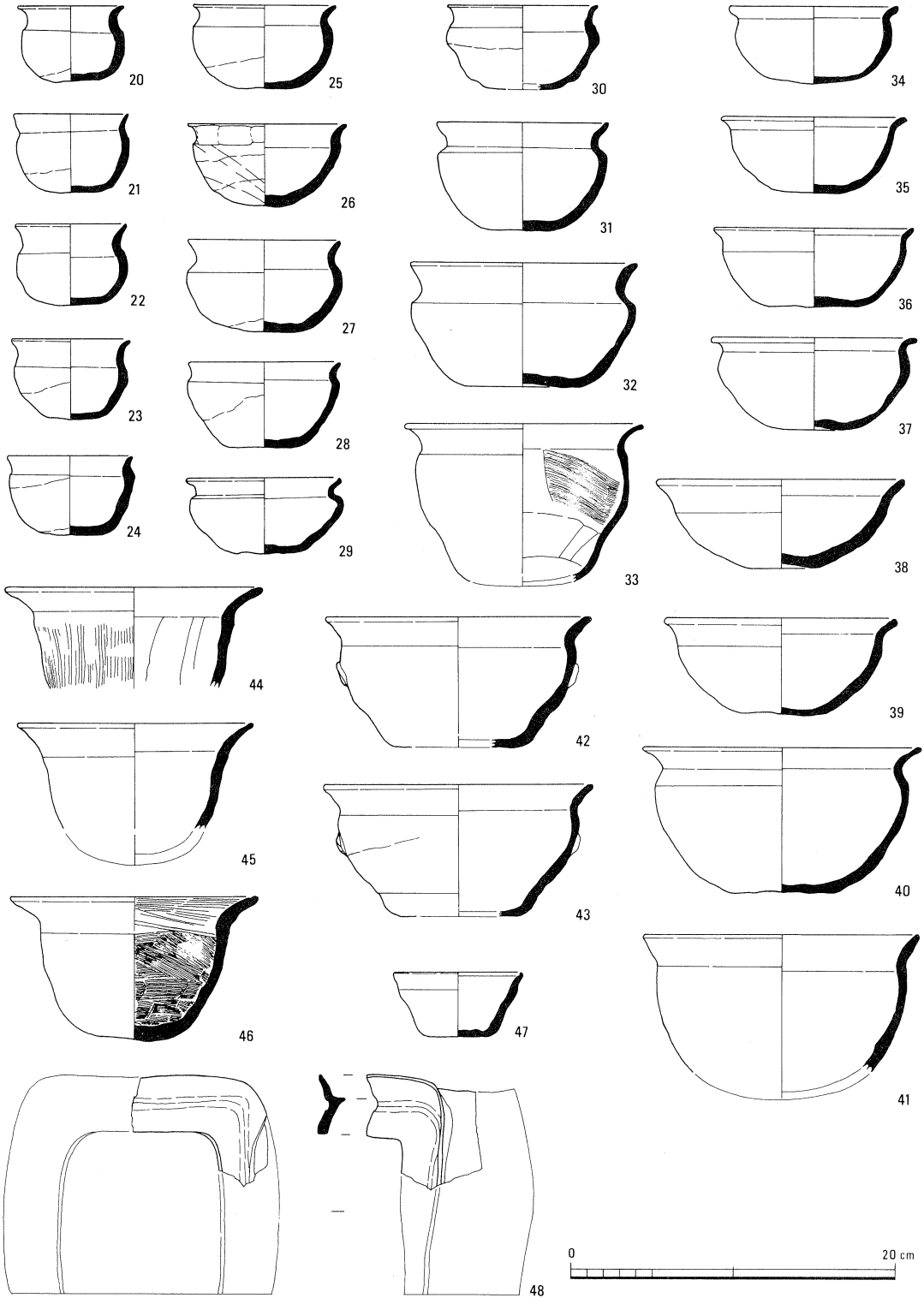


第9図 東堀河SD02出土墨書人面土器1 1/4

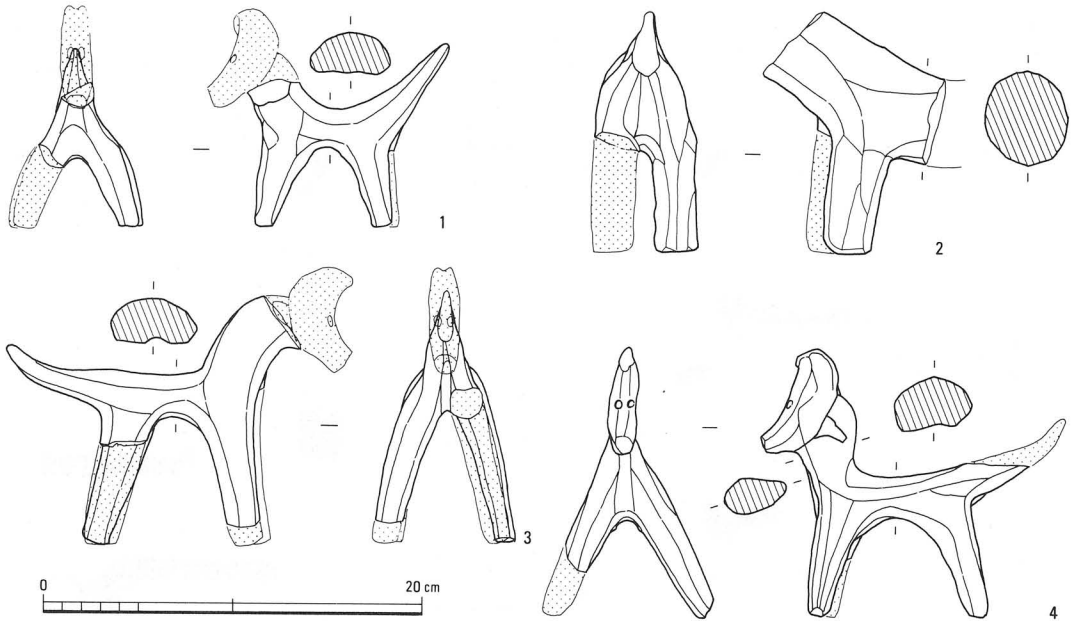




第10图 東堀河SD02出土墨書人面土器2 1/4



第11图 東堀河SD02出土墨書人面用土器・小型模造土器 1/4

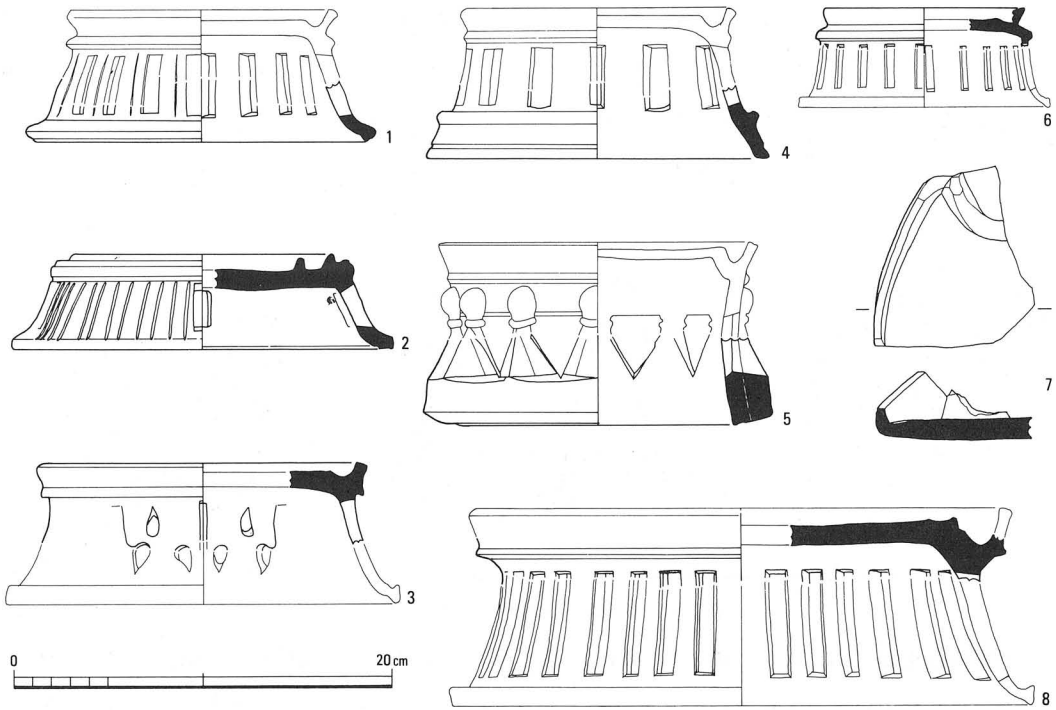


第12図 東堀河SD02出土土馬 1/4

**小型模造土器**（第11図） 甕（44～46），甑（47），竈（48），高杯など土師器の小型模造土器が出土した。いずれも粘土紐巻き上げによってつくられている。また，墨書のない壺Cのうち，小型のもの（20～30）については，竈などと組み合わせ，人面墨書土器とは異なった祭祀に使用された可能性も考えられる。

**土馬**（第12図） 24点出土した。いずれも部分を欠き，完全なものはない。体高6 cm前後のもの（1）と体高8 cm前後のもの（3・4）が多い。棒状の粘土で胴部から尾部をつくらせており，四肢と頸部は別につくり接合する。頸部先端には，粘土紐を貼り付け手綱を表現し，その上に円板状の粘土を折り曲げたものをかぶせて顔をつくる。顔面の上部はややくぼめ耳を表現し，竹管で目を表現する。2は胴部の断面が円形で，脚をヘラ削りしてつくる点など，他の土馬と形態，製作法が異なり，粘土も砂粒を多く含むものを使用している。

**陶硯**（第13図） 出土した陶硯には，蹄脚硯1点，圈脚円面硯7点，風字硯1点がある他，杯B，杯B蓋，壺A蓋を硯として使用した転用硯が17点ある。1は硯部を欠損するが，圈脚部に縦長の透しを配するもので，透しの間にヘラ描きの直線を一条施すものであることがわかる。2は硯部の海陸の区別を凸帯によってつけるもので，圈脚部には，5個程度の長方形透しを配し，その間にヘラ描きの直線を施している。3は硯部の周囲を低くし海部をつくるもので，圈脚部には長方形透しと三個の宝珠形透しを配している。4・5はともに，圈脚部に長方形透しを等間隔に配したもの。8は直径28cmを越える大型品で，硯部の陸部周辺に低い凸帯がめぐる。5は三角柱状の脚部を削り出してつくる蹄脚硯で，脚を削りだしたのちに粘土を貼付し，成形する。7は硯面の周囲に外堤がめぐる風字硯で，硯面の前方に内堤をつくり海陸を区別する。



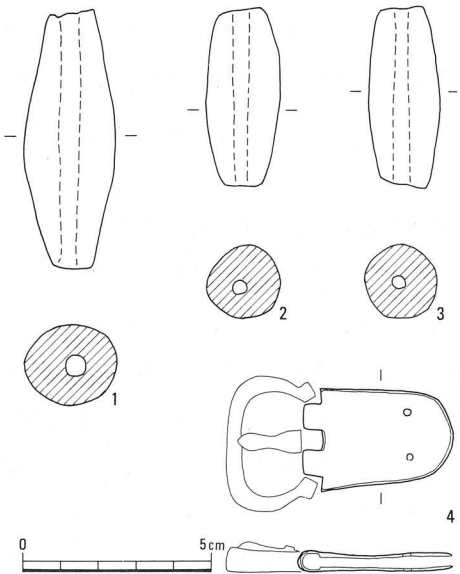
第13図 東堀河SD02出土陶硯 1/4

**土錘**（第14図） 土錘は3点出土した。いずれも土師質で棒状のものに粘土をまきつけて成形したものである。1は28.4g, 2は15.9g, 3は16.6gを量る。

**D 金属製品**（第14図）

今回の調査で、東堀河から出土した金属製品は少なく、銭貨6点と帯金具1点だけである。

銭貨は、和同開珎の1種のみである。帯金具(4)は、銅製の鉸具だが、刺金、外杵、軸棒などは失われ、板金具のみ残る。板金具は周縁をヤスリがけによって斜めに面取りされており、端部には、鋸留のための2孔が穿たれている。 (森下恵介)



注1) 奈良国立文化財研究所編

『平城京東堀河左京九条三坊の発掘調査』1983

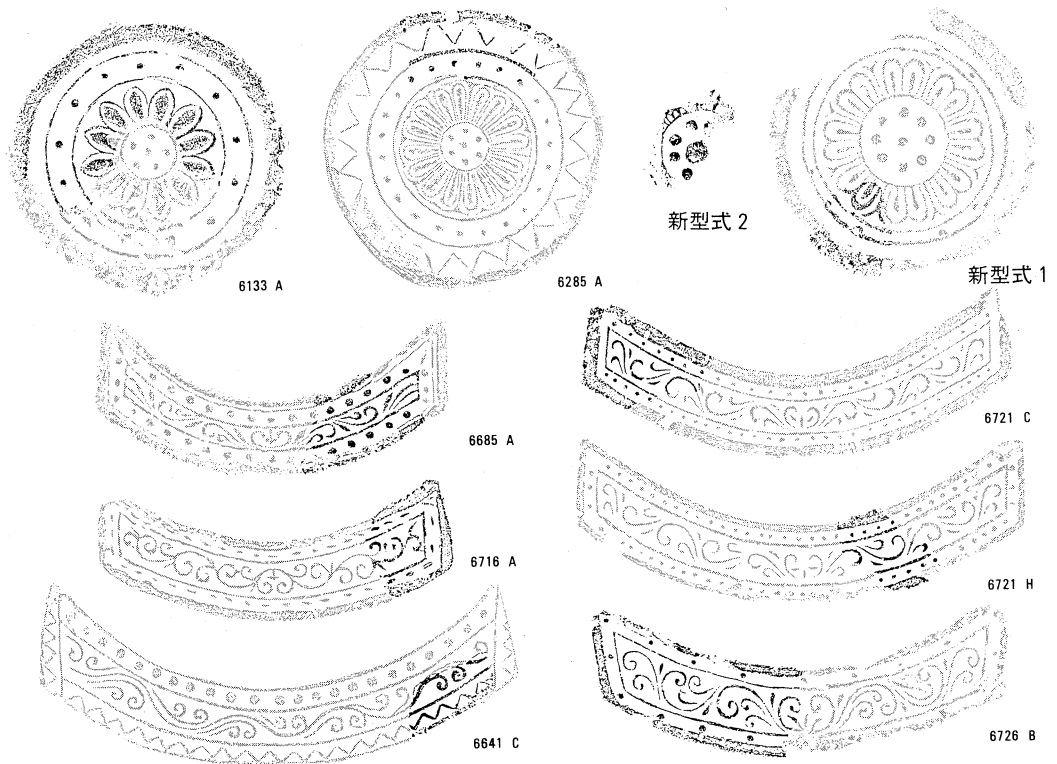
第14図 東堀河SD02出土土錘・帯金具 1/2

## E 瓦類

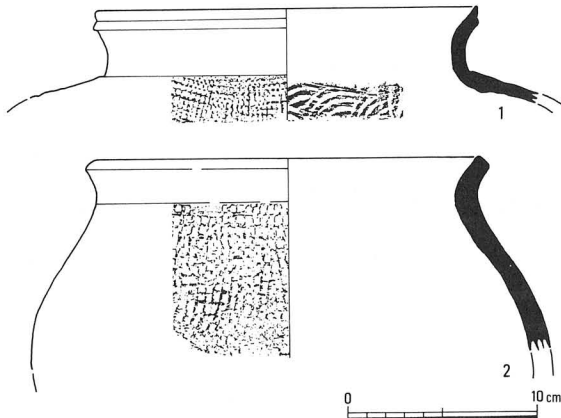
瓦は東堀河SD02最下層の灰色粗砂層から出土したが、出土量は少ない。これらには軒丸瓦6点と軒平瓦7点が含まれている。

軒丸瓦は平城宮6133A, 6285Aと新形式2種が出土したほか、型式不明2点がある。新形式1は複弁8弁蓮華文瓦で、6227型式に似るが、外区内縁の二重圈線内に不明瞭ながらも珠文の表現がみられる点で異なる。中房は大きく、弁区と同一面につくられ、1+8の蓮子をもつ。文様の割付けには規則性があり、蓮子は対向する蓮弁中軸上に置かれ、珠文は蓮弁中軸と間弁の位置に配される。これまでは唯一左京五条三坊十三坪で同×例の出土がある。新形式2は中房を残すのみで、全体は不明である。蓮子の配置は1+8であろうが、中央1点が他より大きいのが特徴で、あるいは6282型式の新種となる可能性も残る。

軒平瓦は平城宮6641C, 6685A, 6716A, 6721C・H・種別不明, 6726Bの各型式が出土した。このうち6726Bは従来瓦当面对し右半が知られるのみであったが、今回の出土例は左半で全体が判明した。逆「小」字形の中心飾りをもつ3回反転均整唐草文瓦で、唐草第1・2単位が4葉、第3単位が3葉である特徴をもつ。上下外区に各7、脇区に3個の珠文を置く。(中井 公)



第15図 出土軒瓦



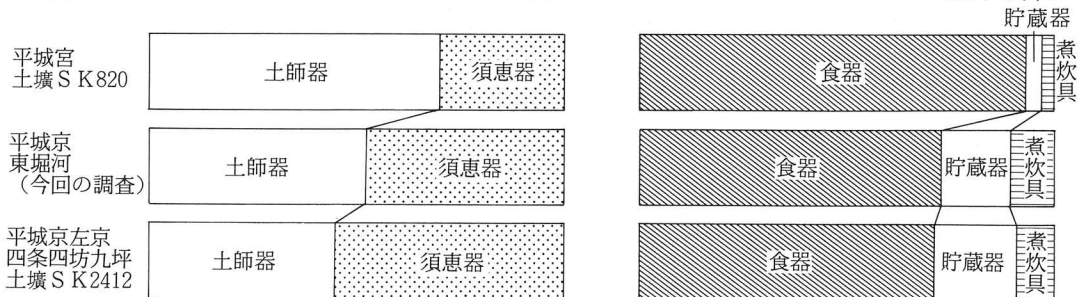
第16図 東堀河 S D 02 出土須恵器・陶質土器 1 / 4

角の粗い叩き目が残される。1は淡青灰色，2は赤灰色の色調を呈し，2の胎土中には，粗い砂粒を含む。1については5世紀代の初期須恵器。2については，朝鮮の陶質土器である可能性が考えられる。

## II まとめ

今回の調査で，東堀河から出土した土器は，約2000点を数え，その器種も多岐にわたっている。河川からの出土遺物として特徴的な祭祀用土器を除き，その出土土器の内容をみると，土師器と須恵器の個体数比は，52：48の割合で，その数は拮抗する。また，土器類をその用途別にみた場合は，杯・皿などの食器が72.7%，壺などの貯蔵器が16.7%，土師器の甕などの煮炊具が10.6%となっている。これらの数値を，従来の平城宮，平城京の調査での出土資料と比較すると，平城宮内出土資料より，須恵器が土器全体の中で占める割合が，やや高く，用途別には，貯蔵器，煮炊具が多く，京内の左京四條四坊九坪の土壙 S K 2412 出土資料に近いことがわかる。このことから，今回の調査で東堀河から出土した土器は，おおまかに言って，平城京における，平均的な日常用土器のあり方を反映しているものと言える。ただ，須恵器の貯蔵器である壺類には，底部に穿孔を行ない，祭祀用として使われたと考えられるものがあり，従来の調査でその出土例をみない器種や，出土例の少ない須恵器高杯などがめだつ点など，そのすべてを，京における日常的な土器のあり方とみるには，なおいくつかの問題点を残している。

(森下恵介)



出土土器の構成

## F 木製品

今回の調査では，東堀河に堆積した土層が，粗砂層といったこともあり，木製品の出土は皆無に近く，わずかに横櫛と曲物底板が各1点出土したにすぎない。

## G 奈良時代以前の遺物 (第16図)

弥生土器，古墳時代の須恵器，土師器，埴輪などがある。1・2はいずれも器体外面に格子叩き目を残す甕で，1は2～3mm角の細かい格子叩き目が，2は5mm

土 師 器			個 体 数			
食	杯	A	I	44	116	
			II	72		
		B	I	身蓋	0	17
				身蓋	17	
			II	身蓋	3	14
		III	身蓋	14	4	
	身蓋		0			
	C	身蓋	4	7		
		身蓋	4			
	碗	A		166		
		C		112		
	皿	A	I	12	69	
			II	21		
			III	36		
B			5			
C			147			
鉢		A		8		
		B		23		
	E		2			
盤		10				
高 杯		21				
貯蔵器	壺	A	9	14		
		E	5			
煮 炊 具	甕	A	27	186		
		B	14			
		C	32			
	不 明		65			
	甑		3			
	羽 釜		3			
竈		42				
合 計			921			

東堀河SD02出土土器个体数表

注1) SK820・SK2113出土資料

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』  
1976

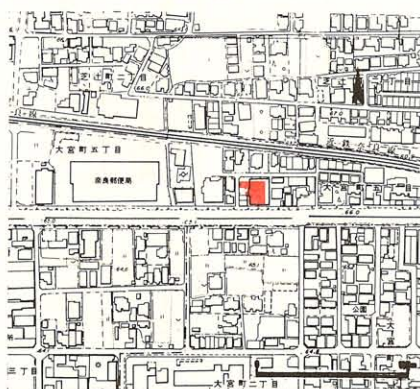
注2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九  
坪発掘調査報告』1983

須 恵 器			個 体 数			
食	杯	A	I	17	82	
			II	14		
			III	32		
			IV	15		
			V	4		
		B	I	身蓋	25	78
				身蓋	78	
			II	身蓋	30	64
				身蓋	64	
			III	身蓋	21	73
	IV	身蓋	28	38		
	E	身蓋	38	253		
		身蓋	38			
	L		2			
	皿	A		20		
		B	身蓋	31	88	
			身蓋	88		
	C		30			
	碗		5			
	鉢	A		16		
		D		17		
	高 杯		29			
	盤		6			
貯 蔵 器	壺	A	14	281		
		B	6			
		C	3			
		E	8			
		F	1			
		G	12			
		H	7			
		K	14			
		L	7			
		M	15			
	N	1				
	Q	5				
	その他		5			
水 瓶		1				
平 瓶		9				
横 瓶		4				
甕	A		58			
	B		92			
	C		19			
合 計			841			

## 26. 平城京左京三条四坊十坪の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市大宮町162番地の4・31における大同生命保険相互会社奈良支店建設の事前調査である。調査地は近鉄新大宮駅の東約300m、大宮通りに面した一画で、平城京の条坊では左京三条四坊十坪に相当する。敷地面積820㎡に対し、発掘区は建物予定位置を考慮に入れ、敷地中央に454㎡を設定した。調査期間は昭和56年4月21日から同年5月25日までである。



発掘区の位置 1/7500

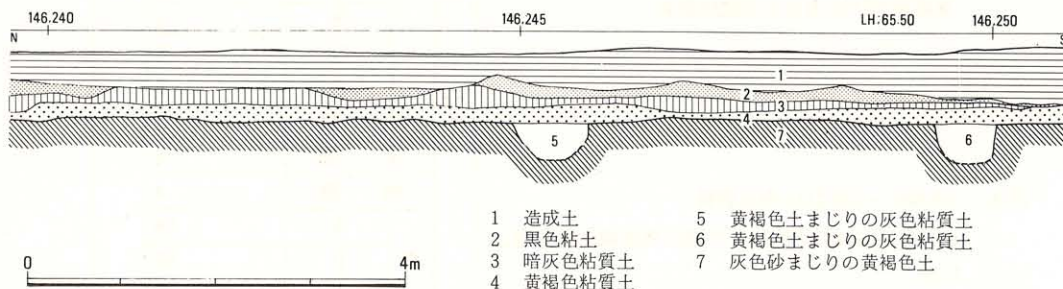
### II 検出遺構

発掘区内の基本的な層序はつぎのようなものであった。まず、約40cmの厚さで盛土があり、この下に旧耕土である黒色粘土がある。以下、暗灰色粘質土、黄褐色粘質土と続き地表面下約90cmで灰色砂まじりの黄褐色土層にたつする。遺構はこの灰色砂まじりの黄褐色土層上面で検出した。なお、発掘区付近の地表面の標高はおおむね65.3mである。

検出した主な遺構には奈良時代の掘立柱建物9棟、塀3条、溝2条がある。

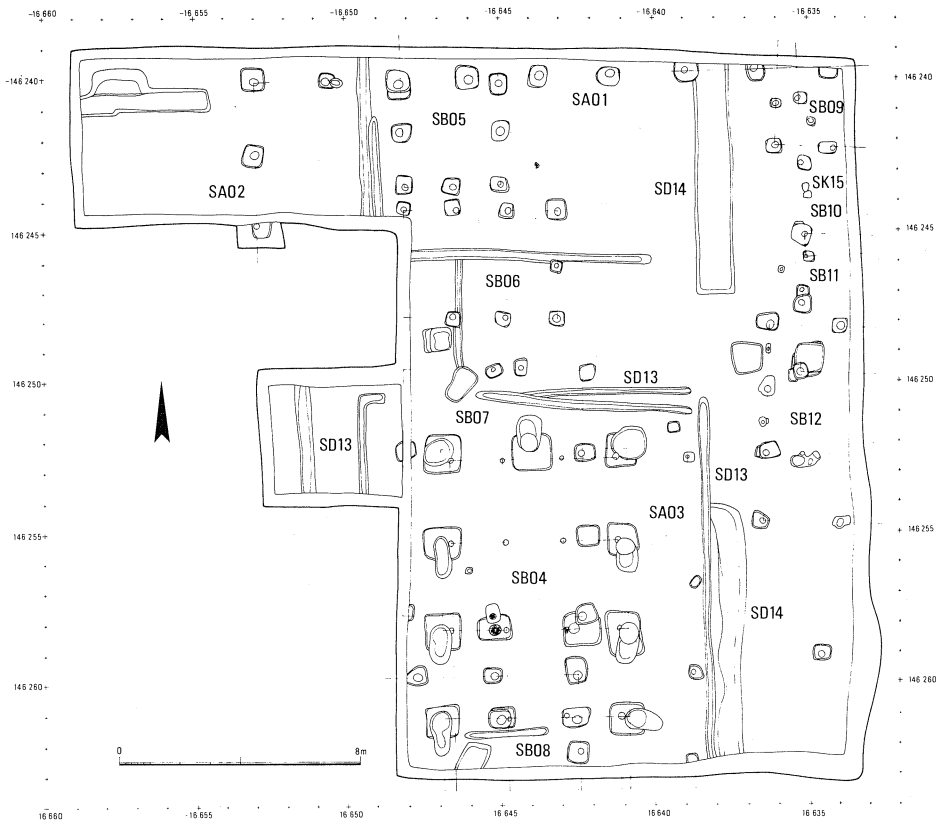
**SA01, SA02** SA01は発掘区北端で検出した掘立柱東西塀。8間分を検出し、東側はさらに発掘区外へ続く。柱間は2.4m(8尺)等間であるが、西から6間目のみ2.5mとわずかに広い。柱筋が国土方眼方位に対して、西で北へふれている。SA01西端から南へ続く掘立柱南北塀 SA02を2間分検出した。柱間は2.4m(8尺)等間である。さらに南へ1間分のびる可能性はあるが、それ以上は続かない。

**SA03** SB04の東約2.1mにある掘立柱南北塀。3間分を検出し、南はさらに発掘区外へ続く。柱間は北から5.2m—2.95m—2.95mと不揃いである。その位置からみてSB04の足場となる可能性もある。



発掘区東壁土層図 1/80

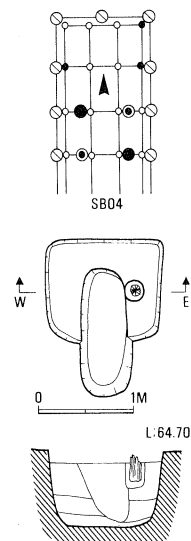




検出遺構平面図 1/250

**SB04, SD13** 桁行3間(9.0m)以上, 梁行2間(6.0m)の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行, 梁行ともに3.0m(10尺)等間。桁行の北から2間目と3間目の柱筋にそれぞれ2個の柱穴を配し, 梁行を1.8m(6尺)―2.4m(8尺)―1.8m(6尺)に仕切る。間仕切の柱であろう。側柱列, 北妻柱列の柱掘形が方1.2m程度ですべて柱抜取痕跡があるのに対し, 間仕切の柱掘形は方0.8m程度と小さく柱根の残るものもある。これとは別に, 桁行のすべての柱筋に1.8m―1.95m―1.8mの間隔で3間分の小柱痕跡がある。床束であろう。側柱列と間仕切の柱穴では, 同一の柱穴に身舎柱の痕跡あるいは抜取跡と床束の痕跡があり, 床束根が残っているものもある。このことからこの建物が床張であったことがわかる。SB04の周囲には幅0.2m, 深さ10~15cm程度の雨落ち溝SD13が残る。溝心と東・西側柱筋心とは2.7m, 北妻柱筋心とは1.65mある。

**SB05** 発掘区北端で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間(3.3m)以上, 梁行2間(3.3m)。柱間は桁行が南から1.8m(6尺)―1.5m(5尺),



SB04柱掘形  
(西側柱列北から第2柱)

梁行は1.65m（5.5尺）等間。重複関係からSA01よりは新しいことがわかる。

**SB06** 桁行3間（6.4m），梁行2間（3.6m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行が6.4m（17尺）の3つ割，梁行は1.8m（6尺）等間である。

**SB07** 桁行3間（8.1m），梁行2間（5.7m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行が2.7m（9尺）等間，梁行は2.85m（9.5尺）等間。重複関係からSB04よりは新しいことがわかる。

**SB08** 発掘区南端で検出した桁行2間（5.25m）以上，梁行1間（2.55m）以上の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が西から2.55m（8.5尺）—2.7m（9尺），梁行は2.55m（8.5尺）。

**SB09** 発掘区北東隅で検出した東西不明，南北2間（5.25m）の掘立柱建物。柱間は南北柱列が北から1.8m（6尺）—3.45m（11.5尺）と不揃い。南北塀となる可能性もある。

**SB10** 発掘区北東隅で検出した東西1間以上，南北1間以上の掘立柱建物。柱間は東西が，1.95m（6.5尺），南北は1.5m（5尺）。

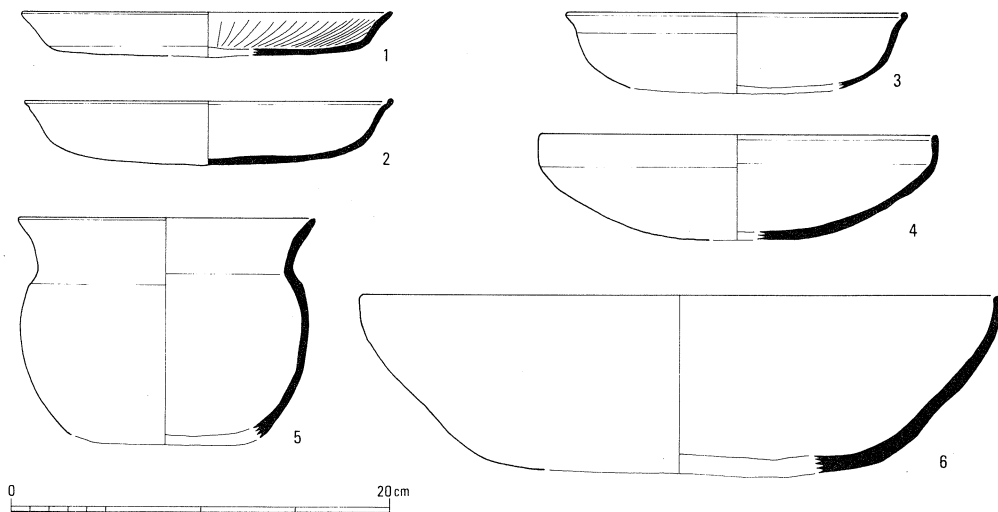
**SB11** 発掘区東端で検出した桁行1間（1.8m）以上，梁行2間（4.5m）の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が1.8m（6尺），梁行は2.25m（7.5尺）等間。

**SB12** 発掘区東端で検出した桁行3間（6.6m），梁行1間（2.4m）以上の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行が6.6m（22尺）の3つ割，梁行は2.4m（8尺）。

**SD14** 発掘区を南北に貫通する素掘りの溝。幅50～125cm，検出面からの深さ6cmと浅く，途切れながらも23.5m分を検出した。重複関係からSA01・SD13よりも古いことがわかる。

### Ⅲ 出土遺物

出土した遺物には丸・平瓦，土師器，須恵器，緑釉埴がある。遺構面を覆う遺物包含層，柱掘形，溝などから出土しているが，出土量は少ない。ここでは，比較的まとまりのあるSB04柱掘形出土の土器を中心に報告する。



SB04柱掘形出土土器 1/4

**SB04柱掘形出土土器** SB04西側柱列北第1柱の掘形から出土した。土師器皿、杯、椀、壺、鉢がある。皿A(1)は口縁部外面をよこなでし、内面には1段斜放射暗文がわずかに観察できる。杯A(2・3)はいずれも口縁部上半がわずかに外反し、口縁端部は内側に肥厚する。口縁部はよこなでし、底部外面には成形時の凹凸を残している。鉢(4)は口縁部の上半が垂直に立ち上り、口縁端部はわずかに内側へ肥厚する。表面の摩滅が著しい。鉢B(6)は外面をへら磨きする。壺B(5)は胴部の調整を行わず、成形時の凹凸が残る。

**緑釉埴** 方形緑釉埴1点がある。各辺の長さは14.6cm～15.2cmとわずかではあるがバラツキがあり、正方形ではない。厚さは4.2cm。胎土は精良、乳白色である。表面の磨滅が著しく一部に緑釉が残るのみであるが、本来全面に施釉されていたものとみられる。ただ、片面は施釉されているものの発色せず灰褐色を呈し、一部他の製品との熔着がある。小土壌SK15出土。

#### IV まとめ

検出した遺構が十坪の中で占める位置を検討しまとめとする。

今回の調査では直接条坊に係わる遺構を検出していない。そこで、これまでの周辺の調査成果をもとに十坪の周囲の条坊道路の位置を復原することにしよう。まず、十坪の西を限る四坊間路は、今回の調査地の南、三条四坊六・十一坪境<sup>注1)</sup>と四条四坊七・十坪境<sup>注2)</sup>での検出例がある。いずれも東、西両側溝を検出し道路心の座標値がわかっているため、この2点を結ぶ線の国土方眼方位に対する振れを求めると $N0^{\circ}8'12''W$ となる。ここではこれを四坊間路の振れと考え、今回の発掘区の西まで延長すると $X=-146,239.92$ 、 $Y=-16,724.20$ の地点に道路心が想定できる。この他に、四坊間路と九条大路との交差部に開く坊門かとも考えられる門状遺構<sup>注3)</sup>の検出例がある。ところが、その心と上記の道路心とを結ぶ線の国土方眼方位に対する振れは $N0^{\circ}33'14''W$ にもなり、これまでに知られている条坊道路の振れと比べかなり大きいので、ここではその成果は保留しておく。

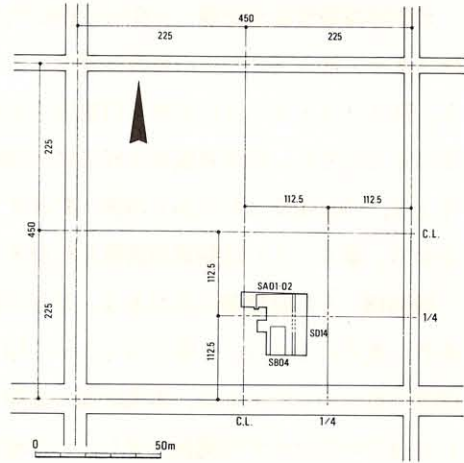
つぎに、十坪周辺の東西方向の条坊道路の検出例には三条四坊三・四坪境小路<sup>注4)</sup>、三条五坊三・四坪境小路の検出例がある。いずれも小路南側溝のみを検出しており、その振れは $E0^{\circ}13'42''N$ である。この坪境小路が京の通常の小路幅、側溝心々間で2丈をもつと仮定すると、上記の小路南溝心の北460尺(1坪の計画幅：450尺+推定小路幅 $\frac{1}{2}$ ：10尺)にあり、 $E0^{\circ}13'42''N$ の振れを

地 点	X	Y	備 考
四条坊間路心(左京三条四坊)	-146,302.53	-16,724.20	注1)
四条坊間路心(左京四条四坊)	-147,279.000	-16,725.500	注2)
門状遺構(SB2434)心	-149,737.36	-16,693.20	注3) 調査概報より算出
左京三条四坊三・四坪境小路南側溝心	-146,417.92	-16,879.00	注4) 調査概報より算出
左京三条五坊三・四坪境小路南側溝心	-146,416.13	-16,430.00	注5)

計 測 座 標 表

もつ東西線が十坪の南を限る三条条間路心となる。

このようにして、十坪を取り囲む4条の条坊道路のうち西面、南面の2条の条坊道路の位置が想定できた。これをもとに1尺を0.295mとして十坪内での発掘区の位置を示したのが右図である。この図により、発掘区は十坪の南半、東西の中軸とその東の一面にあたる



十坪の占地概念図

ことがわかるが、主要な遺構の配置にきわだった規則性は認められない。従来、京の一般の宅地割りは二行八門十六戸制を基本とし、後に三十二戸制に移行したとする考え方がある。この宅地割りが坪の計画幅を厳密に分割し施行されたとするならば、今回検出した遺

構、とりわけSA01・02, SD14はその相当位置にはない。このことから、十坪に関しては少なくとも8分の1以上の宅地利用を考えねばならないことになる。

(西崎卓哉)

注1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』 1984

注2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』 1983

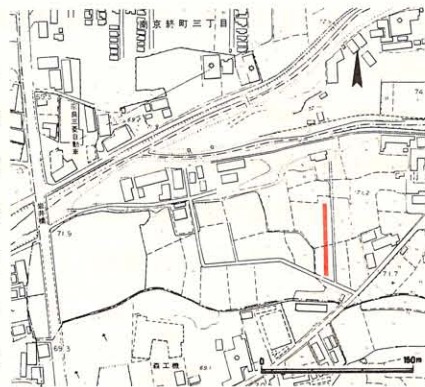
注3) 奈良国立文化財研究所『市道九条線関係遺跡発掘調査概報(2)』奈良市教育委員会 1983

注4) 奈良国立文化財研究所『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1984

注5) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』 1984

## 27. 京東条里推定地の調査

本調査は奈良市南京終町73番地他において実施した、仮称奈良市立第39小学校(現済美南小学校)建設に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の東に広がるいわゆる京東条里推定地の一画であり、条里遺跡の有無の確認を主目的に東西4m、南北71m(284㎡)の発掘区を設定した。調査期間は昭和56年3月2日から同年3月13日までである。発掘区内の第1層黒色粘土(耕土)を取り除くとすぐに地山である黄灰色土が露程したため、この



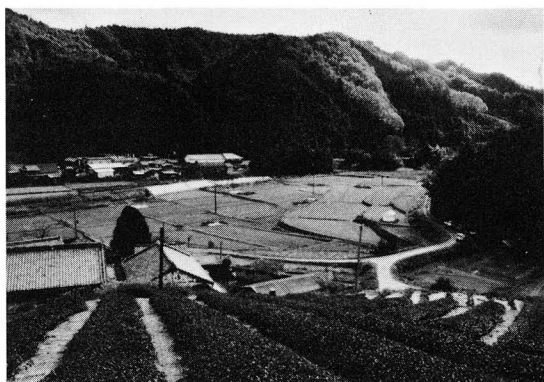
発掘区の位置 1/7500

上面で遺構検出作業を行ったが、何ら遺構はなく、わずかに土師器の細片若干が出土したのみであった。その後、土層確認のため発掘区内3箇所を深く掘り下げたところ、黄灰色土(約1.1m)、灰色粘土(発掘区北端で1.1m、南端で0.3m)、灰色砂の順に堆積していることがわかった。この堆積状況からみて、調査地付近はすぐ北を西流する岩井川の氾濫の影響を大きく受けていることがうかがえる。

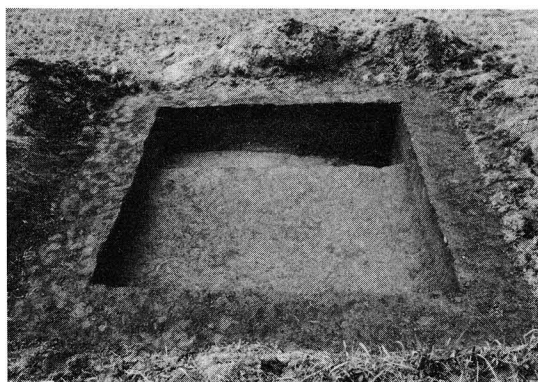
(西崎卓哉)



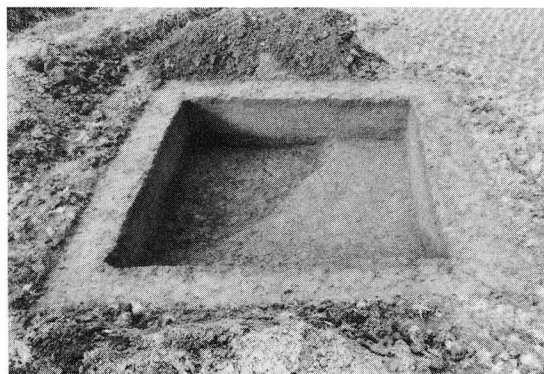
版



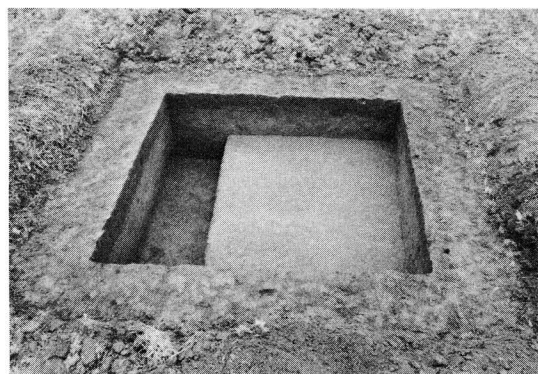
調査地全景 (北から)



4トレンチ (東から)



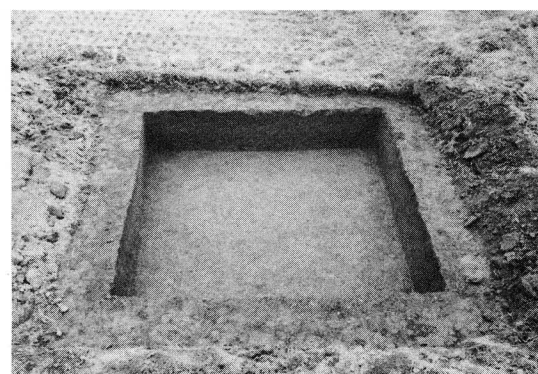
1トレンチ (南から)



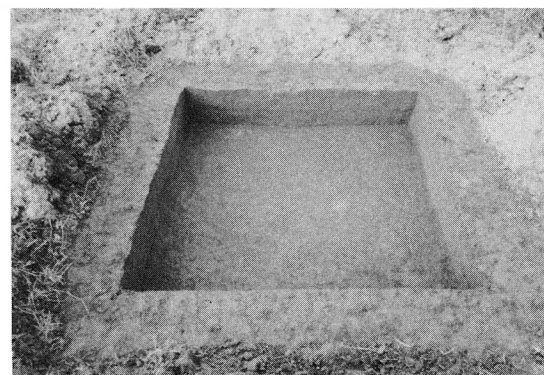
5トレンチ (南から)



2トレンチ (北から)



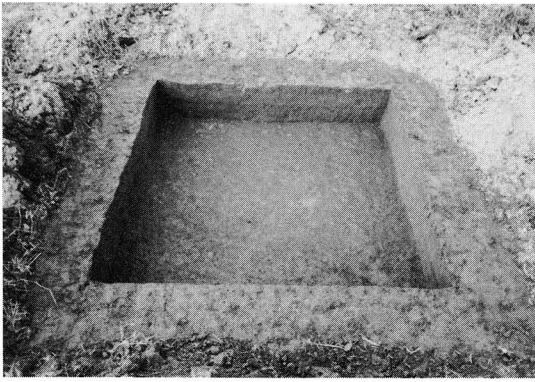
6トレンチ (西から)



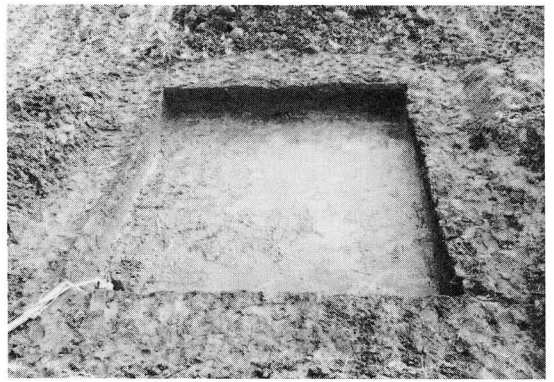
3トレンチ (南から)



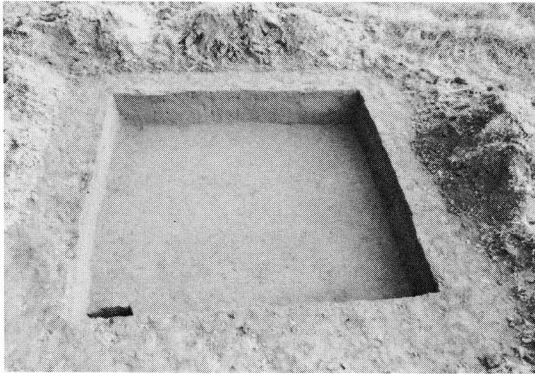
7トレンチ (西から)



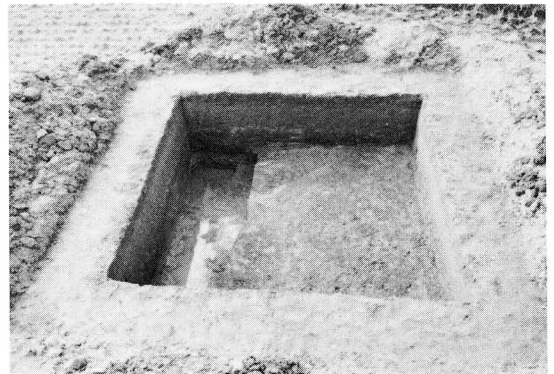
8トレンチ (南から)



12トレンチ (北から)



9トレンチ (東から)



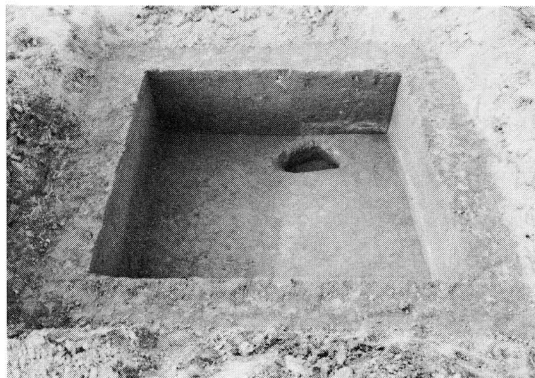
13トレンチ (東から)



10トレンチ (西から)



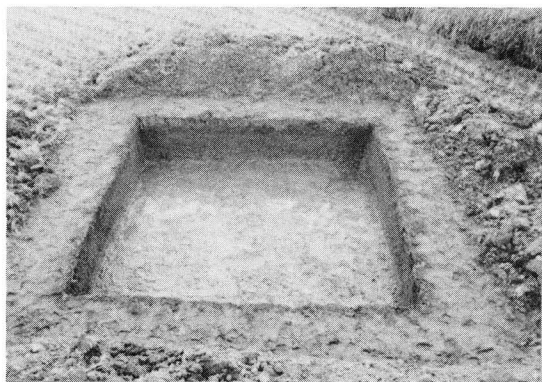
14トレンチ (南から)



11トレンチ (南から)



15トレンチ (東から)



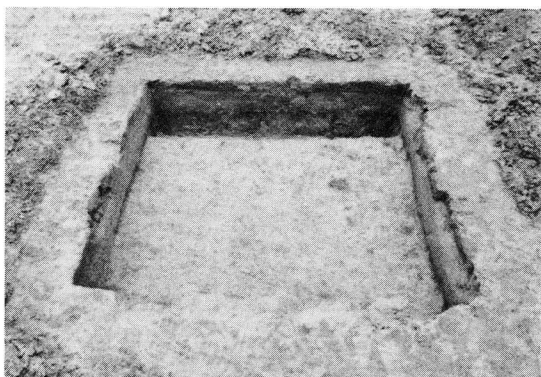
16トレンチ (東から)



20トレンチ (北から)



17トレンチ (西から)



25トレンチ (西から)



18トレンチ (南から)



26トレンチ (西から)



19トレンチ (南から)



27トレンチ (南から)





1. 21トレンチ全景（北から）



2. 22トレンチ全景（南から）



1. 23トレンチ全景（北から）



1. 23・24トレンチ全景（北から）